



2022 金澤詩人賞

金澤詩人No19

二〇二二 金澤詩人賞 入選作品 目次

☆目次

☆受賞作品

◆阿部樹恵 岩手県 8

◆まだらめ三保 Scottsdale, USA 221

☆選評 338

☆金澤詩人賞受賞者 40

プロフィール／受賞への思い／作品へのコメント

☆沖縄特集

◆琴森 戀 沖縄県 44

◆元澤一樹 沖縄県 46

◆奥間 空 沖縄県 50

◆松川優子 沖縄県 53

◆玉城栄人 沖縄県 54

◆麻生藤 沖縄県 54

◆里香 沖縄県 57

☆一般篇

◆長光祐三 広島県 74

◆坂本オズティン 広島県 80

◆無味 愛知県 85

◆三日月ユキ 奈良県 88

◆三谷十一 東京都 89

◆折川とながれ 神奈川県 91

◆番場絵理 茨城県 94

◆木内ゆか 神奈川県 96
 ◆渡部由奈 神奈川県 98
 ◆近藤加奈子 愛知県 100
 ◆和田言依 神奈川県 101
 ◆菅沼きゅうり 新潟県 109
 ◆石田 民 静岡県 114
 ◆佐久間たま子 東京都 117
 ◆桑島明大 東京都 131
 ◆笹岡水樹 東京都 135
 ◆若松理玖 大阪府 138
 ◆結咲こはる 千葉県 139
 ◆あめ 千葉県 145
 ◆江口久路 京都府 148
 ◆高橋詩絵里 兵庫県 154
 ◆島田都和 岐阜県 155
 ◆米野哲郎 山形県 157
 ◆水越晴子 三重県 159
 ◆藍羽由宇 千葉県 161
 ◆神無月 愛知県 164
 ◆藤堂らでん 東京都 166
 ◆ころろ 神奈川県 168
 ◆堤 善宏 愛媛県 168
 ◆春谷 翠 奈良県 169
 ◆帆草とうか 神奈川県 170
 ◆むうめ 島根県 171

◆小川 流 神奈川県 171
 ◆夏宝洛 大阪府 175
 ◆林やは 愛知県 178
 ◆柳沢 進 東京都 180
 ◆相馬 実 大分県 182
 ◆牛田丑之助 大阪府 188
 ◆雨宮信夫 神奈川県 192
 ◆ツチャタカユキ 大阪府 193
 ◆大川黒目 兵庫県 195
 ◆暇野 鈴 神奈川県 197
 ◆若井真也 栃木県 197
 ◆月濤 山梨県 199
 ◆渡辺八畳 東京都 201
 ◆山荷葉 千葉県 202
 ◆藍下はる 東京都 203
 ◆咲 愛媛県 204
 ◆川瀬美鳥 広島県 206
 ◆杉山千尋 栃木県 207
 ◆千葉千華 神奈川県 210
 ◆五十嵐ソフィー 東京都 210
 ◆kesuna 三重県 212
 ◆井上 靖 神奈川県 212
 ◆三浦洋介 千葉県 214
 ◆青崎はぐれ 埼玉県 215
 ◆橋本莉乃 福岡県 218

◆佐藤きりん 埼玉県 220
 ◆南 久子 大阪府 221
 ◆疾風向 長崎県 223
 ◆紗奈さより 神奈川県 224
 ◆Tomaria 茨城県 225
 ◆shio 山形県 227
 ◆こう 長野県 228
 ◆岡安心平 神奈川県 235
 ◆中道侶陽 静岡県 236
 ◆菱沼大生 山形県 237
 ◆上矢優希 神奈川県 238
 ◆佐藤新 東京都 240
 ◆田口裕理阿 神奈川県 241
 ◆柳生たまみ 神奈川県 244
 ◆村雨巧夢 大阪府 245
 ◆清河 倫 東京都 248
 ◆神谷りん 静岡県 249
 ◆長谷川清浩 北海道 253
 ◆白澤侑希 福岡県 254
 ◆辰己尚平 大阪府 254
 ◆伊織梢 神奈川県 267
 ◆きづな 埼玉県 268
 ◆ねむの木 秋田県 269
 ◆Cofumi 北海道 271
 ◆鈴木杏奈 宮城県 273

◆逢多悠花 埼玉県 274
 ◆時北涼芽 宮城県 275
 ◆また 北海道 276
 ◆早川晋平 愛知県 277
 ◆木鹿 東京都 278
 ◆秋葉みづき 東京都 280
 ◆高田テラ 福岡県 281
 ◆坂口美和 東京都 282
 ◆岡部將生 東京都 284
 ◆青津 亮 福岡県 285
 ◆小川勇大 東京都 289
 ◆岩松ほむ 東京都 290
 ◆ふれーん 富山県 290
 ◆デイジー 福岡県 292
 ◆吉田圭佑 東京都 300
 ◆菅野周斗 千葉県 303
 ◆ANGE 愛知県 304
 ◆御手洗智高 山口県 305
 ◆竹之内 稔 兵庫県 306
 ◆星乃刹那 東京都 307
 ◆はなだに 岡山県 310
 ◆しんり 熊本県 311
 ◆LYU JIAYAO 東京都 312
 ◆玉井秀男 福岡県 314
 ◆長尾芽里 福岡県 315

◆時見ねな 東京都 316
 ◆池田謙太 東京都 317
 ◆久保俊彦 京都府 317
 ◆千年光生 千葉県 318
 ◆大野博司 埼玉県 319
 ◆へちかん 神奈川県 322
 ◆井中冬夜 愛媛県 322
 ◆中村真理子 兵庫県 323
 ◆何処力野七氏 東京都 324
 ◆高須健之 千葉県 325
 ◆岩崎俊郎 佐賀県 326
 ◆前川花鈴 京都府 327
 ◆夢 佳苗 埼玉県 328
 ◆吉岡幸一 福岡県 329
 ◆黒縞ビワ 福岡県 330
 ◆行灯 東京都 335
 ◆水落悠楽 茨城県 336
 ◆麻月 奈良県 337
 ◆E 静岡県 337
 ◆上原翔子 山梨県 338
 ◆万年秋 東京都 339
 ◆原水 岩手県 341
 ◆苅屋紀子 栃木県 342
 ◆葉子 千葉県 343
 ◆田村全子 静岡県 350

◆芳賀悠樹 東京都 350
 ◆勾坂美優 静岡県静 351
 ◆野原己代子 福岡県 352
 ◆takimai 石川県 353
 ◆エリー・ファー 東京都 354
 ◆小薬 空 千葉県 354
 ◆北川一鷹 東京都 355
 ◆戸田えりんぎ 京都府 357
 ◆小沢浩太郎 東京都 357
 ◆そおとめ とうこ 山梨県 360
 ◆大庭 新 東京都 361
 ◆つきみ ねこ 静岡県 363
 ◆寂井絲 兵庫県 365
 ◆宋榮燦 神奈川県 367
 ◆鈴木夏子 兵庫県 368
 ◆岡 哲次 神奈川県 370
 ◆林 栄 富山県 372
 ◆光沢 千葉県 373
 ◆kawasaki araya 神奈川県 375
 ◆市川桂 東京都 377
 ◆日高美希乃 大阪府 377
 ◆小杉 知 神奈川県 378
 ◆大里麻尋 東京都 381
 ◆鯉鮓 兵庫県 382
 ◆はつくー 埼玉県 382

- ◆七 まどか 千葉県 384
- ◆伊吉マリ 静岡県 384

☆海外篇

- ◆中村弦 Hamburg, Deutschland 3333
- ◆桜野める NSW AUSTRALIA 3333
- ◆北村千絵 Singapore 3334
- ◆黄資庭 Taichung City, Taiwan (R.O.C.) 3337
- ◆Masayo Ginter Florida, USA 3333
- ◆岩里崇 台湾 3333
- ◆光 美根代 中華民國台湾 400
- ◆彭 泰宏 台湾 400
- ◆Ah Vi Taiwan 台湾 401
- ◆モリシムリ Düsseldorf, Deutschland 404

☆ニューヨークから

- ◆阿部静雄 ニューヨーク 410

☆シニア篇

- ◆ともむらもか 東京都 446
- ◆櫻井 紬 愛知県 446
- ◆長江旺木 愛知県 447
- ◆鈴木十和子 静岡県 451
- ◆峯岸泰希 埼玉県 453
- ◆蘇比深雪 三重県 453

受賞作品

◆阿部樹恵 岩手県

隔絶

多分私は

他の人たちより

少しだけ世界から離れたところにいる

右耳の補聴器を外せば

ほら

音が私から離れていく

中等度の感音性難聴

それが私

私の周りに難聴者はいなくて

私だけが異物のようにそこにある

異物？

そう、私でも家族でも友人でもない

心無い人

知る気のない人

無意識に差別する人

そういった人たちが私を異物にした

補聴器をつけて過ごす毎日

それでも私の神経をすり減らす

「聞こう」という意識はいつしか

「聞かなければ」に変わり

常に張りつめている

外に出るだけで無意識に疲れることを

私は誰かに話したことがあつただろうか

鳥の声も

木が風に揺れる音も

燃える枝が小さく爆ぜる音も

私には聴こえているのに

補聴器を外すと

それらは急に遠くへ行ってしまう

「障がい者なの？」

「聴こえてないふりだろ」

「無視するな」

「ちゃんと聴いて」

「もういい」

あらゆる言葉を受け止めてしまった

大事なことは繰り返し返してくれないのに

悪意ある言葉だけはつきりと、人は言う

まるで私が難聴であることが

全て悪いとも言うように

ああどうして、なんて

とうの昔に言わなくなった

二十年以上、こうなのだから

そしていつの時からか気付いていた

この耳は

「善い人」と「悪い人」を

聴き分ける

決して私を差別しない人

なにかあればフォローしてくれる人

聴き返しても嫌な顔ひとつしない人

私を私として見てくれる人

ただ友達でいてくれる人

自ら死を選ぶことさえ考えた差別の果てに

彼女たち、彼らがいてくれたから思いとどまれたのだと

私は誰かに話したことがあっただろうか

この耳も、悪意も

私を世界から隔絶しようとして

失敗した

隔絶しようという意図なんてなかったのかもしれない

私の耳はたまたまそういう造りで

悪意はただの、無知と性悪の塊だっただけ

私は難聴者

風の音を聴き

鳥の声を聴き

四季の音を聴きながら

言葉を綴る難聴者

ロックバンドのライブだつて行くし

音程の概念がなくても歌を歌う

聴き間違いを笑いに変えて

今日も明日も

なんてことないように生きていく

治ることのないこの耳は

いずれ私を本当に隔絶するかもしれない

それでも

今、私は難聴者として

私のままに存在している

心だけは隔たりを超えられるように

強くなりたいと願いながら日々を過ごす

まだ傷つくことのできるやわらかい心を

そつと撫でながら

銀河の草原

風の音を信じたとき

潮の香りに振り向いたとき

太陽の明かりに嘘を見たとき

この足は軽やかに走り出す

なにもかもが思考の渦から漏れ出して

なにもかもを疑うとき

自由であることの齟齬を見つける

ここはどこで、今はいつなのか

それでもこの足は

走ることをやめても

歩くことはやめない

言葉がどこから来るのか

感情の起源はどこにあるのか

思考の反芻はなぜ起こるのか

不意に浮かんだ言葉を

何度も口の中で持て余す

手に持ったペンだけが

自分の味方であるような気がしている

ペンを通して吐き出された言葉は

どこに向かうでもなくそこに在る

紙の上から私を見つめる言葉は

もしかしたら鏡なのかもしれない

駆け足で翻したワンピースの裾が

なにを見つめて戻ってくるのか

わからない

脱ぎ捨てた靴の行方も

切り捨てた髪の間方も

もう忘れてしまったけれど

もしかしたら鏡なのかもしれない言葉の渦が

渦が

渦が

渦が

銀河のように輝いて

この足も、この体も、この頭さえも動かし続ける

手

あの日、息をなくした祖母の手を
握れなかったことを後悔している、手

私の知らない、息をしていない人間への恐れだったのだろうか

あの日、瑞々しい私の恋心を拒絶した

あなたと繋げなかった、手

触れることすら叶わなかった恋を、いくつ数えればいいのだろうか

後悔も悲しみも、誰かの温もりの裏にあると

気付いた、手

あの日、怖がる私を真正面から見つめ

「そのままでもいい」と言ってくれたあの子の、手

その手は私の大きな心の支えで、今も心を温める

あの日、初めての場所で怯えていた小さな小さな君を

そつと包み込んだ、手

かわいい私の猫は、今は大きくなって小さな寝息をたてている

喜びも慈しみも、この手で感じられるのだと

気付いた、手

この手が言葉を紡ぐとき

それは誰かへの想いばかりが溢れている

頭にある言葉を

心にある言葉を

この手で大切に書きとめるとき

私はあなたを想っているだろう

例え冬の寒さに、手が凍えていたとしても

例え夏の暑さに、手が滲んでいたとしても

あらゆる悲しみと憎しみを握りしめてなお、

それでもこの手は愛を綴ることをやめなかった

指先からそつと

今日もまた、誰かへの、なにかへの、愛を綴る、私の、手

春夏秋冬——恋心——

いつか手放した恋心は

春の花に咲いて

夏の太陽に輝いて

秋の落葉と舞つて

冬の雪と積もつた

手放した、つもりだつた

それは多分

春の芽吹きに似ていて

夏の暑さに似ていて

秋の風に似ていて

冬の静謐に似ていて

手放せるものではなかったのかもしれない

あなたが芽吹かせて

あなたが熱を持たせて

あなたが揺らして

あなたが穏やかにした

そうか、手放したんじゃない

それはずっと、私の中にあったんだ

あなたという存在が

それをそっと動かしたただけなんだ

冬が溶けて春が歌うころ

春がはじめて夏が目覚めるころ

夏がうたた寝して秋が風に乗ってくるころ

秋が散つて冬が舞い始めるころ

恋心はいつだって私の中で

あなたを見つめていた

手放しなかった理由は遠く彼方で

繰り返した季節の残滓に埋もれていくだろう

あなたが気付かせた恋心が

あなたと寄り添えないとわかる時まで

雪まがい

秋の終わりと

冬の始まりの

その間のわずかな季節に

小さな小さな羽虫たちが

ふわふわ ひよひよ

雪のふりをしていた

何かを間違えたような

秋と冬の間の

小春日和とも言える陽射しの中

光を反射して

ふわふわと

ひよひよと

小さな小さな羽虫たちが雪のふりをしている

これから訪れるひどく寒い冬を

この小さな小さな羽虫たちは越せるのだろうか

雪のふりをして

これから来る季節を示しているのか

もし冬を越せないのなら

見たことのない季節の美しい結晶を

聞いた通りに真似ているのだろうか

雪のようにきらきらと舞う

小さな小さな羽虫たち

ふわふわ ひよひよ

君たちは

雪の降る頃、何処にいたのだろうか

冬を待つもの

冬を待つものは

何処に在るのだろうか

確かに在る

寒く冷たく

そして寂しい冬を待つものを

私は未だ見たことがない

それなのに

見たことのないそれは

いつも私の胸をざわつかせる

日々冷たくなつていく風と

日々縮んでいく太陽の時間

草花は小さく枯れていき

木々は色づき落ちていく

冬を待つものは

次第に大きくなつていく

どこまでも美しい雪原と

葉の落ちた木々の威容

凍える風の駆け抜けるのを

春と夏と秋を耐えて

冬を待つものは

待つていた

私の胸がざわつくのも

私の心が怯えるのも

冬を待つものは知る由もない

ただ愛する冬を

待つだけなのだから

曇りガラス

私と私以外を隔てているのは

いちまいの曇りガラス

それはどれだけ磨いても

透明にはならない

曇りガラスの向こうで

今日も誰かが笑っている

ガラスの中の私は

その声がどうしても気になつて

気になつて

明日も笑うだろうか

思いきつて割ってみようか

でも私は知っている

ガラスは痛いつて知っている

でもそれでも

そつとガラスに指先で触れてみた

するとガラスはそこからみるみる割れて

破片が足元できれいにきらめいた

顔を上げると

私と同じ顔が

「久しぶりだね、私の恋心」

と笑つて私の手を取る

指先からほんの少しだけ出た血は

彼女の掌に吸い込まれた

浮遊する

時々、私の意識は宙に浮く

その時、私は世界のすべてから隔絶されていて

時間の経過さえも私の外にある

宙に浮いた意識が戻る時

それでも私は

まだ何かの膜の中にいるような

世界との隔たりが消え失せない

その僅かな時間が

なんだか心地良い

私はまだ、現実に戻らない

今座っている椅子も

そこにいる人々も

空気も

天気も

気温も

私から隔絶されていく

まるで孤独のようだけれど

生物は一個体として孤独なのだから

これはもしかしたら

生物としての形なのかもしれない

ふと

椅子とも

人々とも

天気とも

気温とも

もしかしたら

隔絶されているのではなくて

融合しているのかもしれないと思った

世界はどこまでが世界なのか

私はどこまでが私なのか

宙に浮いた意識は

それを探しに行くのだろうか

予感

木々の梢の先端まで

雪に彩られた世界を

朝陽がゆつくりと昇っていく

朝靄だろうか

澄んだ空気を微かに白く染めて

雪と青空と太陽が織りなす

極彩色の空気が見える

ああ、きっと私にも春が来るのだ

ただただ美しい景色が

何の根拠もなく

私の心さえも彩った

きっと私にも春が来るのだ

◆まだらめ三保 Scottsdale, USA

わたしの「鳥」

右手の甲の真ん中で

小さな鳥が翼を広げている

五歳の時の火傷の痕

それ以来 わたしはこの鳥と暮らしている

ある人に心を刺されたことを

ふと 思い返していたら

大好きなピーターラビットの絵皿が

わたしの手からすべり落ちた

わたしの鳥はすぐ飛び立った

ピーターを抱え 空に登った

台所の床には

こなこなになったピーターのかげら

でも わたしは泣かない

ほんもののピーターは今頃

雲の椅子にすわって

葉っぱのついたにんじんを

かじっていると思うから

ある日 わたしが異国の学校で

バイオリンのレッスンを受けていた時

お母さんがトーキョーで亡くなった

わたしの鳥は太平洋を超えた

わたしとバイオリンを背中に乗せて

お母さんのところへ飛んで行った

わたしはベッドの傍で

シベリウスの協奏曲を弾いた

お母さんは目を瞑ったままだったけど

わたしには分かった

お母さんは

わたしが弾くシベリウスを楽しんでいた

そして

わたしには聞こえた

お母さんは

わたしの鳥に「ありがとう」

とささやいていた

マジック

マジックランチは

アリゾナのハイデザートの真ん中

空に近いところにあるランチ

そこへ

四十人の女の子たちが来る

十のグループに分かれて

セラピーを受けに来る

：

グループ七には

丸顔の女の子がいた

太つてもなく痩せてもなく 普通の見た目の子

いつも赤い毛糸の帽子を被っている

それは その子が髪の毛を引っ張って 引っ張って

髪の毛が抜けて ところどころがハゲになっているから

顎がとんがった女の子がいた

とても痩せていて 腕も脚も細かった

その子は袖がたつぷりしたブラウスしか着ない

それは ゆるゆるの袖口に 食べものを隠すため

食べたふりをして お皿を空っぽにするため

もとは女の子だった中年のおばさんがいた

もとはドイツ人で どこかの会社の偉い人

おばさんは慣れた手つきで

プラスチックのスプーンをくすねた

後で喉をつついて 食べたものを吐いてしまうため

中学生にしか見えない おさげの女の子がいた

黒縁の眼鏡をかけて

ブルージーンズのつなぎを着ていた

ポケットはすべて ホッチキスで塞がれていた

食べものを隠せるポケットは規則違反だったから

赤い帽子の子はニューヨークから来た

ゆるゆるの袖口の子はミネソタから来た

もとは女の子のおばさんは地元のアリゾナから

中学生みたいな子はカリフォルニアから来た

：

みんな たつぷりお金のある家から来た

お金のない人はマジックランチには来られない

松の林と緑の芝生に囲まれた敷地

白いスタッコの建物には たくさん窓

どの窓にも スペイン風の鉄格子

空には薪の暖炉の煙突が突き出ている

ともしゃれているけれど 治療のお値段は張る

女の子たちは 個室のある住まいのスタッコから

大きな二階建てのスタッコへ通う

食堂でご飯を食べ あるいは食べたふりをする

色とりどりのタイルの床のオフィスで

拒食症が専門の精神科医と一対一で話をする

吹き抜けのガラスの壁のアートスタジオで

アートセラピーを受ける

そして

少し歩いたところにある馬のいる牧場で

ホースセラピーを受ける

至れり尽くせりだけど 治療のお値段は張る

さらに セキュリティも万全

高い塀が

内から外へ出るのも 外から内へ入るのも

困難にしている

門は許可がなくては開かない

完全なのか 監獄なのか

意見は別れると思うけど

治療のお値段が張るのは 間違いない

：

赤い帽子のジュティは

新しく来たメンデル先生が気に入った

今までの人みたいに 一人で捲し立てないで

ジュティの話を静かに聴いてくれた

ジュティはおじいさんに虐待されたことを話した

ゆるゆる袖のヒルダは 袖に食べものを隠し続けた

ますます顎はとんがって

腕も脚も もっと細くなった

それでも「食べてはいけない 食べてはいけない」

と二十四時間唱え続けた

もと女の子だったおぼさんのリアは 途中でいなくなつた

ある日 背の高い金髪のおじさん(夫?)が現れて

リアを怒鳴りつけながら ナースに文句を言いながら

リアを銀色のポルシェ911カレラに乗せて

マジックランチを出て行つた

中学生みたいなクリスタルは

馬のブランシュと仲良くなつた

ブランシュにブラシをかけていると気持ちが落ち着いた

そしてブラジャーに隠したデザートのりんごを

馬に食べさせた

∴

ジュティとヒルタとクリスタルは

六週間のセラピーを無事に終えた

ジュティはニューヨークからメンデル先生に

黄色いバンジーのカードを送つた

「少し希望が湧いてきました」と書き添えて

ヒルタは家に帰ると 家族と一緒にの食卓で

食べたふりができなくなるので憂鬱だつた

「きつと太つてしまう」と不安になつた

クリスタルは「馬を買つてくれたら

ちゃんと 普通に食事をする」と

両親に言おうか 考えている

∴

そして

マジックランチには 新しい女の子たちがやって来た
新しいグループ七では

昔のハリウッド女優みたいに

整った顔立ちのカロラインは

空港から おむつをつけてタクシーで来た

下剤を大量に飲んだので おむつが必要だった

ふたこのアン・ルイズとエラ・ローズは

ふくよかな身体つきのお母さんと来た

お母さんは健康そうなピンクの肌

ふたこたちは 青白くかさついた肌

お母さんの方が若く見えた

もう一人は 折れそうなほど痩せたアヒョン

韓国系アメリカ人のお父さんが連れて来た

アヒョンは 受付の人にも ナースにも

一言も口をきかなかった

四人で始まるはずだった新規のセラピーは

つぎの日 一人減って三人になった

着いたばかりのアヒョンが

高い塀を乗り越えて脱走した

アヒョンは砂漠に向かって 走り続けた

折れそうなほど痩せていたけれど

アヒョンは健脚だった

あるいは

「火事場の馬鹿力」だったのか

気づいたナースが 走って追いかけた

マラソンで鍛えていたはずなのに

とても 追いつけない

メキシコから来た カトリックのナースは

「お恵み深いマリアさま」と

神頼みで 祈りながら走った

そして 少しずつ アヒョンに近づいた

ナースを見ると

アヒョンは ウチワサボテンの畑の中に

身を投げ出した

何百ものサボテンのトゲに刺されることを

ずっと前から 望んでいたみたいに

：

この砂漠は昔 ネイティブアメリカンの

ヤババイ族が住んでいたところ

鹿や羊やうさを捕まえ

木の実や種子や果物を採り

地下を流れるハサヤンパ川から水をいただき

豊かな暮らしをしていたところ

夏が過ぎ 低地の食べものが少なくなると

ヤババイたちは高地へ移り

ウチワサボテンの実を食べた

そのウチワサボテンの畑が

今

食べものから逃避する女の子の

最後の逃げ場となった

：

きつと 食べものはスケープゴート

本当は何から逃げ出しているのか

女の子たちも知らないんだろう

おそらく お医者さんも

そして 畑のウチワサボテンたちも

：

何が どう変われば

女の子たちは逃げ出さずに

済むのか

わたしが「わたくし」になると

わたしは

「わたくし」の歩き方をして

「わたくし」の声で笑う

わたしが「あたし」になると

わたしは

「あたし」の歩き方をして

「あたし」の声で笑う

寒い日は「わたくし」が似合う

カンカン照りの日は「あたし」かな

おばあさんになったら

「わし?」「それとも「わい?」」

中身はおんなじなんだけど

それぞれ べつべつの

包み紙で包まれる

アメリカにいと いつも「I」

先生の前でも スタバでも 自分ちでも

いつも「I」

包み紙は無し

それに 誰でも「I」

わたしも お母さんも お父さんも 弟も

ホワイトハウスの大統領も

三丁目の自転車泥棒も

ピリオネアも 文無しも

女も 男も トランスジェンダーも

小さい子供も じじ ばばも

みんな 自分は「I」

包み紙は無し

時々 包み紙をべりんと 剥がしたくなる
裸ん坊のまま のしのしと 歩いてみたくなる

注¹「I」は英語で「I am Miko.」(わたしはミホです)のように自分を指す時に主語として使う代名詞。その人の年齢、ジェンダー、人種、社会的地位などに関係なく、誰でも「I」を使う

わたしに似ている

「離れ離れになつて 大丈夫かしら…」

ケアマネさん ヘルパーさん みんなが心配した
両親は仲の良い夫婦だったから

初めて母をホームに訪ねた日

「ここはね、わたしのためにお父さんが

よく調べて 選んでくださったところなの」

母は誇らしげだったが それは虚言

アルツハイマー用のホームは

ケアマネさんが見つけた

その後 母は二度と父のことを口にしなかった

父の存在を忘れてしまったのか

無意識に 記憶を消してしまったのか

母は 一人でいることの達人になつていた

しばらく経つて 父が逝つたとき

わたしたちは 母には知らせなかった

けれど 訪ねるたびに

「なにか欲しいものがあつたら おつしやい。

なんでも送つてあげますから」と言う母は

わたしがアメリカに住んでいることは

記憶にあるらしかった

ホームに入る前 何度も迷子になつて

首に掛けたセコムの「お守り」(GPS)のお陰で

タクシーに乗せられて帰つて来た母

「なんのおもてなしもできませんで」と

ヘルパーさんに深々とお辞儀をして

お玄関まで見送るので

いつも 初めての人を驚かせた母

ホームではわたしを見つけると

「あら 三保さん」と手を挙げた母

ある年

「わたしの娘ですよ」と

母はホームで暮らしているお仲間

わたしを紹介した

みんなは無言でわたしを見た

あくる年 ホームへ行くと

母はわたしをまじまじと見て

「あなた わたしに良く似ているわねえ」と

微笑んだ。

「だって わたしはあなたの娘なのよ」と

言っただけで 母はただ にこにこしていた。

それが母に会った最後だった。

幼いこと

お母さんの後ろを歩いていたとき

わたしは ふいに 転んだ

お母さんの水玉のスカートをしながら

急いで 立ち上がって

ついて行こうとすると

脚が重い

とてもなく重たくて

一歩も踏み出せない

まるで地面に

糊付けされているよう

幼くて

「絶望」などという言葉は

知らなかったけど

たしかに それらしい心持ちで

もがく

といきなり

ふつと

脚が軽くなる

やつと

動けると

ほつと する

そして

前を見て

気づく

わたしの前には スカートも何も

もう 誰もいない

ああ わたしは置いていかれたんだ

より一層の絶望が

そこにある筈なのに

夢の中で

わたしは泣かなかった

わたしはモノクロの風景の中で
ただ 突っ立っていた

いつか

風景に色が戻り

空が青くなることを

知っていたんだろうか

いつか

誰かが

わたしの肩をそつと抱いて

一緒に歩いてくれると

信じていたんだろうか

幼いことは

ときに

それだけで しあわせである

生と死の水音 みずおと

わたしは息子を亡くしてはいない
ただ

彼はわたしのオーヴィットから

外れてしまった

海のあちら側で

彼に会うのは

ほとんど誰かが死んだ時

薄暗く

緑の深い霊園の中で

墓石の前に並んで

縁なし眼鏡の牧師さんの話を聴き

讃美歌を歌う

亡くなった人のことを思いながら

その霊園には

著名な人物たちも眠っている

文を書いたり

音楽を奏でたり

妻を裏切ったりした

人たち

どんな人も

結局は死んでしまう

ダフネ・デュ・モーリアの短編で

恋人たちは墓場で逢う

静かに死に取り囲まれながら

生の営みの極みを求める

だが その極みも

永遠には続かない

海のこちら側で

わたしが息絶えた瞬間^{とき}

息子は それを知らずに

いつものように

大学へ行き

眠そうな学生たちに

講義をし

書きかけの論文に

手を入れることだろう

霊園を歩くと

心の中に水音が響く

さ行のざわめきの時も

さ行のさざなみの時もある

その水音の中で

わたしは漂う

生と死の微妙な息遣いを

二〇二二年度は三六二四篇の応募がありました。

年々、驚くほど巧みな詩がたくさん寄せられるようになりました。ここに収録された詩篇は、主として若い世代の苦悩と喜びと問いかけが詰まっています。また日本という国の今を敏感に知らせてくれます。自分と比較し、自分の心の位相を探すことができます。

地方の店頭で詩の雑誌は置いてなくて、詩の衰退を否むことは出来ませんが、応募作品を読むと、詩を書く人にとって詩という自由な自己表現は生きるために不可欠で、むしろ表面の現象とは裏腹に、詩はこれからも日本文化の虚飾を撃つものとして在を發揮すると思われれます。

本年度の金澤詩人賞受賞者は次の二名としました。

岩手県のア部樹恵さんの九篇の詩がとても美しいだけでなく、人間的なやさしさにあふれ、たまたま聴いていたモーツアルトのヴァイオリン曲と見事に感応しました。

難聴による差別に苦しみながら、「私の耳はたまたまそういう造りで、悪意はただの、無知と性悪の塊だっただけ」「心だ

けは隔たりを超えられるように、つよくなりたいたいと願いながら日々を過ごす」と克服の過程を綴られています。全篇を通して決して生硬な表現にならず、作品「手」にこめられた様々な思いをみても、他者への愛が繊細に広がってゆき、それがモーツアルトの響きに合ったのでした。これからも、「まだ傷つくことのできるやわらかい心」のままに詩作を続けられることを念じます。

アメリカ在住のまだらめ三保さんは、他界した母のベッドの傍でシベリウスの協奏曲を弾かれたり、セラピーと関わり、それぞれの病態を鋭く観察されたり、日本語の特性を「包み紙」という表現を用いて、日本の国会でも取り上げられたジエンダー問題を考えさせたり、「どんな人も結局は死んでしまう」と達観しながら、母と子への眼差しは哀切である、等々、芸術と生活全般にわたる豊饒な世界が、閉塞感なく物語られています。

日本在住時に、絵本作家として数々の業績を残され、今も子供たちに広く愛読されていますが、これから詩人として日本へ発信されますことを願ってやみません。

沖縄特集を組みました。これらの作品から沖縄という土地が

生み出す言語空間を意識せざるをえません。沖繩の人が内地と呼ぶ日本との差異が詩においても、沖繩の歴史と青い自然が織り成され、その未来への挑戦的な作風に瞠目します。ニューヨークから今年も寄せられた阿部静雄さんの多くの詩から、現代の混迷する新鮮な息吹きを受け取りました。

註＊ モーツァルト、協奏交響曲 変ホ長調 K364

（金澤詩人倶楽部代表 近岡礼）

阿部樹恵

プロフィール

岩手県出身・在住。一九八七年生まれ。特別支援教育支援員（会計年度任用職員）として中学校に勤務。読書をはじめ、音楽を聴くこと、ゲーム、洋裁、ドラマ鑑賞その他諸々と多趣味。詩作の他、小説未満の短文を書き、短歌も詠む。詩を書き始めたのは中学生の時。運動、スポーツも好きでクロスバイクを所持。九歳の頃、中等度難聴を発症。以来補聴器を装着して生活するも、ごく普通の環境で育つ。好きなバンドは L'Arc'en Ciel。好きなシンガーソングライターは中島みゆき、鬼束ちひろ。

金澤詩人賞受賞者

プロフィール／受賞のことば／作品へのコメント

受賞のことば／作品へのコメント

私にとって詩を書くことは、自己表現です。元より私は話すことが苦手であがり症なのもあり、人前で何かを表現するというのを避けていました。その点、文字、文章においては、推敲を重ねて言葉を選ぶことができます。中でも詩は、最も簡単で、自由です。季節の匂いを感じた時、なんてことない日常に美しさを見た時、自分の感情が波打つ瞬間、何かに触れて意識が空想に飛んでいった時、ありとあら

ゆる感覚を文字に起こす時、詩が生まれます。拙い私は、詩の技法など何も知らず、ただ思うままに書き連ねるしかできませんでした。自己表現と言いながら、書いた詩が私以外の目に触れることはほとんどなく、どちらかと言えば思考の整理に近い状態でした。そんな中、様々な要因が重なって「公募に応募してみよう」と思ったのが昨年のことでした。詩の投稿は、この金澤詩人賞が初めてです。

応募したいくつかの詩の中から、一番に「隔絶」が選ばれたことが自分としてはとても不思議です。散文詩と言えるかもしれませんが、それでもこの詩は書いた私自身、詩としての体裁を保つことができているのか甚だ疑問だったからです。この詩は金澤詩人賞の締め切りの前の週、ある朝がきつかけでした。いつも通りの出勤の途中に不意に補聴器の電池が切れてしまい、車中でかけていた音楽も、エンジンの音も、いつもより遠く感じられました。到着した勤務先の中学校の駐車場で、いつもなら僅かに聴こえる生徒たちの賑やかな声が聞こえず、ふと、私は「少しか世界から離れたところにいる」と思ったことが「隔絶」の始まりでした。あとは思うまま、難聴である自分の想いを綴りました。これは難聴者としての私の世界です。もつと色んな人に知ってほしい、難聴者が思うことです。

この度は金澤詩人賞に選んで頂き、誠にありがとうございます。まさか自分がこのような荣誉ある賞を頂けるとも思わず、いまだに信

じられません。誰かに見せるでもなく、ただただ蓄積していくだけだった私の詩がこうした賞を頂ける日が来たのが、本当に嬉しくて仕方がありません。何もない（と自分では思っている）私が言葉を綴ることを肯定して頂けたようで、この喜びをどう言葉にしたらいいのかわかりません。いつその想いも詩にしてしまおうかと思っています。

最後に、私の詩を選んで下さったこと、深く感謝いたします。「隔絶」に出てくる家族、友人をはじめ、私にインスピレーションを与えてくれる季節や自然、周囲の人に感謝をしながら、また詩作に励みたいと思います。ありがとうございます。

まだらめ三保^{みほ}

プロフィール

一九四九年一月一日東京生まれ

東京教育大学文学部卒業

シカゴ大学大学院社会人文学部博士課程修了

アメリカ在住 二二年

日本在住時は児童文学の創作、翻訳に従事

主な著書

創作はナンセンスファンタジーの「おひめさまシリーズ」ほか(ポプラ社)。翻訳は「きかんしゃトーマスシリーズ」、「赤毛のアン」ほか(ポプラ社)、「ふしきの国のアリス」(集英社)等。

フォートエッセイ風の「サボテンとアートの街で…アリゾナ便り」(ピタゴラスプレス)

“Ms. Flygirl and Sky Daisy” (Poplar Publishing Co) 、

以前ポプラ社で出していたものを英訳。

“Ms. Flygirl’s Fantastic Five Days” (Pythagoras Press) 、

ブックとして英語で書き下ろしたものを。

受賞のことは

「金澤」この「澤」の字の「金澤」が好きです。東京生まれ、東京育ちで旅行でしか訪れたことがありませんが、心に残る文学的な旅だったと憶えています。その「金澤詩人賞」をいただいて「驚きと喜び」でいっぱいです。

アメリカへ移つてからは日本語でも書くという機会はありませんでした。画なら翻訳要らずと、ここ十年ほどは主に画を描いておりました。それが、ふとしたことから約一年前そろそろと日本語で詩を書き始め、何か詩のお仲間でもと、インターネットで探している時「金澤詩人賞」の存在を知りました。

まだ駆け出しで、おこがましいけれど、メールでも参加できるといふことで、思い切つて一つ作品をお送りしました。それから「受け取っていただけた」という嬉しさが励みになり、詩を書くことが暮らしの中の大切な時間になりました。時に「わたしを書くものは詩なのかしら？」と気持ち揺らぐこともありましたが、この受賞は「背中を押してあげたんですから、いっそう精進してくださいね」というお言葉と思っております。

書いた詩は英訳して、夫にも読んでもらっています。いつか小さな詩集を作ることができるよう、これから書き続けてまいります。心から

ありがとうございました。

作品へのコメント

選んでいただいた作品は、どれも気持ちをもそのままに綴ったものです。「詩らしくしよう」「詩的な言い方で」などと考える前に言葉が出てきたように思います。

わたしの鳥

幼稚園へ入った時、初めて「手の甲に傷があるのはわたしだけなんだ」と知った驚きと、その傷と共に歳を重ねてきた思いを書きました。

マジックランチの女の子たち

拒食症に苦しむ女の子たちの現実、また、今でも繁栄からは取り残されているアリゾナのネイティブアメリカンの人たちの生地へ「経済的に豊かな拒食症患者のみを支える」グループが入り込んでいくという事実の「悲しい複雑さ」を伝えたいと思いました。

包み紙

日本語と英語を使い分ける日々、二つの言語の違いは考え方、人との付き合い方、距離の置き方等、深いところにも影響があるような気がして、それを表してみました。

わたしに似ている

アルツハイマーになつた母。樂天的で大らかなまま、ゆつくり病状が悪

化していき、初めてわたしが娘であることが分からなかった日の言葉「あなた、わたしに良く似ているわねえ」が母らしく、と同時に「あちらの世界」に行ってしまったのねと、忘れられない言葉となりました。

幼いこと

息子が小さかった頃、わたしに寄りかかると、それこそ百パーセント体重を掛けてきて、その無防備振り、信頼振りに驚きましたが、その重さが心地良かった思い出もあります。子どもたちが、その疑われない「信頼」を持ち続けられる社会であつて欲しいと思いながら書きました。

生と死の水音

太平洋のこちら側にいるうちに、まず兄、そして父、母を失くし、息子とも離れ、わたし自身も夫も歳を重ね、「この先」や「生と死」を考へることも多く、そんな心の揺れの詩です。

沖繩特集

◆琴森 戀 沖繩県

手榴弾

何とは無しに島を一周してみたのだ

かつて島内に周回道路を建設しようとしたが

不幸続きで頓挫したという忌わしい伝説が

ほんの一瞬だけ私の脳裏をよぎる

聽て着天は暗雲立ち込め 辺りは冥くなり

幾多の閃光と耳を劈く弾の様に

雨が ばらばらと降り出した

雷も容赦なく地上に轟き

ずぶ濡れになり 岩陰に隠れた

海神の怒りか 雷鳴は一向に止まない

戦慄の極みで 立ち竦む私の眼前に

波打ち際にころんと

錆びた濃色の物体が転がっていた

「手榴弾だ！」

信管のピンが 波で外れ 今にも暴発しそうなのだ

私は狼狽え 遁走した

遙昔 戦世いくさの中を逃げ惑う人々の様に

海神うみかみに命乞い 暗晦あんかいの中を 孤独彷徨う

遠雷が夏嵐の終焉を告げたが

戦世いくさは未だ終焉しんげんしていない

戦火の森

戦火の森

同胞の亡骸に群がる野犬よ！

死者の指輪を盗む姿は「羅生門」の老婆に似て

「必ずや敵を討ち 妻の元に帰らん！」と

叫びたいが 喉がカラカラで 声が出ないのだ

叢の茂みを掻き分け 敵の空爆から逃れ

息を殺し 杳い夜を やり過すす

銀蠅たかが集る肉片の軀を踏みつけては 幾度も謝り

泥濘を彷徨し 水を求め 血塗れの池に顔を埋める

戦火の森

土を掻き分け密やかに生きる土竜よ！

地中に潜る姿は ナチスから逃げるアンネ・フランクに似て

いい加減出てこい！ どれ程の刻を隠れていたのか？

遠くゲアムで弾痕に碎けた友も 嘲笑っているだろう

お前は戦争が終わった事を知らないのかと

さあ！ 煤に汚れた顔を洗い 燦燦と輝く太陽に招かれ給え

戦火の森

葉脈に銀鼠色の跡を残す蝸牛よ！

屈こまつた身体は ガマ※の中で 蠢く同胞に似て

「デテキナサイ！ ミズモ ショクリヨウモ アリマス！」

アメリカ兵の声に 野犬は吠え 土竜は慄き 蝸牛は首を竦めた

俺は 敵に向かい 潔く碎け散ったが

賢かったのは 投降した 野犬や土竜や蝸牛

註※ガマ・洞窟の事

風に舞う群蝶

弾痕の残るヒンブン

数多ある弾痕の穴に 私は種を撒こう

いつかその種が発芽し 花となり

あの人の魂は 蝶となり

蝶は花の蜜を求め 私の元に還るだろう

やがて 花が咲き乱れ ヒンブンに蝶が舞う

「只今 待たせたね」と

私は あの人の来ていた服を纏い 口ずさむ

※ ハチル「スリ 初春になりば ヌヤマ 野山 ハナ 花ざかり

イルイル 色々ぬ はびる ※ 花に 花に 舞い遊ぶ アシ

スリサーサー シュラサー ハイヤ

あの人や同胞が 皆 蝶となつて還つてきたのだと

そんな儚い夢を 今迄何度見た事か

「主人は 立派に旅立ちましたよ」と

申し訳なさに手渡された 礫 いでい

私は 思わず礫を大地に投げつけた

いくさ戦世で散つた 愛するあの人は 今 何処に？

何故 あの人は死に 私は生きているのだろう

「嗚呼！ 生きるとは灼熱地獄の中を歩く蟻の如し！」

それでも あの人の帰りを待つ私は 問いかける

風に舞う群蝶に

はびるふし 註※綾蝶節・胡蝶の唄とも呼ばれる八重山民謡

註※はびる・蝶の意味

註※ヒンブン・魔除けの壁の事

◆元澤一樹 沖縄県

Trip

——はじめは沈黙

ピントをしぼるように

少しずつ視界が狭まっていく

それが最大値になったとき

ぼくとぼく以外とを結びつけるように

一筋の光の線がのびる

宇宙のようでもあり

深海のようでもある

この場所がどこか

もう

僕にもわからない

平泳ぎの要領で空をかき

しほり穴のむこうを覗いた。

その瞬間

オレンジの皮をむくように

この世界が、空間が、

そっくりそのままひっくり返った！

ふと

我にかえる。

見慣れたからだ、いつもの景色

一度 さえぎられた五感がさえ

あらゆる情報が流れこんでくる

うるさいほど静かだまば

ゆいぐらいに落ち着いて

いる揺るぎない重力に逆

らうことなく立ち上がれ

ば、あまりにも安定した

体幹に一步、また一步と

足を踏みだすカメラを取

り、首にぶら下げて家の

鍵だけ持つて扉を開ける

湿り気を含んだ生ぬるい空気を感して

「夏の夜だ」と唇が告げた。

ような、気が、した。

夜中というほど深くない時間

静かな住宅街を行けば

ぼくの気配を察知した犬が吠える

姿は見えないけど、いる

その犬の名前を考えながら

サボテンの花の蕾を見上げて

／を／

／シャッター

切る／／国道に出ると少しは賑やかで

あかるい、と思う（シャッターを切り

ながらカメラを素早く左右に動かし）

思った、ぼやけた光の残像を収めたかった

ほんの一瞬を切り取られた世界の連なりを

ばらばらとめくつて動くアニメーションのような束の間のトリップはさながら明晰夢の散歩者 感覚のない手のひらでなでる花びらの無味無臭のやわらかさ 震えだす空気の振動と遠くの光の明滅で 向こう側とこちら側とを認識できるくらい曖昧な所在地 ラグる影のモーション 解像度の低い路地裏でねこらしき生き物とすれ違う
間 違う

フラッシュを焚いて

瞬間的に燃えた夜が

再生するまでの間で

向こう側の僕が僕を

見つめる横顔を、を

見た。

しまった。

森に捨てられたヘンゼルが、道の途中で光る小石を撒いたようにとところ

どころ

で写真を撮った。それは鳶

のから鉄条網だつたり路面
に付いたタイヤ痕だつたり
時々なんのかさえよくわ
からない落書きやゴミでさ

え も 撮 っ た 。

的な感情のわずかな琴線に触れるものと愛したい。シームレスな現
実は
まどろみの夜も昼にできる化学も価値観も憂鬱もおぼろげながら見
える向

こう側に向けてシャッターを切る(まるで銃爪を引くように)

祝祭の火

を灯

す。

「ごっだよ。」

砂丘のようなベッドシート

撮る。

光を焚いて、瞬く部屋に、知らない人の影

(怪物のようなその影が自分のものと知るのは少ししてから)おびえ

(て)た

レースカーテンの隙間から臍げに見えた世界の内と／内と外／外。

無意識

現像された写真は

他人の夢のよう。

あらゆる暗闇(もしくは、光)が

印刷されて次々と積み重なっていく

そのうち 舞台上の

ットライトの下 ぽ
くだけが照らし出さ
れる。
(れて)・・・(る)

はじめは沈黙――

◆奥間 空 沖縄県

ちいさな夜

美しさに触れたい夜は
窓をあける。そつと

すると感性は

庭園の梢に下がる雫のきらめきを
とらえる

つぎに

浅瀬に滲む半月。

それから

淡水魚の尾鰭のようにのたうつ

テノールの歌声。

いつしか

ピントを絞るように
徐々に視界が狭まってい
く
それが最大値になったとき
ぼくを結びつけるように
一筋の光芒がのびる

僕がどこに行つても迷わないよう

ちゃんと戻つてくれるよう

に、

灯台はいつでも。

それらに魅了された

右の手が

湖にうねる波紋に似た動作をもつて

夜に香木を捧げる

昼の光に

粒立ってしまった

からだのなかの

なにかを鎮めるために――

そして

わたしは好む

手のひらにおさまる

ちいさな夜を

おとなしい暖炉の炎よりも

もつと気弱なロウソクの火を

作為的で

研ぎ澄まされた静謐より

地底へ向かつて

うんと、ゆるんだ静謐を

窓から港が見える室内

職人になりたいわけでもなく

かといつて

出家したいわけでもなく

ただぼんやりした人間

であればいいと思った昼下がりに

彼は灯台のことを乳牛と呼んだ

彼はラジオから流れる仏語のコマーシャルを

水没林と呼んだ

そして壁にあるハンガーの影を美しくなでる――

彼は午後には平行しながら

じつとみていた

乳牛を横切る作業船を

レモングラスがシンクで溶けてゆくのを

洗剤を薦める水没林を

外に出る

外と内

壁には思索の筆跡がある

煙は環境音楽のように漂っている

タバコは灯台のように自我を押し殺している

陽に晒され

バターのように溶けた倦怠

小型の遊魚船によつて

海面はカーテンのように開かれて

旅客機が性器のように都市に挿入される

搭乗橋がドアに触れ――

内に戻る

掃除機をかけると

固いものがひび割れ

中からちいさな声が聴こえた

それから

<

空間を耕した。

簡条書きのように簡潔に

◆松川優子 沖縄県

ガラスの向こう

人影が見えた

誰かと目が合った

何度も何度も目が合った

偶然かもしれない

そう思うこともあったけど

気がついたら見つめあっていた

厚いガラスに手を置いた

ガラスの人

向こうも手を合わせた

ただただ見つめあうだけだった

長い間見つめあっていた

触れなくなつて

話しなくなつて

ガラスが消えるときを待っていた

どこかで知っていた

ガラスが無くなることはない

同じ場所に座り込んで

長い時間が経った

触れ合うことのないふたり

冷たいガラスに手を合わせて

視線がそれたとき

ふたりはガラスから離れた
気持ちだけを置き捨てて

◆玉城栄人 沖縄県

生きる

空を舞う 無数の鳥達の涙が零れ落ちてゆく

苦しみや痛みを叫ぶ声たちは

黒い煙に混ざり消える

母の愛も父の優しさも知らぬまま少年は

目覚める事を疑わず永遠の眠りにつく

日が昇り沈み 月が上がり落ちる

そうして回り続ける日々を

明日も君がいるこの世界を

噛み締めて今日も 生きる

美しい街に銃声が今日も鳴り響き続ける

覚悟を決めた名も無き兵士が

黒い煙となり消える

母の愛と父の優しさに包まれた少女は

目覚める事を疑わず 今日眠りにつく

日が昇り沈み 月が上がり落ちる

そうして回り続ける日々を

強く輝く君の命を

抱きしめて今日も 生きる

◆麻生藤 沖縄県

その後ろでひとつの惑星が見え隠れ

夜は暗いものだとは知っているが

こんなに深い色は見たことがない

病室の窓から見える

ガラス越しのジェネリックの夜

傍らの装置が

思い出したように青くひかった

ここはさびしいけど

あと少しで帰れるから我慢する

肩に映えた明滅が

ひとつの時間の終わりを告げる

ひとをひととして繋ぎ留めるための

たぐさんの管から

このからだのなかをたゆたう

寄せては返しつづける澄んだ海

うつくしい水面に生まれた

あたらしい魂が

一滴ずつかたちづくられた

石筍のように天を向く

波打ち際には沢山踏み蹴られ

凸凹になつた砂が

山のように隆起している

針を刺す場所も

これからは計算ずくだ

いつも日射光のおいがする
こんなに静かな夜であつても

部屋中にながれる命の賛歌と献身が
油絵具のように

相済茶の空にしぶきをあげて

燦雨のごとくはじけ飛ぶ

この星からあの星へ

モールス信号のような轍

いま月はどこに在るのか

ベッドから起きたら

手を消毒しうちへ向かう

まだこの場所に

残したいものがあるような気がして

伝え忘れが無いようにメモ帳を開く

四方に散らばつたことはたちの影は
生活の延長をありのまま伝えていた
シュガーレスのどあめを買う

銀行でお金をおろす、携帯代を支払う
詩を書く

おもむろに頭上から降るひかりに
ようやく月の戻りを知る

帰路を照らす辺り一帯の明るさは

街灯にも負けない程のひかり

冷えた夜道をとくす

星に抱かれる温み

そして

夜に鳴く鳥の音が

木々を抜ける風の音が

◆里香 沖縄県

灰色の

行き続けられるから。

生きてきた所。

齒のおくて死んだ

見送るから

そしたら、

のはらのゆう日

とけきつても未練がましく

口に残る落雁のあじ

金が要る

生きるには金が要る

家は金

服は金

米は金

水も金

髪をつややかにするには

金が要る

それで、そうして、

なぜだか飢える心に

いろいろ注いで注いで

こぼしてこぼして

三日坊主で、てんでだめです

こおり豆腐みたいに、ほら、

繰り返すほど、一度とければもつと固くなる

金が要る

生きれば、飢えるのだから、

渴くのだから

寒いのだから

暑いのだから

人と出会うのだから

悩むのだから

とかく、とにかく何もかも

金が要る

余裕には

キャパシティには、
つまり愛には
金が必要。

あおと呼ばれた

あおいのだそうです

前途洋々 あおいのだそうです

わたしのちしおはこんなに赤黒いの

あおいのだそうです

ぜんとようよう、あおいのだそうです

わたし借金をしたじゅうなさい

日々に理想に死んで

君とはわかれてしまつて

それから君の心がわかつてしまつて

こわれたため池をすくつてすくつて、と
ないていた

雪崩ていた

そよ風ささめくあの場所に

いまでもきつといるのでしょう

いまではきつとおそいでしょう

桜が散つては咲いたあの小道

いまなおきつと歩くでしょう

いまならきつと惜しむでしょう

小川のせせらぎ あの森で

いまならきつと笑うでしょう

いますぐきつと駆けるでしょう

せみが響いたあのはやし

日差し覆ったあの木陰

波たえまないあの浜辺

いまからきつと捨てるでしょう

これからもつとなくすでしょう

それでもきつと残るでしょう

これからもつと探すでしょう

緑の世界のあの二人

いまでもきつといるでしょう

いまからやつと愛すでしょう

あせをぬぐつて、思い出した

空をあおいで、ねがうこと

あまりに白く切りぬいて、ぬけてしまった記憶は

暑さなど終わればいい、終わるなら、ならば

あせをぬぐつてねがった

そらを青いでおもいだすこと

風ささやきて、つぶやいた

落ち葉にかくれた、ひとりごと

からからふわふわ暮れ果てて、果てぬ焦がれの

夕映えなど褪せればいい、あせるなら、ならば

落ち葉ささやきつぶやいた

風がぬすんだひとりごと

くもつた窓に、さんげした

とけてながれた、かくしごと

木枯らし頬を切りつけて、のこす情けの
のこる情けの

なみだなど役にも立たない、役立たずなら、
ならば

とけずながれず懺悔した

くもらせたのは、かくしごと

沈黙が、みちみちていた。

花をあおいで、刻みつけたこと

落ちて、いつかは踏みつけられていく、にじんできく

枯れるなら、咲かなければいい。終わるなら、始まらなければいい。

どうか、どうか、と願ったこと

ああ、口に出さずにはいられなかったこと

忘れ果て果てることのできなかったこと

無意味とは、思い切り切ることのできなかったこと

沈黙にも満たされていた。

花を仰いだことを刻みつけたこと。

偏頭痛

きゅつと しばられている

片方だけが しばられている

忘れたころに思い出す

覚えるとしては あじけない

しばられている

つかまつている

からまつている

しばられている

ゆるく、ゆるく、またつよく

金輪をかんじる

つよいものがゆるくはめられているよううな

いつも眠っているが、それが分かるのだが、それが目覚めると私は眠くなる。

呼吸のようにまばたきをする。

こんなでは数学など解けやしない。と、言い訳をする。ほおづえをつく。

髪をとけば、倒れてしまいそうだ。

ペンを投げれば、

私がペンを投げれば覚めぬ眠りをむさぼるだろう。おちいつて帰らぬだろう。どうしようもないだろう。昼前、人々はみなおそらく忙しい時間に、家は、私は、せみは、あまりにのんびりとして遠くとおく探している。キーンキーンとじいーじいーとせみが秋にあきにないている

きゅつとじわつと、頭痛の季節の変わり目を、おでこをなでて、受け入れようとする。押さえようとする。待つてと言いたかったのかもしれない。知らない。分からない。

こぼれて追えぬ時間からつぐなえない罪がとどく。小包ではなく、それは目をそむけたい引越しの重さに似て。首をなでる。なでる。頭に手をおく。ああ、知っている。分かっている。ほめようにもほめられないこと。忘れている。わすれている。数学はわたしの苦手と怠けの象徴だから。楽しさを知つてもすきにはならない。国語は、文字はわたしのわずかも常のがんばりの象徴だから、役に立たなくても好きだ。好きだ、と書いた。

はずかしげもなく書いた。口に出すことはあるにはあるが、なかったのに。惜しげもなく書いた。かるく書いた。だから、それではあらわせないくらいになつたどろどろを、言えず、知らず、またかくせず、でもあらわしきれず、はずかしく、はずかしく、惜しすぎて、何もなかったんだ。ない。ない。あつた、たしかにあつた。でもない。わたしの貧しさゆえになくしたんだよ。頭がいたい。

片方だけがいたい。

いたつて冷静なもう片方が私にはいつもあつて、でも助けない、わけのわからないわりには、愛しいもう片方が、邪魔をする。本音を下つ手くそに語る。どうにかこうか、息をする。両方、活ききれず、死にもきれず。はんな、半端、中途、自分で生まれもきれなかったこの人生の途中で、

どうしようもないわたしがあっている。

この坂道を上りもきれず、下りもきれず。

はじめに息をする。

人は初めに息をする。

そして泣く、大声で泣く。

それからきつと抱かれるのだ。きつとわたしもそうだったのだ。

何で生きているのかわからない。

いきをする、ぼろぼろのプライドで息をする。

この生き方があっているのか、正しいのか、世間一般なのか、わからない。

初めに教えてもらったことが、私をかたどつて、あるいは、ねじまげて。

いきをする。がたがたの体が息をする。

間違えて、まちがえて、生きてきたんだ。

それを否定しなければ、しなければ、

肯定できない。

私はわたしを肯定できない。

いままでを、大体、ほぼ、ほとんど、否定して、

残るものなどほとんど、ほぼ、全然、ありはしない、だろ。

どうにかこうか、と言う。なんくるないさつて、なんかこう上手い具合につて。

「めっちゃがんばれば」

それができないから、しないから、しようとすることができないから、いきができない。嗚咽みたいに、嘔吐みたいに、できない。

起きて、食事して、寝る。一日の終わりを願う続ける一日。覚めなければ、どうか、覚まさないで。

いつ、わたしが、起こしてくれと、息をさせてくれと願った。

ああ、でも、たしかに願ったな、私自身が願った。

青い海が沁みることなくかがやいて、いた日。

もし時を戻せるなら、

ずっと、いる。そこにいる。何度でも、何度でも、くりかえして、

ずっと、ずっと、いよう。

いきをした、たしかに笑って息をしていた。

すこしの偽りの上に不完全に成り立っていた、結局、汚れた砂の夢でも、

それは、それだけは、否定していない。

きつと、これからも、しない。

間違えて、まちがえて、その結果でも、

きつと、きつと、できる限りは、浅い、心の底から、あいされたからあいしたから。おさなくて、ばかで、乾いてしまったかもしれないけれど。

いきをする。望まれて、望んで息をする。

間違いの、誤りの結果でも、あやまられても、

私は息をする。

ここで、私のやりかたで息をする。

これからも、わからないし、否定するし、また、また、しようちゅう泣いてしまうだろうな。

そのときは、どうか、どうか、全部じゃなくていい、

できる限りの情けを、情けから、

抱いてくれ。

どうかわたしを捨てないでくれ。

この今のわたしを、かつてのわたしを忘れたように、いつか捨てるだろうけど、

どつさりの洗い物をしているときに、コップを割ってしまった一瞬みたいな余裕で、

息をふきかえす刹那があるといい。

その日まで息をするように。

手を洗う

ぬめりをとって
においをとって

どうにも、切り捨てられぬのだから、と

罰するように

爪を切る。

ガム

真つ暗なところに

蛍光ペンが塗られたような街を放浪したんだ

そこにタイヤのように転がるビニール袋
まるで僕の人生そのものだった

人生は貧乏くじを引いてばかり

僕らは誰かの手の中で踊らされている
僕らは自由になりたかった

そう嘔み締めた1日に

東雲が闇を濾過して光がやってきて
また生きれたとまじまじと光を焼きつけた

ガムを噛むスピードで生きていこう
そう思った

履歴に火をつけろ

独り駆け抜けた

百鬼夜行と魑魅魍魎に溢れた街
深淵のコンビニ 屯する烏合の衆
そんな居場所に浸る

くしゃくしゃの生き様

理想の為の犠牲は付き物
靴音鳴らし 駆け出しては躓く
其れでも戯言を踏み潰してけよ

呪われた向い風に逡巡して
生温い湯に浸かった

荒れ狂う雷雨に
声は届かないまま

不機嫌を極める

紙に刻まれた経歴

火をつけろよ

自由を求めて

嫌いなものを破り棄てろ

君が想う以上に僕は君でいっぱいなんだ

君が想う以上に僕は君でいっぱいなんだ

梅雨のじめじめする雨は

君と接吻する唾液の粘膜のような季節

肩寄せ合いながら

肩を少し濡らしながら

雨の道を傘さして歩く

男と女を引き寄せる引力

君と僕を引き寄せる引力

太陽が西に傾き始める黄昏時

横顔は紅に染まり

愛の辻褄を合わせるように

接吻の味を確かめる

猫のように戯れあつた日

全盛期を生きています

君の愛の線香が漂う街

振り返り様にみたトワイライトへと

消えゆく街並みに本当の別れと惜別を感じた

けれどこれでいいのだ

全ての過去と悲痛とを焚いて

人はまだ見ぬ透明な座標に進む

あの銀河は次の人のいる街を繋ぐ

それでも君が想う以上に僕は君でいっぱいなんだ
全盛期を生きていた

あいつ

あいつと話すといつも悪口ばかり

そんな思い出もいいと思える日が来る

あいつは温もりある人だ

毒がある言葉ばかりだと思っていた

言葉を浴槽に浸してみたら泥は落ちていき優しい言葉が浮いてきた。

あいつはそんな人。

あいつはもういない

僕は悪い人間だ

僕の言葉をフラスコに一滴混ぜてみたら不幸の言葉が飛び交ってきた。

僕はそんな人

あいつがいなくなつてから下水道で光に怯える鼠のように僕は怖がつてた

毎晩シャワーとともに涙をながして、ドライヤーとともに涙を乾かす
日々を数えられないくらい繰り返した

そうして四季折々通り過ぎた景色

いつまでも色褪せることなくやつてくる

そう白昼のペランダで耽つているとドラム式の洗濯機の音が聞こえてきた
よ

地球があちこちの喜怒哀楽を廻す音みたい

思い出の巡礼地は

あいつと僕のこれまでの時がレコーダーのように流れ続けて

僕とあいつは笑っていた

思えばもう大人になつちまったな

こんなに遠くまできて

もう昔に後戻りできない

いまだに空っぽになった部分は
埋まつていない

水の中にいるのに喉が渴いてる魚
水の惑星にいるのに渴いてる僕

いつも睨み合いばかりしていても
最後に笑いあっていた

痛みを吸って吐いて傷つけあつても

ごめんねと拍手交わす瘡蓋になつていればそれでいい

あの笑顔を裏切らないために
必死に生きていこう

誰かに呼ばれたような気がして

振り向いた無垢な空はあいつの笑顔と紙一重

孤独な逃走

いつからか命を逆算する様になつたからか
いつからか決められたレールの上を歩いているからか
生きることが息苦しくなつた

雑踏まみれの世の中だから、

いつも緑の非常口へ逃げたよ

苦悩にまみれて、逃げ口ばかり探しているように

そうして手にしたのは後悔と涙だけ

そういう生き方だから もういいか

ふと街風が吹き、顔を上げてみた

人はみんな必死に生きてるんだつて気づいた

孤独な逃走も飽き飽きするくらいに

人はみんな必死に生きてるくらいがちょうどいい

もう少し踏ん張ってみようか

僕は今絶望の停留所に長居しただけ

ただそんなだけのことなのか

願いは灯台下暗し

遠くばかり眺めているから足元すくわれる

その犠牲者に成り下がった者達

遠くのが綺麗だったからと唇を揃える

一点見つめる日ばかり続いた

いつも無駄なことに費やしたと後悔するが

そんな事ないそれも生きる糧

そういうものなんだ

月夜に照らされたスポットライトに当たった気分で

人はみんな孤独と戦っている

頭を抱えることも飽き飽きするくらいに

僕は絶望の停留所を通り過ぎるだけ

ただそんなだけのこと

人はみんな必死に生きてる

孤独な逃走も飽き飽きくるくらいに

孤独な逃走も飽き飽きするくらいに

◆無味 愛知県

魚

ぶかぶか泳ぐ魚をみていたら

ぶかぶか泳ぐ魚をみていたら

目についたあたしの顔がフサイクで

目についたあたしの顔がうんとフサイクで

まあいい金魚鉢を

グーの手で

殴った

。

○

。

=

，

。

本当は痛くはなかったよ

本当は痛くはなかったのだけど

殴った衝撃、殴った反動

殴った重力と

反対の

重力

で

、

玄関の

ちよつとだけ

高くなっている

段差んとて

足の痛い

ところを

ち

よ

つ

と

ぶつけて

いたかったなあ

と思うより早く

痛いという感覚が

もうそこにありました。

熱を帯びて、赤という赤が

じわりじわりと滴りはじめたときに

生命というものが、赤いものだ

はつと気がついたのです。あたしたちが赤を求めて

傷つけたたぐさんの

痛かった記憶を

慰める

ように

早く

溶

け

て

，

。

・

＝

。

、

なくなりたい

。

なくなつて

溶けて

いく

。

青

を

反射して

赤が消えると

生命は

なくなるのです

。

深海魚は

深海でだけ

美しいのです

。

あたしがうんとフサイクなのは

ここがずうとずうと地上で

ずうとずうと果てしなく

果てしなく続く

何かの間違い

だから

仕方

が

,

。

。

。

。

。

○

そと

わたしという詩を生きるとき

あかんぼうは小さな詩

この世に生まれたばかりの

まあたらしい詩

むちむち すべてへのあし

あつという間に過ぎていく

空から投げ下ろされた風に混ざる詩を

追いかけて追いつけなかった時のように

はじめて 震える胸をそと

くちびるによせたとき

意外な力で むむぎぎゅう と吸い付いた

どこにもある詩

へいぼんで だれにでもうたえて

ちいさくて さけんでいる

力いっぱい からだじゅうで伸び上がって

せかいに

息づきひしめき合って たえず

詩と詩は出会い続け

ぶつかりあい 繋がりがあい

だれもが いつかは抱くことになる

抱かれることになる

詩の果ての黒衣の胸に辿り着き

いのちの半身へと 身を預ける

そのとき わたしという詩はかえる

せかいに

◆三谷十一 東京都

玉蜀黍

前にバスで通ったときは

太陽の垂らす熱い油を飲み干さんと

待ち望む玉蜀黍の苗たちが

透き通る緑の葉先で

みんなして小突きあうように

ざわめいていた畑

いまは れんげ草の野になっている

あれは、土にすぎ込まれる緑肥が育てているのだ

と教えられたのはこの妙な柄のシートカバーの

路線バスに揺られながら

そう あの人が窓のそとを指さして

ふと そんな気がしてくる

だが一体どこへ消えてしまったのだろうか

玉蜀黍 とれんげ草のあいだを

幾度も流れたものたちは

(もし数えるならば、だれかの友や

はした金や 無為の時間か)

もう思い出せもしない

降りればバス停で

砂埃さびしく

くしゃみする春の空

三笠山

晴天の頂上から

一望する

(元月の火は赤々と燃えていた 闇を舐める溶岩の光

怪鳥の羽はたく冬の夜 天に舞う火の粉の映像)

いま 若草色に鎮まり

剃られたうなじのような斜面が

一陣の風に吹き上げられる

重ね山の天辺の香りは

(幾何中心を探す訳でもなく 漂泊し続けた古都のいきれ)

うつつをぬかして蒼穹に

ただ息を吸って吐く

…やがて変異した空

円の円周を

四辺形の四辺を

巡礼し続けるものたちの気配

黄昏を背に

バス停へ下りながら

暗くなる山稜の縁を

あなたとの接面になぞらえる

名残

何の名残か腹這いになり

鈍い秋色の絨毯をさすれば

窓から射す日の加減で

暮れ方の海になる

波打つ麦になる

もう明日

どの部屋もなくなる

かつての透明ゼリーのふくらみの

硝子体だった

いよいよ崩れるときにまた

潮騒と風のなか

まふたを閉じるようにして

そこに浮かんでいた名残

◆折川とながれ 神奈川県

ねむる人

ぶつり

まつさらな表皮に線がうまれ

傷口みたいな両眼があてどなく

視線を投げだしたまどろみに

呼吸の気配はうすらさむい

月光の色をした髪を軽く梳く

眠りを手放したほんの少しのあいだ

かれは青年になる

音のない奔流が脳をささめき

ほかのだれより透明に世界を受け入れる

どこまでもまっさらな青年

空腹を知る前の獣

収縮を知る前の心臓

あなたを知る前のあなた

輪郭の定まらない呼吸を

なだらかに引き延ばす

ひきずるように

肉体を連れる

あなた

とおさかつた意識が

再び体を満たすまで

いつまでも いつまでも

髪をかきわけ 耳のうらをなぞる

柔らかな悲痛

いつまでそうしているの

あらかじめなにかを諦めた声色がいう

おしゃれ

お気に入りのワンピース

お気に入りのジャケット

お気に入りの靴

お気に入りのアイシャドー

お気に入りの口紅

お気に入りのかざりが

私を高く押し上げる

高く高く

高く

高く

高く

高く

酸欠で

死んでしまう

ひゅー

どん

いま

花火みたいな 音しなかった？

内側

いのちはひとつの音であり、ひとつとして同じ音をもたぬあたしたちは叫びの弾丸群。音階はまっすぐに、数えきれないあたしたちは束となつて海のうへへ投げ出され多数に一直線の光線の束が軌道を突き破る。風圧にとぎすまされたささ波の欠片がしろくしろく肌を引き裂いてあたしたちのすはだ、だれも見ることのないすはだ、だれにも隠さぬすはだに赤い線を刻む。ばつくり引き裂かれた肉から紺碧の宇宙がうまれることを知らないあたしたちは怒濤に空と海の境目を削り取る。海の欠片はあたしたちを死に物狂いで削り取る。

ねえ知らなかつたでしょう。宇宙があたしたちから流れ出来たこと。あたしたちが無知に引き裂かれ、あたしたかな粘膜を着こなした宇宙がかぼそい産声に震えたかつてのことを。

ねこ

暗闇から一本のひかりがはしる
追いかける ひかりの道

どこだろうこは

なにもないけれど あたたかい

うすいきみどりの芽吹き しらないしらないにおいがする

お腹が空かないから

もうむやみに反射しなくてよいんだ

虹のたもとをあるく

まるまると太った茶色

足取りはよちよち あいらしい

さいこのひかり 道

歩いたそばから 砕けおちる硝子の螺旋

あなたを導くそれがどうか あなたを受け入れた

扉の奥のにおいでありますよう

忘却の鑑

孤独と祝福を同居させながら決してそれらを認めないかれの卑しさを

あたしはひどく軽蔑している。くろくろと高潔なめつきだけが魂に不釣⁴り合いだった。それを見るたびあたしはいつも彼を許してあげたかった、こうしてうつくしい瞳をもつあなただからその魂はいつそう褪せてみえるのだと、とりだして瓶に入れてゆるしてあげたかった。抱きしめたかれのたましいがあんまりに綺麗なうすみどりをしていたらあたしが神様に文句を言つてあげよう。どうしてもひどい色にしてあげなかつたんですかと文句をいつて、それでもひどい色なんてありはしないので、かれにふさわしい色なんかこの世にはないのかもしれない。そのことをかみさまに指摘されたならあたしは下唇を噛んできつとこどもみたいに黙つてぼろぼろと涙を流したいだろうけれど、おそらくそれはひどくうつくしく誰も見せるに値しないだろう。ひっそりと長いシャツの袖に涙を吸わせ、それが黄ばんだころにはかれのたましいのうつくしさもわずれレースのカーテンにくるまつているよ。

◆番場絵理 茨城県

クリスマスの詩

幼い頃、ママが借りてきたクリスマススの絵本でベツレヘムを知った

三人の王様と三頭のラクダと、砂漠と輝く八芒星

厩のイエスと馬たちとマリヤ 私の知らない 遠い国の出来事

うちにはえんとつがない、と心配したら、パパが教えてくれた

うちのサンタは換気扇から入ってくるんだって。びつくり！

福豆サイズに縮んだサンタが換気扇の隙間からふわふわ降りてくる

「おりてくるときにね、サンタさんもプレゼントのふくろも・・・」

ひそひそ声で、幼い私が教えてくれた

あのとときの私といまの私はおんなじようでおんなじじゃない

イエスは礎に繰り返し彫刻されたまま永遠に近い時を生きて

事情は知らないけれど、絵画のマリヤの夫はおじいさんに見える

パパはかつてママや私や弟に暴力をしていたことをケロッと忘れて
オスのカマキリがメスのカマキリに食べられているところの写真を

趣味のサークルのブログに上げて自分を重ね憂えてた

ママは図書館から相変わらずクリスマススの絵本を借りてくる お金を十分
に出来ない、パパにも食事を作るし

パパはDVしてた家族に簡単なケーキを作る

ファンヒーターは最低温度にしろと怒鳴りながら

弟は小さい頃紙で作ったぐつぐつぴよんのクリスマススリースを懐かしむ

私は絶版になったミヒヤエル・エンデのカメの絵本を思い出す

古典的なクリスマスソングをママがピアノで弾いている

いいのかな いいのかな 幸せぶつていいのかな

虚構のつきはぎのような幸せを 空虚でないとは言えない幸せを
不幸ではないはずなのに 幼い私に誇れないのはなんだろう

イエスも弥勒も現れないし マリヤはリリスと程とおい

ウクライナやミャンマーやパレスチナやここには書き切れない国へ
まだまだ私の知らない悲しみへ

アニメのようにまっすぐに 十数分後でいい、あつけなくていい、
コロナ禍の全世界に 貧困の子らに アンパンマンサンタ、どうか、来て。
募金箱に入れたささやかな小銭が いつかどこかで誰かの福豆サンタに
なりますように。

弟と、なぜこの家に生まれてきたのかを話す

私たちの将来にはびこる灰色の分厚い雲について話をする

キリスト教徒でない私たちの所へ方舟は待てど暮らせど来ないけど

ねえマリア、大量の祈りが重荷になったら

迷わず逃げていいんだからね。

一寸イエスを抱きしめたなら まずはあなたが自由に生きて。

◆木内ゆか 神奈川県

お伽草子

今日は不忍

うまれおちた姿のままで

お伽草子をあっている

いつも半身でおよいでいたけど

今日は右手が温かい

カミに右手をにぎられて 人の呼吸をあっている

冬 蓮池は

穴の貌がうつむいて

枯骨の鱗がふるえている

(ルリビタキ…)

享けた光で飛ぶだろう しらない聲で啼くだろう

カミに右手をにぎられて 池の淵をたどっている

「弁天様がやきもち焼くから次は一人で来なくちゃね」

ふぞろいな石段を笑いながら踏みしめた

のほりきつたら

浮かぶだろう

鼓動のままにすすむだろう

さくらの蕾はまだ固い

光の中 ^{ヘレクイ}道化師がパントマイムで告げている

(サンガツ やよいの ヒナまつり…)

噴水が昇降し

鯨もソラを飛ぶだろう

珊瑚の森もゆれるだろう

つながったまま

そびえる銀杏の門前を 魚のように流れていくと

ほそまる頃には冷たい墓所だ

「人が死ぬから銀杏も肥える」

境内に枯れ散らばった小さい耳たち…

黄色い外耳をサワサワゆらして人の噂をきいたのだろう

黄色い外耳をサワサワゆらして人の噂をきいたのだろう

昔の人のお伽草子を御影石がうつしていた

普洱茶

真鍮管は緑色に錆びていた。小さな蛇口はキリンの角が四方に突き出た形をしており、可笑しいような、淋しいような、仄明るい気持ちにさせた。割れたタイルに象嵌された黒い穴に、大量の水が落ちていくのをしばらく一人で眺めていた。

一人暮らしには不釣り合いな大きな薬缶をいく度か濯ぎ、半分ほどまで満たしてから、五徳の上にズシリと載せた。壊れていたのでマッチを探して点火すると、ほどなく薬缶は温まり、静かに汗をかき始めた。ステンレスの天板は、長年にわたって磨き込まれ、細かい傷に覆われている。義母は几帳面な人だった。

食器棚には曇り硝子が嵌められている。引き戸の中で小さな食器は数客ずつ重なり合つて、眠っているかのようだった。青い小皿は細い金に縁取られ(百合 椿 シロサギ草…)それぞれ異なる白い花が中央に描かれてい

る。ピンク色のデザート皿はやさしく窪んだ花の形で、唇を尖らせた薔薇の蕾が輪になって踊っている。終戦直後に職場結婚した折に、女生徒たちから贈られた…と生前聞いたことがある。

最上段に見覚えのある茶筒を見つけた。何の変哲もないマレーシア産の錫の茶筒が、斜陽を浴びて光っている。ひんやりとした蓋を開けると、老木が発酵したような、松葉を焚き染めたような薫香が立ち昇り、着物姿の義母を想った。水無月には、藤色の単衣に紹の帯を締め、帯留には翡翠を好んであしらった。晩年になっても、子どもたちの前で衿を崩すことはなかった。

湯が沸いた。景德鎮の白いポットに黒く熟れた茶葉を移し、トクトクトク…と湯を注ぐ。所々が金で接がれた、蒼い蝶が舞っている、薄い茶碗を二客並べる。

西日に耀く中国茶が、奔流してきて華奢な器のへ虚を満たすと
台所には青々とした呼気が流れた。

◆渡部由奈 神奈川県

さらめがにがいみたい

じやりじやりのあとあじに

青褪めたあなたの感かくが溶けて

夜るにはつめたい昆虫の抜け殻に

姿をかえてしまうわたしたちが

おそろしいくらいつくつく在れないのなら

あの海辺のしらない幽霊はきえたよ

かじった潮はうそっぱちだったよ

春がさわさわいうのは

あなたが蛾だったからだよ

わたしの感性が

ひどい悍ましさを吸い込んだ

褪めたおんなの感性だったからだよ

あなたがしねない

ちぢこまる怒号だよ

うつくしくも吊るされた

金属の孵化だよ

えいえんだったよ

だからもう

いらなくなっちゃったんだね

よる

蜂の痕があつた

それが悲鳴のように

他人のきずあとのように

ただひつかき傷のように

しらない宗教のように

みたこともない田舎の残穢のように

わたしの呼吸のひとつひとつが

ああこんなにも

・・

なんてあるものかしらと嘯く

うそぶくから

わたしたちに救いなんてない もうなにもない

それなのにあなたが既にいないことを

おさない臓器のかたちをしていつまでも粉々のががやきを握っていた

あなたがいないことを

赦せたのなら

わたしの瞼がきれいに色づくさまをうつくしいと形容していた

あなたがいないことを

褪めた眼球で みつめられたのなら

夏のような

母親の骨を撫でるような

のどを裂くような

酸っぱくてどろりと爛れる

睡りがあつたなら

◆近藤加奈子 愛知県

裏切り

腐った期待の、生あたたかさ

残酷な甘い香りを漂わせ

あなたは幾度も裏切った

底冷えの怒りは、ただ苦く

絶望さえ、すでに意味はない

わたしはただ乾いた喉なのだ

引き千切られた時間の骸

折れ曲がった風景の山

足の踏み場もないその部屋で

いえない傷を舐めている

「おお 無音」

価値のないこの叫びこそ

今の静寂にふさわしいのに

腕の時計ばかりが正しかった

おお 無音――

空に伸びた梢の影が

黒く透明な手でもつて

わたしを掻きむしり

本来の姿へと暴いていく

おお 無音――

あなたが憎い――

切られた電燈をそのままにし

今や一面を忘却の色と化したというのに

乾いた喉で空を舐め続けている

休む暇もなく、孤独な喉で

神さまは、許すでしょうか

おお 無音――

乾いた口づけ

おお 無音――

それから笑う

この過ちをお許してくださいきみ

耳なし芳一くんみたいに耳取れちゃえ

ああ、今すぐ取れてよつて

願いながらシーグラスを瓶に分けている

びりびりと胸の裂けたところから霜柱の匂いがした

自分で尋ねたくせして知りたいわけがないよ

きみのひとつの言動、行動に少しでも揺らめく恋という

実体のない不可避なものが見え隠れしたら

どんなに美しいきみだつて所詮は人間ただの年頃の女の子と思われるだ

けで

眼前で只管に朽ちていくきみを、きみの桜の花弁を音もなく割いたとき

のような薄い唇を、

見つめているだけで包み込まれていく恐怖は

ひとりで朝食をとっている

――四方の窓から差し込んでくる陽射しが牀に染み込んでいくときに襲

われる云いようがない不安と同じだろう

崩壊した美に、所以も運命もないのに

◆和田言依 神奈川県

海辺の廃屋で遊んでいるきみの目は碧色をしている

指一本で壊れてしまいそうな牀に永遠が纏わりついて

透かしてみて

血管が泳ぐ皮膚が小石を拾う

――一度も染めたことないの、髪

私がひゅううと歌う風に踊る毛を捉えようとしているのを

微笑むことで曖昧に分からなくしていく

――染めないと思うよ、綺麗つて云われたから

誰に、と尋ねたらいけないと血液さえ知っているのに

だつて、それは禁忌だからね

自傷行為を目の前でされたら、多分、誰だつて止めるでしょう

――誰に

それにしがみつきの凝り固まるのは愚の骨頂だけれども真実だから逆らう気は毛頭ない

委ね切ったその美しさが後からどうしようもない屑だと感じるようになったら

それは自分自身が屑になった証拠だろう

美しかった、なんてたやすく云えることではないから

眉毛に掛かる前髪を撫でつけて

きみは光を忌む

眩いは自意識を崇高まで高めてしまふね

ここはどこか、その、いわゆる平行世界なのだろう

感覚的なもので分かる

半袖から露われた肌の表面に触れる空氣が妙に煌めいているためにとめどなく満ち溢れる光は地平線を歩いていく

水面を走るのは鳥

—好きだった人に云われたの

きみは缶の曹達をわざと振って開ける
音を立ててこぼれる泡の命は尊からう

、白く青い喉を流れゆく

俯いて耳輪を染める感情よ

—失恋ということ？

ああ、傷つけた嫌われる

もうそんなのどうでもよくなつて

一層のことだいきらいになつてほしくつて

きみにとつてすきでもきらいでもない友人なんていう無害の象徴で

温かい位置にいたくなくつて

だいきらいになつてよ

お願いだから、きらいになつて

こんなにも思ついても云えない

真一文字に閉じられた唇を人差し指でこじ開けて吐かせろよ
ぬるま湯のなかぬくぬくしていれば幸せだから

云いわけばかり詭弁ばかり繰り返して

このくらいでいいやと思ひ込んで腐つていくのは私のほんとうの心情緒なんてものはないよ

さわやかでは表現できない

し足りない風の流れを感じていた五月

庭園で夢中になつて描いた薔薇

掠れた絵具に気づいて彩管を振るうのをやめて水を垂らすまでの、

それくらいの速さで

自分の心というものを疑わなくちゃね

熟れた果ものは美味しいのに熟れすぎた果ものは驚くほど不味い

差し出された曹達に口をつけるのをためらうのは

御霊のためでしょうか

日常では仮面をつけてひた隠しにしている心は

それはなんとか人様に御覧にいろることが出来るようなものにはなるけ

れど

正直になることが真の美德ならば佐清が頭巾とその下の、のつべりとした

マスクを

皆の前で捲つたとき現れた爛れ潰れた鼻(のようだった今や柘榴の様相

で

あれみたいに酷くて顔をそむけたくなる私の腐敗した心はやはり誰も

見向きしないね

ここは平行世界なのだから

Fantasy がきらいで一瞥もしたことがないから分らない

でも、今までの経験と私のこの慧眼でこの世界は平行世界と思う

平行世界―新宿で線を間違えて迷子になつてしまったみたいなことだよ

それくらいのこと、なんかそう、云つてしまえば遊び心みたいなもの

そうでなくちゃこんなこと起きるわけがない

きみはスプリングのいかれた砂まみれのカウチに腰掛けて

どこからともなく取り出したリップスティックを練りだして

きらきらとさせる

そつと滑らしていく、浮いたデコルテは静かに横たわっている

リアリズムエゴイズムフェミニズムシュレアリズム

私は何主義でもないから

見たものを信じるからさ

見えないものは存在しないと思うんだ

神様幽霊御霊

ほんとうは心も在るといふ思い込み

―教育の末に出来上がった虚ろなら

生きるとは無を信じるることか

信仰心で出来た世界はユウトピアの紛いもの

だからつて全否定して生きていく強さが内にはないと気づいたのは

十六歳の秋だった

生きていく上で意外と

ううん

最も大切なことは遊び心と不真面目を行える誠実を

肉体の最奥に秘めておいていざ鎌倉というとき、するりと出せることだ

と思つていてもそんな指針を持ち合わせていないで生まれてしまった欠陥

品は

今日もどこかで、眠たくなるような歌でも聞いて怯えているんだ

そのまま眠りに落ちることも出来ずに中途半端なところでうつらうつら

して

朝陽のもとに現れる自分の肉体は透けているようで

腕 腹 腿 爪先 背中 目 鼻 口 頭 髪

搔き集めてぎゅつと抱きしめることになる

ばらけていく肉体のみすぼらしさたるや

きみには到底分かりっこないね

鴉にも野良犬にも囁かれてこいつは馬鹿なのかと思われる夢を見る

直接云つてくれ

その方がよっぽど傷つかない

ああ、ああ、そう思われていると深く息を吸い込んで思うと

むせるくらい泣けてきて

ずんと乗った頭は思考を停止させ

このまま死んだとして誰かが献花の一本でも捧げてくれるなら

吾が生涯は安易に綺麗と云えるから映画にしたいよと思えるほど幸せ

だったろう

頭は重いだけの役立たず

数キログラムの脳は息絶え絶え

きみは握りしめていた掌をゆつくりとひらいて

紅い小石一見間違いかと思つたでも、それは真に紅かつた

(コランダム)

—これ、ルビー？

—さっき見つけた

碧色の目が私のただ黒い目を覗き込むようにして――どうか、した、の

――なんでもない

貴石の表面をきみが拭つて光らせて

これから先に続く言葉はないから口を噤んで沈黙よろしく

やりつ放し

平行世界の私は、あの私ときつと一緒

生きつ放し

しかも、もう分かつていと思うけれど生きることがうまくはないから

肉と心の傷をガーゼで覆うことも出来なくて

汚いところを垂れ流している

働き甲斐がないね血小板

でもここは平行世界

いくら傷ついても

もうひとつのセカイは平気だろう

丈夫とは云えないけれど

なんとか生きている私に、叩かれて半殺しの目に遭つた蚊のような声で

応援してみる

こんなに醜く生きている

――生きている

仕方がなしに生きている

――これ、食べれるの？

――食べたらずんじゃうよ

きみは深いため息で創り上げた指でそれを口のなかにほうろ

噛み砕く音は寄せ打つ波の泣き声を掻き消して

生まれてきちゃったんだ

勤労の義務、教育の義務、納税の義務

加えて生きる義務

生きる、というのは不条理の哲学で学んでみてよ

カミユが教えてくれるよ

何も出来ないのに死ぬことは出来るというのは救いという絶望

――死に至る病はキルケゴール

きみはこの沈黙を昨日の夢で知つていたみたいに平然と受け入れている

薄い臉を這う血管が繋ぎ留めているきみと私の小指

葬り去つたはずの真実は私の心臓の裏側にへばりついて火になる

よく燃えるよ

きみは大きく目を開いた

その美しさにすべては静寂の彼方へと

屋根の落ちかけたところから見える

空が息を止めて

遠くの鷺が生を捨て

波が風ぐ

ひとつの瞬きは私を動かしてしまう

僅かどのくらい、ミリメートルだろうか、零コマの

遺伝子の奥に眠らせた狂気を思い出さないように神経過敏になつて苛まれてフラッシュバックしたときそれが喉に刺さつた鯛の骨みたいで痛くて気持ち悪い

もうひとつのセカイは何も知らずに

今日も

発展発展

振り返ることなんて許されないから

進歩進歩

そして骸たちには哀悼の意を捧げるでもなく跨いで見ません、見てはいけません⁶

進化も退化も分らないくせに硝子張りの煙草屋の軒下で紫煙を燻らせて苦虫噛んだような顔をするなよ

機械仕掛けのドールだと認める潔さも残っていないなら落武者のようだね

—好きだよ

ふと口をついて出た愛の告白だつてきみはほんの少しも伝わらない

碧目は打ち水の涼やかさで細められ

あーむちえあーでいてくつていぶのそれに似た悠然さは私にはないから全くもつて羨ましい

というのはあいろにーだからいらないよそんなものと思う

—どういう好き？

—恋愛感情としての

—そっか

—私は浅はかだから愛するということが捨てられなくて失い続けた何かは思い出せないのに。愛が私のなかに残つていて、今ね、手首を切つたら、お腹でもいいけど、好きなどころにしてね。そこからきつと血じゃなくて

愛が出てくるよ。真つ紅なあの鉄臭い血じゃなくて、火傷するくらい熱い
どろどろのジャムみたいなのが出てきて汚しちゃうよ。べろべろに皮膚が
剥けて爛れるよ。痛いだろうね。私の愛はそう、それくらい酷いものなの。
でもね、愛とはそういうものだと思うよ。私はさ、愛してしまったことが
怖いんだよ。愛することがいかに衝動的で身勝手な美しさの欠片のない
秩序のないものなのか分かつているから。だから、求められたくも求めた
くもないのに、軽薄な私は結局欲しくて、欲しくてたまらないんだ。それ
が怖くて。愛してしまったこと、この想いをきみに同じように抱いてほし
いって思うのが。私の愛をぶつけるのが。目に見えないものを信じないくせ
して愛だけは信じているのは何なんだろうね。

口が自分の意思では制御出来ず全部吐露してもこの胸に鬱積した愛な
んでもので溢れ返ってしまう

詩的になつてしまふね

愚かだね

急に私は泥のような寂しさに襲われた

首に粘つく風を振り払おうとして煽ぐ

見ごとに色分けされたシーグラスの瓶を落として割つてしまえ

とつととその破片で私の永遠に(尤もらしい)癒えぬ苦しみを切つてくれ
極めて凄惨 畜生道 そういう死体になりたいよ

きみは私の顔―輪郭に手を当て焦点がぼやけ虚ろに浮いている私の黒目
と合わせ

髪に触れた

束ねたそれからそつとりボンを外し吾が精神を解放させていく
はらはらと舞うのは憧れでしょう

腰まで伸びた血液にきみは愛―と形容するのは罪かもしれない―をもつ
て梳かし

―似合うよ、こつちの方が

肩に触れているきみの髪がじゅ・すいね

きみの手を傷つけないようにひとつの傷もつけないように振り払つて

潮風に当たつて崩れかかった飾り棚に瓶と絡めとられたリボンを戻して
腐りかけの窓を開けた

きみは砂浜に曹達の缶を投げる

その横顔に私の胸の内を反映させるなんて原罪より重いね

それは私の骨という骨―形作るものよ

軋んでいくのはローファーの中

肩を叩かれて振り向いたときにほどかれたことを忘れていた髪たちが空を裂いていく

目が乾いていけば血が落ちる

私の柔らかくない唇に魔性が宿っているような唇を押し当てて

息を吸えば小さくなった紅い石が入り込んでくる

舌を絡めているとそのコランダムが口内を切り刻んでいくのが分かる

血だらけになるのも悪くはないか

どっちの唾液か血か分からなくなるのも、形容すれば美しに集約され

てしまうってね

それは途轍もなく勿体なくて

そうとしか形容出来ない私たち人間という種は根絶すべきでしょう

奥歯に乗ったルビーを噛む

喋りにくくなつて私は舌先から血を滴らせて歯を濡らす

親にしがみつかれている囚われの身のきみはしなやかに

翻して

喉を鳴らして

私の唾液を飲み込む

べつと吐き出したルビーを掌に乗せて見せびらかしたいね

平行世界の皆様これが私ときみの愛情です

愛情なんて感情だから見えなとお思いでしょう

それが見える形で御覧になれるなんて、人類史上初めてのことであり

ませんか

現在、皆様が御覧になつているのは歴史的出来ごとですよ

よく御覧くださいまし

あ、これを美しいと形容する方は、名誉棄損、侮辱罪で容赦なく一切合

切訴えますのでご了承くださいね

打ち寄せる波よ

氷点下の中で吐く息のように

—明日も会える？—

—会える

云い切りの形に喉元までせり上がってくる愛というものに溺れて窒息し

たい

生きるなんて軽はずみでいいのに

考えすぎだとしても考えなければなるまい

どうせ死ぬんだからそのときでいいよ、だって無駄じゃん考えたつて、と云わないで

愚かだよ

きみは隙間風が入り込んでくるために木材を打ちつけて継ぎはぎをしている

海底二万海里みたいな色のドアを引いて出ていこうとするから

平行世界のきみはあつちのきみと一緒にのと聞けなかった

好きだった人のために染めずにいる髪が風に煽られて

碧目が角度で光つて、もしくは神様のお遊戯で光らせて、目が手を振つてくれた

私は自棄になつてそれを睨んでいた

きみが砂浜を四分の三くらい歩いただろうと思われるまで睨んでいた
言葉に込められる思いなんて高が知れているから

波にのまれて水泡につつまれながらひゅあひゅあ流されて無に還る

◆菅沼きゅうり 新潟県

デニムこそう

いつでもデニムをはいている。

とくへついでいやつでもない。

ふつうのやつ。

はじめはおとなしかったこいつも

今ではいつちよう前に

でかい顔をしているが

じつのところ履きこちのほうは

もうひとつ。

足のところがだぼだぼだし、

ポケットには穴も空いている。

でも、僕とこいつはほとんど兄弟

といつてもいいくらいの相性。

うまがあうつてやつ。

そういう欠けたところが

僕はわりに気に入っていたりするわけ。

それにふたりとも

けち臭い一日をやり過ごした後の

ベルトから解放される瞬間が

たまらなく好きなのだ。

そのために生きているといつても

過言じゃないよな。

僕はいまベッドのうえで

トシャツを脱いで、

ちようどベルトに手を掛けたところ。

ねえちようと待つてと

君が言つても

そいつは難しい相談だということさ。

ホクロ

新しい体位を試しているとき僕は

彼女のうなじにでかいホクロを見つける。

特筆すべきはそこから太くて短い毛が

生えているということだ。

僕は思わずぎよつとして

それを見なくて済むように

彼女と正面で抱き合い、

からだを激しく動かすのだが、

目を閉じるたび、

誰かに見つめられているみたいに

その黒い丸が浮かび上がつてきて、

いつもより果てるのに時間がかかる。

でも彼女のほうはずいふんと満足したらしく、

もう眠りにつこうという段になつても

僕のからだに腕をまわしたまま離れない。

そして彼女が規則正しい呼吸を始めても、

僕は背を向けたまま寝たふりをして

そのことについては考えないように

ぎゅつとまぶたをしめつけるのだが、

もう後には引けないという後悔が

僕の心に重くのしかかるのだ。

よだれ

僕の眠りに誰かが侵入する。

もちろんそんな予定なんてない。

それつて居心地がいいものじゃないよ、まったく。

土足で家にかかるようなことをする

行儀の悪い人間はいたい誰なんだ？

僕は目を薄らあげ、女の下から腕を引き抜いて

寝ぼけた顔でからだを起こす。

でも警戒は怠らない。

そりゃあ人の眠りを邪魔する人間に

まともなやつはいないからね。

殺されるとも限らないということ。

ちよつとなにしてんの！とガールフレンドは言う。

ふむうと僕はとぼけて見せる。いや失敗。

とつと起きてそのよだれを拭いて出てきなさい

このくそ、なめくじやろうども。

僕は布団から滑り出て、

床に落ちたパンツを拾い上げようとする。

でも彼女はそれを蹴とばしてしまふ。

仕方なく僕はふるちんできおつけの姿勢をする。

これは僕なりの誠意なのだ。

こんなかつこうじゃ弁解の余地もないしね。

その女をおこしてと彼女は言う。

僕は女の肩をたたく。

彼女はまだ甘え足りなさそうな声を出す。

口元にはよだれの跡があり、

髪の毛を数本くわえている。

ばかふたりがよだれをたらして

ホントにいいさまよ。

ガールフレンドは蹴とばした僕のパンツを

拾い上げて女ほうに投げ、

これでそのみつともない顔を拭きなさいと言う。

女はそのとおりのことをする。

あたまをホリホリ。

彼女はそれを見て涙を流して笑いこける。

腹を抱えて部屋の壁にもたれながら。

永遠にそれが続けられるんじゃないかと思うくらい。
ずつと。

庭おじさん

雨上がりの良く晴れた日の朝に

居間の窓のカーテンを開けると、

水滴で輝く、美しい芝の庭をみる事ができる。

そしてしばらくすると必ずといっていいくらい

庭おじさんがやつてくる。

きまつて彼はラジオを持っており、

はじめに飛び石の上に腰を下ろすと

ラジオを置いて、靴とくつ下を脱ぐ。

それから裸足で芝に入り、

ラジオのつまみをまわして

ラジオ体操を始めるのだ。

私は窓を開け放ち、

体操の間じゅう庭に足をだして座り、

そのしなやかな動きに見惚れながら

朝食のトーストを食べたりする。

終わりがけには庭におり、

お水を一杯差し出して、

彼のために戸を開けてあげる。

庭としてもあなたみたいな人に使ってもらえて

きつとうれしでしょうねと私は言う。

すると彼は結構、結構。

ここは実にいい庭ですからなと言つて

のんびりとした歩調で通りの先に歩いてゆく。

彼の言葉は私を誇らしい気持ちにさせる。

でも、この近隣の人たちは

この得体のしれない男について

いささかの意見があるようで、

時々顔を合わせると私に

ひどい嫌味を言ったりする。

そのたび僕はそんなの好きなように

させておけばいいでしょと答える。

なぜならそこは僕の庭なのだ。

他人があれこれ言う話じゃないということ。

壁のしみ

トイレの壁にしみを見つけた。

茶色い焦げみたいなおとで、

小指でトンと突いたような大ききさだ。

乳首みたいに見えなくもない。

いったいいつからあったんだろう？

潔癖な印象の彼には似合わない。

こういうことには十分気を配っているはず。

でも、わからない。

人は見かけによらない。

ねえ大丈夫かいとドアのむこうから声がする。

つらかったらいいんだよと彼が言う。

カジュアルで肌触りのいい音だ。

ううんいいのと私は言う。すぐに行くから。

私はハンドバッグの口を閉める。

スリッパのべたべたが

遠ざかつていくのをきく。

私は便座に座り、

しばらくの間じつとして恋の気配をなじませる。

まえのめりに祈るような恰好で

額に手を当てる。

私はそつとドアを開けてみる。

しかし突然、

まっ裸でタバコをくわえた彼にぶつかる。

腕をつかまれ床に押し倒される。

なるほど

また私はまちがいを犯したわけだ。

すべてのつじつまは合う。

◆石田 民 静岡県

くすりをたくさん

翅を奪られた羽虫が、もはや虫にもみえない姿で床の上の影を攪拌する。陰惨な思惑が兆す。正午を指す針のように鋭く。そこから海がはじまる。

プールの冷たさに切り拓かれた時間のなかで、親鳥の餌付けを待つ雛の如く惨めな私たち。まるで陽気な儀式。私たちはみんな寡の花嫁。昼となく夜となく、信じられない量の薬を飲まされながら、自らの死刑台を磨いている。ぶら下がった縄を点検する。いつもの癖で首に手を当てる。この手のなかの青白い首がはずれ収まる場所が、吃水線を沈めていく。深く深く。優しく眼差されたものから順番にこの世の光を失う。

薄暗がりの中の薄明の痛み。そこに分け入ろうとすると精神分析の蟹⁴気楼が立ち込める。生まれたときからの欠損を十二個に切り分けたら、そこにも季節が巡るだろうか。

そこまでは六メートルの距離がある。身体は四次元的に拡張する。粒子状に細胞を砕いては繋ぎ、未来からの腐敗した泥の濁流をやり過している。

力の動線がバネのように折り畳まれていて、張り詰めたまま病や狂気や詩になるのを待っている。

＊

プレハブ小屋のなかで、滅びかけの言語を習い覚える。もはや人々には体温がなく、剥がれ落ちた爪が落ち葉のように軋んでいる。その堆積のなかでムクムクと育つ不気味な植物が陽光を求める昼は、養鶏場のようになざわめきが最高潮に達する。

掴まれた心臓が自己のほうへと引っ張られる。こうなつてしまうとうだめなのだ。眼は開いているのに、瞼の裏の暗闇を見ている。耳は聞こえて

いるのに、意味の周波を拾おうとしない。言葉の効力が枯れる。文法そのものが嘘偽りに墮する。良心が意味の形成を阻害する。みじめなほど口に出る音はひん曲がつてしまう。心臓が自己に完全に触れると、すべてがあるべき場所に整い、私はいなくなる。

魂と時間のダムが決壊し、焦土だった土地に水面の七色に光る水がなだれ込む。奇形の枝が伸び始める。冷たい塩基配列のなかで、理不尽な暴力に突き当たる。本心の国の国民が、捕虜奴隷として身に余る労働を課せられている。朝になると、昨日までの痛みが萎れた壁飾りとして飾られていた。やけに肌の白い子供たちが折った折り紙として表現される、あらゆる傷痕。既に手遅れなほど化膿したどす黒い赤みは、夕焼けの色にすら喻えられずに中空を浮いている。

＊

空虚な正午から垂れ下がる縄を首に巻きつける。浮わつた言語に変換されていく自己の薄皮で、眼や手脚のない生き物が繁殖を繰り返している。蠕動に伴う悍ましい音に身体がこわばる。搔いても搔いても取り除けない根拠をまさぐり続けていたら、腐敗した視線が遍く樹々を土ご

と焼き尽くした。

＊

道に猫がいたら、立ち止まって気を引いてみる。立ち去るそぶりを見せたら、少しだけ後をつけてみる。それが地面であればどんな土地でも踏めるだなんて忘れていた。人間の性質が枝に引つ掛かつて解れる。至る所から流れる血は赤くはなかった。

＊

捕虫網にかかった天使の服が破れている。眠気として表現される苦痛の感覚が、眼鏡のように視界を覆う。見てはいけないものを見つけたのに、いつものように朝が来て、通りは通勤者で溢れていた。内側から発光する天使の皮膚から、私を責め立てる声がして、まだ目は覚めなかった。

注力が言葉に向けて傾き、感覚の未明から遠ざかつてしまう。小さな窓から落ちる光を掴めない手の動きこそが権威で、私はそこからこぼれ落ちなければ息ができない。

懐かしい人や人。声をかけたいのにかけられず、乱暴な後ろめたさを振り翳す。殴打は流線形を描いて、やがて自分の頭に辿り着く。痛みは

脳が乾涸びるような感じ。眼は付いているのに付いてないみたい。溢れて止まない粘質のエントロピーが、内側から眼をくり抜いていくのを分かっている。

黙っている立ち姿で存在を証しできればいいのに。

身分証明の文面が金属的なよそよそしさで、アイアンメイデンの棘の如く私を包囲している。その中世の鉄の拷問具のなから、ヒフヨウシヤのふやけた皮膚を持ち、規則的に穿たれたレクサプロでしか埋められぬい穴から血を流す、不気味な姿が立ち現れるのを想像する。

私はもう黙っていたいと思う。たとえ立ち姿が不恰好で、それが証ならば惨めな人格を与えられてしまうとしても。

＊

いくつもの手が確執の指を絡めながら私の口を探している。それを完全に塞ぐため。執拗な触覚が怯えて身に迫った脅威を知らせる。手や手は既に首元を捉えていて、力の緩急で降伏を厭らしく要求する。でも一体なにを諦めて降伏すればいいのだろう。身に覚えのない罪作りをする夢遊病者のように、私は分断されてしまったのだ。己が光ならば影にはな

れず、影ならば光になれない、ペラペラの紙にかかれた非実在。

二人で差す傘の中はとても静かだ。どこまでも潜つてゆけそうなのに雨の音しかきこえない。嫌悪で変質した岩場を悲しく見送りながら、私たちは想像の中で喪服を身に纏っている。

＊

曇天色、歩行を繰り返しているときの味覚。洗濯物が濡り、外出が濡り、一日の食事が濡る。ラップトップは無為な通電で寿命を浪費し、俺は俺で寿命よりも取り返しのつかない何かを浪費してしまう。ふいに、窓のあちら側かこちら側で虫の翅音がする。音の定位も曖昧なまま、何か硬いものに激しく阻まれた体を繰り返して打ち付けるのを聴いていると、己の腕や脚もまた、惨めな擦過音を激しく発振しているのがみえた。もうじき夏が終わる。他の諸共を伴ってあちら側へすり抜ける。

＊

万力で締め上げられる、名前のない季節。ギチギチと確実な体感で脅かされる、胸の裏の肉。思考よりも速く落胆する部位を切り取り、空中に放り投げる。仕事帰り、家の最寄りを狙って投げていたものがちょうど

こちらへ落ちてくる。今日は掴み方がまずかった。取り損ねる日は近いのだと思う。

人がだんだん、だんだんと人が、障害物になつていく。無駄な修飾、ないよりは経済的だからと、存在を担保されている通行人。私がどれほど、石のように物言わぬ無生物になれたらと願つてきたことか。人よりもずっと天使に近い、自然の諸力に素直に転がり、転がることで何かを転がすあの石ころに。

一見すると、ここには生きることの凄惨さは存在しない。一日中均質な青白い光に照らされて、消費の欲動に身を委ねてさえいれば誰かに責められることもない。例えば私がここで苦痛に耐えかねて嘔吐する。途端に私の吐瀉物に触れた部分のタイルだけがひっくり返り、元の清潔さに引き戻される。私の苦痛はなんだっただろうかと思う。しかし、見えないだけで人々は踏みつけにしている。私の苦痛などはごく一部に過ぎない。誰かの不本意な労働、排泄物、陰湿な会話。他の誰でもない私に向けられた、落胆と放心のまなざし。

＊

春が、幾つもの節くれだつた指を曲げていく。私を捕らえるまで関節を増やし続けるつもりようだ。巻き爪のように自らの指を貫いた部分は、葉が落ちると同じやりかたで剥落する。人肌の生温い稲妻が空の余白を確実に埋めていく。ライフラインは切斷される。孤独な言語で光を灯す。季節から熟れ落ちた指を齧り、果肉から滴る血で喉を潤す。あらゆる手段を尽くして生きようとする身体は常に震えていて、麻痺した感覚器官にとつての外部は途方もない宇宙。通信手段としての言語は萎え衰えてしまった。漏れ出る笑いは、今は掠れた空虚な音になつて響き続けている。

◆佐久間たま子 東京都

じゃあくな恋

わたしは、

こんな何んでもない日でも

河川敷へ出掛けて

鉄橋に行く電車に手を振ります。

不思議です。

追っかけながら手を振っていると、

涙があふれてきます。

電車は日に何十と行き過ぎるけれど、

そのつど涙があふれてきます。

葦の陰でおしっこをする時は

目を閉じて

瞑想をする習慣です。

—— 昨日の空もこの空も

きつと誰かのこころの模様——

どしゃぶつもどして思います。

彼方への欲で心の底から

表情まで歪む

わたしの恋は、

今から昔も…。

舟が、河に行く時は

舟乗りさんにもハンケチを振って。

さよなら、

さよなら、

わたしの

天才。

食卓

昼なのに

暗いです

食卓は

ビニールクロスのテーブルで

水玉どんぶりぬるま湯張つて

干したきのこを戻して絞り

切つて刻んで

人参あぶらけと

甘く炊く。

ブラのボウルに

たまご割り入れ

卵液とき混ぜ

菜箸で。

樹脂加工のフライパンに

油をひいて

うすく焼き

バットに上げる調理中。

くろトラキジねこ足にまとり付きの、

「危ない」と

座敷に投げた。

塩茹でえんどう4つ

小皿に並べ

ひとやすみ。

ねこの毛が付く

布張り椅子に腰掛けて

母の手づくり、

10年ものの梅酒を

ちびちび。

砂糖、酢、塩の加減

思いつつ

官能小説の頁をくる。

「詰まらないなあ」と

おおあくび。

ちつとしめつた空気を放とう。

窓を開け、

見える景色は工場の

高い煙突

さびたトタン屋根。

藍染の姉さんかむりを解いてぬぐう

首筋の汗。

足で扇風機の

「スイッチ、オン」

小説閉じて、

ほえずえついで、

半裸の女性の表紙を眺め

娘の胸の弾力を想う。

8月28日の食卓は、

思春期の

少女の胸の弾力と

乾物特有の

うまみです。

ニヒリズムの詩人

私は詩人。言葉遊びや愛と友情、

そこに永遠と云う意味を付帯させてみた。

先ず売れたくて、皆が好きそうなワードを

ラ列してみるが、私の本(詩集)は平積みされない。

成功者は言う。

諦めなければ夢は叶うと。

でも成功者は
あいつら

そう詩った時点で、堕ちたんだ。

育ちが良いので、所持金を勘定すると、

現状哀しい。世の中厳しいと言わざるを得ない。

自分の話して恐縮だが、私はアーティスト然

アヴァンギャルドな格好はしない。

正装の為に、ギャルソンのポリ縮絨、

シンプルな黒いジャケットとボトムス。

リーガルのローファー。

普段使いにインディゴリネンのワンピース数枚。

45Rの突っ掛け、サマンサモスモスの

レザースリッポン。

それくらいの服と靴で、日々を廻して居る。

引き続き自分の話して恐縮だが、

私は、その日の献立を考えるとメモに書き、
歩いて買い物に出掛る。

帰宅すると、ライオンキレイキレイで

手首まで良く洗い、アルコールジェルを

ワンプッシュ！

そして、クスリを使いうがいする習慣だ。

お茶を飲んで一服したら、夕飯を作る。

レシピのとおりに計ってつくる

きっちり計ってレシピどおりに作る。

わかるかい？

自分を殺すんだよ。己れをね。

包丁で三つ葉切っていると、降りてくる。

卵液越してると降りてくる。

（詰まらない、と思うだろう。

「降りてくる」とかさ。

理解できるのは、分かる人間だけだよ。

そうとしか言いよう無いよなあ）

だけど、包丁投げてパソコンに、なんて
ならないよ。

料理が終わってしまわないと書かない。

コーヒー飲んだりしてさ、

YouTube 観たりしてさ、

焦らすんだよ。

言葉がバクハツするのを。

言葉遊びに愛と友情、ストレイトに永遠ってゆって

ピンとくる奴今どき居るかよって成る。

こすつてこすつてこすられた言葉からの

チョイスだよ。この時代。

本気^{まじ}で書いた私の詩を絵画で

現すなら、シャガール、

そう、シャガール 先生だ。

説明なんかさせるなよ。するかよ。してやんねえ。

かんがえろ、自分で考えろ。ウソ付くな。

じぶんにウソ付くな！

本当に世の中には存在するんだよ。

すべてを知つても狂わない人間が。まさに、

「降りてくる」人間だよ。

まあ大抵、理解されないひとりぼっちの

寂しい貧乏人だね。

ねこちゃん禁止のアパートで、ねこちゃんと暮らす。

そして、悪魔。

ニヒル
悪魔なヤツなんだよ。

被爆したカラス

亭主が仕事する原子力発電所の鉄塔に

カラスが止まって被爆したと

テレビの速報で知り、

今朝、もう顔も

見たくナイと別れた

亭主の顔を思い出す。

亭主の下着と寝間着を

45Rの風呂敷にくるみ

スッポリ

ワンピースをかぶり着替え

往来へ出

タクシーをつかまえ

発電所へと急ぐ。

途中、アイホンで

ヤフーニュースを検索するも

新しい情報は得られず。

運転手さんに

ラヂオニュースをかけてと頼み

車内の検索にスマホ酔いしつつ

よろめき

発電所へ着くが

カランと扉が開いており

だあれも居らず。

いぶかりながら中へ入ると

カラスと共に亭主が

鉄塔のふもとに

倒れて居た。

胸に耳にあてがう。

「まだ息がある」

ずりずり引きずり

有刺鉄線の外の

茶畑へ連れて行く。

すると

亭主の上に蛹からかえりたての

モンシロ蝶が

くるくる廻る。

「くるくるくるくる…」

しばらくうつとり見とれて…。はっ。

「被爆して居るのだ」と、はっと、

掛かりつけの上野診療所に電話を。

すると診療所のマーク入り

ワゴンカーが

茶畑まで送迎に来てくれた。

いつもながら迅速な対応。

「上野先生」

上野先生に会える、とドキドキしながら

看護師の応急処置に

亭主を見守る。

上野先生は深刻なまなじりで
待つて居られた。

玄関からタンカーに乗せられ
海の見える診療施設で

CTスキャナー室に入る

彼と彼。

コンピュータの管が

配線された

スキャナー室で、ふたたび

被爆

しないでくれ…。

同じ子供

1

ソウウツウツ

ソウウツウツ

雪が止む。

何も思い出せない

電気ストロー。

彼方の子供で

陰毛が抜ける

陰毛が抜けて、

陰毛がちらかる。

2

ピンクルグル

ピンクルグル

あられ降る。

だあれも来ない

電気毛布。

彼方の子供で

あぶらのおしっこで

あぶらのおしっこで

畳が汚れる。

3 (夢を見た)

氷河を割りつつ

船が行く

海へと堕ちた

身重のからだは

痛みに耐えつつ

子供を落とした

血潮が海に広がって、

同じ子供はもう産まれない…。

同じ子供はもう産まれない…。

子供は子供で

わたしを見切った。

クレイジーボーイ

クライアントと

スタバで別れた

帰り道

神社の祭りに

でくわして、

露店でスイカの江戸風鈴を

衝動買いした。

100円でフックを求め

事務所へ。

シンス

一九五八年

コハカバーナビルヂング。

四階まで階段でのぼり

誰も居ない部屋。

給湯湯室で

手を洗う。

窓際に風鈴を引っ掛けて

ウォーターサーバーで水を汲み

デスクの上にノートを広げ

きりきり爪を切つて居た。

するといきなり、

窓の外から突風が。

お盆の始め、13日に

不穏な雲が立ち込めて

風鈴は狂ったように

りんりん鳴った。

「ヤバイ」

「神社からたましいを
連れて来ちましたー!!」

部屋中のパソコンの

キイボオドははちけ

ヴラインドがバラバラ

ちらかり

メガネが飛び

かおが傷付き

ぼくの白いリネンシャツは

血で赤く染まった。

ウオーターサーバーの

雨が降り

無印のシャツも

ジャーナルスタンダードの

パンツも

ハードワックスでスタイリング

した髪も

びしゃびしゃだ。

暗雲が去り

日が直射して

ゆっくりゆっくり

終わって…。

——白昼の室で起こった

ポルターガイスト——

「めんどくさいなあ」と

メガネを拾い

「髪をなおしに行かなくちゃ」

トイレに行き

ハンカチで頭を拭きながら

髪をぐちゃぐちゃ（ワザとだよ）

していると、

鏡に写った己から

たましいの欠片たちが

ピュンピュン

ピュンピュン

散った。

水を飲み

ひと息ついて

壁にもたれる。

窓の外から

太陽が、

血に汚れた

(ふざまな) ぼくの

姿を見て

嗤っている。

「薄情な、太陽だ」
やつ

「ビシヤリ」

拍子木の音を

あいづに

ワグナーの

クレイジーガール

狂ったメロディーが

響きます。

街灯がてんでに並ぶ

雑に舗装された

田舎道で

白いワンピースに

見を包み

ゴツゴツあるく

私の脚は

濃紺の脚。

でも、今はアロエの棘で

血が滲んでいます。

田んぼのあぜから

カエルの声は金色にして。

夜にセミは騒ぎ

すぐ脇を

救急車が誰かのところを運び
走り去りました。

私はこれから

油の沼に

胃薬を投げ込みに
行くのです。

独り夜道があるく。

「でも怖くない」

ここに貞節を

持ち歩いているから。

それは、

いっしょうけんめい

歯を磨く

いっしょうけんめい
体を洗う。

洗った髪が

きしきしきしんで絡まつて

風にもなびかずもたつきます。

そして今宵、

満月の夜にやつて来た

つきにいちどの一週間。

「やんなっちゃうなあ」

雲が流れて見え来た、

今夜の月は、

イ、ケ、ナ、イ

私になんの同情もくれません。

「薄情な、月」^{ルナ}

◆桑島明大 東京都

遠い国で戦争がはじまった

わたしの友人たちはだれも死なない

地球の一部がいままさに壊れてゆく

わたしの友人たちはだれも死なない

わたしの友人たちはいま

原発のある町で教師をしている

生活

ネットニュースの翻訳記事を書いている

凶悪犯罪の被害者たちにマイクをむける

朝から晩まで、ビデオゲームの主人公たちと敵を打ちのめす
永い詩をつくる

山奥の鉄道会社の車掌をする

高価なスーツで体裁をととのえた男たちに頭を下げる

政治家たちのパーティーの司会を頼まれる

若い起業家に心にもないことを言う

深夜のラジオ番組の脚本を書いて却下される

重機で森を切り開く

肌の色のちがう子供たちに日本語を教える

生活習慣病患者たちのリハビリに心を砕く

劇場のチケットを切る

劇場の舞台で世にも恥ずかしいせりふを叫ぶ

それを聴いて涙する

わたしの友人たちはそれぞれの生活をおくる

わたしはなにをしている

遠い国の戦火あざやかな閃光のゆくえを
うつしだす画面のまえで

一日中歯を磨く

一時間に一度シャワーを浴びて

清潔であらうとする

なぜ? —— 会いにゆく人もいないのに

頭のなかに浮かんでは消えてゆく

なにかを拭い去り またなにかを追いかける

会いにゆく人もいないのに

わたしの友人たちは

だれも死んではないのに

わたしは清潔であらうとすることしか

わたしを保てないらしい

壊れゆくこの不安定な世界の

賑やかな周縁で

追憶

タバコの煙が目沁みる

田舎の雨がやんだあとで

灰色の雲をしぼつても

もう雫は漏れませぬ

静まりかえつたプラットフォームで

帰らぬ人を待つている

錆びた鉄の匂いがこみあげて

ダイヤグラムは乱れない

友たちよ

二人で部活の練習をさぼつてかよつた あの商店街はいま
小さな畑になつたとさ

時間の旅路をかけぬけて
なにもかもが朽ちてゆく
悲しさだけが残された……この町に

いまも暮らす

あいつも あのこも

空をいだいて

土に還る

Improvisation(旅)

遠い異郷の道中に

すれ違う人との即興詩

だれかがその戯れを

旅と名づけた

見知らぬ町角できいた

小さな歌の一節が

忘れがたい友になる

歳を重ねてゆくことが

旅のあこがれをつよくする

生まれたことは

この世の中をさ迷うため

すべての意味は雲のように

手を伸ばせばすり抜ける

すべての存在は山の湧き水のように

どこまでもいさぎよく

きまつたかたちをもたない

過ぎ去った時の断片に

遠いふるさとの面影をみるとき

人は詩人として生まれ

旅人として死ぬ

ひとつの詩

わたしは信じる。

偶然、

そこにある百万の詩よりも

苦勞のはてに

守り抜いた

ひとつの詩を

わたしは信じる。

虹の色で

飾りたてた絵画よりも

どこまでも

おわりのない

一本の線を

わたしは信じる。

推敲のかぎりをつくした

長編小説よりも

振り向きざまの

あなたの言葉を

わたしは信じる。

雨の音よりも

濡れた頬を

遠くの稲光よりも

か弱く細めた目を

わたしは信じる。

この世界に

ありふれた

まごころを

わたしは信じる

◆笹岡水樹 東京都

船の汽笛が鳴った

薄暗い4時頃だと思う

水色のような

もつと青いような

深いような。

とんとんとん、と足を着き
ルージユを重ねて愛を知る。

4時頃

潮の香りと

ちよつとしたザアザア雨のプレス

私たちは高層ビルを手懷けた。

ここにいる限り、

ずっと、

ずっと、煌びやかな思考に、嘘に、

後進を続けてしまうつて。

耳元でそう聞こえた

4時頃だと思う。

私はそんな明日を知つてゐる

夜が降つてきた

きらきらした冷たい息が降つてきた

雨の香りが葉音を立てるような

そんな明日のブランコに乗る

ふうふう

さわさわ

ふうふう

さわさわ

風が撫でた私の頭の中は歪んだパイプが沢山ある

つうつと染み込むヒビにあの人顔をすうつと感じた

夜が降ってきた

きらきらした冷たい息が肺を覆った

煙草の香りがえずくような懐かしくて。

誰かの一日に怯えなくても

ふうふう

さわさわ

ふうふう

さわさわ

地面に寝転んで飲み込む黄色と紺色の世界

ノイズがかかる傘を回しながら

混ざり合つてぶつかりあつて

私はそんな明日を知ってる

朝が来るなんて事

朝が来るなんて事

あなたにとつて大した事じゃないよと

わかつたふりをしていたよ

今日も心に薔薇を飾る

鋭い棘がぶつ。ぶつと

内臓を抉る音さえする

その穴の中に光が入るのだから

それでいい。

なりふり構わず夜を待つ。

そしてまた朝を嫌い、

花弁をそつとそつと拾い集めて

接吻を

纏う

君の纏うオレンジの香りの香水

私の纏う甘いピンクのような香水

混ざり合わないように

端へ端へと逃げるゆりかご

ぽーんぽーん

ぽーんぽーん

ここにいる事で

私は酸素を取り込んで

ここにいる事で

誰かの酸素を盗んでしまい

いずれ

ぐちゃぐちゃになったその果肉に

爪を差し込み

人差し指を蟻の巣にしては

私を纏い、オレンジの香へ。

と

変えてしまうのだろうか。

微睡

昼下がりの午後

窓を開けて呼吸して

筆をとり遊ぶ

眠気を起こして

指で操る君

僕はその指に

いつも負けそうになる

つんとして

空を吸った

君だけが書ける文字に躍らされる

嫌だなんて

虚言だらけだ

微睡んだビートは

僕たちらしいって

君だけの感性が歌った。

揺れるスカートを羨ましく思う

暖かな春の風に吹かれて

ふわりと広がるのがとても愛おしい

捲り上げたスカートがバレないように

小走りで廊下へ駆け出したい

憧れは僕のアイデンティティ

誰のものでもない

揺れるスカートを疎ましく思う

冷やかな秋の風に吹かれて

ふわりと広がるのが憎らしい

似合わないスカートに負けないように

大股でグラウンドへ駆け出したい

拒絶は私のオリジナリティ

誰のせいでもない

多様性って不自由だ

僕のことなんて見ちゃいない

選択肢があるって不親切だ

私のことなんて知らないくせに

僕は僕でありたいけれど

私は私でありたいけれど

心のままに生きたいけれど

青春はまるで病氣

心を食べてしまう深い青だ

◆結咲こはる 千葉県

鎮魂歌

交差する愛の差を埋めようとして掬い上げた月の水は一筋の線をひいて
真つ直ぐに射止めるその様はまるで砂時計。

対なる2つの空間に満ちる愛は互いを満たそうとする度にすれ違いを

繰り返して。

交わることなんてないのに。

硝子の向こう側で囁きかける言葉はいつだって同じ。硝子の内側にいる
僕達、私達は例外なしにその言葉を飲み込むことしか許されない。

でも、ずっと祈ってるのだからそんなこと大して気に留める必要はない
のだとわかりきってる。

僕達私達の世界を構築するのはいつだってその向こう側で。けど一度
たりとも交わらない。僕達私達だけが作り手となるこの世界ではそれら
すべてが藻屑の泡となる。

無へと還るまでの鎮魂歌。

毒となれ

灰色の景色の中に落ちてきた私の手を握るあなたはもういない。
あなたがいないから灰色になったのか。

灰色になったからあなたがいないのか。

どちらにしても傷を抉りその傷に染み込む灰色は燻るようでありながら鋭利なサバイバルナイフのようで裏切られた気持ちになった。まるでいなくなったあなたみたい。

消えて灰色、死んで灰色、私の世界からいなくなつて、その切っ先から目を逸らしただけじゃ何も変わらないことがわかつてたから呪いの言葉でも吐いてやつたらまだ何か変わるかもしれないと期待した。

灰色の私、灰色の世界、灰色の紫陽花、灰色の空。

色をなくして所在もなくて気の休む場所なんてなくて、なんなら私がどこにいるのかすら曖昧で輪郭なんてなくて儚いなんて綺麗な言葉じゃ喻えられない地獄。

嫌いだなんて言いたくない。そんな言葉が出てこないほどの気持ちを占めるものが消えてなくなったならどれほど楽か。海に流される瓶に詰められた懺悔の言葉、誰に掬われることなく漂流する歪んだ愛、イルカが飲み込んだ碧い泡みたいになれたなら。祈つても歪んでしまう祈りは呪いに

変わる。

言葉のもつ重みと深さを考えたところでこの灰色の世界では意味をなさない。眠りについたシンデレラは永遠に王子様が現れず眠ったまま。愛のキスも、名を呼んでくれる優しい声すらも意味なんてない。だって存在しないんだから。

消えて灰色、死んで灰色、私の世界からいなくなつて、その期待から目を逸らしただけじゃ何も変わらないことがわかつてたから呪いの言葉でも吐いてやつたらまだ何か変わるかもしれないと縋りついた。

灰色の猫、灰色の愛の残骸、灰色の夢物語、灰色のあなたの姿。

色をなくしてその存在だけの色濃く残して見せつけて知らしめてきてなんなら私がどこにいるのかすら曖昧で輪郭なんてなくしてしまおうとするその色に飲み込まれてしまえそう。

見えなくなるこの目に映る最後の愛。

全部真っ赤に熟れた赤い林檎にのせる毒となれ。

心は二つ、身は一つ

無情にも積み重なる愛憎を背に、手のひらから滑り落ちる砂のようなまつさら無垢な心。残された身体はいつたくなるんだなんて考えたところで答えは出ない。いつもどこからか現れた真つ黒のザトウクジラが全てを喰らい飲み込んで海に帰っていくから、そんなことを考えていたことさえもわすれてしまう。わすれたことすらわすれてしまうのは悲しいことだねって寂しそうに笑ったあなたの面影は一体誰の記憶なのかしら。考えたところで、また消えていく。この繰り返し。

もう傷つきたくないと言いつながらにもずっと擦り切れそうになる首皮一枚繋がっているようなむまつさら無垢な心を抱きしめていたら、向けられる愛憎なんてまったく気にならなくなった。そうしたら、不思議とまわりを見て眺めて、相手に寄り添う余裕なんて出てきたものだから、僕は傷つくだけの心じゃないんだなって嬉しくなる。

降り注ぐ黒曜石みたいな雨の中に現れたザトウクジラがきみを飲み込んだとき、僕は息が止まりそうになった。繋いでいた手も水流に攫われて離れて。見に降り注ぐ水圧と重圧に地盤が砕けるような音がした。

黒いクジラが去ったあとときみはまた笑う。中身の空っぽな空虚。そんな笑み。その背後に張り付く気配を僕は良く知ってる。そしてきみがその気配に対して悲しいほどの冷たい渦に身も心も引きちぎられる思いをしていることも。でもだからこそ、僕はきみの手を取る。いつかその空蟬すらも僕の心と一緒に抱きしめてやれたらと。

いつも隣にいてくれる誰かは、あなただと言うことを私の愛用しているスケジュール手帳が教えてくれる。事細かにその日にあった出来事を簡条書きしているらしいその1ページ1ページに、大きく書いてある名前。それはあなたのものだとか分かってからは、私は毎日あなたに出会い、毎日毎日あなたを想い慕い、毎日別れを告げて記憶を海に還す。

背にのしかかる愛憎なんて減るところが増えている気がした。蛇行して這う蛇のようにずるずるとまとわりつくその重さを振り払おうとすると現れる漆黒のクジラ。ああ、また今日もすべてをわすれる。幸せ。でも不幸せ。忘れたことだけ忘れられたらいいのに。……本当は、あなたのことだけは忘れたくないのに。

残された「きみだったものは、すっかり海に遺灰となつて舞い上がり沈

殿していった。きつとそうして海の生き物に身を分け血を分け、きみなり

の「生」を繋いでいくのだろう。握った手の温かさは、大切に僕の心と共に抱きしめている。忍び寄っていた愛憎は、今や見る影もない。

本当は知っていたんだ。

僕に手を下そうとせんばかりの愛憎は僕自身で、きみを求めてただぬるく柔く抱きしめたいと願っていたのも僕自身だったこと。

最初からここには、僕しかない。

白日

一音ずつ奏でられるあなたの心が静かに雨上がりのコンクリートの上に溢れていくのを眺めながら、私は小さな鼻歌を饒に添える。優しく弱く小さなあなたの音がただ遠くまでゆけるようにコンクリート上を滑っていく滑液になったらいいなと願つて。おこがましいかもしれないけど、願わずにはいられないくらいに無垢で繊細でおほつかない危うさをひと

匙抱えていたから。

飛び石が水面を滑りゆくように、猫が地面に包まれるように、木の葉が風に囁きかけるように、とても穏やかで、真理的で、虚空をさまよう迷子のように。

あなたの心は真つ直ぐいくのでしょうか

宛先も行く先もない蒼い世界をずっとずっと果てしなく

加速せず、でも減速すらもせずただひたむきに歩き続けるあなたのからだは、溢れ落として見失ってしまった心を探す旅時の途中。その目は藍色の常世を封じ込めていて近寄りがたいほどにそのからだすらも飲み込もうとしていた。私は小さなマッチの箱を袖の袂から取り出して一振りする。ジツと、ゆらりと、かげろう。淡く深く赤朱を点すその奥にある熱がその藍を溶かしてはくれないかと願う。

マリンスノーがゆらめく海の中で生きること生きがいとするあの海

月のように、短し命を線香花火のように灯すあの虫たちのように、灯したマッチの火が揺れて、切なく燦るこの緑のように。

あなたの心は雲泥を彷徨うのでしょ

宛先も行き先もない藍の世界をときどき照らし照らされながら

音が途絶え、藍が沈む

一筋の焰が、落ちたマッチの先で一瞬だけ天へと突き抜けたその日から

二〇二二回目の今日が来る

漂流

伸ばされたからだが相反して奪われていく。感覚も神経も血液も嬉々喜びもすべてがそちらへと流れて連れ去られていくのを感じて、満ち引きのある海辺の波内ぎわのような哀愁を浮かべて。それを誰にも見られぬうちに仮面で隠してただ何も感じないのだと道化を繰り返す。残されたのは二酸化炭素の満ちる血液と淡々と刻み続ける心臓とを支え

る横隔膜の震え。それこそが偽らざる真の姿だと知るのは地中深くに潜り行先を見失い迷子となった土竜だけだ。

悩みなんでないでしょ、と言われることが常套句になつていてそうだね、と肯定することに何も思わないはずなのに、ナニか海深く奥底へと沈んでいつてしまったと思う軌跡の存在がなんとなく感じられるから後ろ髪を引かれる気持ちになる。

でもそれはみんな同じでしょ。

だからきつと気にすることすらなくていいのだと見ないふりをしてその海底に向けて書き綴った嫌疑を瓶に詰め込んで沈めることを繰り返した。返事が来ることはない。くることはないけど、瓶を沈めるたびに意識の中に混じる軌跡がゆらゆらと鮮明に見えてくるからなんだか。

指の先まで動かすことにもうナニも思わなくなつて、からだに纏う生の気配はすっかり溶けて消えていた。

茨の鳥籠

引き裂かれた愛の断片にできる傷口を塞ぐ方法を教えてくれない大人にはなりたくないって思ってたのに、今その痛みを抱える分けた心に手を差し伸べることが出来ない大人になつてしまった私は何者なんだろう。

朽ちないで、腐らないで。

それができたら苦勞しないことは分かっているのに、どうしてもそうならない方法だけは言葉にもならないもどかしさに、私は私から逃げたくなる。

離ればなれになろうとする私は迷子になつて、にこにこ笑う私は太陽に向いて歩き出し悲しみに泣き崩れる私は月に向かつて走り出す。そしてたら不思議と心はからっぽになつて痛みもなにもわからなくなった。ただ、息をするだけの物言わぬ植物に。

ばかり、まばたきをしたらそこにはかつて一緒だった私がいて、にこにこ笑つて顔面が引きつつていて気味が悪いというような、不気味な笑いを

浮かべていた。

骸むろ

貴方と共に訪れた十九時三十四分四番地の地下にある美術館で出会つた骸の笑顔に釘付けになつた。貴方に、同意に似た共感を求めたけれど、貴方は頑なにキミワルイと言う。

骸に、ではなくて骸の笑顔がキミワルイ。

誤解を生まぬよう言い直す貴方の言葉なんてもう聞きたくない。なんで私、貴方とにこにきてしまったの。

貴方は言う。笑顔というものを持てる者は決まつて心に幸福を飼つている者だけだと。

嘘偽り。そんなものを秘めたままの笑顔なんて、それこそが骸ののだと蔑んだ。

そうかしら。私にはそうは思えないわ。そんなことを言い募つたら、世界にいるヒトという種族は皆骸だと思う。

混沌とした縦と横の社会の中で貼り付けた仮面で馴れ合うヒトの愚かさよ。心が擦り合わせられることなんてない、平行線を辿るやりとり

に何が生まれるというのか。幸福だけじゃない。幸福だけを持つことなく、生きとし生ける感情を持ったヒトに叶うことなき業なのだ。

そんな業背負い生き行くヒトの心の美しさに惹かれ行く私の心は揺蕩う水面に浮かぶ椿の花びらのカケラ。紅一点が世界を染めることはないけど、目に留まった誰かにだけは鮮やかに鮮明に残る跡となり、夢となる。小さな夢だつて願わくば大きくなりゆく。骸の笑顔が大きくなり行く夢ならば、それはヒトの儚き一瞬の姿とも言えよう。

その様を、その歪さを美しいと、素敵だと言わずしてなんと呼ぶの。

三百六十七年後の未来、きつと私はこの場所を訪れる。誰とくるだろう。少なくとも貴方ではないことは間違いないわ。

海の中をライオンが走るように、大地を魚が泳ぐように。信じられなような歪さを心に住まわせるヒトの心の多面性に期待で胸を膨らませる私をわかつてくれる『貴方』を求めて、熱くて冷たいコーヒークップにほんのちよつとの期待と毒を沈めて、飲み干して。そしてその骸の心を抱きしめながら私は美術館を後にするのだ。……背後に流るる紅を一点残して。

◆あめ 千葉県

ひかり

鳥という言葉を軽率に棄てた日に
孤独の女の傍らで

的礫に耀く裸身のお前は産まれた

私の孤独な血管の中を出鱈目にお前は甘く甘く走つてゆく

朝はお前の瞳を洗い充溢な祝福を

光りの輪は無数のめまいとなつて

揺籃を揺らし見えない指でお前を揉む

その、いたずらが更にお前の細胞を新しく新しく伸ばしていった

十月三日の果実、純粋な誰も目の眼が微笑むとき

お乳を下さいと赤い舌がチロチロと這いずり

視えない何かを信じて

小さな手は顔を洗うように何かを探す

あいた口からは生の明かりがあふれてる

そうして、気化するように遠くの誰かは死ぬ……

廊下の奥で腐った檸檬の柔らかさを抱きながら

肉色の柔らかな曲線を私の孤独は噛み続ける

まるで指をしゃぶるように、ふやふやと ふやふやと

孤独は真赤に角がとれて柔らかくなった

傷つきやすい魂を連れて

お前は何かもかもを赦すように頼もしく

人間という嘘がなく笑った

そして私と同じ息を吐き吸っている

私は真赤に真赤なふよふよとした人間からやり直すのが

さしあたつて目標になつた

お前のように、皆を愛し愛される真赤な柔らかな女に

私の小さなお釈迦様

私の心は限りなく父と母に寄っている

時折、苦しめるのは私の存在が

どのような純度で父や母を支配しているかと、言う事である

私は現在、精神疾患で働けていない

誠に申し訳なく、それに加えて

拒食症で手足はバッタのように細くなった

それでも毎日、私の生存が赦されるのは

唯一つ、老いた父と母の笑顔である

降り注ぐ光束の厳かな重みの底に

私たち親子は居る

喧騒や色彩が振りまく外側より

単色光の内側を守つて

両親は、私のむこたらしい純化した孤独や哀しみを

お釈迦様の如く深く見つめ見守る

そのお顔の何とお優しいことか

その身体のなんと小さくなったことか

その心の底の愛情の寛容さはどれ程だろう

どれ程私に傷つけられ深く変わった愛情なのだろうか

私は父と母によつて赦された寂しさをうけとつて生き続けるだろう

母の臍をみると

命を頂き生かされている事を切に感じる

私たちは繋がつて居た

私は母の卵から孵化して、この世界を歩いている

父と母の笑顔が私にとつての

春であり夏であり秋であり冬である

全ての空間と時間に父と母が座る

たとえ視ることが罰せられた景色に出逢つても

そこに両親が座っているのならば

私はかぎりなく視にゆくのだ

だからこそ外に向かつて歩かねばならぬだろう

的礫に耀く驟雨に降られ

いい時と場所を選んだと思えた

孤独の清き水浴びに真清水は

頬を流れてゆく

それをみて

奇妙に鋭い口笛を吹きならす小鳥たち

人たちは私を軽蔑している

私はそれが私の存在意義であるかのように

恍惚と生きている

父と母と三人きりで

水溜りの上の影を食べながら

単調にして鋭く翳りなく

私は私を洗う

父や母はしわく(固く)なり続ける

二人は小石ほど小さくなり

私の掌の中で眠っている

私は二人を包んだ掌で

お釈迦様を拜む

驟雨に濡れないように熱心に拜む

私は動き出さねばならない

父と母は、日増しに小さくしわくなりながらも待つてくれている

詩を書き始めたのは、その決意の第一歩と言えよう

この二編の詩に、一行一行に

両親の鼓動がうるさいくらい綺麗に鳴り響いているのだから

今度は私が二人を守らなければならない

◆江口久路 京都府

十五歳

1. 予言

彼はまだ生まれてこのかた誰のことも傷つけたことがなかった。彼の母親も、この子はまだ誰のことも傷つけたことがないんです、と予てより語っていた。ネットいじめにあい中二で家に引きこもるようになった彼は、この一年余りの間に大きく変貌を遂げていた。僕は君をとんでもないことに巻き込んでしまう気がする、とある日彼からメッセージが届いた。これは予言だ、と書いてあった。でも僕は「なんだか嫌だな」何となくそう感じただけだった。返信はしなかった。彼に返事をしなかったのは初めてのことで。そして彼は、大きな謎に満ちた陰惨な事件を引き起こす。生きてゐる実感がほしかった、と彼は言ったそう。戦争を体験したかった、と。事件以来僕は、彼との、あるいは世界との関係に大きな不安を抱いている。平穏な日常を描いたポスターが彼の手によって突然引き剥がされ、それを止めていた幾つもの画鋏の鋭い針先がバラバラに弾き飛ばされ、途轍もなく遠く離れてしまったその距離を、まるで実感が保てないその痛みをずっと宙に浮いたままのそれが不意に戻って来て自分の目を突き通すのかも知れないと――。

僕は彼に約束され、彼は約束どおりにそれを実行した。彼は僕を巻き

込み、彼に巻き込まれた僕は、彼を中心に回り続ける一個の物体となつた。彼と僕、以外のほとんどの人がそんなことにはまるで無関心もしくは何も気づいてはいないのだとしても、おそらくは僕自身、彼の予言の陰圧によって取り込まれた彼の運命の一部であり、彼の波動律の支配を受け続ける限り、彼と僕との間に生じた関係は、もはやどこに向かつても解放されることは決してない。

2. nの記憶

よる、くらいだいでところで、おかあさんがせなかをむけてたつていた。

ねえ、おかあさん。そんなくらいいところで、なにしてるの？

水の音

窓を叩く手

手・・・手・・・手・・・

むかし、ひとがころされたばしだつて、おねえちゃんがいつた。かべにちが、いっぱいついてたつて。

支配された庭

死人の爪——伸びる

石の下の虫

こんなひには、きつとあらわれる。

こんなひには、きつとであつてしまふ。

きつと、かげがあらわれる。じぶんという、かげが。

逆光の鏡

刻印された暗示

発雷確率

不連続な乖離

重力と傾斜

抑圧の球体

憂鬱な内部

へやからものがきえ、なにもかもがしろいきりのなかにうもれてみえなくなる。しろいほねが、、、いっぱい。

喉の穴

不定形の影

嘲笑する雑踏

ひとりぼっちのたんじょうび。だれもない。

おはかのなか。ひとりぼっち。

沈黙の魚

蛇の骨

蜥蜴の舌

腐った鳥の死骸

犬の目

獣の手の彎曲

夜光虫

不在の夢

おかあさん。

ふりむいちゃだめだよ。

いまころしてあげるから。

3. 炎天

べつたりと濡れ^{したた}滴り頭部に張りついた髪。薄汚れ垢光りした皮膚。汗染みで黒ずんだ制服のカッターシャツに色褪せてよじれた学生ズボン。誰もががしお枯れるこの炎天下においても、およそ成長期とは見えぬ中学生風の華奢な少年の姿は、一見してわかる違和を強烈に主張していた。通勤途上の乗り換えで駅のプラットホームを歩いていた私に向かい、少年は地

面から立ちのぼる妖気を纏いユラユラ…ユラユラ…近づいてきた。私の数人前からは少年を避けるための間隙が生じ始め、彼の体から、相当な悪臭が発せられていることを十分に想像させた。彼が近づくにつれ、私の周囲の空間は広がり続け、ついに私が少年とすれ違う順番がやってきた。俯瞰で見れば、プラットホームにぽっかりと空いた格闘リングのようなスペースに、少年と私だけがタイマンで残される構図になっていたはずだ。既に数メートル手前から、アルコールと小便と嘔吐物とを混ぜ合わせた異臭が私の鼻を衝いたが、私はそれすら気づかぬふりでただ前を向き、平静を装い少年の横の空間に自分の体を向かわせたのは、この異形の少年に対する憐憫というよりも単純に少年が怖かった、何か動物的な得体の知れぬ恐怖の為であつたのだが、私のこの不用意な行為が、かえって少年の中に、ある種敵意のような（あるいは彼の中にも私に対する恐怖！があつたのかも知れない）、特別な感情を生み出させる結果となつたに違いない。少年がその時どんな表情をしていたのか、その最も重要な視覚情報を、私は彼を頑なまでに見まいとしていた為に見落としてしまったのである。

次の瞬間、少年の体が心持ち私の方へ傾いたような気がした。そして何

事もなく行き過ぎたかに思えた直後、右の内腿に一瞬電気が走ったような発熱があり、少年が私の腰に背後から抱きついてきた。咄嗟には、何が起こったのか、判断できなかった。ただ押されるまま、私は少年と共に炎天のプラットホームに倒れ込んだ。シューッという音が私の中から発せられ、私の股の辺りから真っ赤な血しぶきが激しく噴き上げていた。刺された、と思ったが私にはどうすることもできなかった。二度刺されないよう、私はナイフを持つ少年の右手を両手で必死に押さえつけた。彼の腕は折れそうに細く、骨ばっていた。そうして、自分と同化したように少年を身の内に感じた刹那、私は全身を、全き光に包まれた。――

4. 事件

母親を、自宅で首を絞めて殺害し、遺体を放置したまま鉄道の駅へ向かい、たまたまそのホームにいた全く面識のない男性をナイフで襲つて刺殺したとして、警察は十五歳の少年nを緊急逮捕しました。事件に対し少年は、「誕生日のプレゼントがほしかった。これは僕の戦争です、生きてゆくための」と不可解な供述をしているそうです。

私の青い空

がさがさして気持ち悪い

がさがさして

そこに人が死んでるから

死んでるのは

私

どこにもない抜け道

暗い森

死んでいる私

それが すべてだ

愛さないまでも

無視しないでいて

他人の目と 他人の手が生え出し

息苦しさに取り囲まれた森の奥

言葉が枯れ落ちて

降り積もる

子供の私

子供のまま死んだ

私の子供

渴いた水を吐き出し

泥の血の上に仰臥する

濁った白の目の玉で

憧れの青空を見つめながら

どこにもない抜け道

暗い森

言葉が枯れ落ちて 降り積もる

濁った白の目の玉で 見つめている

ただ青い空だけを 見つめている

どこにもない 絵のような

絵のような 青い空

二間きりの部屋の片隅に淋しく置かれた木箱に向かい

蛾

汗ばむランニングシャツの裾を手で煽きながら

中学生の僕は 英語の演習をしていた

「なあタカシ…、また頼むわ」

隣の狭い風呂場の中から 母のくぐもった声がひそりと届く

僕が湯舟に浸かり 母が洗い場に座る

母は何故か目を瞑り

気だるく上げた右腕を左手で支え

妖しく濡れ光る腋毛の束を 僕の眼前に惜しみなく晒した

湯の中の僕の股間は

激しく勃起している

僕の目は

母の粒立つ太った二つの乳輪と

その下に垣間見える黒々とした股間の繁みに囚われ

脈打つてふくらみふるえていた

剃刀を持つ僕の指は

餅のように吸い付いてくる母の

毛を剥り落された腋の皮膚の感触を

視野の中の具像とともに

記憶の奥の 深く塞がれた場所までじわりと染み込ませ

閉じた

その幻影は

濃密な熱帯の湿地を這い

無惨な羽で厚ぼったい牀を支え産卵する 巨大な蛾の断末魔となり

濡れた羽からしたたるドス黒い肉汁は

風呂場の排水口に垂れ流され続ける母の蛾の

はらわたの汚物そのものとしての僕を

生涯形かたちづく成った

クマジュナン

ある日おんなの子は 森でクマさんに出会いました

おんなの子はクマさんにおそわれ

ココロとカオに深いキズを負いました

なんとか里まで逃げおおせたおんなの子は

そこでノータンをクマンばちにツキサされました

ゼンゴフカクになって おんなの子はキゼツしました

助けてくれたのは 木こりのクマじいでした

キズも癒えて 元気になると

クマじいは おんなの子を

ワルい人に売りとばしました

ワルい人は アタマの汚禍おかし死なシジンで

ゲヒンにニヤけたヒョージョーで

「ネーサン、オ○ンコマルミエデスヨ」というのが口ぐせで

目のまわりには

ビョーキみたいなくろぐろとしたクマが

なんじゅうにも取り囲んでいるのでした

ワルい人は おんなの子を無理やりTOKI♥のまちへつれて行き

とてもひどい場所で ドレーのように働かせました

ワルい人のスキを見て おんなの子は逃げ出します

そしてTOKI♥のまちを さまよい歩きました

クツもなく おんなの子は

車道の端の白いペンキの線の上を

ひとりハダシでベタベタ歩きどおしました

そこへ「る」の外れた車クルマが

(それはトーゼン シジンの乗るガイシャでした)

ぼろろろおーん トハシッテ すきゆるろろ トスベツテ

「ほむっ!」

おんなの子のからだを

ヘンなところでマップ／タツにして

おんなの子のいる世界にマクをおろしました

こんなふうにしてとーとーツヒに

おんなの子は シ・シ・シ・シンでしまいました

それを見たシジンは

いつまでもおなかをかかえてわらいころげていました

◆高橋詩絵里 兵庫県

十九歳

十九歳ってなんか微妙だよな

十七歳ほどの華も持てないし

十八歳ほどの熱意もない

二十歳ほどの自由もない

十九歳って微妙だよな

私には頑張りたいものがない

ハマってるものもない

推しはいるけど二十四時間考えてしまうほどのオタクにもなれない

なにかを世間に求めている

違うと思うことばかり見つけて

これだと思うことはない

そんな自分の人生って何か欠落している気がする

一人で好きなバンドマンのライブに行けるようになった

一人でのチェーンヤサンに行けるようになった

でも地元点はまだ未知の世界のまま

一人で生活できるようになった

遊ぶためにロボットのフリをしてバイトをする

自分の存在を表すためにSNSを投稿する

自分が浮かれていることに気づいて恥ずかしくなる

ときに年相応を目指し

ときにその考えに苛ついてしまう

星が降るといふ言葉をロマンチックに思い、

お花摘みという言葉に笑ってしまう

ほんとはどんな言葉もそこにあるだけ

その言葉をどう思っても否定はされないのに

美しい言葉も醜い言葉も当然かのように印象を統率されてしまう

統率だと思っていたものが共有だったりして絆が深まる

自分らしいをどうして自分で説明しなければいけないんだろう

自分らしいがいいことなのか

自分らしいを知っていたら迷わなくて楽かもね

自分らしいをしらなかつたら新しい世界に出会うかもね

簡単に出る答えなんてなくて

正解が不正解で不正解が正解でもなくて

その考えがそのまま認められたら素敵かも

ときに正解をつくる必要もあるけれど

十九歳、矛盾だらけの世界でただ生きている

肯定も否定もしないで欲しい

◆島田都和 岐阜県

最近わたしを制限したのは

(笑)

終始AIの私が化粧をする意味

入浴の習慣、

1人で理想に遊ぶと核膜が破けて染色体を赤く染色する

誰か(誰か)

私は効率のいい人間になりたい

単細胞になりたい

だれか

私は単細胞になりたい

効率改善にてをつくす

効率改善にてをつくす

てを繋いで、それで何となく安心した

誰かが宇宙と交信した

(誰か)

将来の夢でなんですかね

理想はあくまで理想なのに

誰か

りそうにあそぶ理想

はあくまで理想なのに

(でも想像してたよりずっとつまらない)

ねえ誰か

誰か！

(お願い誰かお願い)

(え?)

え?

誰か

だれか待つて

街角で私達はぶつかりあいうえお

あいうえおつて

まつて

食パンくわえ

くわえて

走るばじるそして私

私、わ

た、わたしミ、私わたし

私待つてたよ？

私は待つてたのにあなたは来なかった

そうやって手を繋いで

それで何となく安心しちゃつて、

(誰)

誰そ彼そとわれをな問ひそ

わすれたい

勿忘

笑うな

わたしばつか

わたしばつか

りばかみたいじゃんミ

(誰か)

わたしばかりばかみたいじゃんなんか

(染色体を染色する)

じゃあわたしだけでいいじゃん(笑)

わたしだけでいいじゃん(笑笑)

◆米野哲郎 山形県

台風前夜

重なりあつた鮮やかな紅色が空から消え

町は夜のしじまを迎えていた

賑やかだった夏蟬の声は もう聞こえない

田んぼの稲の背は高く

横では鳥おどしのフクロウが空を舞っている

シャツを揺らす風に 男は思わずボタンを閉めた

「王手」

夏の余韻が残るなか

季節は詰将棋のように

秋である駒をひとつひとつ確実にさしていく

川べりの道の駅 仕事帰りのサラリーマンだろうか

よれたシャツ 襟にかかる乱れた髪

自動販売機の前にカバンを置き 膨れた財布の小銭を探っている

「チャリン」

食べ物を与えるかのように

ゆつくりと一枚一枚確実に自動販売機に小銭をいれる

響く音は十三回

スマートになった財布を左手に持ったまま

商品を見比べ 視線を揺らす

どれを選ぶのか

季節の運命はそこで決まる

サラリーマンは自動販売機のボタンを押した

人差し指の先は ブラックの「アイスコーヒー」

王は生き延びた――

夏の匂いと秋の足音が交わる夜

暦の進行に待ったをかけるように

季節の覇権争いは続いていく

まるでこの攻防に観客となり熱狂しているかのように

川辺では虫時雨

これからは自分たちの時代だ そう言わんばかりに

エンマコオロギが煽り クサヒバリが騒ぎ立てる

スーパ―からの帰り道

男は河川敷の階段に腰をおろした

イワシ雲のなごりが夜の今も気持ちよさそうに漂っている
今回奴がやつてきたら

権勢をふるった王でも その後は完全に詰みかもしれない
「ブオオン」

そのとき 静寂を切り裂く激しいエンジン音が道の駅に響いた

Suzuki ― 隼 ―

シルバーの車体色に美しい曲線のフォルム

駅に並ぶ大型トラックにひけを取らない存在感

さきほどのサラリーマンらしい

スロットルを回し エンジンの調子を確認している

夏用メッシュジャケットの袖からは ワイシャツがはみでている

ほどなくして轟音は遠く

夏をまとったサラリーマンの姿は小さくなっていた

隼が去り 川沿いの空気が変わるのを感じた

木々がざわめきだし ひとひらの葉が夜風に舞った

右に 左に ゆら・ユラ・ゆら

思わず手でつかもうとするも

体の横をスルリと抜けるその軌道はまるで

往年の名投手マヤディッキーが放つナックルボールのよう
葉の着地と同時に 草木に降りていた露が地面に降りた

「王手」

男は頭上の空を見上げた

そこには夏の間中いた まくなぎの姿はもうない

夏の王と秋の王 対局は佳境を迎える

男は腰をあげ 頂上決戦を見届けるべく帰路についた

今夜は酒でも飲もう 冷豆腐を肴にして

◆水越晴子 三重県

閉鎖病棟の朝

和らいでいく感覚

非常に激しい昨夜の雨

真昼から打ち解けない雫をおもう

葉先から転がりこんでいたら

幻聴のする

私の呼び声が私を確かに生かす

それは

おおよそ

確かな術であり、

私は私と呼応する

幻聴は止まなかったので

閉鎖病棟の朝は静かだった

鳥が死ぬまで集る死体遺棄場のように

蠅が死ぬまで集る蛆虫の共存

私には鳥、雀、そこらにいる徘徊者以外は見えない。

そうだった。

私には幾重にも、八重山のように あの八重樫のように
汚い世界を潤いを与える 奇妙な。

閉鎖病棟にて 奇談は仄めかしに過ぎず。

閉鎖病棟が夜

朝の事を忘れたために 薬の加減で 死んでいく身体

不老不死の生者のように

いつだろうか。

私の心だけ微かに震えて杖となり、巻物のような蔓となり、繁茂した
枝葉には嫌った 嫌ったので 最早

あそこで鳥と遊ぶ子らの純情な目を虜にしていっただけ

底なしの貝殻と藪で出来た家と海岸通りの緩衝帯

未永く死するものたちが奏であう

ロジンが天にいたか

知らず知らずに 私は 渡り合っていた声に
欲望に 踊らされ

竟には 帰郷する夢を見

ここで数十年間も暮らしていたので機械織り機の声ですら、
蚕を飼う音ですら
何ももたらさない。

やんわりと顔に笑みを浮かべる
それが鳥の舟と言わんばかりに

◆藍羽由宇 千葉県

雨の匂いがする

邂逅

草の良い匂いがする

水が私の頬を優しく撫でて 優しくキスをしてくれる
土に身を預けて 草に包まれて

水の香りに包まれて

陽の光と月の光を纏うの

誰かわからなくなる時間の中で ただ確かなものは 肌に張り付くシャ
ツの感覚

星の光をアイシャドウにして やさしいキスをして

両の頬を手のひらで包まれて

体の中の空虚を 温かい風で包むの

泣きそうになる目を開いて また塞いで 自分なりに呼吸する

瞬きで息をする

きつと生きている きつと生きている

あおによし

昼間のほわほわした空気が
夕方になると変わっていつて

夜になるとバキッとする

細いガラスの線が張り詰めた感じになる

夜の森の静謐さがとても美しくて好きだった

景色というよりは、空気のまとう雰囲気や色が一気にバキッとする

世界がどこかシフトする

夕方はこう……爽やかだった香りが実は媚薬だったみたいなの

怪しさを秘めてる空気が広がっていくよね

そこで踊り子は天女のような薄くて長い腰布をひらひらさせながら踊るんだきつと

だんだん夜になって月が出て、月になって夜が出て、

そのフェイスラインが青白く光る時きつと、

世界の時は止まって、また動き出す

機械仕掛けの時計の内部がガタガタ動き出して正しく時を刻み出す

そうして、綺麗に歯車やぜんまいが動いて行く様は世界の秩序そのものの
青の都の魔法がきつと

ピアス

ピアスを開けよう 左耳の上の方の縁に開けよう

でもそこに穴が空いたら 天から糸を通してしまうから、

上から釣り上げられて体が傾いてしまうことになる

バランスを取らないと きつと転んで足を挫いてしまう

だから私は首を傾げて叫ぶんだ

「生きている証明を！生きている証明を！」

人と生のあいだ

僕はさ、知りたいのかもしれない

知りすぎたのかもしれない

……死にたいのかもしれない

でもここでこうして君と、そう、君と

語らいあったり病みあったりするのは、案外存外、心地のいいものだね

目を抉るような偏頭痛と

鼻を突き刺す冬の空気は

夜も朝も変わらずにいて

それだけが僕の救いになつてゐるんだ

後ろから腕を回して

僕の背中にもたれて

ただその体温だけをどうか、試して

生きていることを確かめて

強く、抱きしめてほしい

風の名の下で^{もと}

僕の脳に電極を繋いで

目を閉じて

額を覆う感覚に支配されながら、

その瞼の裏に^{くぐも}叢の夢を見る

どうか覚えていてね

どうか覚えていてね

人か、真か^{まこと}

「^{空虚}」か、林檎か^{うそ}

星屑と蝶

病んでるだとか、あーだとかこーだとか

その口、全部塞いでしまいたいわね

私の怒りの根源は

私への自信のなさね、きつと

でもこれが私だから

これが、私だから、、

そうしてまたリップを塗って

少し動かしづらくなつた口を歪めてこう言うの

さよなら、バイバイ、また会えたらね

ええそうね、さようなら

ええそうよ、さようなら

このルーシュを乱暴に拭つて

本来のあたしになる時

月は満たされる

月は満たされる

星の祝福の下

裸足でダンスを踊る

月に祈りを捧げて

月の光に殺されよう

そしてあたしは

ただダンスのパートナーを待つだけ

ただ待つだけ

舌を出して、星の雫を受け止めて

内側から光るのを、

あたしは今日も待つ

◆神無月 愛知県

愛知(こ)り

わたしはあのひとの愛のかたちしか知らないから、あなたをときに苦しめてしまう。あのひとのかたちにあなただけがびたりと嵌らないと、途端に泣き出しそう。凍てているのにいまにも焦げ付きそう。そんな感情の波にこの身を預けてしまふようになる。あのひとの愛のかたち、それは夕闇にうすく輝る朧月のようにわたしをあいまいにし、聴てわたしは春の雨で地に淡紅の絨毯を作るさくらのように、ひとひらずつ削られていった。

わたしに残った塵はあのひとと過した六畳一間の中をきらきらと舞っていた。その一掴みを愛したのが、あなただった。あなたはわたしの残りくずを全部ぜんぶきれいに攫ってしまうと、わたしを愛慕という名の花瓶に入れた。あなたは毎日わたしに愛の言葉を注ぎ続けた。

「きみはいつかきつと咲けるさ」

「ほくが怖くなるくらいにつやめく一輪の花に、きみはなるんだよ」

そんな日々が、一年続いた。そのあいだ、あなたはずっと、ずうっと、なにも、なんにも、変わらなかった。わたしのとめどなく流れるなみだは、

花のつぼみを枯らせ続けた

それは突然のことだった わたしの病、恋煩いが治つたのだつた 切欠は、
やっぱりあなたの言葉だった

「きみを生涯愛し続けるよ。これはプロポーズだ」

その刹那に、わたしは瑠璃色が目にまばゆい、薔薇の花になつていた
花びらは天道のひかりを受けてあなたの言葉の通りにつやめいた あな
たはそんなわたしを見詰めて、あたかなひとみの温度を教えてください
わたしは花びらのさざめきであなたに愛を伝えた

「アイシテル」

するとあなたは天高く煙るひとすじの暗雲となつて、わたしの前から
忽然とすがたを消した わたしは化け猫にでも騙されていたのかとあな
たが一年過した部屋をゆうらりと眺めてみた けれどそこにはなんのひ
ともなくて、ほんとうに、ただの一つも、なんにも、残されていなくて、
わたしはわたしを咲かせたあなたをおもひ、想ひ、重いあいで自らを踏
み潰した

哀について

わたしはいつだって悲しかった、かなしかった わたしの傍にはただ哀が
あるばかりで、わたしの欲するあいはもう、どこにもなかった 星のよう
に点在するかなしいことが繋がり、わたしは天に囚われていた 天という
名の、あなたに あなたからのあいは、曇天の日のやさしい雨だった 頬を
濡らす水滴はあたたくくて、わたしは次第にこれはあなたから恵まれて
いるものなのか、自身が流しているものなのか、わからなくなるほどだ
つた

大人はわたしによく言った

「若さを武器に持て」

その度にわたしは思つた

「こんなにもろい武器などいらない」

わたしには若さなど必要なかつた 若さをいまから五十年分払うから、
対価にこれからこの足で踏みしめる地のやわらかさが知れたかつた 経
験がほしかった わたしはあのひとがこぼす弱音に、同情はできても共感
はできなかったし、いくら言葉で励ましても足りないと思つた それくら
い、あのひととわたしではあのととき立っていた地のかたさが違つた わたし
に陽だまりのようなやさしさを向けてくれたあなたが陰でどれだけ

のなみだを流したのか、想像はできても、もう確認する術はない あいし

ていた ころから 哀のなみだにあいを誓う

◆藤堂ちでん 東京都

街路の廃人

神保町の古本屋で立ち読みしていると

白い騎士が外のアスファルトの上を歩いていた

かつて英雄たちの商船が沈没した場所で

パンドラは道端の消火栓を開けた

鳴り響くベルに慌てふためく頭が二つの子供

B29は薄い影を残して飛び去った

神田橋を渡ろうとすると

熊楠が退屈そうに赤信号を見つめていた

かつて夜を昼にひっくり返そうとした場所で

いつの時代かの天皇が卵焼きを裏返す

焦げ目の模様に目を回しながら

うつけ者が時鳥を取り逃がす

新宿で飲み屋を渡り歩いていると

裏通りで生ゴミに紛れた個人情報

アブラハムがくたびれた体で漁っているのが見えた

神の子どもたちはキャッチボールをして

窓ガラスにぼっかり穴を開ける

ワクチンを打ち続けた立派な医者は

帰って手首にこそり穴を開ける

秋葉原の高架下で雨宿りしていると

監視カメラに映った君のキリストが

墮落した壁に落書きをしていた

いくつ盗つても盗りきれないと

万引きしながら阿弥陀が微笑む

破壊を忘れたシヴァ神とそっぽを向いたヴェーダが

距離を開けたままメイド喫茶で紅茶をすする

丸の内のベンチで待ち合わせしていると

紙の上に建つ会社が粉々になつて

紙吹雪を舞い上がらせるのを見た

スーツ姿の青年は自分のために生きられない

だから人のために生きていると信じ込んでいる

忠告の価値を知らぬ者は進んで忠告し

忠告の価値を知る者は決して忠告をしない

銀座の歩行者天国でぎゅうぎゅう詰めの中にいると

人間に近づいた機械と機械に近づいた人間が

手を取り合つて歩いているのが見えた

人間より魅力的な無機物は

自らの価値を認める必要はない

無機物に地位を与えた人間は

自らの価値を知ることを恐れている

東京のどこだったかは覚えていないが

都会人が低気圧に押しつぶされて

割り切れない関係を割り切ろうとものがいていた

洞窟の中のミミズクは一晩中

損得のそろばんを弾くのに必死になっている

お得な話が転がつてないかみんな耳をそばだてるが

いつのまにか自分が荒野を転がっていることに気がつく

君が夜遅く帰り道をぼつぼつ歩いていると

警察官が自転車で坂道を登り

君を幻想的に追い抜かしていった

捕まつた時間を解放するために

少年は囚人服を君に手渡す

闇を引きずつて聖人たちは元の場所へ戻つてゆく

架空の話に見向きもしない君を横目で眺めながら

◆ころう

神奈川県

わたしは雨の中にいます

わたしは雨のなかにいる

宮沢賢治的に佇んでいる

へっせ的に眺めている

わたしは雨のなかにある

概念について考える

メタファーの研究をする

わたしは雨のなかに入る

時間が膨張する

耳殻が戸惑っている

わたしは雨のなかに落ちる

自由落下の公式

空気抵抗の係数

わたしは、雨の中から出る

髪を結ぶ。

ちよつぷり、死にたくなる

◆堤 善宏 愛媛県

手を繋ぐ

自宅から二キロメートル離れた神社へ

妻と二人でお詣りに行く

妻は手を繋ごうとするのだが

私は恥ずかしいので振り払おうとする

そうすると妻は面白がつて

余計にしっかり手を握りしめる

「誰も見えないわよ。」

田舎なので人通りも車も少ない
けれども意識すると

誰かに見られているような気になる
遠くから歩いて近づいてくる人、

農作業をしている人、
すれ違う車、…

「誰も気にしてないわよ。」

仕方がないので

手を繋いだまま神社まで歩く

鳥居をくぐり

石段を登るのだが

まだ気になる

スズメ、カエル、さくらの葉、石ころ、…

「見られても、いいじゃない。」

境内では

二人で手を合わせて拝む

振り返れば

高台からは街が一望できる

小さな建物や車を見ると

自分もちつぽけな生き物に思えてきて

広いころを待とうと思う

妻の手を握る

「あら、どうしたの？」

妻は少し嬉しそうだ

◆春谷 翠 奈良県

月光

それは擦り切れたような寂しい色をした青だった。灯を落とした部屋
の真ん中で、月を背に譜面の散らばった床を眺めている。指先で触

れると、さりと音がする。錠剤の白と一緒だ。

瞬きをひとつする。呼吸さえひそめて。いつか、この耳が拾っていた静かな感情は段々と失せ、其れと同時に心臓の何処かが欠けてゆくような感覚があった。遠い日の思い出のようだ、きみの記憶もすべて。許せないことなんてきつとないのだろう。きみが云うのだから。きみが云ったこと、それだけは憶えている。きみが諦めたいくつかの人生とは、他の何にも代え難い無二の芸術だった。そんなこと。そんなこと云ったって何が变わるのか教えてくれよ。僕にはもう何も聴こえない。何も。きみならわかってくれるだろう。この寂しさが。あの眩しいほどにひかる雲を、もう一度この目で観たい。其れで何かが書けるのならば、僕はきみの言葉をまた知りたい。ただ揺れた群青、此処は何よりもうつくしい夜。ぼくはただ、きみの居たあの日にかえりたいだけなんだ。それはまるで手紙のように落ちる、譜面の上のフィーネに水滴が落ちる。きみが居ないことが、こんなにも寂しい。寂しい。夜の底でただ泣いている。遠い記憶の中でずっと擦り切れたような青が漂っていた。

◆帆船とうか 神奈川県

泣く

泣きたいとき

涙できない花は

どうやって泣くのだろう

泣きたいとき

涙できないこの道は

どうやって泣くのだろう

泣きたいとき

涙できない朱い金星は

どうやって泣くのだろう

あたしは涙をさげさば流しながら

涙できないこの道を往き

涙できない朱い金星を見上げ

涙できない夜の花にそつとふれる

ねえどうやって泣くの

花

この道

朱い金星

◆むらめ 島根県

公園に行く、十八歳で来年就職も決まってるけど、ブランコに乗りに行く、ふとお空を見ると木陰に隠された太陽がユニコーンみたいな形の光になつてこちらに漏れだしている、綺麗だな、早く死にたいな、やっぱりあの時、死んでしまえばよかった、果てしない絶望に飲まれた勢いでそのまんま、スーパ―に眠剤がなかったから代わりにジュースを買つて帰つたの、やり直して、気合いで飛び込んで、そうすればきつと、今の中途半端で不格好な私はいなくて、代わりに少し昔の小学校の頃の私が青い背景に笑

顔でリボンを飾られていたんでしょ。一番可愛かったあの頃に戻れるんでしよう、ブランコが似合うあの頃に、私の脳に猫がいるからダメなんです、目を離れた隙に、ぜんぶひつくりかえしちゃうから、私は落ち着かないんです、ずっと片付けているの、早く出ていつて、見ないで。

◆小川 流 神奈川県

小樽の青 三原さんへ

振り返れば 水平線の欠片が光る

多喜二が通つた地獄坂 上りきつたら商科大

地獄坂なんて バンカラな若者たちがつけたひどいあだ名

冬には吹雪が荒れ狂う道も

夏にはサイダー色の風が吹きぬける

この町で生まれ育つた三原さん

関係を聞かれたら 仕事仲間ということになる

冬には おふくろが大量に作るんだよ とおでんをくれて

夏には 泳いじやうか？ と海に連れて行つてくれた

七つ上だった三原さんが逝つた歳より

十三歳も年上になつてしまつたなんて

優しくしかしてくれなかつた三原さん

長期出張のドライブで 好きにしていいつて言われて

大声で歌つたら 歌つた人は初めてだよ つて目を細めた

車窓からは 牛がながまつてゐる牧場

ながまつて何ですか？

東京の言葉だとなんていうのかな 寝そべつてゐる？

海沿いの取材で ウニが続いて吹き出物ができたら

話だけ聴きな 俺喰うから なんもだよ※

海育ちだから どんだけ食べても平気 つて髭面で

みんなにクマさんつて呼ばれてた あの実顔で

ただただ アニキ分でいてくれたから

好きな街を思い出すように思い出せる

隣にいて 傷つけられたことが一度もない

それが

どれほどの奇跡か知らない歳だったころ

小樽の坂から振り返れば

水平線の欠片が見える

思い出のように美しい青が

元気ですか？ そちらで元気ですか？

※なんもだよ

どうつてことないよ の北海道弁。

ありがとう、と言つたときの返しのように

英語の it is my pleasure のように、

「気にしないで、大丈夫」の感を込めて

北海道の友人たちが使っていた言葉

草むしり 2022

猛暑日が続いて

庭は 雑草伸び放題

メリメリプチプチ 悲鳴を聞きながら

両手でわし掴んで 引っこ抜く

うがい薬がコロナ予防に効くらしい

大阪府知事が発表したその日のうちに

薬局からうがい薬が消えた 二年前の夏

今年 蟬が特效薬になる そんな物騒なニュースはなく

シャワシャワシャワと晩夏の合唱

幾千もの蟬が生まれ 幾千もの蟬の死が生まれる

灌木の小枝から モスグリーンの蛾の群れが飛びたつ

平成元年の夏はキャンプ場でアルバイト

毎朝 羽虫の死骸を掃き

釣竿とバーベキューセットの貸し出しで過ぎた

何ひとつ 老いを知らない年のころ

軍手を脱ぎ 汗をぬぐう

うつかり ゴミ袋に閉じこめかけたカマキリを見つけ 放つ

産毛

夜明けから まだ小半刻

トマトの茎の産毛は日に透けて

きゅうりの棘はぴんとたつて

住宅街の小さな庭

熱心にホームセンターに通って

野菜作りを楽しむ人と住み

トマトの産毛を眺める未来は

一度だつて 想像も 構想もしていなくて

ただ ここにいる

もう半世紀も前

祖母ちゃんの家の茗荷の葉かげで

夏を吸いこんだ朝のように

働いて 働いて

プラスチックに盛られた弁当をかきこむ

そこから離脱して

ただ 産毛を見てる

かくたる信仰をもたない私にも

恩寵 という言葉がおとずれる時間

この時間は 弾劾されるべきですか？

無為を 時給より大事にすること

無為を 現実存在させること

そしられても 見くびられても

時代の気まぐれや妄信に 許されなかったとしても

失われ 奪われるまでは

早朝の産毛の美しさに 殉じたい

それが鎮魂でもいいでしょうか

カメモシをはらい 手を合わせて食べるトマトは
ひそやかな夜露の匂いがして

解く 森林公園にて

がんじがらめのまま
林を散歩していたら
黒い炎がやつてきた

青葉の影がちぎれた
のかなとおもったら
燐光を残して去った

カラスアゲハの幻影
ではなくてどうやら

魂が迷いでたらしい

カラスアゲハの形の

脱けあとを覗いたら

空と雲と光が見えた

透明な縄が緩まって

冷えた躰が温まって

私は静かに解かれた

夏至 午睡の後

やわらかな葉ずれの音

この美しいまどろみのために

生まれてきたんだと思う

損得や栄達や

恋のためでさえなくて

からやかな風と木もれ日

この美しいまどろみのゆえに

生きていたいと思う

評価や勝敗や

道のゆえでさえなくて

幾重にも茂った青葉を

風がやさしく鳴らしていく

◆夏宝洛 大阪府

醤油の街に

二両編成の電車が

のたり のたり

がたん ごとん

走つて行く

三日月駅

お城の裾野にある

素麺茶屋から

走る電車を見ている僕は
絵葉書の中に忍び込んで
手を振ったりする

あれが

どこへ行くのか知りたくて
切符を買ってみた

のたり のたり
がたん ごとん

黄色の田園地帯に
水あめのような線路が
だらりと寝そべり

お構いなく進む電車は

谷に棲む風と出逢う

其の風は

稲わらをかすめて

水平飛行すれば

鳶に呼ばれたからと

方向を変えた

夕焼け空は巨人の焚火

其のとき僕は宇宙を見たんだ

正面の山の傾斜に貼りついて離れない

三日月が

夕闇を食べては煌々と太る

三日月 三日月

駅に流れるアナウンスが山にぶつかる

月への特急券を持つていない僕は

電車を降りることは

静寂の片隅

上月こつづきから月田つきたへ

突き進めばその先はきつと宇宙

駅員が背を向ける

しばらく成層圏から吹く夜風で

顔を洗っていると反対方向から

都会行の電車が滑り込んできた

駆け足で車内に踏み入れ

月からの乗客を見澄ます

老夫婦と並んで座る母と幼い娘

のたり のたり

がたん ごとん

電車もろとも

闇に吸い込まれていく

次第に輝きを増す

終着駅の灯りに身構え

席を立ち車窓から覗いた

月の光に

ゆらゆら揺れる白鷺城

見つけた月影のコスモス

きみはあそこへ行くのかい

母と手をつないで

電車を降りるかぐや姫に

僕はかしくまる

こぼれた名前

宇宙の画用紙めくれた黒に

まだ見ぬあなたが眠るとき

都市に融け込む人型魔術の

欺瞞逃れて星を見る

夜半割と静かな潮風が

羽目を外した夜明けの直前

かさぶたみたいな砂塵を連れて

海辺の家を揺り起こす

十二の頃に見つけた銀星

漢字をこぼして落ちたけど

まだ間に合うならば

拾いに行つてもいいだろうか

ときを隔てた選択の

無駄にできない一コマは

大人の僕をたぶらかし

夏の奥へと連れていく

日が昇る前に

済ましておきたい書き取り帳

あなたの名前が

まだ書けない

◆林やは 愛知県

三馬の詩

あに と あね
からまりあつて
きすした
からだが
くだける
わたし
びさいなせいぶつを
みたことない
こうかんして
こたいなのに
うみ と
おもっている？
すなはまの
きおくが
よみがえる
ふたりは
かけていく

すがたを
くらます
なんども
いなくなる
しぜんに
できたね
えらいね
あに と あね は
わたしを
かいして
はかい と ほうらくを
くりかえす
なみみたい
と いったら
いかったね
わたし
うみに

さらわれたことない

うみに

さらわれたことならある

あに と あね

からまりあつて

きすして

しぜんで

わたし

いらないことから

りゆうさんしたよ

いちど

いかされている

おいてかないで

なみ かぜ

ふるる

あに と あね

からまりあつて

ひとつになる

◆柳沢 進 東京都

あたらしい寓話

チャライ世界では老いた若い男女が

きわめてゆつくりと しかし確実に

空に向かって垂直にあるいてゆきます

雨が横にしずかに降っています

テル・サラサートの思想家は独身

ラガシユの思想家は既婚

感性が働かないのは

コントラストだったかしら

寓意を

最初に思い付いたのは誰

耳がわたしは目ではなく体に属さないと云っても
それで、体に属さないわけではない

体全体が目だとすれば、どこで聞くのか
もし体全体が耳だとすればどこで見るのか

太陽のもと新しいものは何も無いにもかかわらず

日々あらたに何かが造られている

修道士の衣に身を包み

太陽から隠れるようにして

チャライ世界なので気になる続きなどはなく

楽天的な今は見る気にもならず

禍に溢れて

わたしは目ではないと太陽が言った
としても

わたしは目そのものが太陽に見える
明日からわたしはわたしではないと
もし

皆が言い出したらどうなるのかしら

パレード

パレンタインにもらった玄米入りチョコを

寝転がって食べている狼は

アヒルに気付かれないように気配を消しても

猫の避妊には無関心

太鼓をたたいている寝間着姿のおばさん

お面をかぶって辺りをねり歩く

井戸桶を被った冬たちはめぐる季節の

予定調和を疑いながら水を含ませた雑巾で

悪霊を追いかう

情念の過剰は人を内側から金色に駆り立てる

ほんとうのことをしらない子供たちと

震えながらたわむれてやっている

冬の精霊は何をさらってどこへゆくのか

光るラメを全身にまとい春が街を行進する

^{ぼろ}襦袢の女性服を着た彼はやぶれた傘を持つ

石鹸のように不確かな

笑顔を強いられた子供達

骸骨の仮面をかぶった花売り

松ぼっくりのチンドン屋たち

彼らは冬の捨て台詞を彩る旋律を奏でる

歪んだスプーンに かのような

季節の自画像が点滅している

記憶を先取りした高圧的な

ほこりっぽく湿潤な窓辺が 春を告げる

◆相馬 実 大分県

からっぽ

仕事を休んだ、暇な木曜日に、

女は自分のからっぽを見つめる、

美術館に飾られた、

いつの時代に作られたのかもわからない、

陶磁器みたいに。

女は自分のからっぽに話しかける。

すると、

いろいろなものが聞こえる。

外から聞こえてくるかのような

雨の音、水の音、

出会ったうちに入っているのか、

よくわからない、いくつもの男たち

の声、

もう何十年も前の、

若かりし父が、まだただの男だった頃に、

ギターを掻き鳴らして

歌っていた

ビートルズの『ミシエル』

それから天草の海の青いせせらぎ。

波に吞まれた

灰と骨。

数年後にはサンタモニカに流れ着く――

「ミシエルよ、

お前は一体どこに行つた？」

そんな歌詞は、無いのだけれど、

みんなそんな感じの、

孤独な音。

ただの女でしかない女は、

ギターを手に取り、

歌を歌う。

そうやって女は、

ジャングルみたいな動物園の、

理由もわからず、

つまらない愛護欲のためだけに買い取つた、

動物園の、

檻に入れられた

生き物たちの

世話をするのを忘れていく。

誰かの愛

今夜、想うのは、

誰かから誰かへ

向けられた愛。

優しい言葉なのに、

触れると、温度が無くて、

凍傷も、火傷もないから、

ますます混乱してしまう。

そして、

木こりが訳もなく、森で切り倒した、

死んだ木になりたくなる。

今夜、想うのは、

誰かから誰かへ

向けられた愛。

「大人の恋」は、終わってから、

人は大人になる。

それつて果たして、

良いことなのかしら。

未熟な心は、

まだちゃんと生きていない蛹なんだから、

許してあげなさいよ。

冬風に皮を破かれ、

春を迎えた頃には、

きつと誰かの夢となっていて、

あなたもきつと

眠れるようになる。

今夜、想うのは、

誰かから誰かへ

向けられた愛。

寂しくて、嫌になるような夜は、

私が空を駆ける、

矢になればいい。

目が冴えて、朝が来て、

露を溶かすような夜明けの炎を
灯せばいい。

その時、問うのだ。

誰かから誰かへの愛などあるのか、と。

内省

夕刻が、不思議な天空庭園みたいに

近い午後、

私はどうやら、

「内省」という場所に

迷い込んだ。

入り口もあつて、出口もわかっているから、

迷子にはならないのだけど、

なぜかどこかに深く、吸い込まれて、

二度と出てこないような、

気持ちになる。

そこには器に注がれた、鋭く、冷え切った想像力と、

真夏の洞窟が秘める寂しさが、ある。

私の体軀はふかふかと漂い、

そこに何かの滅びと、限らない

生命の甦りを感じる。

嗚呼、私は寂しいんだ。

あんなに自分を苦しめた、醜い悪魔を

水の底に置き去りにしてしまうのが。

嗚呼、私は悲しいんだ。

なんであんな悪魔と一緒に、

今まで意地悪な女の子のおままごとに付き合うみたいに、

自分を隠して

遊んでいたのだろうか、と。

水平線の白い太陽と、

暗い闇に揺れる波は、

終わらない午後の会話をする。

元はみな、外からの車の音であり、

台所の流しの音であり、

夫婦の喧嘩する声だった。

言葉は、無限の沈黙となり、

黒く、血の通う壁を穿つ。

そしてその、音のない痛みは、

私というものを呼び覚ますのだろう。

私の筋肉を、四肢を

――別に探し物など、ないのだけど

再び動かすのだろう。

内省とは、

個体と無形の愛が、

出会う水底。

憎しみ

確かあれば、誰かが本に書いていた

「誰かと別れる時は、

思い切り、互いを、

憎みあわなくちゃいけない。」

皮肉にも、その時、

私は不思議な、柔らかな感触に

頭をぶつけた。

憎しみは、

やり直しが、

きかなくなった愛。

戦争

戦争よ、よく聞け。

お前は忘れたのか、

無数の、名もなき兵士が、

お前の命のために死んでいったことを。

戦争よ、よく聞け。

お前は知らぬのか。

詩人や、文筆家が、

人の殺される悲しみを

絞り出すように言葉にして、

黒い山みたいに堆く積み上げてきたのを。

戦争よ、よく聞け。

お前はわからぬのか。

もともとここはお前の土地じゃなかったのだ。

確かに人間も、

壊れた土壌と、森と、海の上に、

文明を築き、

瓦礫を積み上げた。

それらの大半は、

別に伝説でもないし、

見方を変えれば許しがたい破壊にだって
なりうる。

でも戦争よ、よく聞いておくれ。

我らの罪を裁くのは、

お前じゃない。

もつと他の何かだ。

他の何か、

人間にも、お前にも、経典の信条にも説明できない、

偉大な揺さぶりだ。

お前の揺さぶりは、

人間を動かさない。

殺されれば、

動かぬ死体が、

ころころ転がる

◆牛田丑之助 大阪府

椅子

座面と背凭れが鉛の

三本足の椅子が

かつては壁や屋根や鎧戸だった

今は廃物の中に危なく立っている

さつきまで影が座っていたよね

でも残っているのは白内障の点眼薬だ

椅子に眼があればありがたいが

眼どころか顔さえない

もう誰も座ってくれるな

もう誰も凭れてくれるな

椅子は座面の裏の小さな脳瘤で願う

もう誰かの重みを受け止める人生は

真つ平だ

しかし椅子は街道沿いにあり

通り過ぎる疲れ果てた旅人が

次々に腰掛ける

キリンの頭をした紳士

弛んだ胸を貝殻で隠したグラビアアイドル

殺される前に殺せと教え込まれた兵士

しかし誰もが安定の悪い三本足に気づき

悪態をついてすぐに立ち去っていく

こんなことなら

二本足になつて倒れていればよかった
こんなことなら

座面なんか地雷で吹き飛ばせばよかった

しかし椅子はどこまで椅子であり

今日も誰かが座つていく

そして残される悪態にうんざりする

絶対に三本足でバランスを保とうと思つたのは

翅そのものが命のような

赤蜻蛉が止まつた時だけだ

鯨牧場

今行きたい場所は

鯨競場か

鯨牧場だ

人口七、八万人の海治いの町なら

どこでも港の近くに

牧場を持ち 鯨舎が付設されている

ほとんどの町は鯨は一頭しか飼っていないが
牧場の中で

速く泳ぎ うまく曲がる訓練や

人の言うことを聞く訓練をして

一日が終わると鯨舎に戻り

海面に浮かんでミシンコを与えられる

ぼくが一番好きなのはその時で

鯨が鯨舎の中で身体を回転させ

黒い皮膚の背中と 白くて筋の入つたお腹が

海面を出たり入ったりする

その姿をずっと見ていると

友だちがいないことや

母親が昨夜もヒステリーを起こしたことが

吐いた息とともに消えていく気がする

鯨たちはそうして速く泳ぐ能力を身につけ

全国の鯨競場のレースに出場する

大人たちは 酒の入った薬缶を真ん中に

今年の黒潮杯は

潮に逆らわないミンククジラか

力のあるシロナガスクジラかと

毎晩放談している

鯨舎の中でゆるゆると身体を回転させても

先で待っているのは

人のために泳ぐことだ

そう考えると

やはり行かない方がいいのかもしれないと思う

手を振る

紺のフレザーの少女が

横断歩道を渡っていく

君はやはり学校お仕着せの

黄色いプルオーバーを着て

横断歩道のこちら側で両手を思い切り振る

いつまでもいつまでもいつまでも

両手をミツバチの翅にして振り続ける

いつまで手を振るのか

紺のフレザーが横断歩道を渡り終えるまで

信号が赤に変わるまで

紺のフレザーの背中が遠くなるまで

角を曲がつて影になるまで

いつまでもいつまでもいつまでも

両手が千切れるほど振り続ける

紺のブレザーが口のうまいだけの男に処女を与える時まで

ピアノコンクールで選外になるまで

万引きで退学になるまで

年賀状だけのやり取りになる時まで

わずかな金のために見知らぬ男の陰茎をしこく時まで

紺のブレザーを捨てようか迷うまで

君は両手が千切れても手を振り続ける

後ろから肩を叩かれ振り向くと

紺のブレザーに

光のない瞳で、

どうしたの、誰にさよならしてるの

もう行っちゃったよ

と言われるまで

ねえ

声

歯を磨いていたら

きみのこえが

きこえた

きみは自分の部屋で

ヴァチカン美術館展の図録を

みているはずだ

よくきみは

ぼくがいる場所も確認しないで

そうやってぼくによびかける

ねえ

もう一回きこえた

洗面所をでて

まわりを見回しても

だれもない

きつと

昼間

ほくにいたいことがあったのに

この洗面所に立ちすくんで

いわないようにこらえたのだろう

こどものころ

おなかのいたいのを一人でたえたように

◆雨宮信夫 神奈川県

労働の歌が聞こえて来る。

遠くの方から、いや近くからのようだ。

人は働く、みんな働く。僕も働く。

妻はまだいないけど、

世界のため、今日一日のために働く。

労働の歌

朝起きる。まだ眠いけど、朝は起きる。

歯を磨いて、顔を洗って、

髪を少し直して家を出る。

知った人がいれば挨拶をする。

相手が知らん顔をしてでも挨拶をする。

呼吸の仕方はなぜだろう、自分の為だとみんな知っている。

君子ちゃんに会いたい。

フラットホームで待ったけど、

電車のドアが開いて閉まっただけで、

まるでなっちゃいない。

仕事場まで町を歩いて行く。

つるはし、スコップ、

みんなと一緒に道路を掘る。

「何をやっているんだ。使えない男だ」

親方が言う仲間が、はははと笑う。

僕

可笑しくなつて一緒になつて、

はははと笑つて、親方を見る。

つるはし、スコップを握りみんなと一緒に土を掘り返す。

地球の中には大きな宝物が埋まつている。

地球は大きい、固い。

地球の上つ面を掘つて叩いて、

また掘り返す。

何かを作るんじゃないくて掘る。

だから何を作っているのか分からない。

掘れば今日が過ぎて明日になる。

親方がまた僕の方を見た。

僕がニコリとすると怖い親方がニコリと返した。

仕事が終わつたら駅前の店で、

ビール一本飲んで帰ろう。

妻はまだいないけど、母がいる。

◆ツチャタカユキ 大阪府

時空が歪んだタウン

時空が歪んだタウンに入つてからは、こないだの私と、さつきから何度もすれ違う。

夢遊病の私は毎日起きるたびに、月にある、

時空が歪んだタウンいる。

「毎日どうやって地球に帰つてきてるの？」

「UFOをヒッチハイクして」

そこに設置された信号機、

時速300キロで疾走するウサギだつて、

赤信号機の時は停止する。

神様が電気代払い忘れたせいで、宇宙全体が大停電。

iphoneの明かりだけを頼りにして、地球を探しあてる。

透明人間になる薬をこぼした瞬間、

地球が見えなくなつて、

みんなが宇宙空間に浮かんでるみたい。

全体に有刺鉄線が巻きつけられてる惑星に、

着地できるように再びガラスの靴を、

物置から取り出すシンデレラ。

神様が、この世界にある尊いもの全部に、

黒いペンでアンダーラインを引いてつた。

それを私たちは、影と呼んでる。

さよなら、ホワイトノイズ

この街は、精子バンクの爆発事故があつてから、
「ホワイトノイズ」つて呼ばれてる。

おでこに生えた触覚、ぶち抜いたら、

世界が真つ暗になつて、真つ直ぐに飛べない。

この世界は、誰かがオーダーメイドで作つた世界。だから、私には合わないみたい。

神様は一人じゃない。

とても一人で背負い切れる、業務内容じゃない。

地球上の人口と同じ数だけ居て、

一分交代で変わつてるみたい。

倒産したペンキ屋が、余つたペンキを、

街中にぶちまけて、

ここは世界で一番、カラフルな街に生まれ変わる。

さよなら、ホワイトノイズ。

人間の平均寿命が三分になつた世界で、君は何して、一生を終える？
「カップラーメンにお湯入れて、次に生まれた奴に食わせる」

銀河鉄道の終電時刻

天使をクビになった、神様をぶん殴って、
そして地上に落とされた、

悲しみに暮れながら、

ゴミ捨て場で拾ったバイオリン、

ギターのようにかき鳴らしながら歌う。

悲鳴集めてガソリンに変える。

タクシーの中で、

大絶叫しながら運転するタクシー運転手。

東京タワーに突き刺さったまま、

同化して巨大な肌色のミサイルになった。

新しく買ったパソコンのエンターキーだけ届いたの。

毎日一個ハーツが届く。

天国に登って行く時に、

落つことしたiPhoneを見て、

新しい万有引力を発見するニュートンの子孫

本当は生きてるシドヴィシヤスは、

政府によつて宇宙に追放され、

まだロックンロールのない惑星で、

初めてかき鳴らすパンク。

もうそろそろ、銀河鉄道の終電時刻。

◆大川黒目 兵庫県

36度5分

36度5分の体温に命が融けてゆく。

24時間ごとに、水晶のような液が一滴。

一滴。

一滴。

一滴。

生温い寝具の中、5・8インチの窓から眺めた世界を理解した気になって。

秒針が鼓膜にブスブスと穴を空ける。帳から漏れ始めた曙光。50ccの排気音。カラスが夜の断末魔を叫ぶ。

冬を越した窓枠の虫の死骸が、アルミサッシの朝露を浴びた。一日かけて逃げ出した今日が、また始まる。膿んで黄焼けた視界の隅、床に積もった7日間分の抜け殻に足を取られた。

マスクの下、吐いた弱音を再び吸う。肺から全身を巡る。自家中毒。

昨晚あおった甘い毒はどうに甘くない。腹の中で五臓六腑を不愉快に炙り、食道をせり上がる。

息をしなくて、顔面を引き剥がした。裏地に癒着していた愛想笑いが千切れて垂れ下がる。

希死念慮の充滿した喫煙所。吸殻の詰まったスチール缶。並んだどのゴミ箱にも適さないそれに手を伸ばしかけ、今日も引つ込める。

1本で5分、人生を縮めると誰かが言った。1箱100分のタイムリープ。この空き缶には何人の何時間分が詰まっているのだろう。

壁のくすんだ張り紙いわく、路上で未来へ行くのは条例違反らしい。

安物の座布団の上で伸びをする。ガラス製のすり減った球体関節が軋む。軽微な永久変形がそこかしこ蓄積する。ボール紙に包まれたままの家電に、おせつかいに更新されるプレイリストに、二心房二心室に。

新しいヒビがまた可動域を広げた。一般的にこれを成長と呼ぶそうだ。

36度5分の体温に命が融けてゆく。

24時間に、一滴。一滴。

滴下されてゆく。

くすんだ枕カバーへ、

毛羽立った不織布へ、

耐火性のビニルタイル床へ、

薄く潰れた中綿へ。

一滴。一滴。

36度5分の体温に余命が融けてゆく。

また一滴分、小さくなった。

◆暇野 鈴 神奈川県

超記号説体系

《！》つまりれつきとしたわたし／＼のわたしのわたし、しの消失！

たまし
い

〈高層から〉↓少女はみとめる、《高層から》たましいのありかを

栄 ゆりら らり りゆくりら (わたしたちのありかを)

繁栄の葉つば《！》is the leaf of prosperity.)

ひ

と ひ

すべりおちゆく霧もみの柔らかなるをみとどけて とどけて 螺旋する
ひとひらの

も み ぼ ど

ら の

ひと・ひと・のこぼれおちこぼれおちるこぼれおちてこぼれおちたこぼれおち

へ上 下 下 (落下する) 落下【名】(人類が)高いと

こから 落ち る

落・下下下下下下下下

る！

下 下 下 (下へ参ります) 404 NOT

FOUND); ;)

◆若井真也 栃木県

夜、雨の降る

夜、雨の降る

運転して帰る

大きな道の道すがら

背後で閉め忘れた

窓のすきまから

血潮のような生温かい風

入り込んで抜けていく

私の存在を確かめて

流れていく

暗闇の中から

流れていく

暗闇の中へ

それが人生のようだった

夢に逃れた

妻が眠る冬の夜更け

今では沈黙した

山積みの食器を洗う

いつかはもう忘れてしまったが

暗闇の中でただ一つ

弱々しく灯った蛍光灯が照りつける

真夏の蟬のような音を立てて

それが人生のようだった

アメリカに行った

息子の帰国を母が待ちわびていた

やむことのない梅雨の夜

花瓶に生けたくちなしが

首を垂れてしおれていた

そこに確かにあった

希望を暗闇に残して

それが人生のようだった

◆月潯 山梨県

扉が閉まる音がした

カフ

いや、本当はあまり聞こえなかった

多分そんな音がしていた

君がどこかで買ってきた大きなカフ

きつと甘くて美味しいだろうと言っていた

孤りになった事にやっと気づいて

冷蔵庫の奥から手探りで見つけた

一緒に作ろう、と言っていた料理

まな板と包丁と鶏肉と野菜を並べた頃

インターホンが鳴る確率は五分五分だな、

と必死の抵抗をした

頭は壊れたステレオの様に同じ場面を再生する

もういい、と言って飛び出していく背中

その後やつてくる後悔が

あまりに見慣れたものだったから

君の背中はこんなに小さかったけ

どうでもいい新鮮な気づきを

君がいなくなつてから辿っていた

それらしい匂いがして

水とコンソメを加え蓋をした

時計の音が部屋を響き渡った

心臓がないのに世界は呼吸する

白飯のように忘れるくらい当たり前前にそばにいた

君がいたらきつとテレビを点けていた

毎日見るけどろくに憶えてもないいコマーシャル

交わすはずだった些細な笑い話

失つたであろうもので満たされていく

君が遠くに行けば行くほど

私は君のことを考えなければいけない

意味のない時間を無数に紡ぎたかったのに

壊したものの重さを天秤にかけた

その時何かが切れる音がした、プツンと

君の中からか、それとも私の中からか

あの音は何だったんだろう

君が遠くに行けば行くほど

私は君のことを考えなければいけない

それは孤独について考える時間みたいだった

取り戻す努力を放棄した人間はこうやって

正当化する言い訳を思いつくのかもね

それもしようがない

君にとつて私は他人だけど、私は私から

一生逃れられないから

でも、多分そういうことでもなくて

失くしかけているものに縋るのは

失くすことよりも恐ろしい

金縛りのように恐ろしいんだ

何分経つたかも判らず

煮汁が減りすぎたフライパンを覗いたら

作り続ける意味などないそれは

いやに美味しそうな蒸気をあげた

なぜか手を止めてはいけない気がして

牛乳を加えて煮立たせた

火を弱めてから水に溶いた片栗粉を

さいごに塩胡椒で調えて

ていねいに、ていねいに

思い知らせてよ
失ったものを
完成させるから

◆渡辺八畳 東京都

宇宙と駅と
ずっと昔に見た夢を急に思い出した。

四方すべての窓に宇宙が広がる
ただただ白い部屋
どの隅からも辺が直角に伸びていて
歪みの一つも無い
ここはタイルへ精巧に描かれた静物画だ
耳鳴りが響く隙さえ用意されていない

天文知識の代わりとして

視ける銀河のすべてに名前を与えていく

呼び名ができれば少しは愛着も湧くだろう

しかし銀河は冷たく回り続ける

それは許否の態度ですらなかった

宇宙は奈落よりも深い

ふと気づけば

真っ白な部屋の中央に小さな水槽

赤い金魚が一匹泳いでいる

まったく整合極まるこの部屋に捕らえられた

生まれたての太陽だろう

ぶくぶく泡を出すこの恒星は

軌道なんて知りやしないから

ゆつくりと自由気ままにただよう

それからは金魚を眺めて過ごした
鈍重な銀河が姿形を変えてしまっても

ずっとずっと眺め続けていた

そして眺める自分は

いつしか部屋そのものとなっていた

なんでこんな夢のことを思い出したかという
と、JR新宿駅の南口で見た夕陽の赤さがあ
まりにも金魚と似ていたからだ。永劫の宇宙
へぽっかりと浮かぶ純白の部屋とは対称に、
新宿駅前にはあらゆるもので溢れかえりひしめ
き合っている。なのにこの赤さを誰一人とも
共有できない。でも、どうしてそれを責めら
れるだろうか。自分だって今の今まで金魚の
ことを忘れていたじゃあないか。夢の日々か
ら自分だけ抜けたしてしまった今も、金魚は
何一つも意に介さぬまま、ぶかぶかと泳いで
いるのだろう。それはもう横に縦に自由奔放
に。淀みない人々の流れの中で唯一たちすく

んでいると、金魚の赤さがいつそう鮮やかに
なつた

◆山荷葉 千葉県

こころ

わたしのころは どこにある

あたまのなか

むねのおく

ととのえたつめ

ないうちふまず

どこにもない どこにもない

ふこふこした はねでつつみ

おくりものに したかった

よろこぶかは わからないけど

よろこぶところが みたかった

わたしのころは あなたのもとで
あたたかく

すすくと

たおやかで

おんとうに

ねむりたかった ねむりたかった

かろかろと おとをたてて

あめだまみたいに なりたかった

とけて きえてしまおうとしても

とけきるまでは いたかった

わたしのころは どこにもない

ていねいに

たいせつに

つつまれもせず

おともたてず

ちりちりになつた あなたがすてた

そらにあいた あなほこの

ひかりをたよりに さがしてる

かぜふくだけでも いたいけど

ころのないぶん いくぶんかるい

◆藍下はる 東京都

切ない刹那さ

赤信号の時間は 恋のせつなさをよく表している。

ぼくは青信号がきらいだった。指の間をすり抜けていく愛情熱が

静かにぼくを冷やしていった。

赤信号

少し先を歩く君とほくとの

呼吸がそろふ瞬間

他の誰かは愛の言葉を耳打ちしたり

わたしはあなたの手を握ったりしていた

「さよなら」が「すきです」と

同じ数の文字しか与えられていなくて

同じ呼吸の幅で吐き出され

宙に舞ってしまふこと

その時、知った。

さ、よ、な、ら

す、き、で、す

言葉の密度がゆるやかにほくを扼殺した。

◆咲 愛媛県

中三の秋、私は闇に飲み込まれた。

その日もいつものように朝を迎えた。

だけど、いつもの朝じゃなかった。

私の体は黒いナニカに包まれて布団から出られない。

何度も何度も起き上がろうとしてもナニカは私から離れてくれない。

それから私は学校に通えなくなった。

毎朝ナニカが私の体を固定して動けなくさせるからだ。

ナニカに勝つことができれば布団から出られるけど、負けたら一日中布団から動けない。

私はそんなナニカが嫌いだった。

私は高校生になった。

新しい制服に身を包み、新しい校舎で新しい人達に出会う。

私はそんな期待に胸を膨らませ、高校生活を第一歩を歩もうとした。

しかし、そう簡単にはいかなかった。

そう、私にはナニカがいるのだ。

私は入学して直ぐまた学校に通えなくなった。

そして迎えた夏休み。

心療内科の先生に転校を勧められた。

せつかく頑張つて入った学校なのに？

今までの努力は無駄だったの？

様々などす黒い思いが私の周りに渦を巻いていた。

そして、私はナニカのせいで転校を決意せざるを得なくなった。

私はナニカが大嫌いになった。

転校を決意してから一年を迎えた。

何度か転院や入院を経て私は気づいた。

きっとナニカは私にSOSを伝えていたんだ。

これ以上頑張ると私の身体が壊れるということを不器用だけどナニカなりに懸命に伝えてくれたんだ。

今まで敵だと思っていたナニカはきっと私の一番近くにいる「味方」だったんだ。

今日もいつものように朝を迎えた。

そして私を優しく包む十二カに向かって「おはよう」と言った。

◆川瀬美鳥 広島県

鳩と君

古城の畔で桜を眺めながら

きゅりのサンドイッチなど食べていると

一羽の鳩が舞い降りた

毛深く

小さく

濃い灰色の

よく肥えた

その鳩は威嚇するように

ハナミズキの実のような目を開き

首を胸にうずめて

私を睨んでいた

まるで君が

初対面の人々に

照れ隠しで威嚇するように

間拔けな表情がとても愛しい

平和な春の日の話

友は乙女

栗色のフクロウのようなあの子は

清廉潔白の乙女です

いちごパフェとミルクセーキが大好きで

人に懐かず場に懐く

高飛車な猫のような

夢見る夢子さんでした

失恋続きで傍から見ると

なぜそんな腐れ外道にばかり惚れるのかと

趣味の悪さに呆れるのですが

叶わぬ恋への見切りのつけかた

それからの潔さは気持ちがいい

吊り上がった目尻に細かい皺が寄るとき

私はある種

人生が報われたような気持ちになるのです

からくり箱のように乱れた人の輪の中で

私はあの子を見つけると

人生を複雑にしているのは

自分だと気付くのです

◆杉山千尋 栃木県

自分という友達に

わかりやすい理由がなくなつて

生きるのがしんどいことはある。

それを、あの人は病気だから、

あの国は戦争をしているから、

あの時代は、食べるのも大変だったから

などと励まされても

申し訳ないが、響かない

最近、自分の人生に手詰まり感を抱いている

そんな大したもんじゃない

人から愛された記憶もなく

すがつて離婚もしなかつただけで、

家族という単位でいるけれども

愛がないのなら、

一人でいるより孤独だみじめだということを知らないふりして生きている。

だから、子どもに頼ることもしない

一番愛情を注いできたはずの子どもも守ることができず

自殺未遂に追いやった

そこで、本当は自分が死ねばよかった。

ちゃんと考えると

おかしくなりそうで

何も考えずに、ただ生きた

それで、時が過ぎた。

仕事をして、子どもが自立するまで支えることを

自分の人生の責任として

そろそろ、大学卒業で

自立するのではないか

自分は、どうしたい？

愛されていない家族で

守れなかった家族で

いつまで一緒にいるのか

一人はさみしいといった理由で

家族の方が生きやすいといった理由で

死ぬ勇気がないから、ただ生きているというだけで

最後に望むのは何だろう

やつぱり、愛だろうか

友達も作れず

恋人も作れず

子どもも愛していたつもりが愛を伝えられなかったからこそ

母はいてもいなくてもいいんだろう

学費さえ払い終われば、もういらないのだろう

人は成長すると生きやすくなると思っていたのに

自分は成長していないのだろうか

私は物心ついたままの

わがままなあの頃のままの感覚だ

周囲と心を通わせられずに

苦しんでいる

物心ついてから40年ずっと。

孤独に苦しんでいる。

苦しいのに

生きてきて

仕事して

子どもを学校に通わせて

偉かったと思う

今、これからどうする？

白髪が目立ち

目のクマも色濃く残り

長年の仕事で腰のヘルニアも痛く

まっすぐに寝られない

こんな自分が

今から、何がしたい？

友達が欲しかった

恋人がほしかった

誰かに愛されたかった

ちゃんと、愛してきたつもりだったのに

関係性を作れなかった

もう若くない私がこれから何がしたい？

せつかく生きているのだから

楽しく幸せに生きたい

そのためには、何をしたらいいのだろう

こんな風に考えるのは

わがままだから

人間がなっていないからだつて

言われたことがある

成長できなかった

残念な大人だ

でも、自分なりに

必死で考えている

自分は、自分をこれ以上非難しない

もう、いいんだ

何も言わずに

頭を撫でてあげるんだ

◆千葉千華 神奈川県

事足りる

激しい感情など無くとも、この命を全うするには一筋の悲しみで事

足りると思うのだ。

ため息をつき下を向いてとぼとぼ歩く。そんな姿もいいじゃないか。暮れる夕陽がよく似合うというものだ。

世界は前と上だけに広がっているわけじゃない。もともとずっと無条件に途方も無く広いのだよ。よくよく見てこらん。足元にも後ろ側にも同じように時間は流れ、同じように豊かな喜怒哀楽が散りばめられているだろう。

だから、どうか悲観に暮れるあなたを責めないでくれ。歩みを止めてほーつとするのもよいじゃないか。生きるとは自分を許すことだろう。そうは思わないかな？

◆五十嵐ソフィー 東京都

個体差

わたしとあなたが

違う人間であることは

さほど意味を持たぬ

ひとつ間違えただけ

ほんの少し、間違えただけである

この場所に来る前

わたしはあなた

あなたはわたしであつただろう

それはヘソのくぼみ

じわりと汗滲むその手のやわらかさ

ふたり揃うと眠たい牛のような音波

わたしは知っている

そのすべてがわたしであり、

あなたであることを

誤差である

わたしが進んだ一歩を

あなたは立ち止まり

わたしとあなたは一瞬、目をそらした

ほんの少し、ただひとつ間違えただけである

さほど意味は持たぬ誤差である

わたしの生きる世界には

去年と変わらぬ紫陽花が揺れ

あなたの生きる世界には

わたしはもういない

水仙の花

祖母の背中はあるく

祖父は腰のあたり手を組んで

その手のくまなくまるまったこぶし

祖母の背中のまるみをかたどっていて

取り返しのつかない道を

迷うことなく歩いてきたのかしら、と

やや呼吸に乱れをまねく私を

振り返つて懐かしむ祖父母のまなざし

水仙の花香るとき

彼らのあの日を垣間見たような

見てはいけない若き日の彼らから

ふつと目をそらして視線を落とすと

そこには小さくたくましい水仙の花が

風に吹かれて(も)息をしていた

◆kesun4 三重県

詩^{うた}う

名も知らぬ鳥が歌う

何かを憂いているのか

喜びを語っているのか

風の音や木々の囁きを消して

頭蓋の壁を左右に叩く

何かを伝えたいのか

伝わらずに嘆いているのか

歌い疲れ満たされたように

羽音を残して

深い緑の一部となった

その歌は詩に変わる事なく

私の中に置き去りになる

悲哀も歓喜もなく

美しい声は海馬に刻まれ

記憶の片隅に鎮座する

◆井上靖 神奈川県

大都会高層ビルと蜚

田舎で育った私には

大都会の高層ビルが

切子細工のように輝いて見えた

新聞も雑誌も

これからの世の中を支える

新しい技術

若いちからと

もてはやされた

しかし

大都会で暮らし始めて

グレイの高層ビルすべてが

墓石なのだと悟った

そして柱は常に真っ直ぐで

高さや大きさという

見た目に惑わされ

柔軟性など微塵もない墓石

そのため

同期や同僚は所属が解ければ

蛍火のように消えていく

いまここに

蛍が生息しなくなつた高層ビルは

明かりが消えたまま

ボーッと黒く突っ立っている

それもあちこちで

しかし悔しいけれど

再開発という名のもとに

その愚を再び繰り返す

大都会

田舎で育った私には

大都会の高層ビルが

切子細工のように輝いて見えた

それでもいまは

蛍の生息しない

表面だけの輝きが

陽を浴びた墓石の涙

なのかと思えてくる

今日もまた

昼間は涙に思いをはせ

夜間はボーッと黒く突っ立つ姿に

かすかな願いを込めて

蛍を探している

愛しき者

柔らかい匂いに思わず目を閉じる

陽の光が目に見えているような

抱き上げてみる

篩の中の砂のような

足の裏をくすぐってみる

たんぽぽの綿毛のような

太ももをつまんでみる

焼き立てのイギリスパンのような

腕を撫でてみる

菜菔の果実のような

頭を頬で触ってみる

◆三浦洋介 千葉県

洗い立ての枕のような

心を欲してみる

星が生まれる瞬間のような

ああ なんと愛しく

ああ なんと瑞々しい

小さくて私より大きな者よ

◆青崎はぐれ 埼玉県

足跡

わたしの犬は小さいが

その歯で 骨を噛み 肉を切り裂く

しかし

わたしと父のあいだを

つなぐ

わたしと父は 犬の話しかできない

犬を見て笑う父を わたしは見て

犬を見て笑うわたしを 父は見る

父の触れた犬に わたしは触れる

いつか

犬がねむるとき

わたしと父は 犬の話をまたするでしょう

犬を見て泣くわたしを 父は見て

犬を見るさみしげな父の目を わたしは見るでしょう

わたしの触れた犬を 父は撫で

わたしの握った骨を 父も握るでしょう

いつか

わたしは

みんなで一緒にねむりたい

古本

本に殺された羽虫の

かわいた体液がとれない

殺したのは かつての持ち主か その前か

何年ここで死んでいたのか

あるいは

君がここを選んだのか

死に場所に、

そして墓場に

それならばわたしは

墓場から君をひきはなし

君を真に殺した罪人となる

しがみつくような体液のしみを

わたしはもう拭かない

君が選んだこの本 このページで

君がユゴーとともに

永遠に眠れるように

わたしはこの本を売らない

よわいひと

すきになるのはいつも

よわいひと

よわいひとの よわいところ

よわいひとは

地面におちた光のように

そつとあかるく

影をうつす

それはあまりにしずかな光

だれもそれをあかるいと呼ばないまま

ただ、影の輪郭として

背景として あかるく きつと

影が見つかるために

あかるくいるのだろうと 思えるほどである

しずかな光

よわいひとは

遠くはなれた星のように

そつとあかるく

星座をつくる

それはあまりにおだやかな光

だれもそのほんとうのあかるさを知らないまま

ただ、目や口や あるいは

心臓として あかるく きつと

だれかが夢を見つづけるために

そこにあるのだろう

きつと

よわいひとは

よわさをよく知っている

よわいひとは

弱さを笑わずにいてくれる

よわいひとは

一緒によわくいてくれる

よわいひとは……

よわいひとは

よわさを受けとめる強さをもって

それを

強さとは知らずにいてくれる

そのよわさを

まっすぐに見つめられるくらい よわい光を

わたしはすきになる

◆橋本莉乃 福岡県

空を夢見て朝日に泣く

殺してください

できるだけ痛く

できるなら苦しく

ナイフでひとつき

かわりに一粒の同情を

石を投げつけて

代わりに一滴の優しさを

心カタカタ、ガタガタ、ばらばら

丸めて潰して固めてください

そうしないとばらけます

わたしの体がばらばら、ばらばら、はらはら

優しく抱きしめないでください

そうされるといいです

心がぎゅー、ぎゅー、どくどく、ばくばく

いたくてたまりません

強くひきちぎってください

嘯みちぎつて引き裂いて

びりびり、がりがり、きりきり

でもやっぱり少しか心配してほしいです

繋ぎ止めて引き止めて

べたべた、ぐいぐい、ぎゅつきゅつ

ツギハギだらけの傷だらけ

代わりに一握りの同情を

代わりにください優しさを

ゆらゆら、くらくら、ぐーるぐる

同情の裏側に優しさを埋めて
いたみには憐れみを用意して

心がたがた、かたかた、ばきばき

最後には強く握り潰してください

崩れてばらけて、ばーらばら

土に埋もれて空に焦がれて寒さに溶けて

今度の夢には空を描いて

息を止めて瞳をとじてもハートだけがどくどくどく

朝を迎えた瞳に最大限の罵倒と侮蔑の涙を溜めて

私は今日も夢から覚める

◆佐藤きりん 埼玉県

so la ti so la ti

空知川

空知川

そら しる かは
そら ち

so la ti so la ti

フラヌイの

錆びた水 ながれ

フラヌイの

焦げた土 とけ

あめ つち そら

あめ つち そら

海鼠山 渡った

川のむこうには

林があつた

林のなかは

騒がしく

獣の香りがした

そら しる かは

そら しる かは

風の唄も ここでは

知らない拍子で

枯葉を散らした

so la ti re
so la ti re

ti re ti re

そら ちれ

(ti re ti re tire...)

雲は きれ

夜は さえ

そら かは ほし

そら かは ほし

so la ti so la ti so la ti

川を渡る

道をゆく

街は静かだった

◆南 久子 大阪府

草の花のささやきなんかじゃない

黒い板の間に映る

床もみじ

を乗せたタクシードライバーは

わたしが団欒の賑わいを

深く掘られた地層深くに

押し込んで来たのを知らない

川端通りの東河岸を通り過ぎるころ

彼は語り始める

かがやけ

床もみじ

実相院近くの目的地に着き

彼は無事に業務を終えた

入り口はオリーフの木々で覆われ

わずかなすき間から

洋風の建物が見える

表札はない

見覚えのある草の花のささやきを跨ぎ

老舗の暖簾をくぐるように

中に入る

五十音字と数字の組み合わせで

仕切られた木箱の前に来る

この前で「ただいま」を言うのだろう

もみじの渦がわたしたちを襲う

廊下を進むと

突き当りにエレベーターがある

何度も乗り継いで

曲がりくねった廊下を行き来し

また下降しては上る

幾度となく無計画に増築され迷路を巡る

床もみじ

這い廻れ

屋上の上り口で

お茶をすすっている老婆がいる

今日監禁されてきたばかりだという

外気をお腹いっぱい吸っているという

純度の低い風の音にも

よろこびのさわめきを含んでいよう

枯れ草の歌を詠んでいる

床もみじを案内してきたばかりのタクシーに乗る

ドライバーは

西風に揺れる柳に右肩を起こし

川端通の東河岸を通り過ぎるころ

語り始める

燃えさかれ

床もみじ

一度も訪れたことのない実相院が燃える

屋上から

彼女は親指と人差し指を立てて

てつぼうの形をつくり

床もみじ

舞い落ちろ

◆疾風向 長崎県

雑踏

朝早く家を出て 逃げるように生きる場所を必死で探していた

少しの間自分を忘れ 心の一部を撫で下ろしてもらうために ある建物の十階に通った

リフレッシュコーナーと名付けられたその場所には 誰も来ない

あの頃の私には 心地が悪いこの世界の中では 一番心地の良い場所だった

窓の外を眺め イヤホンを指し 心を閉さすために私はそこにいた

でも 違った

十階には何人かの部屋があり 彼らはその階を度々移動する

同級生でも先輩でも後輩でもない 特別親しい大人でもない 特別に好

意も嫌悪感も抱かない人々が 確かに生きていることを実感できる

それが私の空っぽになった心に 不覚にも寄り添ってくれた

何を話すわけでもなく 何を共有するわけでもなく むしろ彼らが私

を認識しているのかさえ不明であるのに それが私を安心させた

生きる希望とまではいわずとも 生きるための微力な息を吹き返せた

ような気がした

今思えばに過ぎないが 私はあの場所で光を見ていたようだ

円周率

例えば 行き詰まったら円周率を書く癖がついた

円周率のように重宝されてみたいものだと思う

終わりがなかったのが円周率の一つの存在意義みたいなものなのか

書き始めたが最後 ここまで書いてきて何だけれど中身なんてない 然程大したことも書かれていない

そう帰結することも出来るのに どの部分も終わりではなく途中のままである

何もない上に 変なプライドと これでもかという嫉妬心だけ存在しているようだ

歪んでも続けることで 人類愛さえなくとも幸せであれるのだろうか 心を超えられない事実はまた 心をどうにか守つてはくれないだろうか

◆紗奈さより 神奈川県

うた

あなたのよろこびにふれたとき

千のベルが歌う

あなたのうつくしきを見つめたとき

千の立琴たちしんがふるえる

あなたのおそろしさ

はかることのできない おそろしさ

おわりのない波のおそろしさ

果てのない波と かぎりあるわたしたち

暗い海にゆらぐ ちいさいのち

ちいさいのちのなかの鏡みなものような湖面

水は天から 波立つことなく

いつもあたらしく

湖いづみは陰かげることなく

光に照らされている

うちなる湖と おおきな海は
いつしよに息をしている

さあ いつしよに歌おう

この世のなにをもたたえずに

ただ この世に息をあたえたものを

たえず うねる波と うごかない湖面は

ハーモニ―をかなでている

地にひびく音も 山を越えていく音も
ともに歌う

根はよろこび 葉もふるえる

根はわたしの腰 葉はわたしの手

わたしは天にふかく根をはり

こころこめて手をふろう

まやかしは広がれど

わたしたちは

おそろしい海のなかにやすらぎ

こころのうちの湖をもつて

あなたをよろこぶ

よろこび歌う

◆Tomaria 茨城県

音のない世界、音のある世界

雪が降ると音が消える

白い世界が吸収してしまうから

はつと、だれかが息を止めたみたいに、

少しの空気のゆらめきさえもとまってしまふ

雨の日はうるさい

さあさあとふる日でも、人が多ければ多いほど、そのうごめきのざわさわした感じが、不安な気持ちにさせる

突如、雨足がつよくなり、さあさあという雨音にすべてがかき消されることもある

電車がおうと目の前を通り過ぎた瞬間、

髪がさかだち、風とともに音が消える

すぎてから、ふうとはきだす

気づかないうちに、息を止めていたみたいだ

好きだった人を見かけた瞬間、自分の中の音が消える

それは切ない一瞬であり、悲しさと恋しさが同居した一瞬である

好きな人が嬉しそうだと、自分も嬉しくなる

見えない紙コップの糸が、向こうまでつづいているみたいだ

好きになりそうな人を見つめる瞬間、自分が消える

両目が無造作にうごいて、なにかを見ようとする

なにも見えない

胸の奥のうごきに、気づかないふりをする

「今だ」と決めた瞬間、世界の音が消える

知らないうちに、走りはじめている

耳にイヤフォンをさすと、世界の音が消えるけど、

好きな人の声だけ、心の中で響いている

家でも学校でも職場でも、

いつでも再生できる便利な「わたし」という音楽プレイヤー

イヤフォンが壊れたら、昔が消える

思い出も消えてしまった

人生の中で音が消えたらどうしよう

どうやって生きていく

むかし聞いた音をかき集めて、大切に愛でるのだろうか
それとも、手放すのだろうか

泣きながら、でも泣いている自分の声も聞こえないまま、ただただ涙を流すのだろうか

きみの声が好きだった

今でも、話したい

話している顔が今も目の前に浮かぶ

電話こしの声がかすむみたい

好きな人は、音のない世界に行ってしまった
残されたわたしはどうしたらいいだろう

音のある世界から、音のない世界に来てしまった。
好きな人は、向こうの世界に残されたまま

◆shiro 山形県

歪な脳みそ

目がさめたら、あたしは病院にいるはずだった。でも違った。天国だった。あたしはあのとき、恋に押し潰されて死んだのだ。悟った。「しあわせを」そういわれて渡された五円玉を使えなかったように。同じだった銘柄の煙草がやめられなかったように。あのひとが好きなミュージシャンの曲をバカみたいにきいていたように。あたしの脳みそは揺れに揺れ、歪になった。みえるはずのない幻。きこえるはずのない声。

「助けてください！」「誰かが叫ぶ。

「助けてください！」「あたしもおおきな声で叫ばなきゃ。

そうしなきゃいけない気がしたけれど声は出てくれなかった。白いベツ下に白い天井。どこもかしこもまっしろで、天国以外のなにものでもない。ふわふわ気持ちいいから今のあたしは誰かが叫ぶ声をきいている。そのうちいろんなひとの声がきこえるようになった。死ぬ前に仲よくなった自分と同じ名前のあのひと。妹の声。だいきらいな父の声。知らないひとの声。なぜか母の声はきこえない。現世では一番元気だったからなあ。靈感もなさそう。都合よく頭が考えて、いろんなひとの声をきく。

立ち上がつて、歩いて。

立ち上がつて、走つて。

立ち上がつて、前をみて。

右へ、左へ、前に進んで。操り人形みたいにカタカタ歩く。

あなたはずっとここにいて。あのひとの声がやさしく響く。ずっとずっとそこにいて。天国に？ いいや違う。ここはあの世とこの世の狭間。あなたが会いたいと思えば妹も母親も来てくれるし、父親は来ない。ミントグリーンの服を着た天使たちはあなたの手助けをしてくれる。こはんを用意してくれるし、ベッドのシーツも交換してくれる。あなたはここでは自由だ。あなたは罪を犯したの。だからここにいないくちやいけない。ずっとここにいないくちやいけない。病名は統合失調症。恋をした代償にあたしが受けた罰。

それは爽快な人間の香り

始まつてから、終わり、までの

格式ばつた長い崖で

私は沈黙を歌う

面白くなるように…

異邦の味、酷く頭を冴えさせた

黒を混ぜた原色たちの餡

待ち焦がれた私の見た

空の柔らかい白と

どこまでも続くこの上なく穏やかな青は

私には届かなかったのだ

どうもつまらない殺風景の中

虫は逃げた

私が踏むとでも思つたのだろう

そこにもなんて事ないと笑う空が

いたことを思い出す

たまに会う周知の

濁り尚も黒くなろうとした泣き声は

瓶や網にこもり

その切なさも共に閉じ込めるのだ

言うに堪えないものも

そのメロディーの中へ隠し

見つけてもらうまで

ひたすら待つように

この鼻先に望みと

薄く伸びた高揚が欲しい

ふと我にかえる時の秒針

今日も寝返る15時の子供

朝を真似 夜を真似

揺れている

冬みたいだ

歩き回れど泥水

藁にも縋る放心の終わる時

そばに座っていてくれる人に

私は好意を持つ

客の座った座椅子

そこに爽快な人間の香り

始まつてから、終わり、までの

長い崖で私は歌う

私も彼も可憐な訪問者

睡り

私は青い星です、何もない中の青です

酔った空の麓涙の祭りを施します

たつた一人で

夏の山で鳴く者達は全て

緑に染まつた春の名残です

いつにも増して貴女は短い

入道雲は凍える羊です

ずっと知っていたと言つておこう

暁に謳うあの山並みを

微笑るまでのあの道のりを

野に咲く花の割れた蕾を

鷹の翼にはピンクの詩が

ただ宵の終わりを教えている

方法に迷うものならいつそ

浮かない夜を祀れば良いのだ

いつもの花が壊れていくのを

見ているのはどうも心地が悪い

ピアノの音が連れてきた正夢

混沌の始まりによく眠れ

どうにもこうにも街は汚い

待つていたのならもういいんだ

ペットボトルのある向こうの縁は

筒が揺れていた夜の街角

忘れ物でもしたのだろうか

独りの街灯 初老のマンション

あの声にいつから脅されたか

どこまでも行くと誓っていたが

眠る前に聞きたいあの長調

蓋を開けた中の魚群の嵯峨
いつか私も行つてみたい

微々たる不安も仰^{のけぞ}反る端の
ハエもよらない金箔の城

見合うと信じて歩きたい

四肢に宿らぬものも許して
晴れてくれよと密かに願う

次の目覚めに着くまでの時
ほのかに香る松の灯火

私は青い星です

何もない中の青です

酔った空の麓で一人

功名心に眼を閉じる

私のお辞儀を偉大な仲間へ：

春の終わり

長閑な村に雲が広がる
湿った風が通り抜ける

前の国道を急ぐ乗用車の

遠くを飛ぶジェット機のような轟音

静かになると後ろの鳥が

雛に鳴き方を教えている

私は帳面に英語を倣う

少々乱暴にただひたすらに

夢の中の様に今心地よく

一見意味などない時間

静かになると後ろの木々が

新芽に雨水^{あまみず}を与えている

私に榮養はあるだろうか

兄も顔をのぞかせることのない

表面に文字を書いたところで

空を埋めた灰白色はどうして

蒼を残し逃げられるのか

胸に泡の様なものがある

重みさえ無いがそこに静かに

これは虚無か期待の礎

どうにも晴れない夏の始まり

誰の目にも留まらぬ村

三方の山は住人の背中

河は夏の日差しに負けぬまま

今日も鮎は棲みカニは居候

そこを歩けばいつも想う

ふるさと

無くても窮することのないほどに

段々と切り詰められていたそれが

いかに肝要であつたかを

ふと南東の鋸刃に似た山に

列車の通る声が響いた

この村の鐵道はとうの昔あつたと聞いた

鋸刃山の話はまだ知らない

その時私は正直なところ

ひたすら
只管に恐かつた

だとして歴史の声を聞いてしまったのかも

知れないのだから…

この話を信じる人など居ない

誰もが笑い顔を背ける

本当は私もそうかも知れない

故郷の音も声もそれだけでない

木も水も日も風も雷も石も

万象は今日も私の村でなお

前の声を 音を

響かせ続けているのだ

私は寛大だ

私の村が寛大であるが故に…

曇り

どこかで鳴った雀威しに驚くことはいつか

慣れの中へ逃げてそれつきり

会うことはないのですか。

夏空に打ち上げられた小さな確信は

私に届くまでどこを通り

何を割いてきたのか。

それは私の中に傷や穴のように

気味悪く残っています。

バラッドに批評したことを悔やみます。

こんな時彼らは力になるのかもしれないのに。

嘆きの不快感しか受け取れず

彼らのシンパシーへの訴え方を心底

軽んじていたのかもしれないと

私は二度落ち込みました。

ただ大きな音全てが

怖い訳ではないのです。

私は雷が落ちる空の

亀裂に伴う爆音が割と好きなのです。

雷鳴はSF映画のクライマックス

手に汗握る、夏の宵の大混乱であり

乾いた肌を潤す偉大な神です。

その昂りを私は好みます。

大きな者は恐く

恐さを持ったものに初めて

大きくなる資格が与えられるのでしよう。

信念も通らないかもしれない灰色の空。

私が大きくなつていくうちに

いつか着くそこは怖い。

もう帰る

私も彼も好きな画

昼に燃えた草木も子供も今

境の上の唯一光る金を

灰となり静かに敬うのです

二本とも垂直に伸びています

私などと目を寄せ

唇を振り 顔を^{しか}擧めると

風は冷えて気持ち良く

垂れた袖を握ったところで鐘はなりました

気に入ったことを伝えるべきか

ああ、なんと広い橋

なんでもしますから

その翡翠の雫を分けてくださいと

そのまま歩いてでも抜けられませんか

最後の最後

出づばった塊が邪魔

多少開いているが

わたしには無理だろう

大地から勢いよく飛び出した蠅

鳥は自分を雀というが

他の獣は鳥の尾を噛む

そんなことはどうでもよかった

鳥が雀だろうと鶴だろうと

獣たちはお前を好むことはない。

寂しがり屋のプロフェッショナルだから

悪いと知っている

私は帰り道

意地悪な雲の下

立ち並ぶ建物の呼吸する窓 吐く息は

何枚も 何十枚も タペストリーを 震わせる

柑橘の 誰とも知らぬ 香水に

会うこともなく 思いを馳せる

楽譜が空から降ってくる

鳴り止まず 転調していく 即興曲よ

我らの中に 指揮者は在りか

◆岡安心平 神奈川県

墮落の果てに

青いカーテンが部屋の中でピクリとも動かない

それが何故か不思議だと思った

その下に置いてある車のオモチャがあらぬ方を向き

床に置いてあるアルミの円形の灰皿には

ピアニッシモが綺麗に模様のように渦巻き状に捨ててある、いや敢えて並べたかの如く

コンセントと自殺願望

赤い口紅が剥き出しのままローテーブルに転がつている

もしも時間の流れに音があるとしたら

ジー、ジー、ジー

しーん、としていてジトーとしていて尚且つ乾燥しているという意味で

コレが日常、コレが日常、コレが日常

ボンコツのコンピュータが床に臥し

つぶやく

つまんない。

◆中道侶陽 静岡県

淵に降りて

明くる日、欠けた十字架が高架下に落とされた

あばら屋から童子がひょうつと勢いよく駆け出していく

その後ろ背を見つめる目玉に暗く、霧が差し込む頃、君は、荒れ果てた原っぱで、昆虫採集に夢中になっていた

日暮れ終わりの枯れた根草の鳴き声に立ち返り、低く、長い深呼吸の後、空の虫籠を肩に担ぎ、君は家路に着く

母の帰りはまだこない

銀杏の鮮やかさを綺麗だと感じられる心を持てた喜びに震えている

何一つ変わらない風景に殺伐とした溜息を漏らし、その息の中に確かな変容の種子の混在を感じる

呼吸は痛みだ

意識すればおのずと乱れていく自我を持て余しながら、けれども彼は彼であるために自分以外の骨を浸透させようと口を開く

真夏日の正午、母と、友と、兄弟と、雨と、足場が必要なのだと言って、君は天を仰ぎ目を焼いた

真摯な魂ほど死に焦がれる

真夜中の運動会

綱引きが苦手な君は、力自慢たちをよく罵っていた
そして、

引力を信じるように、結ばれていった空回り

その結び目を、君は抱いた

◆菱沼大生 山形県

セピア色の郷愁

とおくのほうで空が真つ赤に染まった

きつと誰かが血を流しているのだけれど

僕はほーつと眺める

駆けつけるわけでもなく

声をあげるわけでもなく

ただヒントが合ったから

赤が広がる様を見る

いつしか僕の部屋にも

生温い血が流れ込んでくるのだけれど

僕はなんとも思わない

だつて僕は黒髪だから

僕はセピア色には染まらない

純度百パーセントの黒髪だから

とおくのほうで鳥が真つ赤に染まった

アルビノのクラスは飛ばない

羽を畳んでなんとか歩く

細い声は色なき風に掻き消される

後ろから迫る赤い波は道路ごと飲み込んで

影だけが色素を持つ世界が始まる

その一羽はセピア色に染まる

そうして外の世界は

フィルムカメラに捉えられたように

ノスタルジアに訴えかけてきて

僕の水晶体は

シャッターを切ることを強えられる

アルビノのカラスと黒髪 of 僕

その世界で動きを持つのは

「セピアの」カラスだけで

焦点を合わせきれない僕の水晶体は

何度もまばたく

そのまま

ピントを合わせられないまま

陽が沈んで

ドロドロの血が固まって

全てのセピア色がフィルムカメラに捕らわれる

生温さがなくなつて

カサブタが剥がれて

世界には無機物だけが残される

セピアのフィルムは

カサブタとして消えていった

治った傷痕は表面上のもので

いまだに瞳孔を閉じたままにして

光を待っている水晶体

僕は真つ黒な部屋の中で

セピアの世界を懐かしむ

◆上矢優希 神奈川県

フラッシュバックエンドロール

いとも簡単に夜が続いていく

そんな勘違いをしていたんだ

誰かのせいにした数

自分を愛せなくなった

世にも奇妙でもないつまらない話さ

うまく髪がきまらなくても

走り出したらもう同じだった

そんなことに気づけぬほど 私は子どもだった

嫌なほど 向かい風が吹いている

残酷なことをちゃんと突きつけてくれる社会は

生殺しの笑顔より 案外優しい気がした

私はいたって普通でいるつもりだ

あなたのご希望には 沿えないだろうけど

誰かを頼らず生きること

迷惑をかけるくらいならと選んだ生き方だ

この世界にはまだ私の居場所はない

寛容でいることはむずかしい

無関心の延長戦だったと 考え着いたら早かった

私が好きな私を守るためには この方法しかなかった

たぶん私は 不器用で 器用だ

痛みを感じながら笑えるんだから

でもね、そうして選んできた道は

今更かえるほどには嫌いじゃないんだ

もつとこの気持ちをうまく言葉にできて

弱虫のバイブルになれたなら

見えない幻の涙も

きれいなカップに注ぐことができたろうか

誰かを心配するのは

自分も誰かに心配してほしいから

誰かに優しくするのは

いつか自分がいなくなるとき 泣いてほしいから

私を探し続けるのは

私らしくいてほしいと願う人がいるから

私が私でいられるのは

あなたが変わらない場所までいてくれるから

降り続ける世界からの傷を浴びないように

私はそっと生きている

◆佐藤新 東京都

巡礼

めし
盲いた少女がふらふらと路をゆく、

みちをゆく、

寂しい秋の暮、

踊り吹きすさぶ風笛が

少女の土じみた髪を乱暴にさらう

ああ 誰も彼女が何処へゆくのか知らない

巡礼をする聖者のようにその足取りは重く

茫洋たる顔貌はどこか遠い聖地を望む

根なし草の哀れな旅人こそが彼女だ

彼女に家はなく、親はなく、

友も恋人も居なかった

彼女は正真正銘孤独であつた

生来孤独の少女は何かを求める

生まれ持つてしまった心の欠損を

満たし潤す何かを求める

それは愛かもしれない 信仰かもしれない
はたまた見も知らない母かもしれない

何処に在るかも知れない宝物を探し、

乾ききつた黄色い眼がぎよろぎよろと動く

ああ 誰も彼女が何処へゆくのか知らない

盲いた少女がふらふらと路をゆく、

みちをゆく。

巡行

あま 天知らず、天知らず、

おなこ 若き女子の 行くさだめ。

父母知らず、友知らず、

神さえ知らぬ そのゆくえ。

いたいけな、いたいけな、

輝くまなこの そのよるべ。

うららかな、うららかな

こたち 春の木立の みちしるべ。

おこそかに、おこそかに、

よばなし 誰ぞつむげる 夜話に、

かがやかな、かがやかな、

若き女子の 思い出ばなし。

◆田口裕理阿 神奈川県

後の

迷宮のような廃墟で冷や汗をかき合つた後の家族との団欒も束の間、

白々しい二十五時に虫取りに行け と狩り出され

切り貼りされて尚も目を焼くミニラムな楕円銀河の数々と

横に並んだ 木に蔦蛭、オレンジを膨らませたてんとう虫、チューリツ

ブ代わりの蝙蝠たち…

眺めていた頃に、一機の飛行機が

低空飛行の後

墜落

ガラス張りのホテルを劈き

ここから遠くに行こうと悪人の事務所見学を。

その後飛行者の見た全て…そして、産んだ全て…

海野中の大男、千色の海豚、孤独な谷の孤独なトラック…

「青い空は幸運の象徴だ、曇空なんかより…青い空は幸運でしょう。」

血を流す人々の中、「あの人はどこに行ってしまったの?」

今夜は白々しい二十五時だった故に。

横棒一線

横棒一線、眼中に引かれた

それは家畜の文化とし

肥えた豚が言っていた

「文化の母は家畜である」。

従わざるを得ない轍を

容易い余所見の末は、どうなるの?

野芥子のようなこの心、

垂れた耳さへピンと立て

雲さえも寄せ付けないように、

凧に隠した棘の道

家畜でないならどうなるの?

血は天地を循環する故に

横には流れず…決して横には流れず、

「耳を立て、牙を生やして、血に従う」

此れ、飼い慣らされ

紛れもなく横棒一線、眼中に引かれた

夢みがちな家畜の文化である。

あの頃の、霞んだ青を魅せてくれ

サッポロビールの曲がり角、置いてきぼりの実存が暗くとも見ゆ直角を

少し、あと少しほんやりと、もう少し、と指で擦る

背に掛けた湿気ったギターでさえも

その旋律や、がなる積乱雲に掻き消された街角の囁り

そうであつてくれたのが、

そうでなくなつてしまったのも

往来を行く人々の棘を孕んだ輪郭が

汚されることのなくなった高貴な哲学が

亡霊脚にビリビリと触れ、

あの頃の、霞んだ青を見せてくれ。

鉄の骨組み通る風

あの頃の、霞んだ青を魅せてくれ。

土埃舞い、汚されて、掻き消されたそのわずかな風を私はこの夜の曲がり角

最も明瞭でいて待っている。

月の黒子

「馬鹿ほど哲学したが、フランコに乗ってしまったら、そんなことはきつともうと馬鹿馬鹿しくなる。フランコに乗りながらなど、哲学できるはずがあるか。」

其れなりに反省をして欲しいという星の哲学をその身に返した。

「地球の自転に乗りながら哲学できる奴があるか？」

尻尾を振つて否定した。

秋に眺めた月よ

それがあるとんだか優しく見えると、そう

弧の下の一瞬に指を指して、優しく知的に見える

その瞬きは時空を挟んだ、何千光年前の瞬きであるから、それでも優しく見えるよと、何千光年前の、私の

ものではない瞬きに吟ずる産声を

根を張ったロマンチストの妄言が弧に膨らみを鋭角に愚かさを。

◆柳生たまみ 神奈川県

ハーバリウムの小瓶。

知っている？どうやって小さな口径から

瓶の中に花束を入れたのか？

日光を反射した瓶の中には

細い黄色いリボンで小さく束ねられた

ミモザの花束が液体に支えられて

ふんわりと存在している。

黄色い花が光を一杯に蓄えて

明るさをより一層ましている。

小瓶に詰まったカタチが

花言葉に乗せた感謝の気持ちに変換される。

有形の花束と無形の気持ち、

どちらが瓶の中に入れやすい？
ひたすら瓶を凝視することで
答えを探してみる。

ちからエネルギー。

物体に力を掛けて動かすと

様々な運動や熱反応が起こるらしい。

この重たく冷えたところを

動かすためには何をしよう。

物理的に持ち上げたり

押したり出来たら簡単なのに。

加えた力に対しての公式が

成立するものには正確な答えがでる。

ここには公式が成り立たない。

こちらのエネルギー公式が欲しい。

手だてのなさに焦燥感がつる。

織られた夢。

ひかれた一本の線が

連ね重なり面を形成する。

線が交差し重なることで

面の表情に深みを醸し出す。

織物を織るように幾度も幾度も

繰り返すことで形が作られてゆく。

一本の細く儂い線は

やがては色濃い形となり、

その形は圧倒的な強さを放つ。

本当の美しさだ。

こころバランス。

長い間の探し物をつけた。

真意と本意

こころの歯車が噛み合い

ゆっくりと回転を始めた。

そのちからがこころの芯に伝わり、

芯をくるくると回す原動力を生む。

そして芯と連動した色々なスイッチを

次々に押し込んでいく。

生きている確かな手応えに

こころが熱くなる。

その芯はぜったいにぶれない。

◆村雨巧夢 大阪府

平和への道程

春の到来を率直に喜べない重い状況が続く

(率直に喜べる年など考えられないが)

温暖化により四季自体が曖昧になってきた

日本の繊細な季節感も損なわれつつある

冬將軍に勝利した陽光が強化され跋扈する

私は吞気に季節に佇み花鳥風月を

楽しむことが困難になっていることに気付く

更に東日本大震災などの現在と記憶

そして今猛威を振るうウクライナでの戦争

私はたとえウクライナ国が正しくても

ロシア国があまりに酷いことをしていても

戦争自体がだめだという基本を失いたくない

問題解決の手段としての戦争を否定する

日本は九条始め自国の憲法をきっちり守れば

世界は究極的によくなると私は確信する

何故なら人間は手本となる能力がある

そして私は究極的に人間の良心を信じる

生きる礎がそこにあるからだ

平和への道程を創造する以外ない

新型コロナウイルスを迂闊に軽視しそうになる

P M 2.5にも注意を怠れない

季節と心の詩を書こうとしたが

社会的、国家的問題を抜きに

書くことの困難さを痛感する

私の身体、感性、意識に

立ちほだかる諸問題を正視し

自らの生活を形成する以外ないと思う

もし九条が壊れ、私に「赤紙」が来れば

私は自らの良心と思考に基づいて

拒絶する以外ないだろう

そんな時にこそ、私は季節を楽しみ

自然環境を愛でて昼寝をするだろう

忌野清志郎——RCサクセションの

「逃げるんだ」を聴きながら命の大事さを

確認し、戦争をどこまでも忌避するだろう

扉の向こう

眠いな 齒も磨かねば

もうエナジーがないぐらいだ

友のメールを読みながらうとうと

楽しく貴重な情報がぎゅしり

思わず煎餅を喰らいアイスコーヒーを飲む

何 扉の向こうが光に溢れている？

そんなはずない 今は真夜中だ

起きてきた妻がのたまうのだ

明日がノックする 扉が微かにたわむ

珍しく夜中のコーヒーが効いている

それは夜の喜びか 明日の光は気が早すぎる

メールの件名は「秋の夜長」だ

僕らは真面目にメールのやり取りをする

迂闊なことの多い僕らの観念を

照らそうと扉の隙間から光が漏れる

観念をいたわるためにも

その光を届けようとしている

僕らは心身を病んでいる

薬やコーヒーを飲みすぎる

でもその病は「健康」なものかもしれない

その逆説は明日の光に照らされる

人々よ病院に出頭せよ

戦争できる心の状態を解除してくれ

光も病んでいるに違いない

僕らはなおパソコンの画面に向かう

或いは夜の静寂を楽しもうとするのに

明日の光はひたすら扉を叩き続ける

皆の期待に応えきれないと

溢れんばかりの光は主張する

今夜もまた宿直^{とのい}なのか

睡眠の間に世界で起^{おこ}ることが

麻酔中の経過のように

気になつてしょうがない

僕らに健全な目覚めはない

ただ安らかな絶望感の光がある

その病める明日の光は今やともすれば

扉を軋^{こもも}ませて悲鳴をあげるかのようだ

僕らを含めた人々は樂天的すぎるのだ

◆清河 倫 東京都

雨上がり

バスの中だった。最後列に腰掛けていた。車内はずいぶん蒸^もしていた。前には男が座っていた。ほんのり煙草の匂^{にお}いがある。

窓の外に目を遣^{つか}ろうとした。ガラスに張り付いた水滴が目に入った。

ピントをずらしてもとに戻すと雫^{しずく}は流れて筋が残った。

筋の向こうに逆^{さか}様の太陽が見えた。分厚い雲を掻き分けて漸^{ようや}く地上にまで届きそうな太陽の逆様。

窓の外は雨上がりだった。道ゆくひとは咲^{わら}っていた。マスクをしていて表情はよく判らなかった。ただ心が咲^{わら}っていた。咲^{わら}う心が水溜りに映^{うつ}っていた。

バスはゆらゆら揺れながら進んだ。前方に目を遣^{つか}ると男が立ち上^あがった。煙草の匂^{にお}いがある。先ほどよりも濃^こかった。

男は世界が停止しつづけることを知っていた。男は滴^{しずく}に滑^{すべ}らぬようゆつくりと踏み締^しめた。男の横顔が一瞬間みえた。何かもの足らぬが、それが何かは解^とらぬ目をしていて。いつ迄もみていたいような目をしていて。

日差しが差し込んだ時ついに世界は停止した。男のためにドアが開き、風の通う路ができた。前髪が靡く。

冷たい風は血脈を思い出させた。風は目にみえないやうで、みえた。血脈は目にみえるやうで、目にみえない。

男が突然口を開いた。ほのかに煙草の匂いがした。

男がバスを降りると、世界は再び動き始めた。男と入れ違いに女が乗ってきて、ちょうど男の座っていたところに腰掛けた。

女は窓を開けた。再び風が通った。

そのとき

「あなたはここで降りないのですか」

みているでも、触れているでもない質感があらわれた。ただ、煙草の匂いがした。

バスの中だった。最後列に腰掛けていた。車内には日が差していた。前には女が座っている。窓の外で人々が笑う声が、かすかに聞こえた。

◆神谷りん 静岡県

みつ穂

愛を茂みに隠して旅に出た

一人という自由を求めて母国を散歩する

電車の中で見つけたあの日の夕暮れ：

古びた駅へ降りて荷を置き

風の香りを浴びながら深呼吸した

すると町で埃を被った私に

囁くこの草原の何もかもが教えてくれた

別れを告げられた胸の痛みは

愛する一つ手前の恋にも似てる

遠くを見渡し風の波へ運ばれた心^{しん}

鳴いて鳴いてどうか泣かないで

意味も知らず笑ってしまった幼き想い

はしゃいだ青春は今も涼快していた

忘れ去られた人々は

もう一度愛を拾う為の影法師

行かないで私の想いを置いてゆく針の刻み

なのに、だげど貴女も君もまた一人旅

ひと息しているうちに電車は通り過ぎ

私を気にしてる

電車に揺られ貴女が窓の外を気にしてる

吊りを持たず寄りかかりスマホを片手にする

君もどこか気にしてる

置き忘れた里が蘇り

刻まれた針のときめきを思い出し

初恋のキスがまた痛みとなり顔を出す

行かないで私の夢を置いていく胸の痛みよ

鳴いて鳴いてどうか泣かないで

恨みや憎しみは歩き出したら止まらない

なのに愛する一つ手前の恋にも似てる

いつまで経っても

大人になれない姿に自ずを責め続け

分かっている筈なのに

何度もの失敗を重ねる君

そうだ探しに行こう！

身に染みるそよ風が

青い穂の付き始めた田を今朝も靡^{なび}かせた

電車の中を覗く太陽は

貴女を夢中に照らしている

答えを求める私を見て君が一つ微笑んだ

飽きる事を知らない君を知り

私が生きる意味に迷い込む

そういえば…

茂みに隠したモノとは何だろう？

いつの間にか誰かを忘れてしまいそう…

鳴いて鳴いてどうか泣かないで

意味も知らず笑ってしまった幼き想い

はしゃいだ青春は今も涼快していた

美女の訴え十三歳

怒りたい時に怒れるなんて羨ましいな…

私には怒る意味は知りません

泣きたい時に泣けるなんて羨ましいな…

私は泣きたい事を知らないのです

なんとなく教えて下さい…

笑うとはどういう時に使うのですか？

私を見て目から雫をこぼしている人がいる…

私はそんな時に何をすれば良いのですか？

耳から微かな鈴の音がします…

私の体に何か管が付いているのですが

何をされているのでしょうか？

窓の外が微かに半分ほど見えます…

なんとなく…背中を押されました…

なんとなく…温もりを感じます…

なんとなく苦しいのです…

なんとなく…光が眩しい時があります

誰かが窓越しになんとかなく

スマホという物らしきモノを

私に向けて笑っている様な気がします

手を振ってくれているのですが

私は体を横にする事も出来ずに…

それでも笑ってみようとしました…

なんとなく…気持ちが良いです…

なんとなく…

もう一度笑ってみようと思いました…

なんとなく…

自分の顔が喜んでいる気がします…

これが幸せというものなのですか？

私には分かりません…

なんとなく…分かるけど

なんとなく怒ってみたいな…

なんとなく泣いてみたいな…

誰かとおしゃべりしてみたい…

なんとなく…叫んでしまった…

周りの人は何の反応もしません

こういう時は

泣けば寄ってきてもらえるのかな？

今日も誰かが選んだ服を

なんとなく着させてもらいました…

体を横にされて耳元で『おはよう！』

これは毎日聞いている言葉なのですが

明るくなつた時に使うのですか？

なんとなく笑ってみようと思いました…

頑張つて笑ってみたのですが

気が付いてくれましたか？

なんとなく温もりを感じて生きています

今なんとなく泣いてみたいな…

なんとなく怒ってみたいな…

なんとなく笑ってみたのですが

気が付いてくれましたか？

◆長谷川清浩 北海道

惚れる

白髪で頭も禿げた

ビートルズなんかに出会ったせいで

日がな一日ギターを抱えて来た

田舎の村でも言うほど不良扱いにはならなかったぜイ

岡林って奴もディランて言う奴も色々いるけどね

アコースティックでもエレキでも

ギターの音に魅了されて

惚れてしまったことには変わりない

弾かないで聞くだけの奴等もいる

ステージに立ってる俺等より熱狂的だったりするのに

踊る阿呆に見る阿呆と言うヤン

俺には何故演らないのか気が知れンけど

きつと取り憑かれたくないんだろうね

結果が欲しいだけなんだろうね

きつともっと惚れてるものがあるんだろうね

女にモテたいとかそれだけで

心が奪えるなら動き出すならそれでもいいが

俺等は意外と歌詞にも曲にも声にも入れ込んじまってるのよ

そんなこんなで

こいつは棺桶までのバディーと決め込んでいた

なのに何なん指が段々曲がらなくなってる来て

それって良くなく泣く泣くない

今更スライドギターでもないしょ

だから今はウクレレ・・・

そのうち三線になるかもね

何だろねこの運命の別れ

けれど後悔はないね愛したから

一緒に生きたから

今夜も聞いてくれてありがとう

◆白澤侑希 福岡県

悲しみと喜び

笑顔がこぼれるだけが人間じゃない
涙をこぼすことも時にはあつて
その涙、実はお金で出来ていた

破滅

世界が破滅する
そんな空想論
叶えてみたい

東京の

東京の空は綺麗だとか
だけど

そんな事

誰も気に留めない
空、見たことある？

花

花を咲かせましょう
綺麗な花を咲かせましょう
雨が降る日もあれば
お日様が顔を出す日もある
だから、その花には
傘を用意してください

◆辰己尚平 大阪府

名前を忘れる

ひとりでもいいと
思いたい時間はそう長く続かず

不器用に混ざる

部屋の片隅

取りあえずの参加を

置いておく

それでいいと思えない

ひとり部屋にて

乱された時間の波が

明日の計画を遅らせる

区切られることのない

糸を引くような

繋がりにへの欲望

人であることの

滑らかさのようでもある

人であることの

息苦しさでもある

人である限りの

時間の総体でもあると

悟った後に

すべてが終わってくれないものか

そう願う夜を

いくつ越えただろう

忘れてまた迎えた朝も

いくつ数えただろう

通り過ぎていく一切を

痛みもなく見つめる

生きているようでもある

ここにいないようでもある

寂しいような

暖かいような

天国に近いような

そうじゃないような

残り時間を時々数える

残り時間を時々数える

それからまた

歩き出す

夜が過ぎて

朝が来る

名もなき今日を

名前も忘れて

生きていく

ただそうありたい

ビルの屋上

大げさな理由を

袋に詰めて

ビルの屋上から

下界に向けてばらまいた

大きなあくびがひとつ

雲に乗って

久しく降っていない

雨粒が落ちる

誰かの寝言が

予言の雷鳴に変わり

雨音は窓を激しく叩く

古代のリズムに乗って

僕らの化けの皮を

剥がしていく

通り雨が過ぎれば

理由も意味もなく

雲が晴れて

すべてを無化する

太陽の下で新しく出会う

僕がしたことは

今日は正解だった

それだけでいいや

追跡

いつの間にか

言葉を介して

何もかもが流れ出ること

それだけが

繋がりだと思っていた

言えなかったことは

曇りガラスの向こうで

渦を巻いて

通り雨に打たれる

僕がそう言ったからって

決めつけないで

言葉はどこにでも

変化しながら流れる

水のように流れる

どこまでも

追いかけても

つかめないものを

明日に残しながら

昨日までの

無音のフィルターに

からみとられながらも

たどり着いた足跡に

付け足すような

君への会釈

寂れてしまう屋根の下

傘も差さないで

誰かに酔う

お前には分からない

分からないも分からない

素直になれなくて

ずっと黙っている

重力はいずれ

僕らの虚無と重なつて

いられなくなるから

可能な限り

言葉を発するのだろう

今日もそうだった

明日は分らない

それだけが希望

昨日までを軽くなすような

それだけが希望

風にさらわれる

少女の会話

雨に打たれる

少年の祈り

陽炎がまだ揺れる

どこまでも

強くしなやかに

世界の中心で

恋をする

私にもそんな時が……

追憶の森に彷徨つて

いくつかの後悔と

いくつかのぬくもりが

子供の手に

流れていくから

言葉は時々

立ち止まったまま

陽炎に揺れる

揺れながら崩れる

風に流される

太陽に照らされる

緑に消える

よく追いかけたね

よく見失わないね

そうしている間の

記憶は誰のものでもない

斜め上に重なっていく

頑張った峠を

ゆつくり下っている

揺り戻し

銀色を着飾って街を歩く

光のアトリエで

虹色のシャワーを浴びる

虚無を着飾って

真空に耳を傾ける

射す角度によつて

仏様だつたり

過去の罪業だつたり

どこまで来たのか

忘れるくらいに夢中になる

何に？

ひとりしかいない

ただ酔う

眠れない自己責任

涙も出ないのは

それが大地と繋がっていると

どうしよもなく見えるから

感じるから

可変さえも花模様

アトリエを出て

排気ガスと欲望を

すり抜けて

家に帰る

銀色を脱いで

それなりの肉が転がる

重力に沈む

何が重い

息を殺し過ぎた

違うからといって

透かして見る

太陽は

あの日の赤

あの日の緑

そのまま校庭で倒れたい

朝顔に揺れていた

僕が生きたい

そう思える道は

一瞬で閉ざされて

最高のアイデアを盗まれる

繰り返しが

諦めのカーテンの向こうで

人生を揺り戻す

支えてくれる人たちに感謝

そっちじゃない

こちだみんないるじゃないか

アディクション

もたえるアディクション

途切れるメロデー

君の笑顔が遠くなり

灼熱の空が大地を覆う

僕らは望まずとも

何かを捧げ続けて

眠れぬ夜に

犠牲の代償を払う

それを知るは

罪とは異なり

通り過ぎるのを待つだけ

涙も乾く夜

星の涼しげな光も忘れ

もたえるアディクション

途切れたメロデー

ハンマーが大地を叩き
鼓動が天を突き刺す
徘徊する夜の骸が
大きく撫でまわし
そこは更地になる
知性が残るか
惰性が残るかはそれぞれ

遠い水面

重力に引かれて
残り時間を知る
海底に降り積もる
淡い光の雪
宇宙の闇からの解放
青い光の時間
人の心まで縛る
重力との戦いの日々

残り時間は後ろから
僕を通り過ぎる
見上げればまだ
落ちてこない光が
宇宙に飾られて
緩い底の波が
ゆりかこのように
それまでを揺らす
残り時間分
抗うのを止めるのか
光をつかむか
ひとりに還るのか
全体に戻るのか
遠い水面も揺れる

明かりを消した部屋で

グラスの景色

淡い色の影をなぞり

君たちとの

出合いの輪郭を描く

緑色のキャンバスに

光と風が混ざり合い

それ以上は

何も言えない

時の流れに身を任せ

それまでの人たちが

自ずと遠くへ消え去る

まだわからない

つかめないもので

ガラスの景色は溢れている

未来へと削る音

心の擦り切れ

ずっと固まつたまま

生まれ変わる

その日を待つ

明かりをすべて消した部屋で

浮かび上がるのは

いつもそんな期待の数々

砂時計

彼方になびく

雲を眺める

私をこのまま

連れ去るように

どこまでも連なる

ビルの向こうに

過ぎ去りし夢も連なる

追いかけて行きたい

私の裾が

満員電車に引っかかる

安定と引き換えに

夢は紙飛行機に乗って

あの雲の向こうへ

切ない音がまだ

胸の中で鳴っている

君と鳴らした

あの舞台で止まっただまま

あの日どうして

君と飛び立たなかったのか

それしかなかった……

砂時計がすべて落ちて

青く静止している

お休み

昨日あったこと

今日に流れる

奥底で広がる

今日休むわ

無理が重なる前に

直感に耳を傾ける

何とか生きていく

出来れば省みる

何が行き過ぎたのか

無駄なことはなかったか

無理はしなかったか

必要だったのか

……それが出来れば

苦勞しない

知らずに溜まる

どこからともなく

流れてきて

奥底で広がる

知らずに続ければ

もつとえぐられるから

そうなる前に

今日は休むわ

サイレン

溶けていくことも
知らない
青い空からずっと
垂れ下がる雲
このままたゆたう
知らない温度で
壊される
美しいまま保存
写真を初めて見た
遠くなる
それまで
カタカタと鳴る
ひとくぐりにされ
すべての景色がさわついで

眠れない夜
冷蔵庫の音が気になる
偉い人が殺された
カタカタと鳴る
その音の向こうで
運命は誰が決める？
生存確認のような
ライン上のやり取り
今日は疲れたから
また明日にしてくれ
ありがとう
銃声が響く
逃げ惑う人々
溶けていく日々
誰でもなくなるから
生まれ直す街に
居場所なんてなかった

くじ引きの運は

悪くなかったのに

どこかで何かが壊れる

遠くなる

写真のまま

美しいまま

そう思いたいまま

溶けていくから

下りられたら

階段の下の方にも

下りることが出来たら

そのままでもよかったら

いろいろな仮定

矢印は風見鶏

誰の音でもないサイレン

神様なんていない

イメージは

室外機に揺れる

ベランダの翳り

洗濯物をたたく音

辺り一面響く音

神様なんていない

気たるい昼下がりが

ずっと続いて

いつか蒸発する

イメージは

石ころになつても

顔さえ見えない

品のない会話を

店内に響かせる着物

どこまでも

神様なんていない

大社前

人が通るには

少し狭くなるところに

ア리가たくさん群がる

目の前の

大きな社は見ないままに

柱になる

いい大人を見なくなった

テレビに映るのは

お笑い芸人ばかり

大人を知らないまま

僕らは大人になる

だから不安ばかり

その繰り返し

戦争から七十七年

屋台骨を失って

ハンドルを間違えれば

大人を知らない大人もどきは

いとも簡単に

一番繰り返しは

いけないことをするのも

せめて流されない

踏みとどまる

そうありたい

大人がいないのなら

どこまでも

自分で考え抜いて

いなくなったところの

柱になればいい

二十歳

傷が癒えないから

頑張れない

そうとは気づかず

自分を責める

中心に刺さった棘が

空洞の風にさらされ

虚無に染まる

退廃的で

寂しい青い空の下

全てをゆりかこのように

包んで揺らす

生命とは対極の

死の淵を歩く

同じ青は

ガラスケース越しに

届かない速さで

過ぎていく

僕は二十歳だった

◆伊織梢 神奈川県

弁当と明日

軽やかな風と少し強い日差しが心地よい

あと五分で休憩時間が終わる

急いで片付け午後の勤務へ

今日の肉ボール美味かったな

あと何回この弁当を食べれるか

母の病は進んでいく

奥歯に挟まったネギを気にする

両親が起こした虐待という名の過去

胃の中の物は罪滅ぼしか

カレンダーを見れば明日は母の日

何か買って帰るか

いや、ヴィシソワーズを作ろう

母の大好きなじゃがいものスープ

いつもの手作り弁当のお礼だ

凶猛で凶暴な父

母といえどヒステリーで超の付く教育ママ

両親を恨んだ末に入った閉鎖病棟

悶え苦しみ耐え続けた十代

失った青春

もがきながら祈り喜びへと転化努めた二十代

全てを許した姉の死

食卓を囲む幸せを知った三十代

バラバラだったピースが違う色でひとつに

越してきた峠が未来への架け橋と知った今

時間をかけて訪れた幸せ

両親と向き合う私と妹

四角形のテーブルの真ん中に咲く四季の花

その幸せを噛みしめる

傾く毎に強くなる太陽の光に後押しされて

未知の明日を生きる

頭の中は弁当のお礼のことだといっぱいだ

◆きつな 埼玉県

詩作詩

恋をしているんだろう、といわれたら爆発してしまいそうだ、ぼくは恋焦がれている。そのことをじぶんで思うだけでもばちばち弾けてしまう、これは恋愛のはなしではなくて、ぼくの足の裏が透明な水面を踏み崩していくことのはなしだ。

時間のことや本当と嘘のことがぼくには難しく、錆びついていく。なにもわからないままにきみのせいで時間が進むのが速いと感じる。ただそこから湧き上がってくるような気がする。炭酸水の泡がどこからやってき

たかわからないように、でも循環しているのだ、噴水みたいに　そういう

ことが本当のように感じられ、これが否定されたらきみはいないことになる

だろう、でもぼくはきみを見ていて、きみの影が濃く夏を理解する、きみの声が壁に届こうと延びていく、それつて愛じゃないですか、というた

びに泣きそうになつてしまうのはどうしてだろう？　感情が湧き上がる

と涙が出る、本当のことをいうと涙が出る　ぼくは理由を知りたいわけ

ではなく、ただこのままであったかった　自然だけはありのままでといわ

ないでほしかった　人間から生まれた人間がそのままであるといわないで

ほしかった　きみが水晶体のレンズで歪むこと、だからぼくは眠っている、

教室の窓から風が吹き込んで心地いい、きみの夢を見ていた　ファンタジ

ーの方がよほどリアルだと誰にもいつてほしくなかった

◆ねむの木　秋田県　今宵の泉

夜をなぞつて

星の置き場所

考える

その浮力の中

鎖骨の溝に

髪の毛が浸かる

ブルーの波紋に

雫は滴る

私も歪んで

そこに映る

泣いていても

笑つていても

それはひとり

ナツノイト

透き通る瓶 通り抜ける香り

お腹いっぱい炭酸水

不思議でしかたない

向日葵の顔の向き

夕闇のぬるい風 吸い込む

首筋に垂れる磨りガラス

舌の上の甘いビー玉 映る

虹色の風船

指かざして星を掴んで

笑う声 ひとつふたつ

星と星

繋ぐような

日々と日々を

あと一日もう一日

初期設定

うまくやらなきゃと

呪いを込める

使い古しの電池は

もたない

一か+

それだけの理由で

繋がるとか

離れるとか

分かりやすくいい

機械はね

いつでも

死ねるのだ

◆Cofumi 北海道

バスルーム

湯船はまるで羊水のように

少し涙に曇った

痛んだ心を包んでくれる

膝を抱えたままくると浮かべば

ひたすら母の優しい

愛のある声だけを聞いていた

あの頃に戻れる

どうしてもこのも外の世界は悲しいの

どうしてもこのも外の世界では

人が人を苦しめるの

どうしてもこのも外の世界には

憎染みがこびりついているの

無機質な机の中には

仕事に必要な書類や文房具

カタカタとパソコンを打つ音

無表情な顔の中で

目だけが上下左右と動いている

観葉植物は、話しかけられることもなく

窓際に座っている。

私は呼吸を忘れたマネキンのよう

規則正しく始まり終わる

信号は順に色を変え

渡るタイミングを知らせる

人生には信号機はない

自分の青は他の人には赤だ

心に重さがあるなら

家を出た 午前7時半と

家に着いた 午後8時では

重さも色も変わつてゐる気がする

湯船の中で吐き出す言葉は

バブルとなつて水面で弾ける

このまま海月になつて

ただ、ただ、漂っていたい

この羊水の中で

雪つた空

雪つた空に

何を見ようとしているのだろうか

ビルから見える高速道路は
まるで天空への道

足元から指先で線を付け足す

時折聞こえる雀の声に

優しさの芽がもたげ

白い雲に覆われた空を

肺いっぱい吸う

ブルー Jeans のように

爽やかさを見せつけていた

あの青い空をどこかに探す

エイトビートの音楽で

ゆつくりと目覚めた体に

リズムを植えつける

それはいつか豊作となり

誰かに刈り取られてしまうのだろうか

不安を雲に乗せる朝

雲の向こうの青い空を信じる朝

◆鈴木杏奈 宮城県

人が死ぬ理由

おおよそ88万6600時間

途方もなく 長い時間を旅して

一人の物語に幕を下ろす

深い眠りについて

人が死ぬ理由

おおよそ24時間

人間

脈絡もなく 鋭い痛みに充てられて

一人の作品の打ち切り

母なる大地に触れて

人が死ぬ理由

おおよそ21万9000時間

趣味もなく 同じ日々を繰り返し

一人の我慢で連勤

慣れない自宅で寝転んで

人が生きることになった理由

おおよそ誰かの限界

知人に教師に 上司に家族

一人でいることしかできなかった毎日

いつの間やら灯が

◆逢多悠花 埼玉県

ひと、ひと、ぱらぱら

粒が頭の上で

止まって 流れて

一気にいろんな色が降り注いでくるもんだからあたし、おぼれちゃいそ

うだ。

透明な

フィルター越しの空は、ねずみいろ

その先

ずっとずっと上に、青があるなんて

雨が降ったなら

わすれそうになるんだ。

わかってしまいたくなかった

平気そうにみえるのは

見えてないだけで

平気そうでないとわかるのは

雨が降ってから。

途端に水溜りができて

あ、って

ぽこついた地面にきづいて

しつてる大地じゃないとすら、錯覚する。

平坦だったはずの道は、

水をためて あたしをうつす。

傘をさした あたしがうつってる。

この雨は、今、あたしをつつんでる。

あたしはこの粒たちを、カケラたちを、

大事に思うことはできるのだろうか。

「ぴちゃり」

不確実な足元。

それでも、今、一歩ほつきりだけ、踏み出してみた。

ぴちゃり、あたしの一歩。

地を踏みしめて、一歩。

風が通った。

ふう、

ひんやり湿気をはらんだ空気が肺に入って

身体にしみわたってゆく。

傘をたたんで、地面を とんとん、つて

愉しげなリズムをとってみれるかな。

そんな日が くるといいな。

陽をうけて キラリとひかる、

あたしの道。

この雨で

いつか いつか

輝きを ましていますように。

—— カケラ キラキラ 魔法の呪文みたいに

◆時北涼芽 宮城県

無題

夜空にいくつもの星たちが 様々な星座を形作り、ひとときわ輝きを放つ。

冴え冴えと、暗い寒空に光り輝いている。

そんな空をずっと眺め続けていると、動くはずのない星々がだんだんと

移動しているかのように見えてくる。

星たちはそこで変わらず輝いているのに。

風の強い夜などは、まるで星そのものが流れに逆らい自ら進んでいるよう

だ。

周りが、雲ぐもが流されているだけなのに、星の方が動いているかのよう
な錯覚をしてしまう。

例えば 同じ所でブレることも流されることもない存在は、時に異分子
として弾かれたり、また、体制に身を任せぬ者は「変わり者だ」「反乱者
だ」と、正義を気取った曲がった視線に射抜かれ傷だらけになる。

そこに、ただ変わることなく居るだけで。

周囲の流れに乗らぬ、それだけで。

違っているのは周りの方かも知れないのに。

あなたがそこへ留まる時、思いもしない急な流れにその足元を掬われて
しまうかも知れない。

それでも夜空に在り続けている星々は、私たちの頭上でいつも指標を示
している。

じつと動くことなく 行くべき道を照らし続けている。

◆また 北海道

くそつたれな社会へ。

あの日、あの日から。

笑顔が消えた。

怒る暇も。

悲しむ隙間もなく。

淡々と僕たちの世界から色が抜けていった。

大口を開けている人が夜の街に潜む不良よりも怖く見えてき。

僕たちの昼の時間からは笑い声が消えた

目を合わせることもすらでなくなつた。

でも、それでも泣きたいほど辛いわけじゃなくて。

まったく笑えないわけじゃなくて。

それを社会は

「それも思い出」と。

「長い時間生きていくうえで辛いことはいくらでもある」だって。

ビールを飲み、花見をしながら話しかけてくる。

修学旅行も学校祭もだんだんできるようになってきた。

「3年間あるうちの1回でもできてよかったね」

そうやって、僕たちの記憶に遠慮なく真っ青な絵の具を塗りつける。

ふざけるな。ふざけるな……！

無くなった2年間は戻らない。

作れなかった記憶じゃ浸ることも思い返すこともできないんだよ。

社会と、……社会。

うつすらとしか記憶に残っていない大好きな親友の口元、笑顔。

言いたいことはたった1つだけ。

僕たちじゃない。あなたたちが。

「あなたたちが思い考えるような3年間ではありませんでした。」

◆早川晋平 愛知県

ジエンガ

気がついたら目の前に置かれていた、一組のジエンガがある
既に誰かが始めたらしく、いくつか歪に積まれている
そのせいで、少しだけ傾いている

おそろおそろ、一つピースを抜いて上に乗せる

バランスが取れる場所をなんとか見つけた

あらゆる人が出入りして、わたしのジエンガを進めては去っていく

他人のものだからと、勝手なものだ

でも仕方がない、これは誰が触ろうと、わたしのものだ
このジエンガが、あばら骨のようになるまで

体の中から、取り出せるピースを探しては

また一つ先に積み上げようとする

わたしだけのジエンガ

◆木鹿 東京都

窓

一枚の絵を切り取ったように

透明なガラスを隔てた先の

たくさんの色が

額縁にひっそりと飾られている

濃淡をつけながら

ある刻には暗く

ある刻には明るく

世界を映し出す

その絵は

誰かの生活の中に溶け込み

様々な想いを描いている

まるで世界全体が

透明な美術館になつたような

そんな感覚

誰かがその絵に触れたくて

手を差し伸べ

その奥にあるものを掴もうとしている

でも、あるのは

ひんやりとした固いガラスで

募らせる想いの欠片が

指先からだんだんと

重なり溶けてゆく

そんなとき

誰かは

どんな表情でかお

どんな想いで

向こうの景色を見つめているのか
ほのかな光と影が教えてくれる

また

誰かのいる世界も

ほかの「誰か」の絵の一部となつて
景色を彩る

そうして

1枚のガラスが引いている境界線は
鏡のように

2つの世界を映し出す

誰かの(と)

横を通り過ぎてゆく人

となりで眠っている人

言葉を交わしている人

いる場所

いる時間

何気なく進んでいく刻のとき
すべてに物語がある

その物語は

誰かにとつて

かけがえのないものであり
なくてはならない瞬間

そして

誰かのいる世界は

見ている景色は

紡ぐ物語は

曇天なのか快晴なのか

はたまた

豪雨なのか

その誰かにしか

分からないからこそ面白い

そんな誰かの想いとともに

今日の世界も

明日の世界も

ひとつひとつの織り成す物語が

ありふれた絵の中で

刻々と進んでゆく

◆秋葉みづき 東京都

都会のオアシス

やっと辿り着いた砂漠のオアシス

ここは喫煙所

みんなどこを見ているか分からない

ただ息をしている

フロアライトの紫煙を巻き

佇む5分間

その時の風はなんだか生々しい

さあ、また始まるよ

シマウマが水を飲んでる

ジャズインの will you dance?

日差しは夏色

秋の香りが翳る頃

電車を入れ物と見て

ドナドナの唄を口ずさむ

宇宙までの吹抜け

新月は街がお芝居小屋

スポットライトは眩しくなる

踊り明かす人々

夏の夜

東京は夜まで光っている

まるで昼の光を内包した粒

私たちは家に帰るのを忘れて

誘蛾灯に集まる虫

the wild in the city

折り重なる雲

地層の街

埋まる私は目醒める

本能を燃やす

深まる秋色

地下鉄這う

四つ這いの街

溺れる私は苦悩する

煩悩に飲まれる

行き渡る朱色

◆高田テラ 福岡県

生誕一億周年

愛してもらった、だけがでぎずに生きていた。街中ですれ違う全ての人は線の末端を担っていて、私も手をひらけば線の端っこが握られている。じゃあ途切れた線は今どこにあるのかしら。きつとくるくるまどめられてゴミ箱に捨てられているんだよ。おまえは異常です、だから愛せません。なぜなら私は正常なので。私は正常なので、戦争ばかりしたがってる。

取り返しのつかない過ちを犯しても、しあわせになれるよ。きみが奪った命はきみに殺されてるから、何も言わないし、きみを殺したりしないよ。きみはたくさん、本当にたくさん、殺してきたけれど、彼らはみんな安らかに、きみに感謝をしているよ。

だからきみがしあわせになれないのはきみだけのせい。

訳分からんだけで天才になりたいね。傷つけられただけで傑作を生み出した。死にたいけれど、死ぬには色んな確率が低いから、詩なんか書いて残り時間を生きたがる。きみの憂いは正当です。きみは最高の異常者だけど、私を愛さないという選択だけは正しかった。弱いままでも、何も捨てずに強くなれたら。人類が生まれたときから途切れることない数百億の孤独の中で、お前なんか要らないよと自ら進んで言われに行く、小さな自殺をしてから眠る。

大丈夫。僕ら二人で、世界の誰より特等席で、宇宙を眺めるシートをしよう。

◆坂口美和 東京都

あの子は旅行に行くんだそうだな
なぜだかそれがすごくファンタジーに
感じている今日この頃

きつと電車に乗って

たくさん荷物を持って

私の知らない風景を見に行くんだろうな

本なんかあんまり読まないけど

旅行した気分になれる小説でも読もうかな

この頃毎日だらだらしてたまに仕事して

動くちからがめつきり減っている

自分になが向いてなが向かないのか

自分じゃよく分からないらしいから

自分さがしつて一人ではできないね

自分の外に出よう

電車がなくなつて

荷物がなくなつて

裸のまま 自分の外に出よう

今までみ得ていなかったものが見えてくるはずさ

そう語っていた彼のように

やりたいことがやんなきゃいけないことになるのは

退屈だよ さあ外に出よう

色をみて きれいだとか

形をみて 面白いとか

無邪気に言っていたあの頃

忘れていたあの頃

夏は何度でもやってくる

忘れることなんてできないのさ

言われてやんの

恋じゃないって

私が恋してるのは

あの人じゃなくて

過去の記憶だったんだって

それならさ、なんだか

私はずっと、心の中はずっと

あの頃に立ち止まって動かない

過去の記憶と踊る

人形のように

あの人と踊る夢を漫画にした

漫画のヒーローはいつだって君だった

それってさ もう

三次元じゃなくて二次元の存在じゃん

私が本当に恋しているのは

他の誰でもなくて

あの頃の自分なのかもしれない

時間は流れていくから

あの頃にたどり着くことは

決めないのに

いまだ、あの頃行きの電車を待っている

ずっと過去を見つめて

想いを引きずって

一人で

一人ぼっちのまま

誰かが救ってくれるのを待っていたんだ

その誰かは本当は誰でも良かった

あの人じゃなくても良かった

ただ、過去の私を知る誰かに、

過去の私を救って欲しかった

赤の他人のあなたへ

まきこんじゃつてごめんね

私の身勝手な一人芝居に

私しか出てこない世界に

記憶の中のあの頃に

◆岡部將生 東京都

独り人の消えゆく世界

朝の日射しが私の目を射抜く

冷たい暗闇こそ安寧の場所というのに

外の喧騒が耳に障り

閉ざすのは心と窓のカーテン

隙間から漏れる光の明るさが

力なく横たわる私を叱責するようで

夏の気怠い長い昼の終わりを

ただひたすらに待ち続ける

日が傾けば 独り無為な物思いに耽る

墨色に空が染まる頃

隔絶された世界で

社会に属せぬ自分を責める

ボタンを掛け違えたのはいつだろう

レールを踏み外したのはいつだろう

幾度も 幾度も 答えの出ない自問を続ける

夜深まり ようやくベッドに腰を下ろせば

また今日と微塵も変わらぬ明日を待つばかり

繋がりたい 本当は繋がりたいのだ

そんな心の咆哮が

誰かに届けと空虚に祈る

発せぬ声は影に溶け

私の実像は薄くなり

部屋に占める空気が濃くなるばかり

消えゆく私の空間が

ゆつくり ゆつくり 濃くなるばかり

◆青津 亮 福岡県

我と我が淋しさを磨く者

1

黎明降りる冬の朝、陽のみ毀れるピアニズム、

けさも白雪落ちなくて そら涙に似た指の揺れ。

僕はふだんの習慣の儘、わが淋しさを磨くのだった、

鏡ばかりを眺めさせる、閉ざした自己愛に従つて。

さらつく砂上に轢かれる如き、灰の啜泣にくすぶった、

かの女への往き場なき、光と音の連続に焦られる、

下腹部に籠る不連続 泥溜さながらの恋と官能、

その清算くわえて暴行、呪わしい幾夜への復讐だ。

きんと世界に突き放されて、張りつくわが身は蝙蝠の傘、

戦慄く傘の淋しきの律動 いたみへ澄ますの僕の生業。

もつとも透明ないたみとは、空に漂う神経を打つ、

澄んだ硝子質の涙音「我」なき「わたし」に満ちる光。

2

名乗り出ようか、僕は詩人、毀れた魂がその証拠。

侮蔑投げられ転落するたび、憎しむ 腸から昇り、

我が背骨へと流れ淀む、ディレッタントの群青の血と、

野獸譲りの銀の精液——背に固着すれば万事よし。

魂いわく睡る水晶 僕、その乱用の主犯格。

破れかぶれの韻の儘——酒場の乱痴氣に紛うノイズよ——

水晶打つも砕けずに めくるめく多重に花弁ひらき、

弁を纏つて硬化する薔薇 暴漢拒む姫の脚のそれ、

人の高貴はうごきに宿る。聖性、血と綾織り肉駆ける、
青薔薇へ剥く変貌は 鉄の重装・純潔注ぐ。

生きているが痛いのは幸いだ、苦しみこそが悦びだ、
くるしみたい我が苦しみを くるしめることこそ欲びだ。

扱て、果敢ない水晶打つまえに 手続経るのが御必要、
囁つた者は僕を打て よわき僕だが喜びましょう。

壹——真善美を尊敬し、蒼穹の美を信じてのみよ、
貳——美をみすえ、善くうごけ。愛と信頼をシノニムにせよ。

複雑怪奇に傷んだ水晶 手に持つ脆く果敢ないそれを、
我が身と乖離し色彩ちがう 疎外の視せた幻の世界、

硝子盤へと投げ放つのだ。劇しき愛憎・破壊衝動、
儘に跳びこめ、矢の噴くように —— 淋しくわが身撥ねるのみ。

僕は硝子盤に牙向いた、つぎは現実が武装してくる、
鋼の巨人の理不尽は 我が頭掴み地に擦りつける、

いまさ 蒼穹仰ぐ時、眼なぞ砂と交じるがいい、
そいつに徹底服従しながら、魂の視線、蒼穹から離すな。

瑕つき乱れる睡る水晶 幽かな悲鳴に耳を澄ませよ、

—— 透明な響きはきょうもなし。引き攣る肉は断末魔。

明け渡しては踏みにじらせて、傲然たる眼で眺め遣り、
血まみれの、わが掌みて自己陶醉。胸に舞うのは虚空の冷笑、

サイケデリックなチェンソー、どぎつい色彩の飛沫が叫喚、

泣き笑いに裏つけられた、病める舌先のアフロ・グルーヴ、

それぞ、叫びのわが歌で、整うそれなぞ八つ裂きにした。い
されど後ろ髪引かれる如く、相も変わらず七五調。

叩き撲つてしゃぶつて哭いて、僕、甘ったれのナルシスト、

溶け合う連続に焦がれてる、愛の不在したエゴイスト。

僕は神に感謝をしようか—— かつてに幼稚にくるしめる、
暇と退屈くわえて欠陥、「自己への凶器」を呉れたこと。

突き放された淋しさを、おのが凶器で突き刺して、
いたみを純化させていき、独り善がりな悪戦苦闘、
背向ける自慰者は傍迷惑、誰も貴様を愛しまい。：

——詩作とは、欲の手前で足止める韻、星へと揺らす腕の律動。

きみは僕に訊くのかい？ なぜそんなことをするのだと。
親愛な優しいあなたにね、親から出来損ないともいわれ、
嘗て化物と刈り取られた僕 歪んだ自意識そいつでもって
無精な声で吐き棄ててやろう、顔は自分で拭きたまえ。

*

それというのもこんなこと、告白するのが矛盾であるが、
こんな人間の僕であつても、愛することに憧れるんだ、
すべての魂こゝろに善心が 睡ると信じて了つているんだ。

正直な愛に出港し、感情・行為・現象を一途な光で透したい！

僕たちに睡る善からね あらゆる不純をひきはなし、

水晶いたみに摩耗させ、だんだん透き徹らせて往き、
肉を地へと圧しつけられて、されど魂の鎌首を
唯ひたむきに蒼穹へ、美と善の、落す翳の重なる処へ、

其処 愛の様式陰翳されるか？ 視線くもらす悉く払い、
睡る水晶墜落させて、高く、貴く墜落させて、

そんな悲惨な淋しさこそが、もしや僕でも善くうごかすと、
愛のうごきをさせるのだと、信じているのが僕なんだ！

蜘蛛の國

ひたむきに
いと紡ぎ
わが國を
はりつめて
眸めをとぢる
こひびとの
唇くちわるを

俟ち希む

こひびとは

すがたさへ

あらはさず

唯なみだ

さらさらと

こほ
毀しもし

其があめを

國^すで享ける

そらわれて

こひびとの

炎ゆるいき

洩れ往きて

かの國は

壯麗に

久遠の火

照りかへし

して滅び

な
汝は墮つる…

ブラックバード

私の魂の病める華奢な枝先に

翼をもった、愛らしい「希望」が留まりました――

まつくろに澄み、めさめるような小鳥です、

なべてを抱き虚空を照らす、またと頭れぬ小鳥です。

その子、淋しげな短調で歌います、

銀と群青の夜空に満ち満ちるような、いいえ、

夜空のそれと おんなじ淋しさを歌うのです、

時々 それ背負うがように、星々蒼く照りかえすのです。

交じることをやめた その色彩は、

歌えば歌うほどに 黒は清み、一切を抛らんとし、
ただ 無き処へ飛び翔つては、幾度も墜落するのです。

ひとはそれを「絶望」の色だといいます――
されど嘗ての地獄で視かけた かの小鳥、
私には希望と映った――「犬死」と名つけられたそれです。

◆小川勇大 東京都

綺麗な顔になつて

鮮やかな感情を纏う
手毬のようなハート
大事に転がしてきたのに

どこからか破けてしまつて
いつからかほつれてしまふんだ
残酷な世界で

やすりをかけられたように
表情を失くしていくんだ
綺麗な顔になつて

何も感じないように歩いて
踏み荒らしているのさ
ボーダーラインなんて

彩りの剥がれ落ちていく
手毬のようなハート
抱き締めることも出来ずに

白々しい人波の中で
闇にキスして抱かれていく
夕焼けを見たんだ

◆岩松ほむ 東京都

なんとなく

なんとなく、と思つていることが、

本当に、なんとなく、だつたのかは、わからないけど。

それが、なんとなく、であつたほうが、都合がいい、ときのほうが多い。

いつもと違う道を使つて帰るのも、

それが、なんとなく、だからなのか、

それとも、目当てのケーキ屋さんがあつたから、なのか。

本当の理由はどっちだつていい。

なんとなく、で曲がつた先に行きたいと思つていたケーキ屋さんがあつた
ほうが運命的。

目的があつて曲がつた先に目当てのケーキさんがあつた場合は運命的
ではない。

でも、合理的ではある。

なんとなく、を言い訳に生きてみるのもいいのかな、なんて、なんとなく⁰
思つてみたりする。

なんとなくいつもより夜ふかしをして、

なんとなくアイスを2個食べちゃつて、

なんとなく騒がしいテレビを見て、

なんとなくなんとなくしてみたりして。

そうしていたら、きっとなんとなく明日も生きてみたいと思えてきちゃつ
たりする。

なんとなく、そういう予感がする。

なんとなく、に救われる予感がする。

◆ぷれーん 富山県

窓際の女

カフェ、窓際、スイーツを食らう、女が笑う
甲高くこれ見よがしに

女は電話で男を呼ぶ

お金払って欲しさに、甘い声で

男が来た

女は待つてましたと、また甘い声を出して歓迎する

男は冴えない中年サラリーマンの禿頭

男は来るや否や、女を見て頭の中で計算した

今日つまりセックスが出来る雰囲気なのかどうかを

どうやらまだやれそうにない雰囲気を察して、男は席に座った

女は店員を呼ぶ

店員は訝しげに女と男をみる

明らかに妙な関係だから

女はそんな妙な雰囲気を感してはいるが、きつと感じないようにしている

女は何食わぬ顔で、男に断りなくシャインマスカットを追加した

冴えない中年男とスイーツを食べてやるのだから、シャインマスカットの追

加くらい当然だと思つてゐる

だが、

女は僅かながらの良心からか、男に馬鹿な女を演じてみせる

そして男は愛おしそうに笑う

女は馬鹿な女の方が男は喜ぶことを知つてゐるようだった

だから知つてゐる簡単な知識でも知らないと言う

女は周りに自分がどう見られているか把握してゐるようだった

誰よりも役者なのだ

男は本当だと思ひ込んでいるのか、それとも分かつた上でなのか

どっちにしろ、男は女の中身などどうでも良いみただ

目の前の女のコーラル色の唇を吸いたいと考えてゐる

でもまだ吸えそうにない

その上、女は後から友人を呼んで防波堤を作つていた

女は、この男が防波堤を突破するほどの度胸はないとみてゐる

男は完全に諦めてシャインマスカットを頬張つた

「旨い！」と少し大声で言つた

モヤモヤと喉から上がつてくる性欲を振り払うため

女はそんな男を見て微笑み、マスカラを塗りたくつた重い睫毛で瞬きし

た

瞬間、私は昔の自分を思った

◆デイジー 福岡県

望遠鏡

今日は子供たちの声が

聞こえないと思ったら

朝早くから 草刈り機の音がする

近くの公園の草刈りが始まっていた

秋空は 澄んで清々しい

地上は 草刈り機の音が騒々しい

望遠鏡で眺めると 公園の周囲をおおっていた

夏枯れの雑草がきれいに刈り取られている

五時過ぎ 草刈り機の音が消えると

ちらほらと親子連れの

姿が見えるようになった

子供たちも今日いちにち 待ち遠しかったであろう

明日の子供たちの遊ぶ姿が 待ち遠しい

体の不自由な私にとつて望遠鏡は 楽しみの一つだ

公園で遊びまわっている 子供たちの様子

通勤で 自転車を颯爽と走らせる姿

川を挟んで 橋の上の渋滞した信号待ちの車

遠くのビルの大きな甲板が この前の台風で落ちた

今度はいつ設置するのだろうか

ベッドから眺められる 見える範囲のようす

生活の匂いを 勝手に感じている

散歩

久しぶりに車椅子にて 散歩に出た

公園では 幼稚園児が走りまわり

ねこじやらし・ススキの穂が

さわさわと 風に揺れている

堤防に出ると 川と出合う

さらさらと揺れながら

キラキラと 光って流れ行く

秋風が爽やかで 心地いい

堤防の向こうには 知らないうちに

ビルが 沢山建っている

遠くの山なみも

見えにくくなっていた

いつの間にか

目に映る景色が変わっていた

そよ風だけは 変わりなく

私の心を 柔らかく包んでくれる

俺の部屋

食が だんだん細くなり

喉を 通りにくくなっていく

私は 食べんネ食べんネ と言うけれど

息子は 美味しいネ美味しいネ と言う

床に着いても 同じ言葉を繰り返す

私は 黙って と言うけれど

息子は そうネそうネ と聞いてくれる

褥瘡治療の ガーゼをすぐに剥がしてしまう

一日に何回も繰り返す

私は パチンと叩くけど

息子は 優しく言ってくれる

意味を理解するのはその時だけで
すぐに忘れてしまうけれど…

朝の おむつ替え

ベッドの周囲の物が 散らばっている

私は 叱ってしまうけど

息子は 面白く言葉をかけながら元に戻す
おかしか…と言いながら顔がほころぶ

車椅子で 食卓へ

食細く すぐに俺の部屋に行くと言う

少しでもと ねばつてみても難しい

息子の 美味しいネ美味しいネで

ひとくちふたくち 口に運ぶ

薬を飲んで 俺の部屋へ

毎朝続く ルーティン

今日も一日平穏でありますように

私の基地

ベッドを移動して

私の基地（居場所）が出来た

トイレと食事以外は ほとんどここで過ごす

ベランダに面しており 小さな庭があり

毎朝の 猫の散歩道となっている

小鳥も やつて来る

道をへだてて 公園もあり

赤い帽子をかぶった 保育園児・幼稚園児が

元気よく遊びまわっている

午後には学校がすんだ 小学生がやってくる

サッカー・バレーボール 様々だ

そのあとは 高学年の子供たち・・・

日が陰るころ 乳母車を押したママさんが
幼子を 連れてやつてくる

ベッドの右脇には

介護・保険・病院・領収証等の関係書類

左側には 文房具・今月の領収書・他・

どんどん 品数が増えていく

中央には 長い机を置き パソコン・プリンター
隅にはテレビが 狭い部屋に収まっている

パソコンは七十歳ころから ポチポチとはじめ

いまだに ポチポチとやつている

独学なので なかなか進歩がないけど 満足している

家計関係 書類の整理 色んな記録・・・

我流だけれど なかなか面白い

分からないところは ネットが教えてくれる

麻雀ゲーム オセロ を楽しんで・・・

退屈することを 知らない・・・幸せだ

回想録

2010年3月 心筋梗塞

2013年7月 ジスト(癌)胃の全的術
化学療法 グリベック治療をするものの
体に合わず中止・・・ 入退院を繰り返す

2017年9月 肝転移4ツ目が見つかった
スーテント治療に 切り替えたけど

体質に合わず中止…

別の病院で 薬物補液治療を続けど効果なし

食事が喉を通らず 点滴生活…

末期で 手の施しようもないと言われ

家に連れて帰った

認知症が始まり 日々エスカレートして行く

それから 5年が過ぎた…

現在 八十七歳…来年には米寿が待っている

バランス崩し 骨折入院1カ月

転院して3か月 退院してきて

いきなり 要介護5…

それから 3か月が過ぎた

家族に支えられながら 毎日を過ごしている

褥瘡も 少しずつ良くなっている

認知が加わって 「千変万化」の毎日の

寝たきり生活が続く

食事の時は 車椅子で 食卓へ

食は細けれど 家族と一緒に食べる

病歴を記録していたけど

短歌を 詠んでみた

綴ってみたけど 短歌に収まらず

思いのままに書きつつあったら

どんどん長くなってしまった

今後も 続けていこう

寝たきり介護の 回想録

おぼろげな記憶

年始帳に名前を書きに行くと言って

藩士の 武家屋敷に 連れて行つてくれた

玄関式台を上がると 座敷が広く

はるか彼方に 床ノ間があり机をすえて

年始客が署名する礼帳が

硯とともに置いてある

幼いころのおぼろげな 思い出・・・

通学途中の 少し薄暗い近道を通ると

清流が さらさらと流れ

狭い谷間に苔の付いた石橋がかかっている

町の北西部に架かる キリシタン橋

石橋の裏には

マリア像があつたという伝承が残る

歌を 歌いながら帰った・・・

学校がえりに 近道を

通つて来れば どこからか

ほんのりにおう 梅の花

見れば ちらほら枝さきに

においもきよく 咲きそめた

明るく白い 梅の花

ポツタリ 地つちの上に

小さな音が ころがり落ちた

ハテナ 何が落ちた

ポツタリ また聞こえる

窓をあけて よくよく見れば

アハハ 椿の花

笛売り声忘れて

火吹き竹の皮つきなんかはいらぬか・・・

天高く

天空に吸い込まれるような

青空が広がっている

天高く空気の透明さを 感じさせる

この抜けるような 秋の空気…

今まで気が付かなかった

これほど 引き寄せられるなんて…

車椅子生活になつて 身の回りの出来事に

新しい発見を 感じるようになった気がする

よわい 八十六歳になるまで

これほど感動したことはない…

今までのような 日々を過ごしてきたのだろう

前に前に がむしゃらに 進んでいたのか

空を見上げたことも あるはずだ

でも この感動は初めてだ…

この季節にしか味わえない…

すがすがしい気分… 晴れやかな気持ち…

いまさらながら あたらしい 発見…

今 私は幸せで…

舞い上がっていくような気持ちだ

この天空と 地上の 空間…

この 素晴らしい気持ちを

胸にしつかりと焼き付けておきたい

通りの様子は 何も変わらない

日常の生活も 変わらない

私の心は 清々しい気分で満ち足りている

秋の終わり

十一月も 後二日…今日も 良い天気…

明日は 激しい雨が降るらしい

風に吹かれながら 車椅子でスパーへ

少し強い風も 心地よい

公園には この時間には遊んでいた

幼稚園児の元気な姿がなく 淋しい…

幼子連れ親子が二組だけだった

紙オムツと オムツ用パッドを買って

お父さんの為に 焼きプリンを一個

何時ものように 川べりを…

川面が揺れて 鴨の姿も見えない

誰もいない公園の中を よこぎって道路へ

公園端には 寒くなり冬枯れした 枯葉の中を

チンチン…チッチチッチ…と

小鳥たちが 楽しそうに 飛び回っていた

明日の雨にそなえて 殆どのビルには

洗濯物が 風に揺られて舞っている

明後日には 寒波が来るらしい

帰ってきたら 腹減った…腹減った…

もちよと 待つて下さい…

紙オムツに オムツ用パッドを セットする

今夜は 焼きプリンがあるからね…

昼は 海鮮鍋 夕食は海鮮チゲへとリメイク

カキが 沢山入っているの

スープだけでも 少しは栄養が取れるだろう

私は キムチを 沢山入れて食べよう

◆吉田圭佑 東京都

雨天・楠・地平

「八月十四日、未明

関東甲信越を中心として巨大な雨雲が上空に居座っております

上空数百メートルを厚く雲が覆っており

明け方まで落雷や豪雨に注意が必要です

また山形には避難警報も発令されており

…」

光った

来る 来る

来る

来た！

怨念(もしくは希望)の数々が

九天より落下し

窓に打ち寄せる

部屋へ氾濫する

この千億の情念がスクラムを組み

全てを散り散りにする

T ヤ ら

ト 快

タ ッ

ア

さ

ロ

シ

晴

良シツく

インネ

女

地球に降り立ってしまった怒りからか

死んで南も無く失望したからか

女胎へ潜り込みたい寂しさからか

愉快だからか

意図がまるつきり分らず

怨念たちが独自言語で捲し立てている

ものすごい大声の

一斉に交わされる会話に

私は交されずじつとしている

ブ株 火子 同 大

リ 式 は 供 級 好

ン 会 火 必 は 生 き

は 社 急 要 必 大 は 過

絶 必 は の ? 要 統 要

対 要 必 用 ? 領 ら

に ? 要 は な

じつとしている。

と ひ ひ 速 犯 五

思 ま 保 も す 罪 月

っ わ 険 じ ぎ 者 雨

を た り は いる は を

殴 を 必 必 残 集

れ 焼 要 要 念

！ く ? 君 ? 無

！ の 念

砲弾の降る夜より

嵐の夜の方が

よっぽど寝つけねえよ、とドイツ国民

私たちが大海原の真ん中で

生き残れているのは

息子の白蘭を供えたからです、とハワイ国民

絶滅した言語の分だけ

機を織りまして

朝、もみの木に掛けるようにしています、とロシア国民

蘭茎を見せるな

殺されたいか、と日本国民

キリエ、エレイソン

!!
!!
!!!!
!!!!

!

!!

!

!

!

!

!

!

!

!!!

!!

なぜ国境があつたのか
土地が隆起していたからか

人々の巡礼の跡なのか

飛蚊症の男が地図を区切ったからか

流星群の落ちた先だったか

雷の落ちた先だつたか

未だ、雨止まず

降りしきる雨だれ

降りしきる黒煙

降りしきる紙片

降りしきる言説

降りしきる恋

降りしきる明日

雷は、帰っていく

雨は止まないけれど

今はただ

おやすみなさい

骸の上で

千億の情念の上で

楠の木の根の上で

降りしきる闇の中で

降りしきる無音の中で

私たちが未だ

知ることのないものの上で

◆菅野周斗 千葉県

夜毎にワインを呑む母は

人生で流した鮮血を取り戻すように

焦っている背中を向ける

そんなに急がなくなつて

そんなに震えなくなつて

貴女はまた血を流すでしょう

呑めば呑むほど流れる血

子宮にまで満ちたワインを

貴女はまだ呑み続ける

もう叫ばなくなつて

もう掻きむしらなくなつて

貴女の脅威は去りました

貴女が悠久の摂理に気づき

息子を抱きしめるのが務めだと

振り向いた時

わたしは貴女の流した血で溺れている

◆ANGE 愛知県

いけないで

悲しいを超えた幸せは私にはあまりに毒すぎた

針を振り切った先にある

反動を恐れるゆえに伏せた目の先

毒牙にかかる喉の奥で身動きできずにいる

きつと吐き出してはいけないものを

もうてばなしてしまいたい

善も悪もとうめいに

みとおす私が生きる未来を

誰か汚してはくれませんか

このままいきをしていくには、

この世界この時間にめをあげているのは、

とてもとてもくるしいのです。

まっくらやみにおちながら

笑つてまたねと言えるひとにいる

まぶしいひかりにかこまれて

それでお手を差し伸べられるひとにいる

前を向いていきなさいと

教えてくれる

たくさんの人たちがだいすきです

それと同じくらい

生も死も同様に不可逆であることを信じるままに

すすまないことを選ぶ自分もだいすきだから

確かに私はここまでできた

ここからは不確かに、私をいかせてあげてもいいかもしれない

まだ誰も知らない世界へ

新たな一步を踏み出すだけだから

だから心配しないでつて、わたしは笑つていえるから。

◆御手洗智高 山口県

即興曲

街の曲 即興曲が 聴こえてくる

作曲者不明で 聴こえてくる

淡い午前の 薄水色の 空気の色が 踊り出す

アスファルトから 滲み出たのは 濃彩な色

さわさわと 遠くの方で 浮遊している 話し声

眩しい光に 戯れている

楽譜が空から降つてくる

残酷なほど 澄んだ色した アイスコーヒ―

冴えた氷が グラスの中で 束の間の 名残を歌う

かつて泳いだ 月夜の海へ 何度でも

朝の白みを 知つてはいても

楽譜が空から降つてくる

ワンピース 缶ビール

煙草と金物

戯言の 話し手は

買われないアンブレラと勘ぐれば

楽譜が空から降つてくる

◆竹之内 稔 兵庫県

知らない朝

男の子の朝はいそがしい

「さっさと来なさい。何してるの」

そこにも ここにも 街角には 悪の戦闘員が隠れているから

ビルとビルの隙間 路地裏のうす暗かりに 必ずいる

悪の戦闘員が きつと 我々を狙っている

「そこに昇らない。また花壇を壊すでしょ」

背の高い母親にときどき 手を引つ張られながら

無数の見えない敵と 戦い続ける 男の子たち

知らないこと 知らない動物

知らない漢字 知らない人 と 出会う日々

トナカイの鳴らす鈴がうるさいから、すぐ外せ

昨日の枕元に プレゼントを置いてくれた サンタクロースは

停めた櫓に 駐車違反のシールを貼られ 怒られる

遠いウクライナでは

知らないミサイルが降ってくる 毎日

それって、降ること、知ってたんですね

知っていることなら 安心なのか

知っている人なら 安心なのか

知ってる駅で起こる痴漢や

知ってるお客様から怒鳴られる日々

体調が悪いので、今日は戦いません

背広姿のヒーローは

知ってる日 知ってる場所

知ってる時間だけ戦ってくれるのか

「パンダ、見たくないの。早く、急ぎなさい」

動物園に着くまで

いつたい、いくつ 知らない駅をすぎるのか

降ってくるミサイルに悪も正義もなく、皆殺しです

いつか 知つてしまう日が 来る

いつか やつて来る

その日まで

男の子の朝は いそがしい

◆星乃刹那 東京都

人格夢

寝ようとして、足がなにか私に訴えて来ます

ただを捏ねる子供のようにジタバタと暴れた後、冷めやまぬ興奮がくす

ぐったい

学校に行こうとして、右腕が酷く拒みました。そしてなんども床に腕をバンッと打ち付け、拳句その手に刃物を持つて布団を刺し、左腕を切り裂き、それはもう大暴れをした後、疲れたのか右腕の力が途端に抜けました

会話をしている途中、相手が離脱したら、体のうちから何かが湧き上がって、私はソレを必死に抑えようと抵抗し、悶えました。

布団を転がり、落ちて、左腕は激しく床に腕を叩きつけ、硬い箱の角に打ち付け、鉄の棒に当たり散らしました。

やがて私は引つ張られるようにしてその鉄の棒に頭を思い切り打ちました。

何度も何度も、しかしやがて疲れて、バタリと倒れました。

それでもなお、左腕は何かをしようとひとり、動くのです。

私は何度も、制止するように言い続け、反抗しましたが、不思議と左腕は私の命令を受け付けませんのです。

まるで糸で操られているように左腕が意志を持つているようで恐怖を感じました。

それから私は独り言が多くなりました。

自分の中にいるであろう、何か、に語りかけ、談笑し、それが興奮して暴れたり、悲しくて暴れるのを必死に抑えて、宥めました。

しかし、その子は私の言うことなんて何一つ聞かず、好き勝手にやりま
す。

そんな手にかかる子供を私はいつしか制御することを諦めていました。

ああ、ほら、また、今度は右足が、いや左足が、違う左腕だ、そうじゃな

い右腕だ

いや、身体が、呑み込まれるのを感じました。

ああ、これは、本当にまずいなあ…

どこか夢を見ているように

いや、これは夢ではない

しかし夢だ

夢から覚めた私の体はボロボロになっていた

四肢には切り傷が無数にあり、肉が抉れて血が滴り落ちる。

首にも傷があり、頭は酷く痛い

私は夢で見た

私が刃物で自分の体を切つて、体を家具に打ち付け、頭を壁に打ち付け、
そこで夢は終わったのです。

額から生暖かいものが垂れてきます。

私は既に立つことすらできません。

立つと足がとても痛いのです。

当然です、足は相当切られているのですから

その時の私は何も感じ得ませんでした。

涙すらも出ず、悲しいとは思ったけれど、悲しむことすら疲れるのです。

遠くで誰かの泣き声が聞こえました。

私はいつの間にか眠っていたのです。

声の方へ向かつて歩くとちっちゃな自分が泣いていたのです。

また夢か。

私はすぐにこれが夢であると確信しました。

子供の自分は声を押し殺して泣いています。

顔は見えないけれど、それが自分であると私はそう確信していました。

泣きたいのはこちらだ。

自分の涙が全部目の前の子供に取られているような気がして怒りすらも感じてくる。

僕は子供を殴った。

子供はまだ泣いている。

もう一回殴った。

まだ泣く

僕の怒りはどんどん増して爆発しそうだ

子供に掴みかかった

子供は僕の方を見て

不気味に笑った

ああ、そうか……

これも夢か

◆はなだに 岡山県

出立前

足首から 右上へ さらう

海をすすむ 左下へ おちる

足裏から 右上へ さらう

海をすすむ 左下へ おちる

くもり空で ガラスを すかした

足首から 右上へ さらう

海をすすむ 左下へ おちる

足裏から 右上へ さらう

海をすすむ 左下へ おちる

腰を落とす 貝は欠けていた

足首から 右上へ さらう

海をすすむ 左下へ おちる

足裏から 右上へ さらう

海をすすむ 左下へ おちる

水際の魚 白濁した目が

死んでいた

足首から 左上へ さらう

海をすすむ 右下へ おちる

足裏から 左上へ さらう

海をすすむ 右下へ おちる

足首から 左上へ さらう

海をすすむ 右下へ おちる

足裏から 左上へ さらう

海をすすむ 右下へ おちる

次はどこへ行く

足首から 左上へ さらう

海をすすむ 右下へ おちる

足裏から 左上へ さらう

海をすすむ 右下へ おちる

◆しんり 熊本県

「コトバ」化できないせいで

こうなりたかったわけじゃない こんなしたかったわけじゃない こんなこ

とがしたかったわけじゃない

こんななりたいわけじゃない

こんなしたいわけじゃないこれがしたいわけじゃないこうしたくないこん

なしたくないこうなりたくなかったおさえられず…こんななりたくない
こうなりたくないこんなことしたいわけじゃないこんなしたいわけがないなど
ど…あたしだけじゃない、きっと、他のたくさんの人も…

例えば私の円形脱毛だつて、そう。抜いたのは自分だし、私は一時期眉毛
も全部なかった…ストレスでぜんぶ抜いてしまつていたんだと思う(もちろ
ん脱毛だけではなく、8キロくらい数年で痩せたり、夜や夜中もずーつ
と考え考えたり考えてたり塾にいるときも…とか、こころが上がつてく
ることができなく…こころがずーつと沈んだままずーつと上がつてこれな
い上がつてこない状態上がつてこなく…希望が感觸的にわからなくなつた、
生きる希望がなくなつたなどなど言いだせばほんとうにキリがなく…
いのち への影響)

1日に3 Lも4 Lも、飲むものを大量に飲んだり、そんな一日一日を
何年間も長い間…とか、精神の病院に入院したとき含め抗うつ剤や睡
眠薬など精神関係の薬を(強い薬含め)多いときには(二日)十個以上を毎
日毎日…そういう日々を続けたり、

トラウマや PTSD、いまでも続いている過去を卒業できていない状態…(過

去が終わっていない、ぜんぶがスッキリ終了していない、終了できていない、完了していない、昇華できていない、続いている、いまま過去を生きている、状態…

そんな私の“いのち” “いのち”の状態、状況“いのち”…

例えば自殺する人だつてそう、あたり前だけでももちろん自殺したかったわけじゃない

いじめられた人がテレビに出て、1回死のうと…みたいなこと言つて、だけでももちろんその人が死にたいとかつてわけじゃない

レイプ被害に遭つた人がその後の自傷行為…とかもテレビであつたけど、もちろんその人だつて自傷行為がしたかったわけじゃない

悪^{あく}はいつから悪^{わる}なんでしょう、だから裁けない

傷はあつても、それがどんだけでも、どれほどのこと(もの)でも、痕がない

から証拠がない、こんだけ…つて言えない
それがどれほどでも

こんなやつ

弱つてたえてこんな…こんなに…

“いのち” “こんなやつ

ここまで…こんなやつ

◆LYU JIAYAO 東京都

日本語学校に壁はない

出るつて言つた

お父さんは学校をやめたいかと尋ねた

クラスメートと夕食を食べたいと言つた

お母さんは学校をやめるように頼んだのですか？

私は戻って言った

お父さんは学校がとても遅く閉まったと言った

ああ、お父さんは学校に壁があると思っていた
門をくぐらないといけない

ええ、私の母は学校には壁があると思っていました

夜中に帰って壁を登る

でも、日本語学校に壁はありません

ドアマンもいらない、壁をよじ登る必要もない

日本語学校に壁はない

壁を越えずに深夜に帰る

我在日本學校沒有牆

我說要出門了

爸爸問要出學校嗎

我說要和同學吃飯

媽媽問要出學校嗎

我說回去了

爸爸說這麼晚學校都關門了

喔 我爸爸以為學校有圍牆

我出門要過門崗

呀 我媽媽以為學校都有牆

我半夜回去要翻牆

但是 我在日本學校沒有牆

沒有門衛也不用翻牆

我在日本學校沒有牆

我深夜回去不用翻牆

◆玉井秀男 福岡県

花歌留多

年が明け、行商から戻ってきた父は、黄色く濺んだ眼の大男。

氣に入らないと大声で怒鳴り散らし、すぐに暴力を振るう父。

その父が、酒に酔つて珍しく機嫌のよい時に、いかさま交えて遊んでくれた花札。

その大きな手で、めくる絵札がきれいだった。

怖かった父と遊んだ思い出の絵札の花歌留多。

磯の松 枝葉を抜けて 吹く風の 音色に合わせ 鶴の一鳴き
梅の花 今は盛りと 鶯は 匂い携え 春を告げ行く

川端に 花見幕引き 満開の 桜を愛でて 君と親しむ

暑い夏、居酒屋で知り合つた女は、三つ年上のフィリピーナ。

お世辞にも美人とは言えないが、肌白で乳のでかい女。

窓を開け放した部屋で汗まみれで抱き合い、裸のまんま何時間も花札ゲーム。

些細な事で喧嘩になり、女を殴つて蹴り飛ばす。

何も言わずに姿を消した女が残していった絵札の花歌留多。

時鳥 甘い匂いに 酔いしれて 藤の花房 掠め飛び行く

杜若 水面煌く 八つ橋の 川べりに咲く 薫風受けて
艶やかな 大輪の花 咲かせたる 牡丹の上で 蝶舞い遊ぶ

秋の夜、マンションの一室で、知人に誘われ花札賭博。

一晚で二十万稼いで、二時間で八十万負ける素人博打。

突然のガサ入れで、窓から飛び降り逃げ回つて隠れた公衆電話の箱の中。
ボックスで座り込み、ただただ怖くて膝を抱えて震えていた。

汗ばんだ手の中で、しっかりと握られていた絵札の花歌留多。

野辺の萩 したれる花の その下で 臥猪の床に 猪集う

満月に 白銀色に 染められて 山の麓で 浮かれる薄

重陽の 節句に呼ばれ 盃を 交わす相手は 一輪の菊

年の暮れ、寒々とした四畳半。テレビも家具も何もない。

古びた石油ストーブの上で、薬缶がせわしく湯気をあげる。

話す相手もなく虎落笛を耳にして、独りソーセージを肴に湯呑で焼酎

あおる。

万年床で横になり、手すきびで絵札をめくり花札遊び。

染みだらけの布団の上に並べたきれいな絵札の花歌留多。

秋深く 燃え立つ紅葉 その下で 女鹿求めて 牡鹿嘶く

道風が 見つめる先の 川岸の したれ柳に 蛙飛びつく

神聖な 五三の桐の 鳳凰は 最後を締める 極月の微

◆長尾芽里 福岡県

寂しさと自慰

ふいに訪れる寂しさに

どうしたらよいのか途方に暮れて

ふいに左の乳房に触れる

まだ誰にも触れられたことのない

わたしだけの膨らみは

暖かさとも柔らかさでもって

幾許かの安らぎをくれる

いつかあなたに求められ

寂しさなどとうに忘れて暮らしたら

この膨らみをわたしではなく

あなたのために捧げられたら

◆時見ねな 東京都

見すてられても

見すてない

軽んじられても

軽んじない

見つめられなくても

見つめる

愛されなくても

愛する

叫ばれなくても

見すてられても

叫ぶ

刻まれなくても

刻む

抱きしめられなくても

抱きしめる

紡がれなくても

紡ぐ

打ち捨てられても

ひろう

うたわれなくても

歌う

褒められなくても

ほめる

忘れられても

忘れない

◆池田謙太 東京都

どす黒い魂が

僕の内側に堆積している

皮膚の至るところを

刺すような

ひりひりした感触

痛みではない

哀しみではない

拒絶の暗い淵を

あてどなく彷徨う

不在

途方もなく続く

どす黒い無数の手が

私の身体を蝕む

身体をよじれば

僅かな光を見いだす

その光さえも

盲目の私には見えない

◆久保俊彦 京都府

椿の花が

ぽとつりと落ち

つばに波文がたつ

紅の名残を留めおき

水に帯状となり

椿さす赤

血糊が蠢いているようだ

切先で撥ねられた首

流れる赫は空氣にふれ

青漆と混じり酸化がすすむ
せいしつ

滴った血痕の光景は

金氣臭いに

あはれを感じる

春の庭には

鳥もやつてくる

首をかしげる仕草は警戒を怠らない証

天敵に狙われることを知っているから

花糸が切れ落ちた花も

生死の攻防も日常に潜んでいる

季節が進むにつれ

辺りに大氣を空振させるほど

赤い花々が舞い散る…

◆千年光生 千葉県

ウォーク インザ ミュージック

5時！こじこじだ！

足を運べ 前へ 横へ 前へ

揺らせ、揺れろつあたま

歩く

歩く

歩く

私のリズム

でそして、きみを！ミュージック！

ウォーク インザ ミュージック

ウオーク イン ザ ミュージック

迸る

音の

濁流その中を 私ひとりで

美しい、音

希望の、連なり

閉じ込めて

進む

孤独の

よろこび

これは眠りと同じ

揺らめく重なる

ガラス

の

光を避け

暗い闇の

電灯が

ぼつ

ウオーク イン ザ ミュージック

ウオーク イン ザ ミュージック

静かなアス

ファルトを擦

つて前へ

前へ、前へ、前へ

◆大野博司 埼玉県

しにがみをみた日

しにがみをみた

仕事でトラブルがあり、

二週間インドネシアへ出張中の休日の夜

夕食帰りに後輩と

薄暗い路地裏を歩いていたとき

しに神をみた

まっすぐ歩いていたはずの僕が
元氣いっぱいにはジャンプしたらしい

死神をみた

僕がジャンプした先は
インドネシアの路地裏の

汚い汚いドブ川で

水なんて流れてなくて

ゴミばかりの深い川だった

右足の脛を深く切り

中から筋肉が顔を出していた

頭から血の毛が引くのがわかった

強く打った脇腹は紫色に晴れ上がった

もし、尖った何かが突き出ていたら

間違いなく僕の体を貫いていた

それでも僕は

翌日も車で一時間かけて現地の工場へ行き
足を引きずりながら働いていた

工場長がそんな僕を見て

慌てて現地の病院へ車で連れて行ってくれた

診察まで二時間も待ったけど

傷口に消毒液をかけて

絆創膏を貼ってくれただけだった

死神だった

僕はただ黒い影に呼ばれた気がして

付いていかなきゃと思ったんだ

ココロはワクワクしてたんだ

深い傷を負った右足を

日本に帰国して医者に診てもらったら

足を切断するかも知れないと言われた

咄嗟に、いのちがあつてよかつたとおもつた

母親になんて言おうかとおもつた

子どもたちにどう話そうかと考えた

足を切斷する手術をしたら

会社はどれくらい休まないとだめかなあ

とか氣にしている自分がいた

結局、なんとか足は切斷しなくてよかつた

二ヶ月松葉杖をついて会社に行つた

朝のラッシュはつらかつた

それでもやさしい人はやさしくて

席をゆずってくれる人がたくさんいた

優先座席に座つていたお婆さんが

お兄さんどうぞ、

と満面の笑みで席を立てくれた

日本はすごいなとおもつた

ニンゲンは尊いなとおもつた

ただそれだけで泣きそうになつた

死神だつた

僕はただ黒い影に呼ばれた氣がして

付いていかなきゃと思つたんだ

ココロはフワフワしてたんだ

死神をみた日

死にかけたぼくは僕の闇をみた

そして、生きている僕はニンゲンのひかりをみた

しにがみを見たぼくは弱いのかな

まだ生きているぼくは強いのかな

ぼくは生きている

きつと、生かされている

ニンゲンは弱くもあり強くもある
だから、ニンゲンなのだ

◆へちかん 神奈川県

悲しい島 佐渡島 金の島

鎖に繋がれた男たちが

二度とは帰れない深い穴に

ミルクの様に注がれて

己の不幸を嘆く島

夢の島 佐渡島 金の島

黄色く輝いた土の山が

頬紅鮮やかな女たちの

作ったばかりの絹の帯

縁取る刺繍となりました

佐渡島

哀れな島 佐渡島 金の島

夕日が映し出す島の影に

野菊の花びらを浜辺に撒いて

幼い子供が手を合わす

大きな墓石 佐渡島

◆井中冬夜 愛媛県

抜毛症

また睫毛を抜いてしまった

無意識のうちに抜いてしまっていた

気付いていても止められない

取れなくなるまで抜いてしまう

また睫毛がごっそり無くなってしまった

恥ずかしくて人に見られたくない

でもやつてしまったのは自分

何で抜いてしまうのだろう

やつと生え揃ったところだったのに

また始めからやり直さなければならぬ

どうすれば止められるのだろう

無くなった睫毛を見て涙を浮かべた

◆中村真理子 兵庫県

残像

あなたは見たことがある？

朝の空気が細かな粒が密かにゆれる瞬間

おはようと

手を振った時、消えてしまった――

色ついた葉をきれいと言い

落ちた葉を、ほうきではくのです

集められた葉は、冬のはじまり

季節は見ようとしなくてここに始まる

濃い霧がつつむ

円山川の向こう岸

ぼんやりとしたヘッドライトが

私と世界をつないだ

黒い大きな森が、包む夜

けーんとないた動物が、生きていることを教える。

私は世界の片鱗

目にも止まらぬ速さでかけぬける

こわい。そして、知りたい。

◆何処カ野七氏 東京都

果ての果てのひかり

へ世界はどうしてわたしじゃないの？

偽物のエデンで眩く。

盲目の少女と苦むした園生、ゆびきりの思い出。

へねえ、いつかふたりでさ……

ひつくり返った大アルカナ最後のカード。

地平線が落ちてきた。もう出発しよう。

西へ、西果てへ。

惑星中の洗濯物舞い散る夕暮れ。

もう恐慌ははじまっていた。

いつかふたりでいちごケーキを食べよう。

臆病という名の荊を胸に、少女は、

清廉という名の盾を手に、わたしは――

つないだふりの手をほどく。

瓦礫の中から螺子の飛んだラジオが眩く。

へ世界はどうしてわたしじゃないの！

水筒におさめたちいさな海たずさえ、

世界の終わりに、ドラゴンフーズで、

水平線を超えて、ひとりぼっちで。

グッドモーニング・グッドバイ おやすみの挨拶。

ここは霊廟、もう花も咲かない方舟。

◆高須健之 千葉県

若かったね

泥んこにまみれて、這いつくばって

やつとのことで貯めた入学金

二年遅れて、夜間高校の門をたたいた

入学してはみたが

教師と生徒の、方向性のギャップに驚いた

教師に言わせりや、東京下町名門校

大学に行くのには

歴史など、ゴロ合わせで「年号覚えろ」だと

あきれたぜ

コンクリートむき出しの講堂跡には

東京大空襲で逃げ込み死んだ、それらしき油の跡

「母さん、熱いよ。焼け死ぬよ」

と叫んでいる、

考えさせられるぜ

善悪とかね、人間性、哲学を教えろってんだ

父は戦死の母子家庭

昼間は工場で汗をかき

夜は薄暗き机に座り勉強だ

疲労困憊すれば、歯茎がガタガタ、血が滲み垂れてくる

そんな薄暗い学校には、貧困独特の匂いがあるのだろう

蝶が密に群がるように

お釈迦様が仏像抱えてやつてきた

十字架も免罪符を抱えてやつてきた

赤いのもきたぜ、マルクスとかいうのを抱えて

授業よりは面白かったが、俺などは、ひねくれ者

上から目線に嫌気がさして

反骨心がむらむらと湧き上がリ

宇宙の心を取り入れて

「新鮮な哲学教えてやるぞ」

と、俺が言ったらさ、あきれて皆が逃げ出した

若かったね！

◆岩崎俊郎 佐賀県

処暑の火曜日

処暑の火曜日はとても暑くて

少年のぼくは飼い主に裏切られた猫のように
日陰を探して人通りの絶えた町をうろついていた

ぼくは大人になりたいまでも

鉛筆とかアイスピックとか妻の八重歯などといった
先の尖ったものが苦手である

それは幼い頃に突然咲いた母の白い日傘が

ぼくの目をかすめたからだ

母がそれを詫びたのは 十年後

ぼくが大学に入って最初の夏の帰省の時だった
母はたぶん油断していたのだと思う

ピアノの上に小さな木彫の持仏があった

ぼくはそれが水子地蔵だとすぐに分かった

三つか四つのとき

お前も産まなきやよかった、と

母がふとつぶやいたことを

思い出したからだ

それにしても あの時

母が弾いていた曲はなんだつたんだろう

いつのまにかそばに立っていた母が

悪かったわ、お前の右目駄目にして

許してくれるわね

と言った

母はもう長いことピアノは弾いていないようだった

ぼくは埃のはらわれていない鍵盤蓋を哀しく感じながら
黙つてうなずいた そして

やつと母にすこし許されたような気がした

施設の母がぼくのことを思い出さなくなつてから

五年目の夏が過ぎた

処暑の火曜日

ぼくは なぜか

白い日傘をさした身重の母のことを考えている

おそらくこんなふうに

許すあても許されるあてもなく

了らぬ夏を彷徨うしかないのだろうと

思いながら

◆前川花鈴 京都府

潔癖

「あなたを愛するために生まれてきた」と言えない弱さが、わたしだ

「何者にもなれなくていい」と言えない弱さが、わたしだ

無菌室の天井 誰とも手を繋がない場所の夢を

まぶたのうらに見つめながら

どうか心臓が凍ってほしいと 繰り返し 凍ってほしいと 繰り返し
考えた

なんてことのない生き物だった、とあなたに笑ってほしい、

わたしが死んだあと、解剖してほしい。

失つても、いたくもかゆくもない、と思つてほしい。

あなたのために生まれてきたわけではないわたしを、

どうか惜しまないでほしい。

与えられた愛をかみくだき すりつぶし のみこんで わたしの爪にし
た

その爪であなたの手の甲に線をつけた

すべてをなげうてないわたしの不誠実が いつかあなたを傷つける

そんな夢を 繰り返し そんな夢を 見ていた

「愛している」と言ったら笑うんだろうな
心を半分あげてもいいくらい好きなのに

◆夢 佳苗 埼玉県

沈む

一人になりたい

誰にも影響を与えず

誰からも影響を受けず

ただひとりで

深く静かなところまで

沈みたい

そうすれば

誰かの何かで傷つくことはないし

誰かを傷つけてしまったかもと

悩まなくてもいい

ただそこに沈むだけ

何も考えたくない

何にも左右されたくない

私は私で

ただ健やかにいたいから

それは叶わないことですか

ああ一人になりたい

深く深く沈んでしまいたい

そこで差し込む光を

ぼうつと眺め

綺麗だなと思いたいんだ

体に心にその光を受けて

植物が光合成をするように

私もいらぬものを吐き出して

必要なものを溜め込む

そうしていつか

また沈んだ底から

這い上がれるといい

◆吉岡幸一 福岡県

父のいない部屋

誰もいない部屋で倒れた父は

言葉を残すこともなく旅立つた

冬の終わりのよく晴れた日に

開かれた窓から枯れ葉を招いて

畳のうえで仰向けになっていた

やわらかな日差しが頬を照らし

小鳥のさえずりが絶え間なく

川音に混ざって聴こえた時刻

誰もいない部屋で父は逝った

母の仏壇のある部屋でひとり

将棋をさしながら呟く独り言

人付き合いが苦手な父の話題は

いつも天気とテレビの話ばかり

ときどき痛む足を引きずって

窓の外を飽きるまで眺めていた

母が亡くなって汚れていく部屋

視力の落ちた目に汚れは入らず

積もる埃に気づくこともなかった

誰もいない部屋で倒れた父は

思い出だけを残して逝ってしまった

亡くなる九日前に降った雪は黒く

ベランダの隅で固まったまま

孤独ではないと否定しながらも

さみしそうな顔は隠せないでいた
母に向かつて手を合わせていた父は
手を合わせられる側になつた
黒い雪は溶けそうになかつた

ひろい家で一人暮らしをつづけ
遠くで暮らす息子を気にかけて
買った弁当ばかりを食べながら
出がらしの茶を嚙っていた父
人は一人で生まれ独りで死ぬと
強がつて言っていたこともあつた
息のない顔はどこかほつとして
安堵したように見えた
伸びきつた眉が風が風にゆれていた
誰もいない部屋で倒れた父は
孤独死だつたのだろうか

位牌がふたつ並んだ部屋は空っぽ
締め切られた窓とカーテン
ときどき訪れては光と風を招く
父がいてもいなくても

川音に混じつた小鳥のさえずりは
部屋のなかに届けられる
将棋盤の駒が動くことはない

安らかに
父よ

◆黒溝ピワ 福岡県

身心脱落

何かより優れている事を
証明する度に
表面だけが煌びやかに光を放つ

その度に 肩に重たさがのし掛かった

飽和状態の世界

360度 何処を見渡しても

今のままで生きてはいけないような

そんな氣にさせられる

疑う隙も無い程全てが一致したシステムを
いつも逆から覗いていた

差し出された物の中に

欲しい物なんてひとつも無く

虚栄の理想は

手に入れたところで

醒める夢

真理はいつも暗がりに一陽を差す。

完成されたシステムの内側に

何一つ見つけることの出来ない焦燥感

流行 好み 憧れ

商戦の鮮やかな花がスクリーンに咲き誇る

サブリミナルは意識を知らぬ間に錯覚

優劣を操るつもりが気付けば操られ

枠からはみ出た者は敗者だと

仰せの様に取り組むだけ

虚しさは永久に葬ればいい

メッキの賜杯を掲げれば

沸き起こる喝采

それでも満たされぬ日々は続く

チラつく物質と対価に目が眩み

本質は置き去りのまま

マジョリティに群がる

システムは水面下で侵食する

そんなものが美学だという世界で

是が非にも見習わなきや

何とか其れ等に同化しなくては

拭えない違和感を忘れなきや

何一つとして懂れる所は無いけれど

使いやすいデフォルトに習い

フォーマット化された人生に

チャンネルを合わせようとする度に

何かが悲鳴をあげた

今日も冷めきつたハートが

逆さまに吊られ白々しく世を見る

今日も今日とて

どのスクリーンにも蔓延る

声高なジャッジメント

己の株上げに血眼になる

もうわかったから黙ってろ

内省という言葉も知らない愚か者め

浅はかな笑い声の渦の外

声なき誰かが踏み台に

目に映らないものはいつも
全てが無かつた事になる

ごみごみとした
プールの中で

誰とも共鳴し合えず
狭く薬臭い水の中
ぬるぬると不快に接触しながら
必死にもがき探した
何かを表現しようと

泳ぐ場所は他には無いと
知らぬ間にいつしか
自分を捕らえて離さない
見えない檻と鎖にハツとする

真理はいつも暗がりに一陽を差す。

どんな生き方だつて

心臓は拍動を繰り返し
肺は呼吸を繰り返す

ココはとうに息絶えているというのに

抜け殻は痛みさえもう感じはしない

心を失くしてまで

同化しようとした世の中は
私に何を与えたらうか

まだ見ぬ微かな希望に

人生の限られた大切な時間を捧げてきた

優しさとは犠牲心の違いについて

深々と思慮する時間を

自分に与えることすら出来なかった

真理はいつも暗がりに一陽を差す。

撃ち墜とされた冷たい地面の上

立ち上がる気力も消えかかるとき

地面を伝い聞こえてきたのは

内側から生命を叫ぶ

心拍動

未だ外部から清氣を求める

弱く小さな呼吸音

この期に及んで

生命活動は続いていた

健気に命を繋ごうと

命の神秘に胸が潰れそうになった絶望の日

真理はいつも暗がりに一陽を差す。

真理はいつも暗がりに一陽を差す。

目を瞑るよりも

はるかな闇に立ち尽くす時

人は初めて知る事になる

外の世界には何も無く

真理は内在していたと

この世に生を享けたその日から

神殿は内に静観し

ただただ鎮座していたと

真理はいつも暗がりに一陽を差す。

燦々と輝く来光に目を細める時
やっと知るのだろう

夜明け前が最も暗かったことを

従い続けた

虚構の美学

抜け出す事を後押しした

カルマと苦境へ

そつと掌を合わせ

目礼し永遠のお別れを

混沌に背を向け

揺るぎない真理へと

歩き出す

やっと今、

生まれて初めて

私は私になれたの。

◆行灯 東京都

Like a Lice Life

生まれてこのかた、全うなんて知りやしない

嘯く声を聴く奴もいない

「こんなにキレイな夜なのに」?

笑っちゃうなア そんな感情とうの昔に落としたろ

酒瓶片手にネオンの下をぶらつけば

思っちゃないことするするり

回る視界と吐き気を催す甘い臭い
ふらついた足で 何かを踏んだ

あけすけな奴に嫉妬して

醜い奴に寄生した

上手な奴を引きずり降ろして

空いた席に上がるでもなく

また誰かが座ればチクチク刺した

「楽しかったか？」——ああ勿論！

そうじゃなきゃこの虚を埋められない

「もう明日から来なくて良い」

無能の烙印と背中を押された

俺の何が悪いんだ！

汚ねえ路地で潰れて啼いた

街行く人の眼には留まらず

踏み潰されても気付かれない

誰かが嗤った「憐れだなあ」

ああ、

虱のような、人生だ

◆水落悠楽 茨城県

悲しみ

星も見えない夜に

明るだけの月があつた

信号を待つていた僕は

身震いするほどに悲しくなつてしまった

冷たい風が僕の前を通り過ぎて行く

信号が変わつたので

横断歩道を渡つたが

僕は何を思つたか

悲しみを

おいてけぼりにできなかった

◆麻月 奈良県

立秋

植木に水をまく女性がいた

麦わら帽子をかぶり

黒く長いワンピースを着て

あたりは蝉が鳴き

西日に照らされている

私の首筋には汗がつたっていた

なのに彼女のワンピースは涼やかで

銀色に光る水滴をふりまいている

恵みの雨に植木は潤う

緑が輝く

ああ その水を私も浴びたい

夏の日差しに弱った木々のように

私は疲れ果てていた

なんでもいい

命を与えてほしかった

どこかでヒゲラシが鳴いている

けれど

夏はまだ終わらない

◆E 静岡県

託つ

私は負の感情のデイスカウントストア

幸せとは程遠い存在

辺りはいつだって 曇りか雨だった

カラリと晴れた日なんて 無かった

静いという名の 寿命の奪い合い

人生という名の 負け戦

命という名の 不治の病

生き長らえる程に 災いが頭をもたげてくる

私の様な 弾け損ねのポップコーンには

死ぬ事よりも生きる事の方が難しい

希望アレルギー 滅びゆく命のカタチ

向かい風にも程がある

生は

「イク」「セイ」「シヨウ」「ウブ」「キ」

様々な音色を奏でる

しかし 結局のところは

死「シ」という一点に収束するらしい

身体という消耗品 単なる肉体の経年劣化

心が 人を永く見せているだけだ

こんな風に

薄汚い言の腐葉土が幾重にも積もり積もつて

時折 キュウとしみつたれた音を上げていた

澱みきつた頭の片隅で

今日も心を家探した

◆上原翔子 山梨県

偽物よ?と

笑つて揺れた胸を

触り

指先から奥の方へと

人工的な形が流れ込む

見たい?と

下着の中から現れた刺青を

ファーストピアス

触り

指先から奥の方へと

人工的な色が流れ込む

さよならの

代わりに零れた

キュービクジルコニアは

さよならの

キスをされて開いた穴を埋め

人工的な光で私を刺し続ける

◆万年秋 東京都

HENGE

フローリングの深海にほどけるととき

私は海月 無数の触手をゆらめかせながら

僅かな月明かりを頼りに揺蕩う

飼い猫が膝に座るとき

わたしは陽だまり あなたの時間をあたためるため

指先に愛を蓄えては コロコロと鳴る喉を撫でる

夜が昼を飲み込むとき

私は海 溶け合いたくて手を伸ばしては

その距離を知り ひとり俯く

彼女らと遊ぶとき

私は風 葉っぱも花もポリ袋でさえ踊らせて

からから笑う 無敵の時間

遠いあなたを想うとき

私は泥 醜く重く 熱い泥濘

欲しくて欲しくて 全部欲しくて

悟られぬよう 常人の型に流し込む

私は変化する

温度 において だれかの言葉一粒が

肺胞を満たし 動脈を伝つて

細胞を置き換えていく

制御不能で 煩わしくて

めまぐるしくて 愛おしい

花を買った 衝動的に

水仙

ナルキッソスにあやかつて 鏡の向こうを愛せればと

夕陽に沈むアパートに ひとりひとりと一輪

あなたの夢は

豪邸の一輪挿しかな

生花の主役かな

誰かへのプレゼントかも

健気に背筋伸ばしてさ

残念でした

五畳半で おまけに空き瓶

人生なんて そんなもんだよ

何も応えず 花は俯く

こんなはずじゃなかった？

もつときらきらした場所でみんなに愛されて

言葉の刃先はなぜかこちらを向いていて

放つたび 痛い 痛い

「ほら 水仙が可愛い泣き顔に見惚れとる」

夕焼け色の風が運ぶのは

転んで泣きじゃくったあの日の母の声

母さん 母さん 私を撫でて

可愛い子 大丈夫よと あたたかな両手で頬を包んでくださいな

泣き疲れて突つ伏す私に どこかの家の夕飯の香りが追い討ちをかけてくる

みんな誰かに愛されている

誰かが帰りを待っている

私はひとり 水仙に見下ろされるだけ

◆原氷 岩手県

わたしのいるべき場所

ああ わたしのいるべきところだ

ここ

もしくはある場所だ

ここが わたしの ところだ

哲学的思惟を重ねて

わたしに戻った

もしくは 秋の名残り

永久というものがあれば

それがわたしを形成していた

おそらくは 不和の中 世界との

ここに休息する

墓穴を掘った時もあつた

だがそれも終いだ

しばらくは 災厄を忘れよう

そして永遠に忘れよう

セクシャルなもの

もしくは 男性的なもの

もしくは 静寂

そこから

わたしがまた始まる

知恵が入り込み

生きるのが容易になる

作家性とは

おそらくは今を生きることじゃないか

◆苧屋紀子

栃木県

ホワイト

満月が照らすいつもの街路で

不意に取り巻く芳香に意識を奪われる

初夏のみずみずしさのトーンに合わせて

通りすがりの身体に甘く溶け込む

クチナシは夜に香りが強まるという

月明かりに浮かび上がる小さなホワイト

葉の茂る合間に控える清楚な花弁には

およそ似つかわしくない妖艶な香り

クチナシはなぜこの色を定められたのか

いいえ、ホワイトだからこそ

先に続くすべての彩りの源になれたの

バラのように幾重にも巻いた

フェルトの風合いの花弁に触れる

指先にしっとり濡れた唇を感じる

二度目に会ったとき

彼はホワイトのニットを着ていた

静謐な面影に私は笑顔を返した

およそホワイトに似つかわしくない

香りが立ち上ることに気付きながら

目を閉じて闇に佇む

ホワイトの残像を打ち消すように

冷たく照らす月を打ち消すように

夜に強まるというクチナシの香りに

迷わせられたことにして

◆葉子 千葉県

溶ける記憶

恋人になったようなふたりの錯覚

三十二才の私

電波の届かない田舎の貧困層で育ち、母方の祖父母の家は築百五十年

自分の部屋も作ってもらえず テレビも見せてもらえず 発言する権利

さえもらえなかった

星だけが見える僻地

恐ろしい家 いつか出ていかなくちやと

幼い頃から思っていた

ここは私の家じゃないからって

友達ができなくて 学校はつらくて

初めて幽霊をみたのは小三の時

わたしはわたしの身体から

抜け外れそうだった

ねえ、だれのせいでもないです。

高校入試の時に不安になつて勉強に逃げたら

入試で一位になっちゃった

それがわたしを余計に追い詰めた

目立ちたくなどなかった

普通になりたかった

個性などいらなかった

幼い頃から不眠に悩まされていたわたし

もう限界だった

十六才 自殺未遂をした

オーバードーズ

助けて欲しかった

誰も助けてくれなかった

両親はわたしが壊れていると

気づかなかった

統合失調症の薬を出され

はつきり病名を宣告されないまま毎日のように金縛りに苦しめられながら

無理矢理に身体を動かした

一人っ子の母方の祖父母の偏狭的な教育

母もきつと苦労した

父は婿であり

家を支配しているのは祖父母だった

ねえ、誰も悪くないです。

バイトの面接はなかなか受からなかった

その場に合わない答えばかりしてしまう

どうやってお金を稼いだのか

全然思い出せないけど

フルタイムで働いたことはほとんど無い

身体はずっと ぼろぼろだった

二十三才 父は何度も行方不明になった

母はヒステリーを起こし

私に八つ当たりした

夜中の海にひとりで行って

泣いていた

二十五才 残高八万円を握りしめ

二万七千円の部屋を借り

保証人は居なかった

あたらしいわたしが始まったみたいな錯覚

田舎を抜け出し

自分の部屋を確保して

ようやく眠れるようになった

移動の電車の中で

過去を思い出し 何度も泣いた

誰ひとりも私の過去や孤独に踏み込むことのないまま 何年か過ぎた

二千二十年 一月

陽性判定はないもののコロナが流行してすぐに感染した

バイトは無期限休業になり

私は不安になり 不眠になった

朝起きて夜眠る事は幼少の頃から

とてもむずかしいことだった

初めて出会った時

あなたは白髪だらけで忙しく

機嫌も悪く

あつという間にコロナ後遺症だという前提で治療を始めた

初診からでもオンラインで受診できるなんて

今思えばおかしい話

あなたが作り出した後遺症ではない患者が全国に何人もいるのではない
でしょうか

ねえ、あなたに傾倒した私も悪いです

あなたを最期の恋と思い

心の中に秘めていた

誰にも相談しないと決めていた

親に遺骨を引き取られたくない思いで

死後事務委任契約まで考えていた

わたしが異性と手も繋いだことがないと

あなたは知らず 診察室で私的な話をして

同情を買い 私を誘った

妄想の中でだけ恋人になり

私は心を吸い取られて

夢遊病になり壊れていった

苦しんだわたしに

あなたは同情し

身勝手な夢を見て

まるでアニメの主人公のようだとでも思いましたか

大腸カメラの検査をした日

あなたはやけに機嫌が良かった

今思えば根っからの変質者だったのではないですか

コロナ禍の中

私は暗闇のなかで天使の顔をした

悪魔に出会ってから一年経ち

惑わされ、狂わされ、

記憶を失い、徘徊した

漢字は書けなくなり、算数はできなくなり、

スマートフォンの使い方もわからなくなつた

コロナ後遺症外来という看板を

大々的に掲げ

メディアにも出演し

医師でありながら

深夜四時まで診療を続け躁状態で働き続ける

あなたは誰よりも治療を必要としているのではないですか

どう思いますか

現実が見えていないのはあなたか？

私か？

あなたは哀れな裸の王様に成っていく

性被害の犯罪者になるヴィジョンが視えた

あなたの分身がいないのは

あなたが孤独であるからではないのかしら

看護師さんは言いましたよ

痴話喧嘩にならなくてよかった、と

あなたは私に対し都合の良い夢を見て

いつも通り性的欲求を満たそうとして

人選ミスをしたのではないかしら

互いに間違えた泡のような恋だった

診察室で二人きり

私の孤独につけ込んで

精神科医でもないのにも関わらず

親と縁を切るようにと私に言った

父親と裁判をしているとか

僕の腕が悪くて死なせてしまった患者さんがいるとか愚痴を言っ

私の隠しておくもりの気持ちをこじ開けて

潰瘍性大腸炎だと知っているのに

血が出る、と言うと

月経の血？と聞いてきた

父に言わせればあなたは常習犯の変質者

奥さんが怖い、などと言って私を惑わせた

いつも通り、遊ぼうとしたのでしょうか

頭が割れそうで記憶がなくなりそうだと訴え
入院したいと訴えても無視され

ひとときは診察券も取り上げられた

精神科医でもないのに

靈感の話をすると一生精神病棟から出られないからしないほうがいいと

言ったりして

脅して

予想外に私が狂ったので

狼狽したのではないですか

看護師さんは言いました

あなたが思っていること言っているのよ、と

精神科の先生は言いました

そこへはもう行かないように、と

証明することはできないけれど

あなたはまるで犯罪者みたいね

恋人になつたような私の錯覚

それこそパラノイア

あなたもそうだった？

今ならばまだ間に合うと、羊文学の

OPPARTSという曲が聴こえていた

世界の救世主になつたかのようなあなたの錯覚

そのエンバイアにわたしは

危うく乗るところだった

これ以上の被害者が出ない事を、

祈るばかりの日々です

現実など所詮は夢と同じ、
視界のあちこちに曼荼羅が咲き、
パライソは近づいて
ほらね、誰も悪くないです。

あの日の歌の通り、
今ならばまだ間に合いますか？

縦書きの文章が読めなくなつて
服薬管理もできなくなつたわたし
この世で視えていることなどすべて
アカシックレコードから用意された
幻に過ぎないのです
時間だつて存在しない
物理学者がそう言つてるよ

恋人になつたような私の錯覚
もう魔法は溶けた
記憶を溶かされた

これ以上の被害者が出ない事を、
祈るばかりの日々です

「この世界はすべてフィクションです」

溶けていく記憶
ほんとうのことなど
ひとつものこつていません
私たちは恐怖を持つて産まれたから
さつさとあの星へ帰ろう

証明することは難しいけれど

とりあえずあなたは可哀想な人ね

◆田村全子 静岡県

季節病

夕べは一晚中

窓をたたく雨の音と 電線を唸らす風を

聞いていたような気がする

何の夢を見たかは忘れたが

余韻をひくような幸せはなかった

いつものように台所に立ち

洗濯物は部屋干し サツと掃除を済ませて

ゴミを出そうとした その時

初めてのよう な やるせなさ が こみ上げてきた

代わり映えしない毎日をこれからも過ごすのか

死は受け入れるが 今は準備ができていない

このままでは無知も同然ではないか

わたしが何者なのかを知りたい

この世のどんなポジションにいたのか

なぜ生きてきたのか

見えないやり残しもあるだろう

たいそうなことをしたいわけではない

今の暮らしが嫌だということでもなく

なにかを新しく始める覇気もないが

まだ止みそうにない小嵐の

あたたかい向かい風に髪を乱していると

なにかが呼んでいるような気がする

そうだ きようは春一番だ

◆芳賀悠樹 東京都

ノスタルジア

忘れましたか たまゆらの日々 温泉地

上流にかかる太鼓橋 その上で 僕は皆目を瞑り 優しい陽を浴びました

可憐な微笑み 微風と

往來の会話朗らかで 川の流れもしおらしく

私の心は和むばかり

河原の砂利の音 水切りと

靴にかかった無邪気な雫 小さな蕾が川に落ち 川は些か垢抜けた

少女みtainな野良猫に 僕は愛想尽かされて 善の笑顔が溢れたな

思わせぶりなあの態度 彼の娘と同じと 今思う

極楽鳥の囀りを その日は三度 聞きました

打算のなかった童の頃 浮かぶ景色 常緑樹

あの日の記憶と重なります

糊の効いたあの浴衣 骨身に染みる 暈の香り

翠の香りが心地よく 幸福をあの日に抱きました

星空 湯船で旅をして 野を超え 山越え

女湯超えて のぼせて見上げた 枝垂れ柳

甘美な女性にみえました

今尚胸に溶け込んで 追憶の果ては 涙がほろり

ああ郷愁 掴めぬ幻影 時経つ度に 彩られ

幽けき幽けき かの情景

優美な姿はどうしてか

日が暮れる度に 遠のいて

脳裡にしつこく 染み付きます

二度と届かぬ思い出よ 懐旧ばかりが膨らんで

いつかは僕は忘れるかい

私の心は憂鬱です

◆匂坂美優 静岡県静岡

世界の核

誰かに褒められたいと思う日々

誰かに共感してもらいたいと思う日々

けれど人間一人一人違う世界を持っているから
完全に理解し合うことは不可能で

今日も自分の世界にたつた一人うずくまる

星が見える

触れることはできないけど

太陽が見える

それが放つ熱に飲み込まれはしたくないけど

この世界の核は私で

あなたの世界の核はあなた

核の形は似ていたとしても材質は異なるから

無意識に

傷つける

傷つけられる

笑顔で傷を覆う

謝罪を述べる

傷が治ることはないけれど

こうしてまた自分の世界に閉じこもる

◆野原己代子 福岡県

深読み

深読みとはなんだろうと思う

表面をとり繕う言葉の深読み

本質を見抜くために深読みは必要

君はすぐに深読みばかりをすると

貴方はすぐに苦笑する

渡りきった岸辺

命からがらの生還

冷えきった言葉

命尽きた運命の掟

持て余した時間の最中

貴方の視線が右往左往と動く

チヨロツと飛び出た不可解な配線

ああ、なんて面白い脚本

伏線が繋がった幹旋業者

空模様は凄まじいほどの晴天だというのに

暴走した貴方の冷や汗が凄いのなもの

まるで着ぐるみの放送事故のよう

それでも時間の針は止まらない

深読みは持つて生まれた私の宿命

◆takimai 石川県

わざとな笑顔 ねえ、やめて

懺悔

離してよ

そんな私 助けてよ

強いハート、そんなハート

守つて

染まらないで 嘘の色

あなたはどうか

感じてる 変わつてく 染まつてく

悲しいよ 大切なものを壊したり

愛とかずつと嫌がつて

消えていく

わざとな笑顔、ねえ、やめて

放してよ

きみのこと ねえ、話してよ

お床ふきふき

ほんとはずつと笑つて

零した涙を

懺悔が私を嘲笑う

懺悔で

◆エリー・ファア 東京都

白

塗りつぶした朝

真っ白になつた廊下を歩く

本棚を倒してしまつた

どうやつて片付けようか

玄関で皿を叩き割つた

どうして台所でやらなかつたのか

自分でも分からない

マヨネーズと塩と醤油をまき散らした寝室

耐えられないような臭いではない

引き千切れたスーツがベランダにあった

お尻から漏れ出た血が足元に溜まつている

さつぱりしたかつたのでお風呂呂に入った

家から少し歩いたところにサンドイッチ屋さんがある

久しぶりにそこで朝食をとることにした

◆小薬空 千葉県

いのり

言葉では 足りぬ時がある

例えばそれは 大根のお味噌汁

塩分控えめ 無添加のあじ

僕たちは あーだこーだと 言うけれど

飾られた言葉では 無添加のあじを 表せない

沈黙は 飾らぬやり方だと 僕は思う

例えばそれは 誰かを応援するとき

がんばれ 負けるな あと一步

たくさん言葉を 知っている

しかし 僕の気持ちの コアの部分は
こんな陳腐な言葉で 表せない

本気で何かを願う時

僕は両手を合わせ 無言を貫く

必死にいのる

神にいのるではない

仏にいのるでもない

言葉では 足りぬ時がある

いのりは少し 味噌汁の香りと似ている

◆北川一鷹 東京都

花の棺

幾つもの春が来て

幾つもの秋が過ぎ

いつしかあなたは遠い人になってしまった

北国の草原に白い花々が咲き

いつも私はその匂いの中に横たわった

青い空を見上げ

雲の流れを眺めながら

私は、あなたの面影を探していた

遠い日の、遠い場所でのことだった

花に埋め尽くされた丘陵の

甘い香りに包まれて、ふたりは横たわっていた

そこから海が見えた

その美しい思い出は、花の棺に収められた

遠いところへ行っていたのか

それとも長い夢を見ていたのか

花咲く野の

花の棺の上を

風が吹き

また風が吹き

あなたは遠い人になってしまった

そして私は

独りで老いてしまった

青い影

追憶の深みから浮かび上がる

ひとつの青い影

懐かしいその影は

消えていった。ひと日

またひと日

あの日、世界は蝶の翅の彩のような

美しい夢を見たが

美しい夢を見たはずだったが

いつしか、夢は

白い羽根となり

幻想のように降りしきった

北国の青い連嶺に降る雪のように

なぜにまた美しい想念は消えゆくのか

かりそめにも忘れまいと誓うその時々

追憶の中のひとつの青い影

その影は、冬の海をさまよい

冬の海に凍てついて

水の結晶となるだろう

やがて、その水の結晶は

忘れ去られた小さな固い石となつて

深い海の底に沈んでいくだろう

◆戸田えりんぎ 京都府

空の町

春の川原に寝転んで

空の青に手を伸ばす

遠い 遠い 遠い

風が吹き 桜が舞い

海よりも鮮やかに 波が立つ

あの青に触れられるだろうか

この手にすくい取れるだろうか

この手にすくえたならば

そこには私の町が宿るだろうか

私の町が宿つたならば

端から零れ落ちるだろうか

静かな川の流れに耳を澄まし

淀みに成るうたかたを想う

◆小沢浩太郎 東京都

丸いものからの連想

バス停の舗装された路面の水たまりに

天からゆるやかな雨が降っている

水たまりの水面にどんな拍子でできるかわからないが

大きな泡や小さな泡ができて

すぐ消える泡もあれば

しばらく残るものもある

大きな泡と小さな泡はどんなちがいでできるのだろうか

すぐ消える泡といつまでも残っている泡のでき方のちがいは

どこにあるのだろうか

伊豆大島の三原山の火口の近くに

小指の先ほどでもない白い丸い粒が無数に落ちていた

火山噴火により降り積もった火山灰の上に雨粒が落ち

雨粒に火山灰が融け込み固まったものらしい

アッシュピソライトいう

アッシュピソライトが黒いと

まるで鹿のフンのようだ

奈良公園のシカのいるところにゴロゴロ転がっている

シカのフンを踏まないように歩くのも大変だ

シカが近寄って来たのでシカせんべいをやると

すぐフンをしたのでびつくりして飛び退いた

上野公園でゴリラの鼻クソという名前のお菓子が売られていたが

名前に怖気ついてしまい食べたことはない

丸いものだったのだろうか

一度食べておけばよかったとも思った

上野公園でゴリラの鼻クソと書かれた看板を最近は見ない

今でも売られているのだろうか

変わり玉という名の飴玉があつたが

最近ほとんど見ない

赤や青や黄のまん丸の飴を舐めていくうちに

飴の色が変わっていく

口の中から飴を取り出して色の変化を見て楽しんだ

理科室で水素を発生させて

水素が出てくるガラス管の先にシャボン玉液をつけると

シャボン玉ができる

水素は軽いのでシャボン玉は上に上がつていき

理科室の天井に当たり破裂する

お盆のようなベッドの上に

水素のシャボン玉を天球のように作り

それにマッチの火を近づけると

シャボン玉は火を噴き爆発する

アドバルーンも最近滅多に見なくなつた

大きな気球にヘリウムガスを入れて

新しく開店したお店が店の真上の空高くに

アドバルーンを宣伝のために上げる

戦争中に日本では風船爆弾が作られた

和紙でできた大きな気球に水素を封入して下に爆弾を吊り下げ

アメリカに向けておおよそ一万个の風船爆弾が放たれ

偏西風に乗つて数百個が太平洋を渡りアメリカ本土に到着した

神父の夫婦が子供たちを連れて山にピクニックにきていた

子供の一人が風船のしおれたようなものに近づき

その下についている機械のようなものに触れた

風船爆弾は爆発して

夫人とお腹の中の子供と五人の子供の命が奪われた

科学の力が戦争の兵器として使われる

戦争は悲惨な結果を生む

すべてが丸い形をしているわけではないが

爆弾のイメージは丸いものを連想させる

風船爆弾しかり

原子爆弾しかり

クラスター爆弾しかり

ドローン爆弾しかり

中性子爆弾しかり

丸いものには

楽しいもの

不思議なもの

可愛いもの

面白いもの

目をひくもの

美味しいもの

きたないものがあるが

人の命を奪う危険なものだけは御免こうむりたい

◆そおとめとうこ

山梨県

はたちになりました

はたちになりましたので

ひいおばあちゃんのとこへ

お酒を抱えていきまし

はたちになつたよと頬を搔いたら

あつという間だとわらっていました

瓶のなかで揺れるお酒は

いつかいつしよに呑みたかつたお酒です

卒寿もこえたおばあちゃんは

ずいぶん豪快にわらうひとで

酔いがまわると

しわの集まるその口をおおきく開けて

わたしの背をたたきました

いつしよに呑めてよかつたと言つたら

日本酒をなみなみとつがれました

月はまあるく

風のそよぐ静かな夜です

おばあちゃんが右になつてしまつてから

十二回目のまんげつです

目が覚めれば

六畳一間にひとりでした

とどこどこ傷のある円卓に

発泡酒の缶がひとつ潰れていました

おばあちゃん

わたしははたちになりました

おばあちゃん

はたちになりましたので

お酒をいっしょに呑んでください

おばあちゃん

わたしははたちになりました

◆大庭 新 東京都

平日

高層ビルに 朝日が浮きだし

澄んだ空気のなかを

まだらに スーツが横切る

さつきまで 朝日を背に

地平線の向こうまで伸びていたはずの影は

カラスの 忙しない 鳴き声が

聞こえ出すにつれ

小さく 惨めに

足元だけに 留まって

それすら 登り続ける朝日に 落とし穴に変えられて

ティッシュ配りからもらった一枚を

電光掲示板に 透かして

穴を開けて のぞく

ひっそり照らす ブルーライトに混じった 血の気のない

真つ青な平日

落とし穴は 足元から じわじわ 広がって 滑らかに

溶けてゆく 落ちてゆく

凛々しく 仁王立ちしていた

巨大な 偉大な 僕の影が

なよなよ曲がり 流される

影のなくなった頃 嫌味たらしく 朝日が照らす

澄んだ空気のなかを 私は横切る

腐敗

畳に寝そべって 本を読んでいると

ぽつんと 水が落ちて 濡れた

水は ぼたぼた垂れた

雨漏れだろうか 上は見上げず

ただ 濡れていく紙を みてた

かすかに心拍数は 上がっていた

文字が滲んで 濃い紫が

ページの端に手を伸ばすように 薄くなりながら 伸びていった

血に 似ている

ぼたぼた垂れて 読めないから 濡れない場所に 投げたら

雨音に しつとり 軋む音が 添えられた

冷たい雨は もちろん 私にも かかつてきたが

雨のせいで 立ち込めてくる

腐った臭いの方が 気になった

仕方ないから 布団かぶって 咳き込んで 寝た

本は 全体が よれた しおれた ひしゃげた形で 乾いていた

不可逆に形づけられて 落ちている

遠目で見ると 陽が差してるのに 気づいた

障子の穴ほこからのぞく庭は 葉っぱが 先端の露に ぐにやりと 曲げ
られている

なんとなくあの露は

突風に吹かれ 本に 垂れるよう 操作される 気がした

本を開くと 滲んでくる渦巻いたインク

私は 昂つて

本を ぐしゃりとつかんで 叩き折つて 投げ飛ばした

そうだ この本 古本屋で 買い取ってもらおう

買い取れないと 言われたら 部屋に飾ろう

無価値な 腐った本を 机の ど真ん中に

開いて そのまま 貼つてやろう

ゆるやかに血が巡り 頬がほてつく

体の芯が じんわりあたたまる

心地良い妄想

よし いくぞ 本に 手を 伸ばして 引つ張つて

パッパリッパリッパリッパリッパリ

本が 紙が 割れていく

足のつま先から 髪の毛の穂先まで

沸る高揚が 競り上がり 包みこむ

◆つきみねこ 静岡県

思いのまま

遮光カーテンの隙間から

細く溢れる光

朝が来た

シャッ シャー!

カーテンを開ける音は今日も潔い

シャキシャキとした気持ちでキッチンに立つ

昨日の晩に洗ったステンレスボウルを

シンクの下引き出しに仕舞おうとして気が付く

我が家にはもうひとつ

同じサイズのボウルがあつたのか

“シナノスイート”は りんこの品種である

わざとみたいにベタベタとしている君の皮は

近所のスーパーに並べられていたどの個体よりも

つややかで赤赤としていたんだよ

洗つても一向に落ちる気配のないベタベタに

早々に白旗を上げて

とりあえず四分の一を胃袋に収めた

それで今日は

パンチニードルの気分

太い針に糸糸を通して布に刺す

とても単純だけど

注射針を彷彿とさせるその先端には

何度見てもドキッとさせられる

ぷすつ ぷすつ ぷすつ

だんだんリズムに乗ってくる

ぷすつ ぷすつ ぷぷすつ

刺さりにくいときもある

そうこうしてたら 裏側はすでにもいじけ

ぬくもりを生成するには

ドキッとする注射が欠かせないのだ

ひと段落ついて ふと窓に目をやる

煌々と輝くレースカーテンには

物干し竿の影が しましまと映り込んでいた

「ハローワーク行くかあ」

テーブルに散らばった毛糸を片付けてから
パーカーを羽織る

すっかり冬の陽気だ

◆ 寂井絲 兵庫県

鬱々

胸にへばりつく鉛塊、頭に垂れ込める濃霧
視界の四隅には常に日没が迫っている

息を吐けばそれは溜息以外の何物でもない
遙かに味のしない朝食に口内の異物感

伸びた爪に嫌気が差し立ち上がっても
足取り、？これはわたしの足だろうか

薄汚れた壁に掛かるカレンダーには

未だゴッホのひまわりが描かれている

目を逸らした先にあるのは塵、積もった埃
洗つていない食器や服やバスタブの山

堪らず異次元に逃げ出したものの

暴力的な未読通知の数、数、赤い烙印

どん詰まりのベッドで毛布に包まり

わたしはハイギョになるしかなかった

世界は決して敵ではないが味方でもない
皆それなりに不幸だ、ありふれている
平等に不平等で不尽に理不尽であるから
燻ることはない、ただっ広い更地だった

毎度まいど、行列のできる心療内科
待合の空気を一体何に喩えればよい

「先生」の名前が変わり果てた頃

もはや紙切れになつていた処方箋

フルボキサミンリチウムモトリギン

わたしは魔法にかかれなかった

死にたいと言えば脅迫になる

苦しいと言えただ困らせてしまう

母の丸くなった背中や刻まれた皺を
撫でてやることさえできないわたしの
兄は結婚した、妹は就職が決まった

それでもなお余りある、二十六の図体
祖母は 同じことばかり言っている

電池を抜こうが止まってはくれない

秒針に動悸して同期してどうかしている

冬が来て春が来て夏が来て秋が来れば
誕生日、また一つ処刑台の階段を登った

おだやかに風が吹いている

広場の鐘が昼下がりを伝える

長椅子には居眠りをする老人と猫

じきに子どもたちも帰ってくるだろう

木々の梢がくすぐり合うように

柔らかな光が行き交っている

円心にある噴水が小さな虹を架ける

その袂から今、一羽の白い鳩が翔び立った

もう、祈ることもないだろう

ああ鬱々としている

かろうじて詩を書いている

書いている

◆宋榮燦 神奈川県

チョコレートブロック

最低限を目指しているの

毎日必要な栄養素の3割を持っているんです

私はチョコレートブロック

日が昇る頃の朝にピッタリの食べ物です

99円で楽しめる美味しい朝ごはん

忙しいあなたにおすすです

一生これだけ食って行けるんです

息をするための最低限でいいと決めたあの日から

もう日は昇れなくなったの

一年に一回だけ昇る太陽でいいんだ

そういう生活を望んで受け入れたの

わかつたふりして感想とか言わせない

酔っぱらったまま夜を過ごすことでは感じれない

こっちは禁酒生活4年目なんだ

大人になつた以来から飲めなくなったの

いつも酷い酔いが襲ってきたからです

正気で生きてるように見せかけたいから

しゃくくりを隠しただけなの

気楽に酔っ払うなんてありやしない

正気でいられないから酒なんていらないんだよ

酷い酒癖だ

だから私は

一年に一日だけ生きるんだ

その一瞬のため

さんびやくじゆうよつかを過ごすのだ

一緒に食わないか

チヨレートブロック

最低限の非日常なの

◆鈴木夏子 兵庫県

日曜日

good-bye

朝から雨が降っていた

昼前に買い出しに出かけた

十一月も中旬に差し掛かっていたが

寒さはそれ程でもなく

黄色や赤に色づいた

紅葉を愛でながら歩いた

帰り道

大紅葉の木に目がいった

スーパ―が入ったビルの二階の窓越しに

ひとときわ鮮やかな赤色の葉が見えた

吸い寄せられるように窓際に寄り

しばらく眺めていた

眺めていた間に

何枚かの葉が散っていった

くるり、くるり

表を見せ、裏を見せながら

高い所の枝からも

低い所の枝からも

散っていった

くるり、くるりと

散っていく赤い葉はまるで

good-bye-ny

言っているようだった

good-bye

good-bye

なかなかいい人生だったよと

言っているようだった

枝にまだ残る他の葉に

今し方までくっついてた枝に

静かに降り注ぐ雨に

雨を降らせた天に

窓際に佇む私に

good-bye

good-bye

なかなかいい人生だったよ、と

人生のその最後の時

私もまた

good-bye と言いつつ

逝きたいと思う

傍らに誰も居なくても

父に

母に

友に

あなたに

good-bye と言いたい

good-bye

good-bye

ありがとう

なかなかいい

人生だったよ、と

◆岡 哲次 神奈川県

如く如く如実に如く実相を見つめ

「無始無終の妙

無辺に拡がる無始無終の

世に現れ来る

そのものそのままの姿を

如来という

全ての源 全ての根

全ての始まり それは

産まれ無きもの

限りなきもの

永遠無限無辺なるもの

源とは即限り無し事なり

永遠に即すものなり

よつてそこに因は無く

よつて果も無し

常にそこに存在し

ただ ありのまま

ありのままと

大事なる事はありのままに受け持ちいる事のみと

廣大無辺無始無終の中を

そのものそのままの姿で

現れ来るものを」

月は様々な様相を見せる

丸い月 半分の月 三日月

時には姿を現さない時も

光と影

相反する二面の姿

しかし

真実は玉 実相は玉なり

世には

様々な姿 様々な様相がある

一人の人の苦しみ

一人の人の悲しみ

一人の人の喜び

一人の人は憎しみ

一人の人は哀れみ

一人の人は優しさで満ち

一人の人は

愛で満ち溢れている

人はそんな様々な様相を見て触れて感じて

幸せになったり

不幸になったり

様々な感情 様々な想い

様々な欲望

入り乱れ混じりあいながら

助け合ったり 争ったり

その集大成が

社会の様相

地球という星の様相

大局で見たとき

その姿 様相は

そのような相をなす

次に点 瞬間 刹那を見詰める

現れては消え現れては消え

次から次へと

止まることなく様相を変化し

千変万化にかわりゆく生命の

想念 思念

その想いを

刹那に湧き起こる生命の息吹きにまで凝視していく

苦しみ 悲しみ 憎しみ

優しさ 喜び

絶望 希望 不幸 幸福

溢れ出る想い そして 欲望に至るまで

その刹那に流れる想いは一つ

ただ一つ

生きるという事

生きる 生きる 生きる

応えは一つただこれだけ

生命の性証

その実体 その応えは一つ

ただこれだけ

生きるという事

生きるという一念

この一つのみ

生命の刹那に宿る想い

命のベクトルを念とするなら

その生命に宿る一念は

ただ一つ

生きるという事のみ

苦しみの如く生 悲しみの如く生 憎しみの如く生

喜びの如く生 そして最後に死も如実の如く生なり

欲望を含める

相反する全ての想いが

生という一念に即す

如とはそのまま ありのまま

人の生業 全ての様相が

如く如く如実に如く

生命における生である

月が月であるように

その姿 真の実相なり

◆林 栄 富山県

今夜は暗闇が深い

カラスアゲハ

黒が

ベッドに横たわった

私の体のふちを侵食してくる

カラスアゲハは真つ黒の羽

暗闇に溶けて飛ぶ

闇なのか 羽なのか 区別がつかず

飛んでいるのか

それとも 静止しているのか

わからなくなる

もう何を信頼していいのか

あなたが 私に言った言葉はホントウだったのか

あったことか

なかったことなのか

暗闇に体が溶けて

私と夜の境目を見失う

カラスアゲハの真つ黒な羽

闇に紛れた 黒い 鱗粉

早く訪れてくれなければ

私は正気を保てなくなる

◆光沢 千葉県

我が子へ

意味を持たされ希われて生まれたのに

そのうち、それを失くしたり奪われて

ただ、そこにあるだけになったもの。

おまえが生まれたこの街は

かつて人々が

大いなる海を埋め立てた繁栄の証だ

その先端に作られた人工海浜は

たぐさんの家族と子どもたちのために。

けれど皆が一心に固めたはずの砂や土は
繰り返し、訴えるように寄せる波の力に
壊れて、壊れて、遠浅の海に流れ続けた

砕けた海岸は立入禁止になり

残ったのは船が着くことも、

人が泳ぐこともない

そこに横たわるだけの海

大きな大きなトマソン

「この海は死んだ」と

ある作家は言った

誰かに希われた意味をなくし

あらゆる命は逃げ去り

砂と泥が混ざり合った、意味のない濁

「この海は死んだ？」と

幾度も潮音を聞いた

誰かに希われた意味をなくしても

あらゆる命が逃げ去っても

砂と泥が混ざり合った、生きている海

私はそのことに

助けられる時があつたんだ

はじめに言ったことは、

生き物はみな、そうだからだ

おまえも、私も、そうだからだ

いつか元の形をなくしても

いつか風と波に削られても

いつか誰にも見限られても

それだけで生きていることを

◆kawasaki araya 神奈川県

真の静寂の中で

静寂を文字で伝えるのは難しい

無音、沈黙、森閑、深閑…

言葉として伝えたとしても

読み手が静寂に包まれるわけではない

空白を開けたとしても

静寂の状態を表現しただけで

著名なミュージシャンも「無音」というタイトルの楽曲をアルバムに収録し

ていたりするけど

スピーカーから何も聞こえないだけ

本当の静寂とは？

それを人に伝えることは可能なのか？

どうすればとじつと考える

目を閉じ

耳からの情報をすべて遮断する

閉じた両目の間にあった僕の意識は

静かに吸った空気に溶けて

鼻の奥から押し出される

一旦外気で冷やされ

再び鼻の奥へと吸い込まれると

肺へと甲高い風切り音と共に送り込まれ

ふわふわとした細胞に取り込まれ

生暖かい海にザブンと飛び込んだみたいに血流に溶けた

やがて僕は鼓動の音に包まれる

それは静寂とは程遠い

力強い生命の躍動であるけど

第二次世界大戦時中

緊急潜航する潜水艦の機関部内みたいでもある

動脈の中を流れていくと鼓動以外の音も聞こえる

筋肉の収縮の音

間接の曲がる音

指先で鼻を擦る音

膝を曲げたときのピキッという音などは相当な衝撃波だった

ゴクリという音と共に

まるでケーブルカーみたいに

食道を流れ落ちる生暖かい唾液とすれ違い

押し上げられるように首を廻り

僕は脳へと入っていく

脊髄から延髄と髄液にまみれ巡り

小脳頭、頭頂葉と流れ

前頭葉から脳下垂体に染み込むと

常に聞こえていた自分の鼓動も聞こえなくなる

僕は更に脳の奥へ奥へ

僕は僕の奥へ奥へと染み込んでいく

太陽の光も全く届かない

だけど見上げると

自分が見える

僕の過去が見えるし

僕の本音が見えるし

僕の欲望が見えるし

僕の衝動が見えるし

僕の醜態が見える

私は醜態の固まりだった

見下ろすと更に

私の怠慢と

私の諦めと

私の終への渴望が見えた

真の静寂包まれた今

ここから出たくはない

◆市川桂 東京都

夜によむ詩

ひとりでいる夜

ベッドのなかにいるじぶんが拡張する

ひとりだ

ひとはひとりだと感じる夜なのだ

そこに孤独はいる

そこに自由もいる

そこに社会はなく

そこにいた役割は消えうせてしまい

ただのじぶんがいるだけだ

静かな鼓動

拡張してゆく世界に包まれ

少しばかりの野心

思考が解き放たれ

いつかの記憶

絡みゆく自分と自分

生まれたばかりのころにたどりつく

美しい音楽のように

寄せては引いてゆく、高揚感

少しばかりの孤独

ひとりでいる夜、

じぶんをわすれる夜なのだ

◆日高美希乃 大阪府

ロシアの灰色猫

道路の水溜りをタクシーが

猛スピードで横ぎって行った

跳ね返す紫吹に泥混じりの

濁流水。もとい

蒲焼通りのバス停留所

今時な国際ホテル、まるで

東洋銀座な、飴色小路

構想タワーに映る、強力わかもと、

の芸者レーザー。いつか見た

深夜映画のシーン。

終電後のたるま屋付近は、不機嫌な

叫び声が、こだまする丑三つ午前。

降る雨に伴う、僅かな星だけの夜道。

幸せと不幸せの歯車な鳩時計。

美食家のアンソロジー。

ブルジュア、フランス人

そのようなアスファルトの街角。

◆小杉 知 神奈川県

終末の風景

この世界が発狂するとき

白濁した静寂が

朝の空気を包み込む

喧噪を期待した駅鳩たちは

何も映らぬテレビにあくびをひとつ

バスターミナルを見下ろした

通勤客が練り歩く

彼らは食べかすひとつ落とさない

誰も喋らず

誰も騒がず

自分の手相の皺を数えながら

駅の構内へと無言の行列

等間隔に貼られたポスター達が

彼らの行進を見張つてゐる

やがて全員が改札口に吸い込まれる時

電光掲示板に映し出されるその文字は

“本日、電車は運行しておりません”

その案内を見上げた人はおらず

自動改札はバタバタと風車

みんなはどこに行つたんだろうね？

売店の陰からドブ鼠が尋ねる

訊かれた売店のおばさんは

そんなことは言っちゃいけないよと

丸めたスポーツ新聞をメガホンにして

男みtainな低い声で注意する

ああ、そうだった

このおばさんにも口がない

くぐもつた声は今日の新聞の一面に

印刷された朱色の見出し

券売機前は野良犬たちの溜まり場で

声を潜めた遠吠えが響く

紙の切符は貴重ですよ

今のうちに集めておきましょう

けれどもコインの入れ方がわからない

パネルに前足が届かない

仏頂面した四角い機械は

冷めた目つきで煌々と光る

“ごんごんと”と空気の軋む音がして

黒塗りのガラスの各駅停車が酸欠で

枕木抱えて力尽きる

ドアが開いても誰も降りない
客が乗つてたかもわからない

ふおんぶおんと看板広告震わせて
透明ガラスの快速電車が傷だらけ
中には誰も乗つてない
運転手までいないから通過もせずに
点字ブロックに乗り上げる

パンタグラフをねぐらにしてた
始発駅からの茶毒蛾が
ばたばたと飛び立つて

雨除け屋根の蜘蛛の巣にかかる

「運行してないと書いてあったのに」

「まあまあ、理屈じゃあないんです」
そんな会話は白線の内側まで下がって

殴り書きされた黄色い鱗粉

誰も喋らず
誰も騒がず

立ち尽くしたまま次の電車を
ちゃんとした電車を待っている
駅鳩たちの糞を踏み付けたまま
向かいのホームを凝視する
向かいのホームでは十二時間後の
帰宅姿の彼ら自身が

北口階段目指して殺到する
ああ、今頃慌てても遅いんだよ
ドブ鼠が野良犬たちに

車掌さんの口調で諭してる

野良犬たちはもう何にも興味がない
価値あるものはひとつ残らず
全部車輪に轢かれてしまった

蜘蛛の巢は毒蛾を吊るしたまま

向かいのホームまで網を広げて

滑稽な事故を悼んでる

向かいのホームの怪我人たちは

恨めしそうにこつちを見ている

その沢山の目が閉じられたとき

この世界は本当に終わる

◆大里麻尋 東京都

いつもだれにでも

有り余る以上の愛を

求めているだけだ

心に轟がかる日に

長夜

地の底から込み上げてくる熱狂を
求めているだけだ

ゆらゆらと枯葉が落ちていくのを
この目で追って数えては
時間だけが過ぎていく

街を照らす明かりが人影に揺れて
誰も彼も
無限の波に吞まれて消えていく

わたしはきつと
岩肌に顔寄せ頬擦り
綿菓子のように
ふわふわと
飛んでいくと思う
そう思う

数字が色に変わる夜

色濃く引かれた境界線の上で

曖昧でいたい

できることなら形のないものを

抱いていたい

強く、強く、そう願う

◆鯉鮓 兵庫県

帰宅とは

家を出たとき、もう二度と帰れない気がした

でも気付いたら帰っていたんだ

そんなもん

◆はつくー 埼玉県

霧雨のよるに ほんとは小雨のよるに

ひとり 部屋のでんきを消した

まふたを下ろしてみたら

真つ暗なせかいに

白夜が横たわっていた

そのうちオーロラが見えて

パレットに色が乗つてく 虹も生まれた

沈む夕陽が手招きするから

追いかけたのに

呼んでいたのは ぼくじゃなかった

濡れた芝生に そつと

なみだを隠した

小さな芽が なみだを見つけて飲んだら

大きな葉っぱになった まるで傘

河川敷から見る

近くて遠い 高くて低いビルたちは

動けないけど ぼくは動ける

水面をはねる魚のせいで

世界が少し揺れた

月は気づいていないみたい

魚がこんどは二匹ではねた ぼくもはねた

風の味を知りたくて

口を大きくあけたら すな

の味がわかった 風味

誰かに教えたくなつて

通りすがりの猫に教えてあげたら

早歩きで 横断歩道 を渡つていった

青信号でよかつたね すぐに赤 見上げて黄色

時の星に住んでいるコビトが

今日と明日をとりかえる仕事をしている

サボつていいよ と言つたけど

まじめなコビトは時計の針を動かして

ぼくの命をちよつと ちぎつた

時計の針が錆びたらきつと 仕事はやすみ

海の水をかけてやろう バケツに穴があいてる

その穴から覗いたら

やつぱり 白夜 ぼくは

動けないままパレットに

一から百まで 色をさがした

やがて ひとつ 夢がとけて残る

白い夜

◆七 まどか 千葉県

徒花

知らぬ間に根を張っていた

この地に何の愛着もない

それでも私の足の裏は

愛おしい人を抱くかのように

片時も地面を離そうとはしない

気まぐれに飛び乗った風が

私を落として去っていった

立ち去る間際に風が呟いた

この地で花を咲かせろと

足の裏から威勢よく生えた根は

既に根腐れを起こしている

初めは爪先だけを染めていた

淀んだ紫がかった色が

日に日に身体を蝕んでいる

美しく咲け と歌った人は

咲いた花に水さえやらない

もつと愛でればよいものを

美しく散れ と吐いた人は

散った花弁を踏みさえしない

もつと憎めばよいものを

咲かぬ花に

責任の在処を問うたところ

口を噤むばかり

◆伊吉マリ 静岡県

母

不思議な反応を起こしかねない面影が、鏡の中の顔に散った。

空は青く、海もおだやかなある日のことだった。

十七歳のわたしはたつたひとり、鏡を見て強く決断する。

まるで空気の動きが、肌に触れるそれが、一瞬止まったような春。

このろくでもないと思いはじめていた世界を切り離すことにした。

学校など、行かない。行けない。うつ病のままでは、梅雨。

なぜ地球は青く見えたのだろうか。見てみたいとも思わないが。

未開が多すぎる。そのままにしておけばよい。

きつと幼い頃には言われたことはあるだろうけれど記憶にもない、

母からの「ありがとう」と「ごめんね」。十年以上ふりにやつてきた。

しかも同時にふたつも。母が言うのと恥ずかしそうで、けつこう好きだ。

母は子どもができたらくさん甘えさせてあげようとしたにちがいない。

自分が甘えてこなかったから。しかし、無理だったのだな。だつて、

甘えさせ方がわからないのだから。すべて許す。

梅雨はとうに過ぎた。もういつがいつだかわからない。しばらくして、

母とふたりで旅行に行った。夏の北海道だ。富良野にも行った。

トマトを丸齧りで食べた。摂食障害のわたしが。夢のようだった。

一進一退を繰り返して、母との関係を構築し直している。

うつ病でよかった。よかったはずだ。眠れないが。食べられないが。

わたしがどうなるうとも、わたしは孤独だ。

両親とわたしの仲がいいのは素晴らしい。感謝している。

その上で、わたしは、孤独を感じる時がある。

涙で、涙で、涙で、ああ、涙が、不思議だ。

わたしは母親にはなれない。

それでもわたしは生きている。

父

父上とわたしの間には、世界に時間はなく、あるのは、

そこはかとなく匂い立つ、尊さ。気配。

父上、どうしてあなたはいつもそうなのですか。

どうしてわたしに反対したことなどないのですか。

あなたは奇跡です。あなたの子どもになれたことは、

産まれる前からわかつていたのでしょうか。

そんな気がします。産まれる前から決まっていたのです。

父上は、病気で働けない三十六歳のわたしを養つて、

健康のために毎日スクワットをしています。

あなたと共に過ごす時間が好きです。わたしは闇に

溶けておりますが、その闇を薄めてくれるのは、

いつもあなたです。

求めてる、求めてる、求めてる、求めてる……！

あなたの言葉を。

わからない、わからない、わからない、わからない！

そんな時、わたしの傷つきやすい場所を当てて和らげる父上が

太陽みたいに見えます。

愛を伝えるしかできないわたしが惜しい。そんな性質。

時が流れるのが必要なようです。

おだやかで、狂おしくて、あたたかい時が

海外篇

◆中村 弦 Hamburg, Deutschland

昨日の神話

朦朧とした雲が開けても灰色の寒空

赤毛のアイヒャンヒエンの急ぐ

ああケパブ屋ならその突き当りを

右へ行つたすぐにありますよ

ちようど親のない子供が死にかけているから

ついでに何か恵んでやってくださいな

そこらは年中お祭りのようで

みな今にも泣きだしそんな顔をしながら

愉快に踊っているのです

当面食うに困らぬドングリ

はい、はい

フライベイトインシユランス

はい、はい

エントリーチケット

云々

移民局の方が言うには

私は資格を得るのに

十分な預金を欠いているらしいのです

では預金を得るにはどうすればよいかと聞くと

そのためには相応の対価を払えとのことでした

何かが失くなる音がするわね

今のはお隣が帰った音だよ

キレイは汚い

汚いはキレイ

ほら僕を見てこらん

君はついに本当の僕を知ることではできないのだ

君？君は僕で、僕のすべてだ

でもやはり君はそれを知ることではできないのだ

でも

明日お天気だったら

昨日行くはずだった教会へ行こう

そこで僕の知っているぜんぶを教えよう

その前に僕らはたくさん祈らなきゃ

そして慎重に

よく考えて

楽しかった未来をなくさないようにね

東南アジア紀行

大麻の臭いにうんざりしたら

バンコクを列車で抜け出して

無駄な鈍行は住人を不思議からせる

すべて隣の婆さんのする通りにしよう

ガバオライスはいつもガバオライス

夜行列車の歯磨きは偉人の気分

観光客が少なくて良い、とか言わない

これが旅をしてる感じで

ビールを飲むのが仕事で

あんまり巧くやり過ぎてはダメだぞ

あんまり巧くやると神様に見放されちゃう

行き先は地図が決める

マレー半島を日本軍のように進む

ずっと同じ木

あれはゴムの木かしら

クアラルンプールは実はクアラ・ルンプール

中華屋っぽい中華屋

ビリヤニもビリヤニ

旅らしい旅

レゴランドしかないよという

親切な忠告を貰いながら

のこのジョホールバルまで来れば

すぐ向こうはシンガポール島

ここからは資本主義に従おう

ここまで来ればマックも許される

マレー沖の海はどんなか見ないまま

なんとなくマニラ

ところで貴方

旅情をどこへ忘れてきたのですかな

それっぽい風景

反応する自動機械

旅慣れた自動機械がこの街の危険を知らせている

でも酔っぱらって歩くくらいがちょうどね

セブのクラブは

キッスの無駄撃ち

あああんまり楽しいとダメです

負けたらテキーラなんて

そんな愉快なジャンケンはお免です

ああタクシー

貴女はだあれ？

もうひと月も遊んでいます

そろそろ帰らないと

どこへ？

東京？

あんたつまらない街イヤですわ

バンコク？

Oh!

バンコクのクラブは

キッスの無駄撃ち

あああんまり楽しいとダメです

負けたらテキーラなんて

そんな愉快なジャンケンはお免です

ああキミは

さっきの男はどこ？キミはいくつ？

あんまりかわいいと

恋に落ちちゃうよ

飲み過ぎちゃあつまらない

もっと愉快的遊びを残しておきましょう

まだまじめな顔をしてお話しでしょ

ちよつとお外で一服

ほら火を貸してくださいな

おやすみなさい仔猫ちゃん！

今夜だけはやさしい夢を見せておくれ

南国の陽差すベランダや

...Find someone could...

何でもないおしゃべりを

...Accept your loneliness...

明日も続く予感とふたに

今夜だけはやさしい夢を見せておくれ

煙草を吸う君の視線や

...You are nice...

君が腕を引つ張る感触が

...But that's it...

まだ消えてしまわぬうちに

今夜だけはやさしい夢を見せておくれ

今日を苦しんだあの子らや

...You love me?...

どうしようもないやつらも

...I don't think so...

少しでもおぼれにあずかれるように

今夜だけはやさしい夢を見せておくれ

君がいつも勝つ喧嘩や

...I'm going out with...

小さな夜の戯れに

...The person I like...

あるはずだったすべての弔いに

君がいない時

俺もまたそこにいないのだった

俺が捉えた君の目尻に

そこに宿った宇宙に

気付くものはいないのだった

今夜だけはやさしい夢を見せておくれ

すべて生まれなかったものために

...Please be in love...

もうそこには何もないのだから

今夜だけはやさしい夢を見せておくれ

...With someone else...

俺だけが知る世界のために

：黒のコンバースのスニーカー、グリーンシャツ、ブルージーンズ、ボシエツト、蛙、二本の煙草、猫の餌、見えない刺青…

◆桜野める NSW AUSTRALIA

わたしの部品

いずれわたしの体の中の部品達が、わたしの自由を奪ってゆく。

不自由な生が続いてゆくくらいなら、この体の部品で自由が手に入る者たちが使えばいい。

引き替えに、自由が奪われるまでの時間、この世の全てを手に入れる権利をわたしに。

時がくれば、わたしの部品達は、好きにすればいい。

空が落ちる

空が、落っこちてくればいいと思った。

雨の日独特の、昼なのか、夜なのか、わからなくなる様な、重く、光りの射さない雲がどこまでも続く空を見上げてそう願った。

世界を飲み込むほどの雨を含んだ空が、この世界を、上から舞台が幕を下ろすように、暗闇で世界を包んで、人も、歴史も、光も、闇も、正義も、悪も、友情も愛情も憎しみも喜びも全て飲み込んで無にしてしまえば、この苦しみも消えるのにと。

そんな朝だった。

生かす資格

死ぬなんて、軽々しく言うもんじゃないという。生きろなんて、無責任に言えるものかと、思う。生きる苦しみも不幸も、全て背負う覚悟もない人間が、何が無責任に苦しみを引き延ばす権利があるんだと。人を生かせるのは、その人が生きるためなら、何でも出来る人間だけだと思う。

生きる理由が欲しかった

人の役に立つ仕事に就こう そうすれば、生き続ける理由になると思う

た。そんなものでもなければ、続けられる気がしなかった。

◆北村千絵 Singapore

一人の日曜日

空は薄紫色に染まつて

一人の日曜日が終わろうとしている

電話もかかってこない

遠くで犬が鳴いている

彼も淋しいのかしら

雨上がりの外の空気は少し湿っぽくて

でもいい匂い

私は夕陽が残していった素晴らしい空に見惚れながら

悲しくない 淋しくない

自分に言い聞かせる

みんなそれぞれに生活がある

その枠の中でしなければならぬことをして生きてゆく

たとえばそれが嫌なことでも

どうしてもつと自分の好きなことだけをして

生きてゆくことができないだろうか？

どうして嫌なことも楽しそうに振る舞わなければいけないだろうか？

だったら一人でいい

一人の方がいい

淋しくてもつらくても

嘘をついて生きるより

こうやって夕陽を見ていられる方がいい

空はいつの間にかラベンダー色に変わり

やがて真つ暗になった

せめて星を見つけて一人の夜を楽しみましょう

さびしくない 一人でも

あの時の私へ

たとえば、昔流行った曲がどこから流れてきたとき
ふとその歌を聴いた場所、時間、匂い、そして誰と一緒にいたかが
急に甦る瞬間がある

そしてそれはとてもほろ苦い気持ちだったりする

まだ若くて人を心から信じてたあの頃

一生懸命に人を愛し、愛され、それがこの世で一番大切な愛だと信じて
疑わなかったあの頃

会えばはしゃいでふざけて楽しくて

真っ白なゴートを着て、ピンクのマフラーをした私をその人は写真に撮った

私はまだ子供のような顔をして化粧つ気もなく笑っている
何も疑わず、全てを信じて

今その写真を思い出すと、私はあの時の私が愛おしくて仕方ない
もしあの時の私のそばに、今の私がいたら、たくさん忠告してあげられた
のに

たくさん話を聞いて、相談に乗ってあげられたのに

間違えないように、人を疑わないでいられたらそんな素晴らしいことは
ない

でもいつもそういうわけにはいかない

ちゃんと伝えてあげられるのに

ピュアな顔で楽しそうに笑う私
その後になんかに悲しいことが起こるかも全く知らずに

若すぎる、そう若すぎた

でもそんなことがあつて本当に今はよかつたと思える
今の私がやつぱり一番幸せだと思ふから

ありがとうシンガポール

輝いて見えた街並みが思い出とともに甦る

けれどもそれは徐々に薄れていき

もう心ときめかないことに気づいた旅から帰った早朝

空港はがらんとしていて、迎えに来たタクシーの中から見たこの国特有
の景色は

車窓をものすごスピードで流れてゆく

まるで私の心から思い出を剥ぎ取つて行くかのように

昔は近隣諸国へ短期間の休暇に行つても帰つてくるととても嬉しかった
匂いや温度、花々の香り、そしてタクシーの匂い
家に帰つてきたとホツとする気持ちはどこかにあつた

でもそれは子供達との生活がこの国にあつたから

毎日を精一杯生きてしなければいけないことをこなして

そして子供たちが心地よく楽しく過ごせるようにと頑張つてきた日々

それは何にも代えられないとても大切な日々

でも子供たちが巣立つた今は？

自問自答する

そして答えはもう出ている

この国で二一年間暮らした

とても素敵な国

でも子供たちがいない今、私の居場所はここではないと本能的に察してし
まつた

自分の生まれた国へ、育つた国へと思ひは果てしなく続き

やつともうすぐ帰れる日がやつて来ることに、戸惑いと興奮と少しの不
安を抱きながら

それでも希望を持つて帰りたいと考える自分がいる

輝いて見えた街並み

心ときめいた街角

いつからどこからどう消えてしまったのか説明するのは難しい

瞬きをした一瞬だったような気もするし

長い長い時間をかけてそう気づいたような気もする

でも私はこの国がこれからもずっとずっと好きだろう

心ときめかなくなってもまたこの地に降り立った暁には

きっとこの国で過ごせてよかったと思ひ

この地の匂いや温度が懐かしく

切なくなる想いを抱くのであろう

だから言いたい

この地にありがとうと

素敵な国、明るい国、外国人に優しい国

ありがとうシンガポール

◆黃資庭 Taichung City, Taiwan (R.O.C.)

成長

時間會等人 不可能

人會等時間 我希望

再走得慢一些 我就會成長

再走的快一些 你就會逃開

請再多給我 一次機會

時歲一直增加 想要更多更多

是否那天到來 我能笑著送你離去呢

夢中想伴你左右 看一齣動人悲劇

夢中想再牽你手 走一段歲月靜好

(Google 翻訳) 育つ

時間は不可能な誰かを待つでしょう

人々は私が望む時間を待つでしょう

ゆつくり行くと私は成長します

より速く行くとあなたは逃げるでしょう

もう一度チャンスをください

年齢はどんな年をとっていて、もっともっと欲しい

その日が来て、私はあなたを笑顔で送り出すことができますか？

夢の中であなたに同行し、感動的な悲劇を見たい

夢の中でまた手を握ってしばらく歩き静かになりたい

松葉

人間最為祥和的不是夢想 而是孤獨

孤獨的葉成惹最美的幻影

幻影成了最美好的泡凜

泡凜的過程除了冰冷的華麗

華麗的你一如春秋夏天的我

一如過往雲煙的自我

松の葉

世界で最も平和なのは夢ではなく孤独です

孤独なイエチエンヤの最も美しいファントム

ファントムが最も美しい泡になりました

凜を浸すプロセスは、氷のようなゴージャスなものに加えて

ゴージャスなあなたは春、秋、夏に私のようです

過去の曇った自己として

◆ Masayo Ginter Florida, USA

にーにー蟬

近くの森から聞こえる

にーにー蟬の声

秋のおとずれ

郷愁の声

子供の頃遊んだ、山や森

一緒に歩んだ友の顔

少し高音の蟬の声

透明な一線に導かれて

私の脳裡に反映する

懐かしい顔

懐かしい光景

近くの森から聞こえる

にーにー蟬の声

その音を聞くたびに蘇る

懐かしい想い出

にーにー蟬よ

ありがとう

◆ 岩里崇 台湾

短い自白

この青い惑星

これ以上私の痕跡が見つからなければ

少なくとも時間の憂鬱

僕は、君だけを残りました

◆光 美根代 中華民國台灣

ひまわり

大きなひまわり

の隣に

小さなひまわり

太陽のような顔は

とても綺麗

みんな同じところを見てるね

夢は心の中にしまつて

これから花を咲かせる

大輪のひまわり

の陰に

小さなひまわり

母の静けさと強さを見習い

これからも明るい方を見て

育てていく

◆彭 泰宏 台灣

インスピレーションが消えたの二十一世紀

生まれては消える縁の中で

衆生は感情のある世界に存在しています

さまざまな感情を体験していくのです

電気と光と影の中を回る

青春のイメージは永遠

君この気持ち忘れられない

莊子は蝶の夢を見て美しい夢を見た

この人生を考える、運命に従う

白い服を着た女の子が頭を下げて微笑んでいる

手彫りの世紀の時

窓の外、ガンジス川の砂は常に変化している

みんなの愛と運命が違うのを見た

彼の本当の考えを観察する

わびさびは陰にある

みんなのライフストーリーを真剣に理解する

痛い男への優しさ、前世の因果を媒介する

後悔はありません、岸に戻る

痛みの海は優しさ変わる

Photoです仏

シンキングボウル金剛経とシャッター音の決定的瞬間に

雷のように目を覚ます

服従は水のように澄んでいる

洞窟の最深部に生まれる光と影は仏の存在を見た

プラトンの寓話を見る、どこでも安心、もう欲望はない

F2.0カメラの絞りはあなたの気分を明確に知っています

好きなことに集中する、恵みの瞬間

神話上のティーンエイジャーは彼のワインを飲みました

若いホームレスの男性が夢を覆す

ブッダは孤独を讃えてひれ伏した

1／千秒のエゴ

デジタルアーカイブされた画像は一〇〇年間新品のように見えます

三千世界、人間はオタマジャクシのようなもの

天と地と神々の前に塵が漂う

真夜中に帰宅

宇宙は夢を見た

人生劇場の幕が再び上がるとき

すべての騒音が静かになる

人間も仏教も原点回帰

生まれたての赤ちゃんのようにピュア

◆ Ah Vi Taiwan 台湾

如果房間是一片沼澤

如果房間是一片沼澤

沼澤是一個房間

鹿群在蘆葦叢

游泳池迴圈

堅果在大酒桶裡發酵

鰻魚在背風處

鼓動泥巴鑽動著

水沫酒泡渣滓

螞蟻在棕褐色天空下

貓頭鷹低低

海苔偽裝成鐵

水龍頭水恰巧就像輕輕拍手聲

果核的尖端

鸛鵲喜歡梅

新鮮空氣迴繞里亞式海灣

吃一塊夢預計到達時間

如何歡呼哇

喝一杯茶在額外時間之後

波普猶然波普

If the room is a swamp

If the room is a swamp

The swamp is a room

Herd of deer in the reeds

swimming pool loop

Nuts fermented in vats

Eel in the lee

agitating the mud

Foaming wine dregs

Ant under tan sky

owl low

Nori disguised as iron

The tap water happens to sound like a clapping of hands

tip of the pit

Emu loves plum

Fresh air around the Ria-style bay

Eat a Piece of Dreams ETA

how to cheer wow

drink a cup of tea after the extra time

Pop is still Pop

部屋が沼地の場合

部屋が沼地の場合

沼は部屋です

葦の鹿の群れ

スイミングプールループ

バットで発酵させたナッツ

うなぎの風下

泥をかき混ぜる

泡立つワインの残骸

日焼けした空の下のアリ

フクロウ低

鉄を装った海苔

水道水はたまたま手をたたくように聞こえます

ピットの先端

エミューは梅が大好き

リアスタイルの湾の周りの新鮮な空気

夢のピースを食べるETA

すごい応援する方法

延長戦の後にお茶を飲む

ポップはまたポップです

◆モリミドリ Dusseldorf, Deutschland

味の濃い味噌汁

夢の中で、味の濃い味噌汁を飲んだ。

じやがいもと玉ねぎの、味噌汁だ

玉ねぎは奥歯で小さくシャクリとほろけた。

じやがいもはそれよりも更に奥で、音もなく、形を崩した。

やわらかい、角のないじやがいもが溶け込んだそれは多分

昨日か、一昨日か、

ずっと昔に作られたものだ。

舌の上では

なめらかなような

ねっとりしたような

優しい甘さを思い出す。

そう感じることをそれにはいる前から、

とくく知っていた。

身体のあらゆる処がその味を思い出し始める。

脳の奥の一室で、

食べたときの

昔の映像が壁に投影され始める。

信号が次々と点灯する。

それは喉を通る前に

舌の上を激流が通り過ぎる前に

口元に腕が運ばれる前に

鼻がその臭いを見つけ

眼はその姿を嗅ぎつける

頬の内側から涎があふれ出て

喉や舌が熱を持って乾いている

脳はいつかの味を唱えている

食卓に座るのは、子供の頃の自分だ。

中身はほとんど、今の自分だ。

夢ではよくあることだ。

目の前に座るあの人は顔がつりとして、

目も鼻も口もない。

だが、怖くはない。

目や鼻があるであろう場所には

なめらかな皮膚が広がり月の海のような陰が落ちている。

食卓は暖かいオレンジ色の光に包まれている。

音はなく、

静かだ。

テレビはついてるが、音はついてない。

あの人はテレビの方を見ている、

横を眺めている。

子供の容姿の私はそこで、味噌汁をすすっている

子供であり、大人である

その二人に特に興味がないのか

あの人はテレビの方を見ている。

なぜあの人と味噌汁を飲んでいる夢を見ているのかは分からない。

あの人は自分の肩胛骨を覗くようにして

完全に不自然な姿勢と身体つきで

テレビをみている

首はずっと強く横に曲げられている

オレンジの光が当たっている

長くなつた首に長い陰が落ちている

頭上では電気の周りを蛾が飛んでいる

あの人の顔は変わらず見えない

見えるのはかろうじて顎だけで

あの人は左手で見えない口元に

味の濃い味噌汁を運んだ

蛾が電気に止まろうとして

何度もどこかにぶち当たる

コツコツコツコツ

小さなその音だけが聞こえる

テレビが面白いらしく

あの人は無い口で、笑う

膝をたたき、身体を振らせて、揺らす

壁や床にはあの人の灰色の陰がゆらゆら動いている

耳を澄ました

蛾のかすかな羽音と

コツコツ

という音以外はやはり聞こえない

あの人はテレビを見るのをやめた

テレビの画面には

チャンネルが一つしかない

テレビは早送りで

ダンスをする人々、新しいテクノロジー、捕まらない犯罪者、月への旅行、戦争、新しい病気、女優、流行つてるもの、失踪した子供、コメディアン、災害、簡単にできる美味しいレシピ、難民たち、可愛い動物、

について見せると

スーブの滴が皿の中に飲み込まれるように
突然にぶつりと黒い画面に消えた。

あの長くて短いあの人と過ごした時間は消えた。

対岸のあの人は電球を持っている
気が付くと、電球を持っていた

一体いつからどこから

それを持ってきたのかわからない

あの人が話しかけてきた

顔が無くても

ああ、やはりあの人だと分かる

あの人は早送りの早さで

椅子に座り直した

早送りで

右手を挙げて、下げて

早送りで

あの人の中指と薬指が顎を撫でている

下を向く

上を向く

蛾は電気の周りを

変わず忙しく

時計回りに2週

電気にコツコツ

反時計回りに3週

コツコツコツ

早送り早送り早送り

あの人は電気を見ている

机の上の電球を見ている

蛾を目で追いやり

頭が右上左上右上左上と

忙しく追いかけている

あの人はしばらく動かない

じつとして、何かを考えている

味噌汁は冷めている

飲み込むと、大豆の粒があつた

引き続き、早送り早送り

オレンジの光が消えた

何気ない動作ひとつひとつが

すべてが早送り

朝が来て、また夜になる

蛾が跳び始める

コツコツ

頭を触り

まだ余る味の濃い味噌汁を飲む

あの人があの仕草をする

そう、あの人はこんな仕草をしていた

完全に忘れていたけれど

そしてそんな話をするときは

そう、この顔をする

目も鼻も口もないが

この顔をするを知っている

もしかしたら、何かを見落としていたかもしれない

それでも私は早送りのボタンを押し続ける

口がないので何かを話しても声は届かない

だけど内容は胸に入ってくる。

頭に直に入ってくる。

大したことは話していない。

またあの話だ。

あの人とはもうどのくらい会っていないだろう。

◆阿部静雄 ニューヨーク

画家の告白

いつさいの熱情と幻覚とが現実であるがごとく
我が孤独なる魂がさすらい

原野をこする

おお何たる初冬の豊穰なる花畑

天からは教会の鐘の夥しいしらべ
おれなど

墓から現れ出た春姿の麗しい君よ

君の存在こそ我が求める美なり

突如 画布が春の輝きの肖像画となり

そして瞬時にいつさいの熱情が幻覚となつて

美が色あせた

ああ芸術とは何たる不条理な殺人者であることが

ニューヨークから

車いすマラソン

拍手と声援が都会の森に響きわたった

遠くから近づいてくる

マラソン選手の懸命な息づかい

見よ 彼らを 彼女たちを

両脚が両腕となつて

車いすマラソンの輪のハンドリムに

全力を注入している

そのスピード

脚で走る選手でも追いつかない

一瞬僕は胸が暑くなった

ああ 失われた脚が

若い兵士がアフガン戦争で

地雷を踏み 身体もろともに飛び上がり

荒地に叩きつけられた幻影

いや幻影なんかではない

事実の心象なのだ

見よ

全身と全精神を犠牲にしてまで

国家に命を与えたその若い兵士の姿が

必死になつて一途にゴールを目指す

これは選手にとつてのスポーツではない

いかに生きるべきかの戦う自分への解答なのだ

ああ晴れ渡る大空に響きわたる歓声と拍手

終日止むことはない

生涯止むこともない

僕の心身の内で……

僕にとつて詩作とは何か

僕という人間は世界環境内存在の現存在であるという概念から離れられませんが 僕に日々与える人間感情や思念はまさにこの世界のあらゆる環境内からきています 詩作は環境内存在に同化 異化して

行われます

なによりも僕がよりどころとするのは直観です 直観が派生し意識の流れをつくり 連鎖 拡張 また断絶 中絶に発展します 題材は限りなくあります 自己省察から社会環象までさまざまにあり
僕は自問自答を繰り返します

それに加え、詩作する楽しみは僕の持つて生まれた素質の内自分自身を生かすことにあります。これで僕は無理なく心の自然派になれるのではないかなと思います。

人生の余白に大いなる楽しみを満たしてきた僕は、その楽しみいっぱい
余白が 僕の人生の記録帳になれば 僕にとって限りなく幸せであると
確信しているのです

注・・「人間は世界環境内存在の現存在である」という概念「ハイデッガー
哲学より抜粋

落下

淋しいぞ

どこへ消えたのか

蝉の激しい濁声の競演

全力を出し切つて

真夏の陰の敗残者となった

蝉の落下音

ああ淋しいぞ

またも

顔を出した立冬

死の顔だ

都会に陰のごとく響く

枯葉の落下音

喪失の思い出

冬の暗い昼下が

母の三回忌に古里の

海辺を歩いた

太陽を喪失した僕の頭には

カモメの怪しいなき声が満ち

眼には青々とした寒松の姿

今にも刀を抜いて僕に

切りつけてくることゝ

誰も看取ることもなく

母を逝かせてしまったのだ

海が深いしわをよせている

潮の微かな声

母だ

生きることをなさずして

晩夏は去り

晩秋も去り

夕日が去りゆくと

今日という一日が終わる

生きることをなさずして

凍った虚しさが胸を突く

梢の葉は去り

大地の枯葉が燃え尽き

夕日が世界に影をなげる

裸木の我は

生きることをなさずして

無を夢見る

凍った虚しさが氷となつて

冬の湖水にさまよう姿が

痛々しい

孤独の花弁

孤独の花弁が落ちた

145センチ弱

45キロ弱にまで

縮まつて

九十一歳にまで延びていた

私が急遽異郷から故郷の土を

踏んだのは陽のない淋しい

元旦であつた

街も病院も海に沈んでいた

母だけが海面に漂い

刺された神経が

退潮に沁み入っていた

海風の強い松林の墓に

耐えきつて戦病死した良人を

埋葬した直後からのその苦しみが

戦後の闇の時代

熱い屋根の上で踊った

浮かれ神輿の狂乱の時代

狂った神経の果ては

母の孤独の花弁をずつしり重くさせ

一生の空を寂寥とさせた

列車が止まった

時を奪った終着駅

バジャマ姿の母

なんと美しいのだろう

バジャマ姿！

ああなんとということよ

筆筒の中に粹な紫の着物が

目を覚ましていたというのに！

再度母の美しさを見つめた

だがこの美しさは幼時からの私を

暖かく力強く包容するものではない

戦後の孤独が咲かせた

たつた一人で試練に耐え抜いてきたものだ

一瞬 母の小さな身体が燃え上がり

炎が悲しみとなつて

魂が私を穿つた

長く異郷に

放浪に明け暮れた

出来損ないの一人息子の胸を！

手を暖めた白骨

母が

母が生きている？

そうか！ そうだったのか

私こそ母の生き甲斐だったのだ！

埋め込まれる全体主義

バイオコロナ変異体チップが俺の体に埋め込まれる

あらゆる変異体に抗うために

バイオ癌チップが俺の体に埋め込まれる

あらゆる癌に抗うために

バイオフィューチップが俺の体に埋め込まれる

あらゆるインフルエンザに抗うために

バイオリューマチチップが俺の体に埋め込まれる

あらゆる関節炎に抗うために

バイオ前立腺チップが俺の体に埋め込まれる

真夜中でもじっくり熟睡するために

こうして次から次へとバイオチップが俺の体に

埋め込まれてはチップ尽くしの万華鏡となる

最後にバイオゴッドチップが俺の体に埋め込まれて

全てのチップが神の奴隷になる……

日の出の写真

大海原が眼前に広がる

ガラス窓に覆われた上階の

角部屋で孤独を癒せぬ男

40年間も走ってきたのだ

合理主義に徹した会社内部で

男の頭脳を損得 利得と昇進のために

全力を尽くしきって……

40年間も走ってきたのだ

人生行路を突き詰めながら

子の成長と家族の面倒

その責務を一生の義務として……

40年間も走ってきたのだ

一日24時間休みなく

合理を掟として 分けの分からぬ

非合理など糞くらえと吠えながら

40年間も走ってきたのだ

合理主義を血肉化させた思考が

男の全体を創り 世界観となつて

物事の判断基準となつた

だが突然組織は男の

昇進を止め 地方局に左遷

男の心臓を引き裂いた

非合理の合理ではない

これも合理であると割り切るのは

なんと辛いことだ

辛い 辛い

そうであれば自分を解放させるしかない

自分を首にして 地方局から脱走し

自宅に戻ったものの

待っていたのは

母の介護

子ずれの娘の離婚と帰郷

自宅は合理のたがが外れ 脱走の心理と

絡み合つて不可解な心理が滲み出て

不調和が暴走する精神

高じては冷め 冷めては高じる

鬱の気分

予期せず眼の無い仮面が現れる循環

40年間も走り続けてきた

果てしない道

不毛ではなかったはずだ

不毛では・・・

元旦の日の出

毎年その写真が僕に送られてくる

耐え難き走り続けた男の生が

一瞬の癒しだろうか

俺との絆の 日の出の写真が！

人間不信の冬

やつて来た やつて来た

人間不信の冬が

自信をもつて言えるこの俺こそ

人間不信の典型例であると

抗体ゼロという結果に

出会つてみればワクチン接種の

証明書など全く無意味

水際対策こそ俺の毎日だ

きよろきよろしては街中を

歩かねば ああ歩かねば

都会人はみな兵士なのだから

俺を殺すわけではないが兵士の

一撃で倒れるのは嫌だね

おや あの通りはもの凄い長蛇の列だ

見える遠くに 白いテントが

警戒 警戒

俺にとまった鳥が羽をバタバタさせて

耳を穿つ

あれ 別の通りでも またもや

テントにはCOVID19テストの

旗が大揺れだ

警戒 警戒 警戒曲が

耳をつんざく 鳥が

あれ ふと誰かを見つけたようだ

とまり樹を移して ある女(ひと)に

とまった

空は落ちた

鳥の警戒曲を胸に家路を急ぐ

あれは鳥の曲

薄闇のなかで声をからして

歌っているのが聞こえてきた

愛の時間

俺の内の時間は常に終わりがあ

俺の外の時間は常に終わりがな

俺の胸の内なる時間は

おまえひとりへの愛ゆえに

いかに灼熱の太陽のごとくの身体に

なつてしまったか おまえは悟ったはずだ

愛の終わりは非情で孤独だ

たとえ愛の時間が空回りしていたとしても

その時間のなかで歎びと悲痛が

結晶作用を続けていたからだ

おまえは樂園を俺と共に彫刻すること

拒み 愛を殺傷した 俺たちは

感情も精神も互いに異邦人だったのだ

愛は虚構の内では生きられない

意志の力をもつてそれを

取っ払うんだ

意志をぼろぼろにされた俺の時間

それはもう止まった 無の時間がやってきた

友よ

この経験を繰り返したことありや

あればこそ愛の空回りの奥で

孤独が微笑み情けをかけることを知るだろう

この俺の胸に

自愛を見出す他なしと そして

外の時間の流れの中に自愛を托すんだと

俺の意志で……

冬のみかん

蝶の羽のような緑の葉を付けた

みかんが俺を見つめた 冬の最中に……

何を迷っているの

私の全身を包んでよ

あなたの手の中で温もりしていきたいの

ダウンジャケットはなし

まるで裸同然なんだから

転がしておくれ

あなたの暖房の部屋の白いベッドに

狭い都会の売り場の籠の中の奴隷はうんざり

何をしているの

私の薄い皮を剥がして

どうしようって云うの

あつ痛い 噛まないで

私の血がベッドを汚してしまうわ

でもいいわ

あなたに噛まれるんだったら

あつ痛い 痛い

もつともつともつと

ああそれこそ私の歓喜よ

私があなたの体に入つて

私があなたのお役にたてるんだったら

都会のぼろ籠の中にいたら

それこそ売れず 腐敗しきつて

哀れで嘆くだけだわ

はじき出される個人

高額な請求書を大学病院から受け取った

何も聞いていない

説明さえ受けていない手術代

何を手術したのだ？

腹を切った証もなく

麻酔が覚めてみれば白い寝台の祭りごとは

跡形もなく出所の違う三枚の請求書が

俺を脱むのみ

無言の対話

むかつとして野生が激憤するが

相手は大病院という金儲け主義の機構だ

クレームしたつて

別の部門に追い払われる

がうちに組まれた城に突っ込む穴はなし

一匹の蟻がいや例え無数の蟻が

城壁を這つても

ああ無意味の努力の死でしかない宿命

どうにもできぬ巨大な城という機構

俺の野生の怒りと激情をもつてしても

ダイナマイトで揺さぶることはできない

城を取り囲む

憤怒の蟻の輪

俺もその輪に連なつて・・・

古典絵画がひしめき合っている館内は

陽が隠れた冬の都会の森に似て

静寂そのものだ

ひっそり響き合う古典神話の呼吸

小老はその呼吸に押されて

いつもの近代美術の部屋に入った

ゴッホの自画像の前に立つ

おのずと涙がこぼれた

深い憂いをふくんだ表情

目まぐるしくかけがいのない人生の

時間が小老の開けた心に

なだれ込んできた

無言の対話

ゴッホの変化する表情

ひとときわ悲しみが迫ってくる
愛した それを 小老は深く
魂までになったその顔を…

無言の対話

あつという間の儚い生に激情の
津波にもまれ 崩れていった
夢と希望 そして

自虐の苦悶の底に死が居座った精神
愛した それを 小老は深く
悲しみとともに…

無言の対話

崩れゆく身体

崩れはしない自然のなかの尋ね求める美
愛した それを 小老は深く
そしていつまでもゴッホの魂から離れられなかった

愛の回想 3

遠くになつてしまった

蕾が青葉となり

あなたになつていたその葉が
悲しみと陽気さを溢れさせた

モーツアルトの調べを奏でた日々も

青葉もやがて枯葉となり

大地に集められ炎となつて
あなたの呼び声に嘆きの胸で答え

響かせた永劫の別れの日さえも

遠くになつてしまつた

あなたが読み上げる詩に

愛がこぼれ 暖炉の火のなかで

燃え上がつては詩そのものが

愛を奏でた一日も

真つ赤な生身の薔薇の花弁に

くるまつて無垢な薔薇を愛したと

思ひしや鋭い棘に刺しぬかれ

血だらけになつた思い出さへも

遠くになつてしまつた

あなたが死者となつて涙を流し

迎えに来たときに

死者となるべき幻想を抱いた

若き時代も

愛する言葉がなんと不条理で

裏切りが続いた果ての往きつくところ

愛を殺すほか平穩は得られないと

老いゆく道の上の意志の決定さえも

あなたの美しさに動揺して

ただただ心のなかで

あなたを愛撫する

目覚めた朝の狂気

灰色の生気を失せた男根のごとくの岬

前面に拡がる海原

どこへ流されていくのか

崖の縁に構えた危なかしい

訪ね乾いた一軒家

どうやつてここに

なぜここに

誰の家なのか

記憶にはない

岬での不明さ 不可解さ 奇怪さ

奇妙な光景だ

室内装飾さえ澄み切った記憶にはない

幻か 家を後に岬の手すりを握りながら

さあ 帰ろうかと決心した時に

若い娘が 突然 葡萄の房を膨らませて

飛び出してきた

そうだあの娘に ここがどこか

場所を いやその前に

すかした腹の幸のために 葡萄の中身を

吸い取ろう あの生カキも・・・

追った娘はすでに

岬に沈んで消えてしまっていた

不思議で奇妙なことよ

ここには確か昔 一度戯れにやってきた

思い出す はつきりと

生気ある岬の光景に陶醉し

あの光輝く海原が見える

レストランで確かに生カキを吸い取った

帰りのバス停も近くにあったはずだ

ああ記憶がああ若い娘の葡萄の房のことく

膨らむわ 膨らむわ

記憶が虚構を舐めるとは

いやこれは幻想か原体験か

それとも虚構と虚構の間をさまよい

幻覚と妄想を弾き出しているのか

目覚めた朝方

深まる混迷と混乱

幻想が朝方になって中絶せずに

脳波となつてあの岬に立たされている

考えれば考えるほど俺を失つて

俺が虚構の一部に 幻想の実態になつていく

怖い 狂気への入り口が

自我が幻想と妄想を帯びることが・・・

怖い 目覚めた灰色の朝が・・・

真実なき人間

俺を愛したゆえに俺の百合を

夜な夜な求めたのか

それとも

俺が愛したゆえに不誠実な

肉体が夜な夜な俺を裏切ったのか

おまえも俺も虚構人間

真実なんてないんだよ

真実はおまえも俺も

虚構人間であることだ

それも

完全なる不確定性なる存在だ

これこそ真実なんだよ

黒い震え

セラピーに通つても 通つても

一向に心身の震えは止まらず

一日として部屋に孤立しては

自分を失いそうだと

半年前に父を武漢コロナで亡くした

遠方で独りぼちの知人が

震えながら嘆いていた

今同じ震えを持つ人たちの集団セラピーが

あるかどうか探しているんだが：

君が近くにいたらカフエで語り合い

君自身を取り戻す努力を惜しまないんだが：

と声を震わせた

樹々の葉は震えて 震えて

既に墓の中に入ってしまったていた

痛ましく残された裸の梢が寒冷に

震えている姿

きつと小さな 小さな芽も震えているだろう

きつと去りゆく冬を前にしての

希望の震えかもしれない

だが去りえない震えを持つてしまった彼がいる

離婚への震え

子なしへの震え

逝ってしまった父への震え

道の果てに震えが留まっている

まこと極まりない悲愴

記憶の震えが・・・

どう生きるべきか

幕は開いている

震えを解きはなすドラマは始まろうとしている

枯れゆく一本のころある樹よ

聞こえるか 聞こえるか

生を震わす機織りの歌が・・・

震える記憶を通り越して

乗り越えていく歌が・・・

落日の震えの中にあつても

太陽の叫び

何もかも投げ捨てて

心に促された緑の異郷に出会い

恋し 愛し 生き

今では何もかも 自由さえ

嫌悪し 怒り 悩み

老いる足さえ欺瞞と腐敗に満ちた大気に

震えさまよう

告げるべきか この都会に別れを

精神の荒廃したこの地 この老いの身で

生き抜くのは耐えられまい

ああ幻覚か さつきから

悲しみの声が…

私を生かした太陽の叫び

落日の身にあつて朝明けを

二度と見ることもなく

荒地に没するならば

ああ 私を探すあの悲しみの声

いつまでも私が生きた異郷の都会に

その響きが降り続けよう

父と母の声が…

いのち

水漏れする私のおんぼろ舟よ

どこへ向かうのか

漕ぐ力もなく

川の赴くままに流され

落日の滝へか

そうであろう

そうであろう

とすれば 時よ

私の願い 過ぎ去った日のいつときに

とどまつてくれまいか

落日のまえに

私の胸がはちきれ あふれ みたされた

初めて知った命への愛の

その喜びのいつときに

それこそが私をして

命が激しい不安と憂鬱の暗い洞穴に

潜んでいようが

永遠に輝いているものだ・・・・

私の水漏れするおんぼろ舟よ

向かう先の果ての

夕陽がどんなにか美しいものであるかを！

現代世界

平和を求めぬ資本主義大国は

金儲けに命をかける

強欲な猛獣である

グローバリゼーションの大義のもとに

平和を求めぬ独裁大国は

独自の安全保障を構築できない

破壊と崩壊を運命づけられている

ナショナリズムの大義のもとに

平和を求めぬ共産社会主義大国は

偽善と欺瞞に満ち溢れ

攻撃的な異質な国家である

その国こそ自国民と弱小国の命を奪い取る

全体管理の大義のもとに

資本主義国家も

独裁国家も

共産社会主義国家も

倫理を欠如した国家なれば

その国家こそ人類平和をぶち壊す

仮に資本主義を標榜する国家に

倫理がなければ

自由は単なることばに過ぎなくなる

民主主義国家といえ同様に

とすれば独裁が自由に勝利し

自由は独裁に勝利することはない

ああ俺にはどの国家体制に所属しようが

求める平和で静かな命を暖めてくれる

懐がなくなってしまったようだ

畜生！ このスマホ！

俺を決して休ませぬ！

逃亡先

大都会には

私に争う相手がいなくても

理由なく攻撃してくる悪者たちが

群れをなしている

理由があつての争いは激越の濃淡こそ

違え普通の人間の行為だ

地上でも地下でも

私は誰とも争いたくない

老いた身であれば

ああ あの楽園こそが

私の望みをかなえてくれる理想の時空

その時空に至れば時空は

死んだのも同然

私の歩みはもう始まっている

朝の宝石

私欲のない自然に迷い込んで

みると 迷いが覚めた

清らかなスビリット

ふっと湧いて

河の向こう岸の母のことが思い知らされた
貧しくとも ひとり心のなかに

仏陀と共に・・・

それゆえに朝の宝石が喜びとなったのだ

私欲のない自然に迷い込んで

みると 迷いが覚めた

ふと心に沸いた

清らかなスビリット

老いをどこまでも歩かせる

命になつていた

日曜の昼下がり

大型スーパーマーケットに入った

回転ドラムのごとくの空虚な日曜の昼下がり

これといつて興奮も感動もなく

ありきたりの食料品をカートに放り込む

りんご レモン バナナ 玉葱

人参 セロリ 白菜 キヤベツ

トマト ガーリック ミルク チーズ

ヨーグルト オートミール チキン ポーク

ナッツ 冷凍ターキーバーガー・・・

もう何十年も習慣化したものを今日も

ああ春なのに らしきものはなし

ふと頭を横切る花びら

貯水池の桜並木

ピンク一面の映像が僕を包む

高インフレに苦情を漏らしながら

自動キャッシャーで清算をすまし

外にでると

太陽が大笑いし 春風を巻き上げている
ふと雲がピンクに染まり 僕の空虚さを
追いやるように 動いてきた
空がいつとき満開になった

男と女

愛のない女に恋焦がれ
愛を尽くし
どうしても鳥かごに
閉じ込めて
自分のものにしたい男
たとえ暗闇のなかの
片道をつつ走るにせよ
利用され蹂躪されようが
自分のものにするまでは
中絶することのない愛
その愛が狂気となつて

ついには薔薇のナイフで
女の心臓を突き刺した
女は云つた
馬鹿ね あんたは
私は過激な唯物論者よ
あんたと同じよ

都会の朝

空虚な朝
青空が悲しい
銀行の窓口に立つ
金を数える女
退屈した空虚な顔
パン屋に入る
売れ残りのパンを
紙袋に包む空虚な男の顔
肉屋で出会つた

肉付きのよい薄つべらな

ハムをカットする

老人の空虚な顔

郵便局で切手を買う

黒人女のけだるい仕草

空虚感に沈んだ顔

野菜を探して店に入る

萎え萎えになつた野菜

萎え萎えになつた

キヤッシャーの老女の空虚な顔

街角の花屋で母のために

白ユリを求めるも

手渡す小男の

やるせない空虚感

家に戻つて

母の遺影の前

またも空虚な顔

空から雨が零れてきたようだ

晴れることはあるまい

誕生日の贈物

僕には覚えがない

子供の頃に母や周りが僕の

誕生日を祝ってくれたことが

喜寿の賀の祝いになつても

それがなくてもよいと

戦後の子供心のままでよいと

無意識のなかにそれがいきている

でもユダヤ人の友は違つた

祝うべき子供の頃の誕生日

それはどつさりと両親から贈られた

祝いものにかこまれた祝賀の日であつた

だが悲しかった

これほど悲しいことが祝いの日に
味あわされたのだと

贈物は 本 ベルト 靴 下着類

に限定したものであった

サイズがすべて合わず

いずれも大であったのだ

明日のためとはいえ

伝統とはいえこんな悲しいことはない

毎年のこととこぼす

でも教えがあつて両親がしたのだから

攻めるわけにはいかないが

自分の子供にそうさせることが

今できないでいるんだと

民族の教えを 伝統を破つてよいのかと

意識に上がつてきては悩ませていると

孤独な合理

洒落た小さなレストラン・カフェが

目に入つた

若者で賑わつている様子

全面ガラスのドアを押して

席に座れてほつとした

腹が鳴つていた

もう少しだ

だが待てども注文を誰も

取つてくれない

周りを見回した

皆スマホを動かしている

隣の席から声が聞こえてきた

メニュー#3と5

それにコーヒー

支払いも済ませたと

席から見える厨房には

一人年季のはいつた中年女

忙しく立ち回っている

若者が立ち上がった

カウンターの上の出来立ての

二人分の料理とコーヒーを

トレイにのせ席に戻ってきた

また腹がなった

僕のスマホには財布機能のアプリを

怖くて入れていない

支払いは現金がカードだ

空いた腹の怒りが全身を駆け巡った

席をたった

すぐさまスマホを手にした

若者二人がその席をしめた

なりっぱなしの怒りの腹

注文をとり

料理が運ばれ

キヤッシャーで清算する

どこか愛想のいい店はないものか

雨が降ってきた

孤独な合理の雨が・・・

初夏の部屋

部屋を初夏に整えて

さっぱりした気持ちで外を見ると

すりガラスの都会の光景が

眩しい夏を知らせていた

空には太陽の熱情の歌声が

大気には昨夜の雨のしっとりした

開いたからだの歌声が

そして固い都会の舗道の上には

あなたとのぬくもりの歌声

僕は精一杯歌声を吸い取った

思い悩むな

夏の終わりを・・・

黒いしげみ

猛烈な大粒の雨に泣かれ

何もかもずぶ濡れになつて

夏を迎えた

だが一本の樹が僕のずぶ濡れさえ

吸い取つて無限に葉脈を広げようと

満ちた力を大氣にふつけていた

それだけではない

僕の身体のすべての水分を

一本のストローで飲み込んで

青黒い繁みをつくつていた

僕といえは

名もない夏の暗い葉

やがてはびつこの枯葉となつて

舞い散つていく魂

さあその宿命を引き受け背負つて

いつでも崩壊する現実には立ち向かおう

迂回のない夏の終わりがどうなるうとも…

狂乱の喜び

あなたの全裸の美しい色艶に

狂い悩むとは

なんと痛ましき

老いの色情

なんと無上の喜び

老いの気持の若返りで

あることか

でも もう狂い悩むこともない

首を切り取って

美しい真つ赤な薔薇を

私の心の花瓶に

閉じ込めてしまつたゆえに

物欲と精神

マンハッタン島はコンクリートのビルが

軒並みに天を突くがごとく

人間の組織の物欲の花ざかり

僕の若い時代でも 歳老いた今でも

膨張するその風船に変わりはない

組織の中に入った

好き嫌いに関係なく

住む 食べる 寝る

を日々維持するために

自由と解放のない蟻のごとく

暴力的な束縛組織の物欲の風船のなかで

蟻が極小の風船を膨らませながら・・・

それがどうだ

定年に達するころ 物欲の夢に描いた

我が家の設計と建築・建設

夢の家の幻がちらつくだけだ

人生の失敗 確かに

自分に問うた

他者であるもう一人の自分が

その通りだと

判事になつて裁定した

だが判事に食つてかかったのは

検事でもない自分という弁護士だ

確かに風船は弾けた

弾けたが良心と良識の心は逆に

弾けた風船を修復し 別の風船に

変えてしまった そして

その小さな風船を秘めて

一匹の蟻が 草花 樹木の根っこ

の別世界のなかで日々生きている

ようやく今になつて

自分という弁護士がいつたい何を

守つてきてくれたのか体得できた

これを別世界での幸せというのだろう

崩れる星条旗

長く住みなれた

我が肉体よ

我が頭よ

おまえはよくも長く住みなれた

異邦の合衆国 異文化に

馴染み染まつてしまったのか

確かに

衰えゆく肉体は星条旗の生活の

風呂敷をかぶり

忘れゆく頭は星条旗の文化の

帽子をかぶつてきた

我が祖国よりもいつそう長い間

だが長く住みなれた

我が肉体

我が頭

あんな調和のない生活の風呂敷も

あんな物神の文化の帽子も

全て仮のもの

私の魂が染まつてたまるか！

美しい伝統と文化の

日本の穢れなき魂

星条旗に汚す権利などありはしない

崩れゆく人種のるつぼの中の

星条旗の短き伝統と文化よ

破壊されるばかりで保守できないのは

いつたいなせなのか……

口にパンをくわえた小鳥

アッパースト・サイドの5番街の一画

深緑をかぶった屋敷の庭に腰を休めた

ふと背後の梢から小鳥たちが

声をあげて寄つてきた

かじつていたバケットを足元に零すと

小鳥たちが次から次へと

パンを口に加えては

私の顔を眺める

またパンを零す

くわえていた口に更にパンを重ねる

口に溢れたパンを素早く略奪するものもいる

パンがある限り取り合いになる

つやのある別種の小鳥がやつてきた

眼球は回転せずじろじろと私を眺めるのみ

なぜか私を嘲笑うように

ふと思った

五番街に棲む鳥だよな――

祖母の思い出

私には二人の祖母がいた

母方のそして父方の

母方の祖母は長い縁側の前に広い

庭のある、遠くに田畑が見える屋敷に

曲がった腰を辛そうにして住んでいた

母が僕の小さな手をつかんで

僕を実家に預けるためにやつてきた

大家族だつたけど祖母が一番好きになつた

遊び疲れた時などはいつも五円玉を握らせて

僕を近くの駄菓子屋に飛ばせたものだ

何度も何度も五円玉を握らせた手を

見ていると 時には畑 田んぼの土が

ついていた皺くちやなそれが

美しく見える瞬間があつた

今思えばその美しさ ひときわ

祖母の腰まで深く曲げてしまった

人生を想い描くのだ

父方の祖母は海辺の町に住んでいた

夏になると祖母の家に泊まつては

真っ黒になるまで遊び疲れ楽しんだ

祖母は八人の子供を産み

小さな家でよくも育てあげたものだ

感心した みな独立してしまつたために

祖母は一人で生きていた

ある年の夏休み

祖母が僕の小さな手を握りしめ

息子二人が同居する東京の屋敷に

連れ出した

一人は結婚し子供が二人いた

叔母は優しく美しく

叔母と叔母の明るい家庭が大好きになつた

一か月経つと祖母が迎えにやつて来た

祖母の皺くちやの手が僕の手を濁つた

だがそれを払いのけて

僕は玄関で顔が皺くちやになるまで

泣き尽くした 淋しいんだよ

叔母の家にいたいんだよ

かなわぬ現実

帰りの汽車の中で祖母の膝の上で

眠ってしまった

だけど目の前でみたあの祖母の皺くちやの

白い手は忘れることはなかった

今思えば八人の子供を送り出した

苦勞の連続 それこそが皺くちやの

波間に宝石の光を放っていたのだと

想い描いている。

幸福

あなたが誰よりも羨ましい

シャトー・マルゴーのように

なんと優雅にお歳を召されているか

八十九歳なのに

ええ八十九よ

でもこの齡になつて感じるわ

私つて赤ん坊であることが

ええ髪も齒もありませんわ

あるのはおしめ

それに背丈だつてもう赤ん坊よ

幸せの目覚まし時計はいらないの

いつだつて幸せなのよ

みんなに守られてね

光の中 天上の微風が私の老いを

かたく抱きしめていった

朝と夕べ

童の頃の日々

腰が直角に曲がつた祖母の

毎朝の心に微風を起こさせる優しい

親しい声の響き

だみこえ

夕べになると祖父の毎度の濁声と

狸の腹をたたくポンポンの音が

夕日の光の中で交じり合つて

平穩に明け暮れていった

若い頃の日々

朝は理由もなく鬱が心に影をつくり

夕べには孤独にも涙ぐむ

壮年の頃の日々

朝は愛する女の裸身のそばで

去つた熱情と興奮を想い描き

心楽しく笑いが泉となる

夕べになれば

真つ白なシーツの上で生活苦に

促されて昂揚もどこへやら

救いのない灯りがともり

背を向けて声もなく眠る

さあ今の老年の日々

時折のめまいが不安の朝の光を

怪しく揺らす

夕べになると

鐘のひびきの内に人生の終わりを

夢想する だが

ああわが魂よ

内に留まれ！ 留まれ！と

われを激励し心諫めつつ

声もなく眠ろうとするわれを知る

病院の花弁

20階の行きの病院の

エレベータに駆けこむと

マスク顔の老人たちが

死を握っている

昼下がり

雨雲が出るが

日光が追いかけてきて

20階の待合室の車椅子の

老人たちに降りかかる

私を素通りして

ドアを開けた若い看護婦

声を張り上げて生を呼び生が

死を壊す医者部の部屋に入っていく

私は呼ばれることもなく

未だ座ったまままだ

ドアが開く

別の若い看護婦に連れられて

薄い白髪の青白い顔した車椅子の

老婦人が死を抱えて出てきた

日光が追いかけてきた

私の横のテーブルの上にある

落下した花弁に降りかかった

太陽の声がした

私の名を不安げに呼んでいた

秋の風

いつもの小道の影をささない

ベンチに座る

足元にやつてきた栗鼠が奇妙に

媚びた秋の顔を見せた

腹を空かして この期になっても

ああ弱い栗鼠よ

どうしたのか その足は

血痕を見せる痛々しい傷跡は

戦に敗れたのか

仲間の栗鼠に

それとも犬か

いやいや出没する洗熊か

仲間は敵

敵は仲間

片びつこをひいているではないか

突然 遠くで犬が吠えた

途端に栗鼠は逃げ去った

傷の痛みに無感覚になつて

脅かされることのない秋風よ

早く団栗を落とす力をつけてくれ

俺だつて明日はポケットに

落花生を詰めてやつて来るから

約束するよ

心象の花

秋の昼下がり 都会を隈なく散策した

街角の花屋の華やかな色彩

戦い合う国旗が空気を汚すデパートビルの黒色

倒産した小さなブティックや小売店

そしてレストランの灰色

ストリートのグリーン

アベニューのブルー

タクシーが光を流していくイエロー

線と点と塊の色彩が空間を切斷する都会

そして疲れを知らぬ

パステルカラーの大空の群青色

都会の鼻の上で欠伸をしている

くまなく散策した都会

私は一つの奇妙で光をスライスした

美しい抽象画を完成していた

一日の終わり

横切ったメトロポリタン美術館が

私を呼んだような気がした

深い秋へ

季節が墓場に急ぐ

そよ風が神々しく聖歌を歌う中を

骨を折った黄色く汚れた

襤褸の服をまとったホームレス

光と風に揺れ彷徨っている

大地が落葉を食らっている

遠くで無数の人間が兵器で倒れ

大地がせつせと墓づくりに忙殺される

闇が白夜を飲み込んでいる

流星が墓場に落ちてきた

哀悼するがごとく・・・

愛の暴走

愛が妬みの薔薇の棘を磨ぎ

ひかりを照らしながら

私の狂気の眼を回転させた

みこと 水中のナイフが

舌を出した大魚を射止めた

反転した狂気の眼

記号となった愛を認める

主観的な棘ある理性が私の心を射止めた

川が裂け 滝に落ちてゆく

日記「一日の旅」

季節が死の衣裳をまとった

ハドソン川にそって走る列車から

対岸の山にあつ紅葉を見つけた

列車はキロメータが壊れた駅に止まった
私はおり立つた

そして目指した美術館で

缶詰を開けた修復不可能な現代アートに
私は完全にいかれてしまった

そのいかれた頭に紅葉の帽子を被せ
ハンバーガーにかみつき平らげた

一日の秋の旅路が終わった

ジュニア篇

◆ともむらももか 東京都 六歳

やさしいとわるい

やさしいとわるいのころは一つ一つにわかれている

ひとはみな、せいかくにより心の中がひらけるのだ

わたしは

やさしいころばかりと思っていた

にんげんにわるいひとがいるだなんてしらなかった

ならば

わたしは

やさしいころの中の星になりたい

◆櫻井 紬 愛知県 八歳

かげとわたし

階段上がれば目の前に

白いドアがあらわれた

その向こうにかげがいて

疲れた様子で眠ってる

かげとわたしは同じ夜に

同じ部屋で眠るべき

だけどドアがぶつりと

かげとわたしをちよん切った

かげはつかれて目をつむり

わたしはつらくて目をつむる

◆長江旺木 愛知県 九歳

におひ

なんで においは

もの、いきものによつて

ちがうんだらう

たとえば 土

土だけでも いろいろある

しめつているとき

カラカラなとき

ひなた

ひかげ

そのときの

いろんなにおい

水と雨のにおいはちがう

同じ水なのに

雪も 水つぽいにおいだね

だむ うみ かわ みずうみも

いろいろなにおいがある

にじつてくさい雪 どう

空気のうすいガラス しお

木のはっぱは

わらびのようなにおいだな

においはふしぎだ いっぱいだ

ベットだったら

毛 ひげ 手 足 しっぽ

いろいろだ

“わた”のにおいをかいでみた

新発見。

これは、

マンモスだ。

※「わた」は、飼っているネズミ(フアンシーラット)の名前。

サボテン

サボテンまんまる

かわいいな

とげちくちくいたた

かわいいサボテン おおきくなあれ

おひさまいっぱいあびて おおきくなあれ

とげは こうげきのじゃないよ

とげは じぶんがたべられないためさ

とげは こわくないよ

じぶんをまもるため

天使のゆきちゃん

ちよっぴりさびしいな

ゆきがないよ

ねていた わらも

のみかけのお水もあるのに

ゆきが

もういないよ。

まいにちいっしょにあそんで

まいにちごはんをたべて

いっしょにげんきにぐらした

今日までずっと

かわいいゆきを

たくさんたくさん見られて

しあわせでいっぱい

たのしかったよ。

今日までずっと、ありがとう

生きていてくれて、ありがとう

うまれてくれて、ありがとう

ぼくにあいにくえて、ありがとう

お別れのあと 家にかえった

おへやには

ゆきが使っていた小屋が のこった。

なかをのぞいたら、

ゆきのおいが のこった。

さよならだつて

すこしだけのあいだ

みんなで

きつと いつかまた

あそべるよ。

※「ゆきちゃん」は、家で飼っていたネズミ（ファンシーラット）。

もりの輪

あさいちばん おきたの

たいようさん

やまにのぼつて おはようさん

たいようのひかり

はつばさんをおこしたの

おはようね はつばさん

おはようね たいようさん

はつばさんは おじぎする

しずくよ とどけ

つーいっ ぽたん

土さん おはよ

水さん おはよ

土さんは お水をあげる

すくすく大きくなつてね

木のねっこさん おはようお水だよ

土さんおはよう おいしいね

木のえださんに とりさんとまった

木のはつばさんは とりさんにこあいさつ

げんきですか おはようさん

おおきい山さん おつはよう

やあやあとりさん おつはよう

草さん ふわあ。

あさですよ

いちばんはやおき たいようさん

みんなにしらせたよ

もりのみなさん、おはようさん。

みんなはやおき、いい調子。

◆鈴木十和子 静岡県 十二歳

大切な物

生きて行く中で

大切なものは増えていく

人の心をコップに例えると

年を重ねるにつれて入らなくなっていく

それでも入れるために

『大切』を

無理におしこもうとする

その結果

心が割れてしまったり

本当に大切な事が(命とか)

わからなくなってしまう

『何もない』のも大事

悪口

悪口は水のようなもので

他人にかけようとする

はねかえって自分にも来る

そして

悪口を言われる人よりも

自分が一番悪口をたくさん聞いている

つらいときは絶えないでよい

生きていけばつらいことはたくさんある

人は強くてもうい

だから

つらいことにどんどん潰されていく

気づけばベツチャンコ

つらい時は潰れる前に休め

耐えなくてよい

周りにふりまわされなくて良い

磁石は他の磁石の影響を受ける

人も同じで

周りが動くほどふりまわされちゃう

疲れちゃうし

落ち着かない

だから

引き合う人と一緒にいれば良い

一生懸命

何か、守りたいもののために戦う人は

どれだけ怒られても、ボロボロになっても

最高にカッコイイ

努力もせず、蜜を吸うだけの

傷のない綺麗な人よりも

人を蹴落としてまで

自分を良く見せる人よりも

よっぽど良い

罪悪感の割り算

いじめる人：針

いじめられる人：ボール

に例えよう

何かを傷つける時

最初にボールに針を刺す時

最初は『うわ』と思う

でも二番目、三番目になると

もう穴空いてるし

罪悪感は薄れていく

自分が針を刺している(傷つけている)

事に変わりはないんだから

罪悪感をもて

やるな

◆峯岸泰希 埼玉県 十三歳

電源の ON ボタンを押す

機械は 起動する

当たり前のことだ

学校で「おはよう」と言う

友達が「おはよう」と返す

当たり前のことだ

電源の ON ボタンを押す

機械が 起動しない

壊れているのかな？

学校で「おはよう」と言う

友達が 何も言わない

どうしたのだろうか？

とある人が言った「当たり前は当たり前じゃない」と。

当たり前は 当たり前じゃないか！

どういう意味なのだろう？

僕は答えを探し続ける

僕は答えを探し続ける

◆蘇比深雪 三重県 十三歳

夢は叶わぬ代名詞

夢見た光は側になくて

自分の意思は死んでいて
手をかざせば垢だらけ！

夢見るまふたは1枚で

脳内会議苦悶の図

湿気た髪の毛巻いちやつて

失敗したってそんなもん

君を思つて言つてるの

捨て台詞は億劫に

安心 不信 無関心

ノートの隅の落書きは

勇気付けるものもなく

下手くそばかりが漂つてゐる

どぼん、と音がする

目に見えない何者が垂れ下がる

一歩一歩侵食し

がらんがらん

闇にひかりが照らされる時

わたしは夜がこわいと想う

公募 2023 金澤詩人賞

金澤 詩人 賞	● 1年に1度、応募作品の中からすぐれた詩人1人を選んで授与します。 ● 賞金 10 万円と硝子のトロフィー
応募 作品	● 詩の未発表作品を電子メールで送付する。添付ファイルの場合は必ず Word でお願いします【pdf 不可】。作品数自由。縦書き横書き自由。紙原稿はお受けできません。 ● 送り先 mimi.7.kei@gmail.com ● 名前（ふりがな）、住所、年齢、電子メールアドレス、電話番号、応募年月日を記入。ペンネーム使用の場合は、本名とペンネームにもふり仮名を。 ● 著作権は応募者本人に属します。 ● 受付期間 2023 年 3 月 11 日～11 月 30 日 ● 個人情報上、掲載時には名前（ペンネームの場合はペンネーム）と都道府県名のみ記載します。
発表	● 2024 年 3 月下旬の http://bach2.sakura.ne.jp に発表します。 ● 募集要項ならびに選考の結果についてのお問い合わせには応じません。ご注意ください。
主催	金澤詩人倶楽部（代表近岡礼） 〒920-0036 石川県金沢市元菊町 13-11-201 http://bach2.sakura.ne.jp

2022 金澤詩人賞

(金澤詩人No.19)

発行 2023 年 3 月 1 日

編集発行者 金澤詩人倶楽部代表 近岡礼

発行所 〒920-0036 金沢市元菊町 13-11-201

090-3298-1682

<http://bach2.sakura.ne.jp>

mimi.7.kei@gmail.com

二〇二二金澤詩人賞 二〇二二年三月一日發行 九二〇―〇〇三六 金沢市元菊町一三―一一―二〇一 金澤詩人倶楽部 〇九〇―三二九八―一六八二